

北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅷ

姫御前遺跡Ⅰ

2008

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅷ

ひめごぜ 姫御前遺跡Ⅰ

2008

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

北陸新幹線は、東京都を起点に上越新幹線高崎駅から分岐して、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・金沢市・福井市を経て大阪府に至る総延長700kmの新幹線鉄道です。開通により北陸地方と首都圏・関西圏は短時間で結ばれ、日本海沿岸地域の産業・経済・文化の交流発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

本書は、この北陸新幹線建設に先立ち、平成18年度に実施した糸魚川市姫御前遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、室町時代には木製品を使った祭祀が行われていたこと、古墳時代前期には玉作りが行われていたことが明らかとなりました。

今回の調査結果が、糸魚川地域の歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御協力と御援助をいただいた糸魚川市教育委員会、並びに地元住民の方々、また発掘調査から報告書刊行に至るまで格別の御配慮をいただいた独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構北陸新幹線第二建設局、同糸魚川鉄道建設所の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成20年1月

新潟県教育委員会

教 育 長 武 藤 克 己

例 言

- 1 本報告書は、新潟県糸魚川市東寺町2丁目1番地ほかに所在する姫御前遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は北陸新幹線の建設に伴い、独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構（以下、鉄道・運輸機構）から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したものである。
- 3 発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。
- 3 埋文事業団は、掘削作業等を株式会社 古田組に委託して発掘調査を実施した。
- 4 出土遺物及び調査に係る各種資料は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記は「06ヒメゴ」とし、出土地点や層位などを続けて記した。
- 5 本書に掲載した遺物番号はすべて通し番号とし、本文及び挿図・遺物観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。
- 6 引用文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 7 作成した図版のうち、既成の地図を使用した場合は、それぞれにその出典を記した。
- 8 調査成果の一部は、現地説明会（平成17年11月3日実施）、広報紙『埋文にいがた』No.58（平成19年3月20日発行）で公開しているが、本書の記述をもって正式な報告とする。
- 9 石製品・石器の岩石名・鋳物名同定を、糸魚川市フォッサマグナミュージアムに委託した。分析走査型電子顕微鏡での半定量分析の結果を第V章3C2）と遺物観察表に掲載した。
- 10 出土木製品等の樹種同定・放射性炭素年代測定・土壌分析を、株式会社 古環境研究所に委託し、その結果を第VI章に掲載した。
- 11 遺構断面図のトレース及び各種図版作成・編集は株式会社 セビアスに委託した。
- 12 本書の執筆は、加藤 学（埋文事業団 班長）、小川真一（同文化財調査員）、田中一穂（同嘱託員）、相羽重徳（株式会社 古田組 調査員）、松永篤知（同 調査員）があたり、編集は加藤が担当した。執筆分担は以下のとおりである。
第II章1、第IV章2AB、3AB：小川
第IV章2C1）、第V章1A・B・D1）～3）・F、2、3E、4、第VII章1：相羽
第V章1C・E・G、3B、第VII章2：松永
第V章1D4）：田中
その他：加藤
- 14 発掘調査から本書に至るまで、下記の方々から多くの御教示・御協力を得た。篤く御礼申し上げる。（敬称略、五十音順）
赤澤 徳明 扇山 和博 金子 拓男 木島 勉 久保 智康 笹沢 正史 竹之内 耕
土田 孝雄 永澤 博之 西田 昌弘 水澤 幸一 宮島 宏 山岸 洋一
糸魚川市教育委員会 糸魚川市押上区 糸魚川市寺町区

目 次

第 I 章 序 説

1 調査に至る経緯	1
2 調査と整理作業の経過	2
A 確認調査	2
B 本発掘調査	3

第 II 章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境	5
2 歴史的環境	6

第 III 章 調査の概要

1 グリッドと調査区の設定	10
2 基本層序	10
3 調査の概要	12

第 IV 章 遺 構

1 概 要	13
2 中世の遺構	13
A 掘立柱建物	13
B 杭 列	13
C 箸状木製品等の出土状況	14
3 古墳時代の遺構	16
A 掘立柱建物	16
B 溝	17
C 土 坑	18
D 灰白色シルト塊	19
E 板 杭 列	19
4 そ の 他	20
A 風倒木痕	20
B 倒 木	21

第 V 章 遺 物

1 中世～近世の遺物	22
A 概 要	22
B 土器・陶磁器	22
C 土 製 品	26
D 木 製 品	27
E 金属製品・製鉄関連遺物	31

F 石製品	31
G 銭貨	32
H 骨角器	32
2 古代の遺物	32
3 古墳時代の遺物	32
A 概要	32
B 土器	33
C 石製品	34
D 石器	40
E 木製品	44
4 弥生時代の遺物	44
5 縄文時代の遺物	44
A 石器	44
B 土製品	45

第VI章 自然科学分析

1 花粉分析	46
A はじめに	46
B 試料	46
C 方法	46
D 結果	47
E 花粉分析から推定される植生と古環境	48
F まとめ	49
2 植物珪酸体分析	49
A はじめに	49
B 試料	49
C 分析法	49
D 分析結果	50
E 植物珪酸体分析から推定される植生と環境	51
3 放射性炭素年代測定	51
A はじめに	51
B 試料と方法	52
C 結果	52
D 所見	54
4 樹種同定	54
A はじめに	54
B 試料	54
C 方法	54
D 結果	54
E 所見	57
5 動物遺存体同定	58
A はじめに	58
B 試料	59
C 方法	59
D 結果	59
E 考察	59

第Ⅶ章 ま と め

1 姫御前遺跡から出土した中近世の土器・陶磁器	61
A 出土状況	61
B 姫御前遺跡における土器・陶磁器の流通と選択性	61
C 土器・陶磁器の製作年代からみた姫御前遺跡の消長	63
2 笛吹田遺跡出土の古墳時代土器との比較検討	65
3 古墳時代前期の横刃形石器・打製石斧	66
4 姫御前遺跡の消長と周辺地域の環境変化	68
《要 約》	73
《引用・参考文献》	74
《別 表》	77
遺物観察表	77

挿 図 目 次

第 1 図 北陸新幹線の路線と調査遺跡の位置	1	第 13 図 18C21 における花粉ダイアグラム	47
第 2 図 確認調査トレンチ位置と本調査対象範囲	2	第 14 図 花粉・孢子・寄生虫卵の顕微鏡写真	48
第 3 図 調査・整理の経過	4	第 15 図 植物珪酸体分析結果	50
第 4 図 姫御前遺跡周辺の主な遺跡	7	第 16 図 植物珪酸体（プラント・オパール）の 顕微鏡写真	51
第 5 図 箸状木製品等の出土位置	15	第 17 図 木材の顕微鏡写真	56
第 6 図 管状土錘の最大径と孔径	26	第 18 図 動物遺存体写真	58
第 7 図 土の字体例	31	第 19 図 中近世の土器・陶磁器出土分布	62
第 8 図 半定量分析の結果（1）	36	第 20 図 出土陶磁器からみた姫御前遺跡の消長	64
第 9 図 半定量分析の結果（2）	37	第 21 図 姫御前遺跡・笛吹田遺跡の主な出土土器	66
第 10 図 紡錘車の形態分類	39	第 22 図 姫御前遺跡の消長と周辺地域の環境変化	68
第 11 図 横刃形石器の大きさ	41		
第 12 図 貝殻状剥片の剥離軸	42		

表 目 次

第 1 表 SK100 出土の扁平礫	18	第 7 表 放射性炭素年代測定の結果（2）	53
第 2 表 SX14 における板杭	19	第 8 表 樹種同定結果	55
第 3 表 花粉分析結果	47	第 9 表 動物遺存体同定結果	59
第 4 表 植物珪酸体分析結果	50	第 10 表 中近世土器・陶磁器の産地・器種別破片数	62
第 5 表 放射性炭素年代測定の試料と方法	52	第 11 表 肥前系陶磁器の時期別破片数	64
第 6 表 放射性炭素年代測定の結果（1）	52		

図版目次

[図 面]

図版 1	遺構全体図・グリッド設定図・基本層序図	20-20'、遺構分割図 (3) 2-2'～遺構分割図 (4) 12-12')	
図版 2	遺構全体図 (3区)		
図版 3	遺構分割図 (1)	図版 11	中近世の遺物 (1)
図版 4	遺構分割図 (2)	図版 12	中近世の遺物 (2)
図版 5	遺構分割図 (3)	図版 13	中近世の遺物 (3)
図版 6	遺構分割図 (4)	図版 14	中近世の遺物 (4)
図版 7	遺構個別図 (1) (遺構分割図 (1) 1-1'～12-12')	図版 15	中近世の遺物 (5)
図版 8	遺構個別図 (2) (遺構分割図 (2) 1-1'～11-11')	図版 16	中近世の遺物 (6)・古代の遺物
図版 9	遺構個別図 (3) (遺構分割図 (2) 12-12'～16-16'、遺構分割図 (3) 1-1')	図版 17	古墳時代の遺物 (1)
図版 10	遺構個別図 (4) (遺構分割図 (2) 17-17'～	図版 18	古墳時代の遺物 (2)・弥生時代の遺物
		図版 19	古墳時代の遺物 (3)
		図版 20	古墳時代の遺物 (4)
		図版 21	古墳時代の遺物 (5)・縄文時代の遺物

[写 真]

図版 22	遺跡近景	図版 32	中近世の遺物 (3)
図版 23	遺構写真 (1)	図版 33	中近世の遺物 (4)
図版 24	遺跡遠景・近景、遺構写真 (2)	図版 34	中近世の遺物 (5)
図版 25	基本層序、遺構写真 (3)、遺物写真	図版 35	中近世の遺物 (6)、古代の遺物、古墳時代の遺物 (1)
図版 26	遺構写真 (4)	図版 36	古墳時代の遺物 (2)
図版 27	遺構写真 (5)	図版 37	古墳時代の遺物 (3)、弥生時代の遺物
図版 28	遺構写真 (6)	図版 38	古墳時代の遺物 (4)
図版 29	遺構写真 (7)、遺物出土状況、作業風景	図版 39	古墳時代の遺物 (5)、縄文時代の遺物
図版 30	中近世の遺物 (1)		
図版 31	中近世の遺物 (2)		

第 I 章 序 説

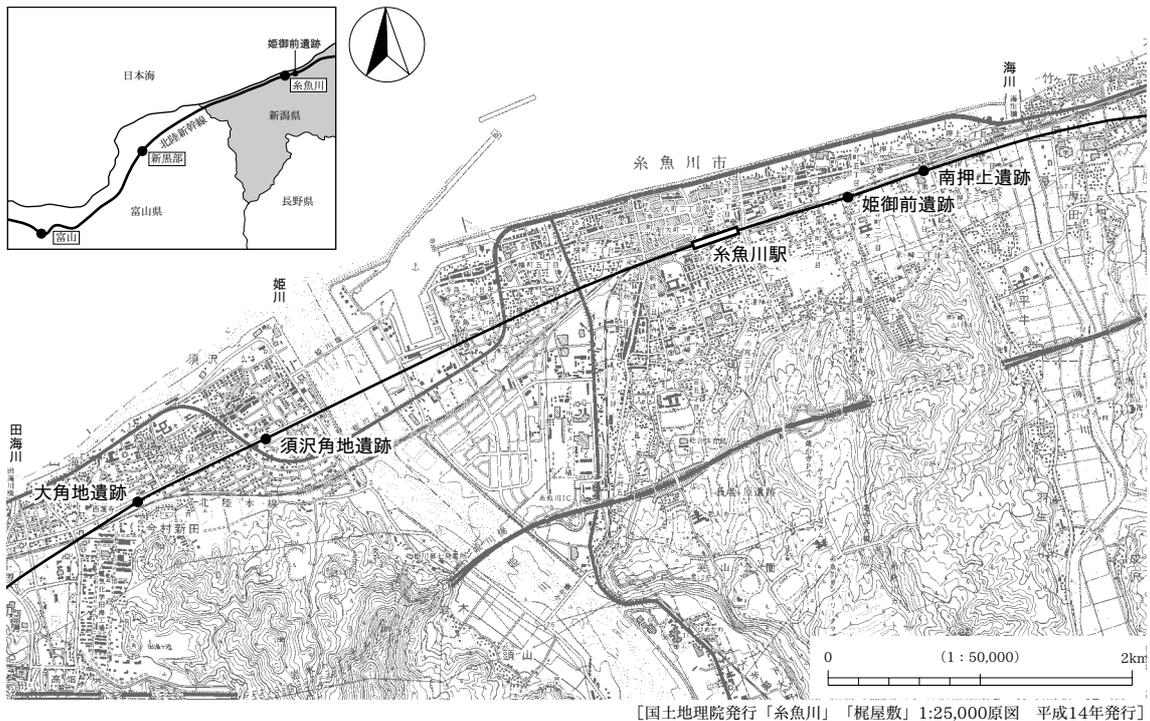
1 調査に至る経緯

北陸新幹線は、全国新幹線鉄道整備法に基づき建設される新幹線鉄道である。東京を起点とし、上越新幹線高崎駅で分岐して、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・金沢市・福井市等の主要都市を經由し、新大阪に至る延長約700km（うち東京・高崎間105kmは上越新幹線と共用）の路線である。このうち、高崎・長野間は、平成9年10月から営業運転している。北陸新幹線の全通により、北陸地方と首都圏・関西圏を短時間で結び、日本海沿岸地域の産業・経済・文化の交流発展にも多大な効果をもたらすものと期待されている。

上越市から富山市までの約110kmの区間は、平成5年9月に糸魚川市～魚津市間が新幹線鉄道規格路線としての工事実施計画が認可され、平成13年4月には上越～糸魚川間の新規着工及びフル規格化が決定した。これを受けて、鉄道・運輸機構と県教委との間で、建設用地内における埋蔵文化財の分布調査・試掘確認調査等に関する協議が本格化した。

平成13年5月、鉄道・運輸機構から分布調査の依頼を受けた県教委は、同年10月に分布調査を実施した。その結果、周知の姫御前遺跡から土師器片が採集されたことから、確認調査実施の必要性を報告した。これを受けて平成17年5月・11月に確認調査を実施したところ、古墳時代の遺物包含層と溝状遺構を検出したことから、2,200m²について本発掘調査が必要であると報告した。

その後、鉄道・運輸機構、県教委、埋文事業団の三者で取扱い協議を行い、確認調査時点で未買収地で



第1図 北陸新幹線の路線と調査遺跡の位置

2 調査と整理作業の経過

あったため判断保留としていた範囲も含めた3,120m²について、平成18年度に本発掘調査を実施することとなった。鉄道・運輸機構から依頼を受け、県教委は埋文事業団に本発掘調査を委託し、平成18年8月7日に調査に着手し、11月29日に調査を終了した。

2 調査と整理作業の経過

A 確認調査

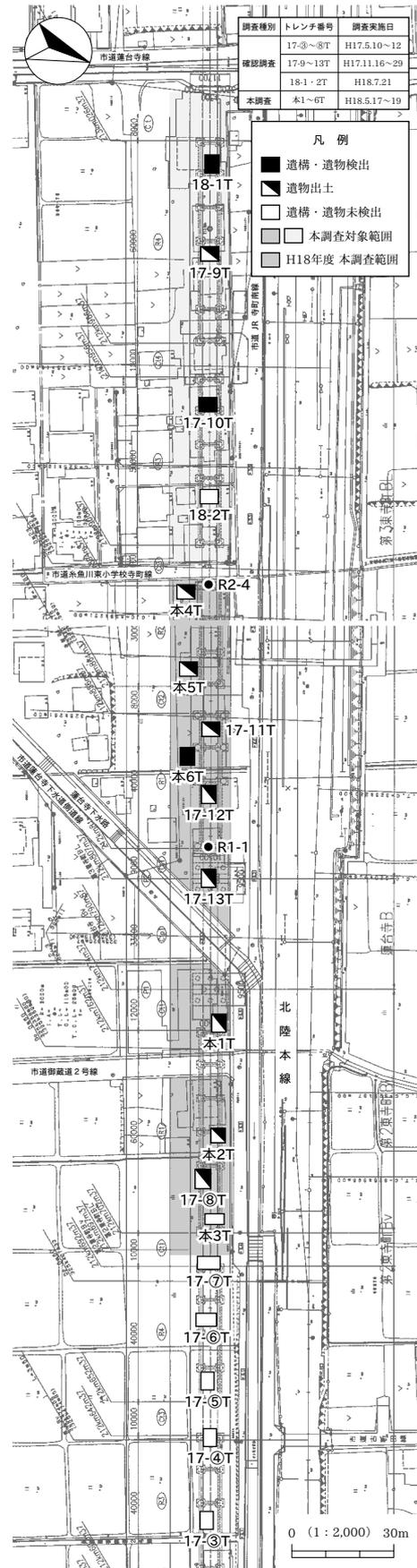
1) 調査の体制

調査期間	平成17年5月10日～5月12日、平成17年11月16日～11月29日		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）		
調査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総括	波多 俊二（財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）		
管理	長谷川 二三夫（同）	総務課長	
庶務	長谷川 靖（同）	班長	
調査総括	藤巻 正信（同）	調査課長	
調査担当	寺崎 裕助（同）	課長代理	
調査職員	尾崎 高宏（新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係 主任調査員）		
	田中 一穂（財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 嘱託員）		

2) 調査の結果と取扱い

確認調査を実施した時点では多くの未買収範囲が残っており調査対象範囲が限られていたが、現地表下1.5～2mに古墳時代の遺物包含層が検出された。これは、埋蔵文化財包蔵地カードに「地表下90cm余りから古式土師器が出土した」と記されている土層に相当するものと考えられた。この遺物包含層は、第2図に示す範囲に広がっていることが明らかとなり、17-10Tからは溝状遺構が検出された。また、古墳時代の遺物包含層よりやや上位からは、珠洲焼等の中世陶器や木製品が出土した。

この結果を受けて、2,200m²について本発掘調査が必要である旨を鉄道・運輸機構に報告した。また、用地未買収のため調査を実施できなかった範囲については判断保留としたものの、周囲のトレンチで遺物包含層が確認されていることから、遺跡が存在することが想定された。



第2図 確認調査トレンチ位置と本調査対象範囲

B 本発掘調査

1) 調査・整理の体制

調査期間	平成18年8月7日～11月29日、平成19年1月16日～1月18日			
整理期間	平成19年1月4日～3月31日			
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）			
調査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団			
総括	波多 俊二（財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）			
管理	斎藤 栄（同 総務課長）			
庶務	長谷川 靖（同 主任）			
調査総括	藤巻 正信（同 調査課長）			
指導	寺崎 裕助（同 課長代理）			
調査担当	加藤 学（同 班長）			
職員	小川 真一（同 文化財調査員）			
支 援	株式会社 古田組			
	現場代理人	竹内一喜	調査員	相羽 重徳 松永 篤知
	補助員	安達鉄雄	風間 梢	間 優子 葭原美恵子

2) 調査・整理の経過

鉄道・運輸機構、県教委、埋文事業団の三者で協議した結果、確認調査によって本発掘調査が必要と報告した2,200m²に加えて、周囲のトレンチの状況から遺跡が存在する可能性が濃厚なものの、未買収であったため確認調査を実施できなかった範囲もあわせて3,120m²について本発掘調査を実施することとなった。

しかし、確認調査実施の時点では未買収地が多かったため十分な調査率を確保できておらず、遺跡の範囲・内容については再検討する余地があった。また、遺跡が現地表から最大で2mと深部に埋没していることもあり、内容を十分に把握することが困難であった。これに加えて、調査実施のために鋼矢板を打設することを想定していたが、北陸本線に近接することから多くの制約が生じる上に膨大な費用を要することが明らかとなった。そこで、本格的に調査に着手する前に部分的な調査を行い、遺跡の内容をより詳細に把握し、鋼矢板打設に際して必要な情報を得なくてはならなかった。このような状況から、平成18年5月17日～19日に、3,120m²を対象として6トレンチ118.5m²（3.8%、第2図本1T～本6T）を予備調査した結果、「①遺跡の深度が1.1～1.5m程度と当初の想定より浅く、安全勾配を確保することで調査できること。②本発掘調査対象範囲の東側は、遺物の分布密度が極めて薄く、全面調査する必要がない部分があること。③遺物包含層は、中世の遺物を含む上層と古墳時代の遺物を含む下層が存在すること。」が明らかとなった。

この結果を受けて、調査の方法について鉄道・運輸機構、県教委、埋文事業団の三者で協議を行い、鋼矢板打設による土留工事を行わないこと等、調査の方針・方法が確認された。その後、調査着手のための諸準備を行い、8月7日から表土掘削を開始し、9月4日から本格的に作業員を投入した。湧水がある上、調査開始時に降雨が続いたことから、まずは開渠を掘削し排水施設の整備を行った。その後、遺物包含層掘削・遺構確認・遺構掘削を行い、11月中旬には掘削作業がほぼ終了した。その後、11月21日に航空写真を撮影、同月29日に作業終了し、後片付け等を行い12月5日に撤収した。なお、11月3日には現地説明会を行い、参加者は165名を数えた。

また、平成18年度当初、調査対象地とした市道御蔵道2号線（第2図）と重複する4区（図版1）につ

2 調査と整理作業の経過

いては、11月段階では道路・ガス・水道の切り回し工事が未了であったため調査できなかった。冬期になり、調査を実施することができないことから、この範囲の調査については次年度以降に実施することとなったが、施工の都合により、橋脚の杭部分（2m四方を2か所）を平成19年1月16日～18日に調査することとなった。調査開始後、ガス・水道の配管による攪乱で遺跡の残存状況が不良であることが明らかとなったため、急遽、市道下範囲145m²について面的に調査することとなった。この追加調査によって、平成18年度当初の調査対象地すべてを完掘した。

整理作業は、現地調査と併行して開始した。遺物は、現地で水洗・乾燥・選別を行い、注記は上越市柿崎区に所在する（株）古田組遺跡調査研究室に運搬して実施した。遺構の記録類についても現地で基礎整理を進めた。調査終了後は、姫御前遺跡に先行して調査した上越市用言寺遺跡の整理作業と併行して作業を進め、1月から本格的な作業に着手した。2月までに遺構図面の整理、遺物実測図のトレースを完了させ、3月中旬までにすべての原稿を入稿した。その後、3月末までに編集・校正を行い、平成19年度に印刷、刊行した（第3図）。

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
本発掘調査											
予備調査	■										
調査方針検討		■	■	■							
準備工				■	■	■	■	■	■		
調査				■	■	■	■	■	■		
現場撤収								■	■		
整理作業											
図面整理											
遺物水洗・注記					■	■	■	■	■	■	
遺物実測									■	■	■
遺物トレース										■	■
原稿執筆											■
編集・校正											■

第3図 調査・整理の経過

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

姫御前遺跡が所在する糸魚川市は、新潟県の最西端に位置する。市域の北は日本海に面し、南を長野県、西を富山県と接する。糸魚川は、古くから国史跡・松本街道の起点として知られている。「塩の道」と呼ばれるこの古道は、糸魚川から長野県松本までのおよそ30里（120km）におよぶ峻険な山越えの道であり、海をもたない内陸部へ塩や魚介類を送る生命線として重要な役割を担ってきた。現在も姫川沿いに長野県に通じる国道148号線・JR大糸線と、海岸線沿いの北陸自動車道・国道8号線・JR北陸本線の交点にあたる交通の要所となっている。

糸魚川市には、ほぼ南北に流れる姫川とほぼ一致するように、フォッサマグナの西縁にあたる「糸魚川―静岡構造線」が分布する。この構造線を境界にして、地質学的に西南日本と東北日本に分けられている。構造線以西の地層は、主に古生代石炭紀～二畳紀に至る青海―蓮華変成岩帯など、古生代・中生代の堆積岩・火成岩から成り立っている。青海―蓮華変成岩帯は、その断層面に蛇紋岩・輝緑岩・変斑礫岩などが介在する複雑な構造を有しており、ひすい輝石岩・青海石・奴奈川石など希少な岩石が含まれている。中でも、ひすい輝石岩は小滝川や青海川で産出することが知られており、「小滝川の硬玉産地」「青海川の硬玉産地」が国の天然記念物に指定されている。一方、この構造線以东の地層は、主に新第三紀・第四紀の新しい時代の堆積岩・火成岩から成り立っており、構造線の東西で地質が大きく異なることがわかる。このことが、地形・動植物の分布に相違を生み、さらに言語・風俗文化にも影響を与えることとなったといわれている。

市域の南側には、飛騨山脈の北延主稜と西頸城山地がある。飛騨山脈には、県内最高峰の小蓮華山（2,769m）をはじめとして2,000m級の山々が連なる。その主稜は日本海に進むにしたがって高度を急速に減じ日本海に没している。この急崖が「親不知・子不知」であり、東西文化の障壁となった。石灰岩からなる黒姫山（1,221m）・明星山（1,188m）では山岳カルストが発達しており、日本最深の白蓮洞（513m）など多数の洞穴が存在する。市域には、ここから産出する石灰岩を資源とした化学工業地帯が形成されている。

西頸城山地は、新第三紀以降の堆積層が隆起した丘陵と、長野県との県境をなす雨飾山（1,963m）や海谷山地など火山性岩石を主体とする山塊から構成されており、さらにその背後には本県唯一の活火山である焼山（2,400m）が位置する。標高400m以下の小起伏山地域では、主に新第三紀の砂泥岩層から形成されており、地下水量が増大する融雪期、梅雨期、初冬などには、崩落・地すべりが発生する〔鈴木2000〕。地すべり等防止法制定のきっかけとなった柵口地すべり（1947年発生）など、著名な地すべり地が多い地域でもある。

これらの山地を源流にして、青海川・田海川・姫川・海川・早川などが北流し日本海に注ぐ。中でもこの地方最長の一級河川である姫川は、長野県青木湖北部の湿地を源流とし、全長60kmに及ぶ。これらの河川沿いには河岸段丘がみられるが、特に姫川と海川の河口岸に発達している。この段丘は高位の洪積段丘から低位の沖積段丘まで6段に細分されている〔鈴木1982〕。高位の段丘には縄文時代～弥生時代、

2 歴史的環境

低位の段丘には縄文時代～古代、沖積段丘には古代の遺跡が分布しており、遺跡の時期が下がるにしたがって高位から低位へとその分布する主体面を移動させている [寺崎 1988]。

これらの河川はいずれも急流で、かつ海底が深いため、沖積平野は発達していない。最も広い沖積地は姫川と海川の河口間に形成された扇状地で、この扇状地を中心に狭い海岸平野が広がる。このほかの平坦地は、河川沿いにわずかな谷底平野が細長く形成されるのみである。また、北東－南西に平滑に広がる海岸線沿いには砂丘列が形成されており、姫川河口左岸の須沢では最大幅 300m、最大高 11.5m を測る [鈴木 1982]。市街地や主要幹線は、この砂丘上と沖積地など、限られた平坦地に細長く立地している。

姫御前遺跡は、この限られた平坦地に位置し、砂丘列と丘陵にはさまれた三角州に立地する [鈴木ほか 1982]。この三角州は、姫川・海川によって形成された地形であり、扇状地のような形成過程をたどったものと考えられる。遺跡周辺の平坦地においては、海岸砂丘と接する範囲に北国街道が築かれており、その周辺に近世集落が築かれている。本遺跡周辺は、この集落よりも 1m ほど標高が低く、近世以降は水田として利用されてきた範囲に相当する。

2 歴史的環境

糸魚川市域における古墳時代・古代・中世の主な遺跡分布は、第 4 図のとおりである。姫川右岸の糸魚川地区では、標高 100m 以下の緩傾斜の丘陵が発達し、特に標高 50m 前後の河岸段丘上に遺跡が多く分布する。また、近年、北陸新幹線建設に伴う発掘調査等によって、狭い平野部においても遺跡分布が濃密であることが明らかになっている。居住に適した平坦地が限られるため、土地利用が特定の範囲に集中した結果と考えられる。ここでは、姫御前遺跡に関連する古墳時代～中世の遺跡について概観する。

古墳時代

古墳時代の遺跡は、玉作に関連する遺跡が特徴的に発見されている。

笛吹田遺跡 (22) は、前期を中心とする滑石製玉類を製作した玉作遺跡で、白玉・勾玉・管玉・砥石等が出土し、玉作用の特殊ピットや方形周溝墓とみられる遺構が検出されている [安藤ほか 1978]。また、近年、都市計画道路建設に伴う発掘調査が断続的に行われ、竪穴住居や埴や木製釣瓶を伴う井戸の検出や琴柱状石製品の出土などの成果が注目されている。なお、笛吹田遺跡は、昭和 37 (1962) 年時点では「姫御前遺跡」として登録されており、昭和 50 (1975) 年に別個の遺跡とされるまでは、本遺跡と同一の遺跡として捉えられていた経過がある [土田 1978]。両遺跡の間に遺跡の空白が存在することが確認されているようであるが、年代的に重複することから無関係とは考えられない。また、昭和 13 (1938) 年に記録された相馬御風氏の身辺雑記には「六月五日私は KI を伴うて糸魚川町内の田圃中から沢山の弥生式土器や祝部土器の破片の出たという場所に見に出かけた。(中略) たまたまそこへ田の水を見廻りに来た老人によって、そのあたりの字名が神楽田、笛吹田、姫御前などであることを知り得た。」 [相馬 1938] とされている。笛吹田・姫御前周辺に古墳時代の遺跡が存在することが、昭和 13 年にすでに知られていたことがわかる。

大角地遺跡 (5) は、昭和 10 (1935) 年の朝日新聞に「石器時代の玉作り遺跡か。倉若七郎氏が青海町で発見した考古学上の宝庫」と紹介されている。その後、青木重孝氏によって蓄積された資料が契機となり、学会で注目されるようになり、勾玉の製作過程「オガクチ技法」 [寺村 1966] の標識遺跡としても



第4図 姫御前遺跡周辺周辺の主な遺跡（加賀街道の位置は〔土田1991〕による。）

〔国土地理院発行「糸魚川」「小流」1:50,000原図 平成8年発行〕

2 歴史的環境

知られるようになった。昭和45・48（1970・73）年には、都市計画道路建設に伴う発掘調査が行われ、工作用特殊ピットをもつ玉作工房跡が検出され〔寺村・安藤^{ほか}1979〕、前期～中期の滑石製玉類の製作関連資料が多数出土している。また、平成17年には北陸新幹線建設に伴う発掘調査が行われ、勾玉・白玉の製作関連資料が出土している〔加藤^{ほか}2006b〕。

田伏遺跡（34）は、中期～後期の遺跡である。昭和45（1970）年に行われた発掘調査では、滑石製の白玉・管玉・勾玉・子持勾玉や紡錘車の製作関連資料が多数出土しており、玉作遺跡であることが明らかにされている〔関1972〕。また、祭祀系土器の出土や滑石製模造品の大量出土から、玉作に伴う祭祀が行われた可能性が指摘されている〔糸魚川市史編さん委員会1986〕。

一の宮遺跡（18）は、天津神社境内に所在する。大正8（1919）年に高橋健自氏によって発掘調査されており、後期の土器とともに有孔円版・勾玉・白玉等の祭祀遺物が多数出土している〔糸魚川市史編さん委員会1986〕。祭祀遺跡とみられる一の宮遺跡〔椋山1972〕から出土した玉類は、笛吹田・田伏・大角地など、近隣の製作遺跡との関連性が指摘されている〔関1972〕。なお、天津神社境内の奴奈川神社は、『延喜式』に掲載される「奴奈川神社」に比定されるものと考えられており、奴奈川姫が祀られている。

このように糸魚川地域では、滑石製の玉作が盛んに行われた遺跡の存在が特筆される。また、北陸新幹線建設に伴い発掘調査された本遺跡（21）、横マクリ遺跡（前期）（29）、六反田南遺跡（前期）（27）においても玉作の存在が確認されている。小規模な集落においても、数は多くないものの未製品を含む玉類がほぼ例外なく出土しており、玉作が行われていたと考えられる。ヒスイ・滑石等の石材原産地を控える当地域においては、縄文時代以来、伝統的に玉作りが盛んに行われたといえることができる。

古 代

古代には、新潟県一帯は越国の一部であった。『日本書紀』持統6（692）年9月の条に「越前国司」の記述があることから、越国は越前・越中・越後に分割されていたとみられている。この頃の越後国は阿賀野川以北を指しており、頸城郡は越中国に属したものと考えられている。『続日本紀』大宝2（702）年の3月の条に越中国の4郡を越後国に分割したことが記されているが、この4郡は、頸城郡・古志郡・蒲原郡・魚沼郡を指すものと考えられ、さらに和銅元（708）年に越後国に設置された出羽郡が、和銅5（712）年に出羽国として分立された。これにより、佐渡を除く現在の新潟県の領域が定まったと考えられている。なお、『和名類聚抄』には「国府在頸城郡」とあり、頸城郡内に越後国府があったと考えられる。

頸城郡は越後国の南西端に位置し、天平勝宝4年（752）10月造東大寺司牒（正倉院文書）に頸城郡の郡名がはじめて見えるが、『和名抄』（東急本）には「久比支」の訓を付している。頸城郡の郷は10郷が記されており、姫御前遺跡は頸城郡沼川郷に含まれる。天平勝宝年中（749～756）の東大寺正倉院御物の庸布墨書には「久疋郡」と記されている。『和名抄』では高山寺本とも「奴乃加波」の訓を付しており、吉田東伍の『大日本地名辞書』（1907年）では沼川郷を現在の市振から早川谷までの地と推定し、室町時代の「沼河保」とほぼ同じ地域と考えている。

『延喜式』には越後の駅・伝馬として、「滄海8疋、鶉石・名立・水門・佐味・三嶋・多太・大家各5疋、伊神2疋、渡戸船2艘、伝馬頸城・古志郡各8疋」と記されている。滄海駅は青海に比定できる。北陸道越後国駅馬の越後国最初の駅として「滄海馬8疋」とあり、他駅が5疋に対して越中国佐味駅と並んで8疋と多い。海岸沿いは急崖をなす親不知・子不知の難所であり、古代では上路を通る山道が使われていたと推定される。また、海路も重要な交通路として利用されていたと考えられる。

青海地区（旧青海町域）における古代の遺跡は、集落跡と窯跡がある。姫川河口近くに位置する須沢角地遺跡（7）は、昭和62（1987）年・平成17（2005）年に発掘調査が実施され、7世紀末～9世紀前半の集落跡であることが明らかにされている〔土田^{ほか}1988、辻2006〕。また、須沢角地遺跡の西南西1kmの丘陵裾には西角地古窯跡（6）が所在する。窯体の一部・窯壁・焼土とともに多量の須恵器が出土しており〔寺村・安藤^{ほか}1979〕、8世紀末～9世紀初頭前後の窯跡と考えられている〔春日1998〕。

糸魚川地区（旧糸魚川市域）の道者ハバ遺跡（10）では、掘立柱建物や井戸といった遺構とともに、多量の須恵器・土師器のほか、灰釉陶器・緑釉陶器が多く出土しており、当地方の中心的役割を担った遺跡と推定されている〔糸魚川市史編さん委員会1986〕。このほかに8世紀末～9世紀に土師器生産が行われた小出越遺跡（33）〔鈴木^{ほか}1988〕、多数の製塩土器が出土した立ノ内遺跡（41）〔高橋1988〕、数百点に及ぶ土師器の廃棄土坑が注目される山崎A・B遺跡（30・31）〔木島2007〕などの調査事例がある。

中 世

青海地区では、山城跡や経塚の存在が知られている。勝山城跡は、標高328mの勝山山頂に築かれている。天正年間（1573～1582）頃、越中への前進基地として築城されたといわれており、戦国時代は同方面を押さえる要衝であったと考えられている〔平野・渡辺1968〕。寺地の南方、松山の尾根上に南北500mにわたって築城された松山城跡（2）は、標高170mの地点に本丸跡があり、空堀や帯郭・裾郭で幾重にも固められている。石垣に所在する天神山経塚（1）は、1919（大正8）年に調査され、仁安2（1167）年の銘のある珠洲焼の経筒が発掘されている〔金子1975〕。

糸魚川地区では、御山遺跡（9）・中平遺跡（15）・古川遺跡（16）・水保観音堂境内（44）・北平遺跡（25）・クワノ町遺跡（24）・竹花遺跡（17）・山崎A・B遺跡（30・31）等が知られており、観音菩薩立像（重要文化財）を安置する水保観音堂境内からは中世陶磁器類が出土していることから、水穂寺跡との関係が考えられている〔山岸・田村2004〕。また、段丘～丘陵上には、中世後期～近世初期の原山十三塚（14）〔木島1989〕や山崎三十三塚（26）〔木島1989〕が分布する。

当地域の中世遺跡については調査事例が少なく、その実態は必ずしも明らかでなかったものの、近年の北陸新幹線建設に伴う発掘調査によって、平野部に多数の遺跡が存在することが明らかになりつつある。特に、多量の木製品が出土する実態が、山岸遺跡（37）〔渡邊2007〕、寺地遺跡（4）〔相羽2002〕、本遺跡の調査事例によって明らかにされつつある。木製品が特定の範囲から多量に出土する上、箸状・棒状の製品が地面に突き刺された状態で検出されている。この特異な出土状況の解釈については多角的な検討を要するが、特徴的な祭祀行為が行われていたことを窺い知ることができる。今後の調査の進展によって、糸魚川地域における中世社会の一端が明らかにされていくものと期待される。

第Ⅲ章 調査の概要

1 グリッドと調査区の設定

本発掘調査対象範囲は、道路や水路によって3か所に分断される。便宜上、上越方（東）から富山方（西）へ1区～3区と呼称し、1区と2区間の市道下部分を4区とした（図版1）。

グリッドの設定は、法線の幅が17mほどと細長いため、地形や方位にあわせると調査時にグリッドを誤認する恐れがあった。そこで、細長い法線と平行するように設定することで、作業の効率化を図ることとした（図版1、第2図）。グリッドの主軸は、新幹線法線のセンター杭R2-4（世界測地系X=115906.5398、Y=-55596.2477）とR1-1（世界測地系X=115931.7057、Y=-55523.6880）を結んだラインを主軸とし、杭R2-4を基点とした。主軸は真北から70度52分19秒東偏している。

グリッドは大小2種あり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25分割したものである。大グリッドの呼称は、センター杭の方向を算用数字、それと直交する方向をA・Bとし、両者の組み合わせにより表示した。小グリッドの番号は、1～25の算用数字で表し、北隅を1、東隅を5、西隅を21、南隅を25となるように付した。これらを組み合わせて「13B1」等と表した。なお、富山方に遺跡が延伸する可能性が想定されたので、この点を考慮してグリッド番号を設定した。

2 基本層序（図版1）

1区～4区とも基本堆積は、おおむね一致している。宅地造成時の厚い盛土（0層）を除去すると旧地表面（Ⅰ層）が現れ、そこから地山（Ⅷ層）までの厚さは50～150cmほどであった。この間に、近世（Ⅱa層）・中世（Ⅱb層）・古墳時代（Ⅲ・Ⅳ層）の遺物包含層が層位的に検出されている。

遺跡は、平坦面上に立地するが、大きくは調査範囲の東側の標高が低く、この傾斜と対応するように遺物の分布密度が稀薄になる。また、3区西側には南北方向へ傾斜する落ち込みが認められ、Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層はこの部分で確認された。ここには腐植物が厚く堆積しており、湿地的な環境であったことが窺える。一方、平坦面においてはⅡb層とⅢ層の堆積が薄く、中世と古墳時代の遺物が混在して出土する状況にあった。しかし、Ⅱb層からは中世の遺物が、Ⅲ層からは古墳時代の遺物が明らかに多く出土する状況にあった。また、Ⅱb層とⅢ層の堆積は薄い上に、両者とも暗みの強い土層であり遺構の判別が困難であったことから、遺構確認はⅧ層まで掘削してから実施した。

0 層 盛土 宅地の造成土。

Ⅰ 層 旧表土 近代以降の陶磁器を含む。Ⅱa層との層理面には鉄分が著しく沈着しており、宅地造成前の水田の床土と考えられる。層厚は、15～50cmほどである。

Ⅱa層 暗黄灰色細砂（2.5Y5/2） 粒子の粗い細砂を基調とすることから、洪水性の堆積物と考えられる。花粉分析・植物珪酸体分析の結果からは、Ⅱa層段階において水田稲作が行われていたことが明らかになっており、比較的水の影響を受けやすい環境にあったことが窺える。また、Ⅱb層との層理面には、足跡等旧地表からの圧迫によって形成されたと考えられる凹凸が多数観察されるが、

これは耕作時の足跡である可能性が高い。Ⅱ a層には17世紀を主体とする遺物が含まれており、近世に形成された土層と考えられる。層厚は、20～30cmほどである。

Ⅱ b層 黒褐色細砂混じりシルト (10YR3/2) 腐植物を含むシルトを基調とし、砂を介在することから湿地性の堆積物と考えられる。花粉分析・植物珪酸体分析の結果からは、Ⅱ b層段階において水田稲作が行われていたことが明らかになっており、比較的水の影響を受けやすい環境にあったことが窺える。Ⅱ b層の下位からは古代の遺物がわずかに出土しているが、14世紀後半～16世紀の遺物を多数含むことから、主に中世後期に形成された土層と考えられる。また、箸等の木製品が、良好な状態で多数出土したことが特筆される。層厚は、5～25cmほどである。

Ⅱ c層 灰白色シルト (7.5Y7/2) 1区・2区・4区で認められる。Ⅷ層と似た土質・色調であるが、粘性がより強い。1区では溝状の落ち込み (SD3) 周辺を中心に厚く堆積しており、窪地を中心に堆積した土層と考えられる。Ⅱ c層からは木製品が少数出土していることから、中世の堆積層と考えられる。ただし、すべてⅡ c層の上位のみから出土しており、Ⅱ b層からの混入品である可能性もある。

Ⅲ 層 褐灰色粘質シルト (10YR4/1) Ⅱ b層に比べてやや粘性が強い。ただし、地点によっては、ほとんど土質・土色に違いがなく、壁面を削る際、逆立つ部分をⅡ b層、滑らかな部分をⅢ層と判断することもあった。Ⅱ b層において壁面が逆立つのは、砂が介在するためである。すなわち、Ⅲ層のほうが、より均質なシルトといえる。直径10mm以下の炭化物をわずかに含み、古墳時代前期後半～後期の遺物を多数含む。Ⅲ層は、低地部分ほど厚く堆積しており、層厚は5～30cmほどである。花粉分析・植物珪酸体分析の結果によれば、Ⅲ層からⅡ a層にかけてスギ林が減少し、水田が著しく拡大することが明らかとなっている。

Ⅳ 層 にぶい黄褐色粘質シルト (10YR5/3) 低地部分のみで確認される古墳時代前期前半ないしは前期中頃の遺物包含層。直径5mm以下の炭化物をわずかに含む。地山に似た色調であるが、粘性が強い。層厚は、30cmほどである。花粉分析の結果によれば、スギが優勢であるが湿地林の拡大がみられ、湿潤化が推定されている。植物珪酸体分析においては、調査範囲の近辺で水田稲作が開始された可能性が指摘されており、そのような環境変化と対応する可能性がある。また、クリが増加し、人為干渉によりクリ林が増加した可能性が想定されている。この頃から、人為的に植生が改変されている可能性が高く、土地利用の履歴において重要な画期といえる。

Ⅴ 層 黒褐色粘質シルト (7.5YR3/1) 低地部分のみで確認される土層であり、黒色腐植物を多量に含む。含水率が高く、しまりが極めて弱い。Ⅴ層からは板状木製品 (図版18-300・301) が出土しており、放射性炭素年代測定によって2150±40年BP (BC340～320年、BC210～160年) という年代値が得られている。この年代を評価すれば、弥生時代に形成された土層と考えられる。層厚は、15cmほどである。なお、花粉分析の結果によれば、スギ林が卓越して分布するが、Ⅵ層段階と比べると湿地性カヤツリグサ科が増加している。

Ⅵ 層 黒色粘質シルト (10YR2/1) 低地部分のみで確認される土層である。炭化物粒子をごくわずかに、腐植物を多量に含む。層厚は、20cmほどである。古墳時代以前に形成された多数の風倒木痕の覆土と酷似した土層であり、それと同様の年代に位置付けられる可能性が高い。風倒木痕から出土した倒木の放射性炭素年代測定結果は、2900±40年BP (BC1130～1010年) という結果が得られている。また、風倒木痕からは形態的に縄文時代晩期頃に位置付けられる石鎌 (図版21-360)

3 調査の概要

が1点出土している。上位のV層出土遺物の年代測定結果も勘案すれば、VI層が縄文時代晩期頃に形成された可能性が高い。なお、花粉分析・植物珪酸体分析の結果によれば、スギ林が卓越し、草本が少ない森林状態であったことが明らかになっている。

VII 層 灰色砂質シルト (10YR2/1) 漸移層。VIII層を基調とするものの、黒褐色粘質シルトを斑状に、炭化物粒子をごくわずかに含む。層厚は、10cmほどであるが、存在しない部分も広く認められる。

VIII 層 灰色砂質シルト (5Y4/1) 今回調査において地山と判断した土層である。均質な砂質シルトで、混入物はほとんど認められない。上位層との層理面には凹凸があり、部分的な落ち込みか遺構なのか判別することは難しい。

3 調査の概要

前節で触れたとおり、II a層 (近世)・II b層 (中世後期)・III層 (古墳時代前期後半～後期)・IV層 (古墳時代前期前半ないしは中頃)・V層 (弥生時代)の5枚の遺物包含層が層位的に検出された。このうちII b層とIII層から、年代的にまとまりをもった遺物が比較的多く出土している。

II b層は、14世紀後半～16世紀の陶磁器類とともに、木製品が多数出土したことが特筆される。木製品には、箸状・棒状が多く、中には地面に突き刺したような状態で検出されたものもあった。木製の形代や銭貨も多数出土していることを勘案すれば、当遺跡で祭祀が行われたことが推測される。

III層からは、古墳時代前期後半を中心とする土器と玉作関連資料が出土した。土器は、多数出土したがほとんどが小片であり、全体を復元できる資料は存在しない。玉作関連資料は、滑石製の勾玉・管玉・白玉の製品・未製品が出土した。しかし、その数は少なく、小規模な生産遺跡もしくは玉作遺跡の縁辺であったと考えられる。ヒスイの原石・剥片も出土した。ヒスイ製の敲石も出土しており、遺跡内で剥片剥離が行われた可能性があるが、出土した資料はすべて単独個体で、剥離時に生じる碎片は認められない。

遺構の分布は稀薄であった。明瞭な遺構は、中世の掘立柱建物1棟・杭列1列と、古墳時代前期の掘立柱建物1棟・土坑4基・溝4条・板杭列1列のみである。このほかにピット状の落ち込みが多数検出されたが、底面が先細りになるものが多く、また木片が出土するものもあった。その周囲には風倒木痕が検出されていることから、木の根等により形成された落ち込みと考えたい。ただし、表面上は遺構との区別ができないため、遺構と同様に調査して記録を残すこととした。

なお、遺構の調査方針・記載は、新潟県埋蔵文化財調査報告書第159集『用言寺遺跡I』[加藤ほか2006a]、土層及び土器・陶磁器の色調記載は、農林水産省農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』(2003年度版)に準ずることとした。

第Ⅳ章 遺 構

1 概 要

検出された明らかな遺構は、掘立柱建物2棟（SB1・2）、杭列1列（SA1）、溝4条（SD2・SD9・SD10・SD32）、土坑4基（SK12・87・91・100）、板杭列1列（SX14）と数少ない。基本土層と遺構覆土の層位関係・遺構同士の切り合い関係・放射性炭素年代測定・出土遺物の検討から、SB1・SA1が中世、SB2・SD2・SD9・SD32・SK87・SK100・SX14が古墳時代前期、SD10・SK12・SK91が時代不明（中世以前）の遺構と判断された。そのほかにも性格不明の落ち込みが多数検出されたが、風倒木痕など自然の落ち込みである可能性が極めて高いと判断された。この風倒木は、出土した倒木の放射性炭素年代測定の結果が2900±40年BP（BC1130～1010年）であること、縄文時代晩期に比定されると考えられる石鏃が1点出土していることから、遺跡が形成される以前の縄文時代晩期に形成されたものと判断した。

2 中世の遺構

A 掘立柱建物

掘立柱建物は2棟検出された。いずれもピットが最も密集する14Aグリッド付近に位置する。このうち、基本土層との関係の把握からSB1を中世、柱根の放射性炭素年代測定結果からSB2を古墳時代に位置付けた。ピットの密集は、特定の範囲で、掘立柱建物を建て替えた結果を反映するものと考えられる。この付近は、調査区の中でも比較的標高の高い平坦面上にあり、建物を構築するのに適していたことが窺える。また、建物を見出すことができなかった多数のピットは、2棟以外の建物の存在を示唆するが、その広がりには調査範囲外にまで延びており、建物群の全体像は明らかでない。

SB1（図版4・9・23・24・26） 13A・14A・14Bグリッドに位置する。柱穴を構成するP47・P108の覆土にⅡb層が落ち込む状況が確認されたことから、中世の遺構と判断した。検出範囲では3間（8.1m）×3間（8.1m）の総柱建物と判断したが、調査範囲外にさらに広がる可能性がある。主軸方向は、真北から18度東偏する。柱穴の平面形は円形・楕円形であり、断面形はU字状・箱状・半円状・階段状・弧状など様々なものがある。一方、柱穴の規模は小さいことで共通しており、直径20cm、深さ15cmほどである。床面積の割に、柱の規模が小さいようにもみえる。ただし、Ⅷ層まで掘削して遺構を確認したため、実際の柱穴の規模は検出されたものより少なくとも10cm程度は深いといえる。柱根は残っておらず、抜き取られたものと考えられる。

B 杭 列

SA1（図版5・9） 12A・12B・13Bグリッドに位置する。ピットが等間隔に規則正しく並ぶことから掘立柱建物に関連する柱穴と考えて調査を進めたが、これと対応関係にあるピットは見つからず杭列と判断した。主軸方向はおおむね南北であり、真北からおおむね11度東偏する。SB1の主軸方向に比較的

近いといえる。柱穴の平面形は円形・楕円形、断面形は半円状・U字状である。柱穴の規模は、直径25cm、深さ10cmほどで、柱穴の間隔は約3mである。検出範囲では5つの柱穴が等間隔で検出され、調査範囲内での全長は14.5mである。他の遺構との位置関係をみると、SA1より西側にピット群が集中することがわかる。一方、東側には風倒木痕が密集するものの、明らかな遺構はほとんど認められない。この検出状況から判断すると、SA1は集落の内外を隔てる境界の役割を果たした可能性を指摘できる。遺物の出土は認められないが、ピットの規模・覆土の内容が掘立柱建物に共通すること、掘立柱建物との配置に有意な関係を見出すことができることから、中世に位置付けられる可能性がより高いものと判断した。

C 箸状木製品等の出土状況

1) 平面分布

本遺跡では、658点の箸状木製品が出土した。箸状木製品は調査区のほぼ全域から出土しているが、分布に粗密が認められる(第5図)。箸状木製品は中世段階において、古代の斎串と同様な役割を果たした[四柳1987]と考えられ、祭祀具であった可能性が高い。同様に、形代(人形・刀形)・下駄・扇骨・錢貨も祭祀の際に使用される可能性があるため、これらの出土傾向もあわせて確認する。

低地にあたる1～6列周辺では、箸状木製品の出土密度が最も高い。特に調査範囲の北側に多い。この範囲では、形代と錢貨の共伴は少ないものの、下駄3点と扇骨1点が出土している。下駄と扇骨の出土はこの周辺に限られる。形代の中には、杓子から転用したと考えられる人形(130)も含まれる。

次いで、13～17列周辺においても箸状木製品が集中する。13A・14A・14Bグリッドには掘立柱建物があり、調査範囲内の微高地にあたる。掘立柱建物が存在していた時期と同時期に箸状木製品を用いた祭祀行為が行われたかどうかは判然としないが、箸状木製品の分布は、掘立柱建物内では希薄である。この周辺では、形代の出土が少ないものの、錢貨が多く出土している。

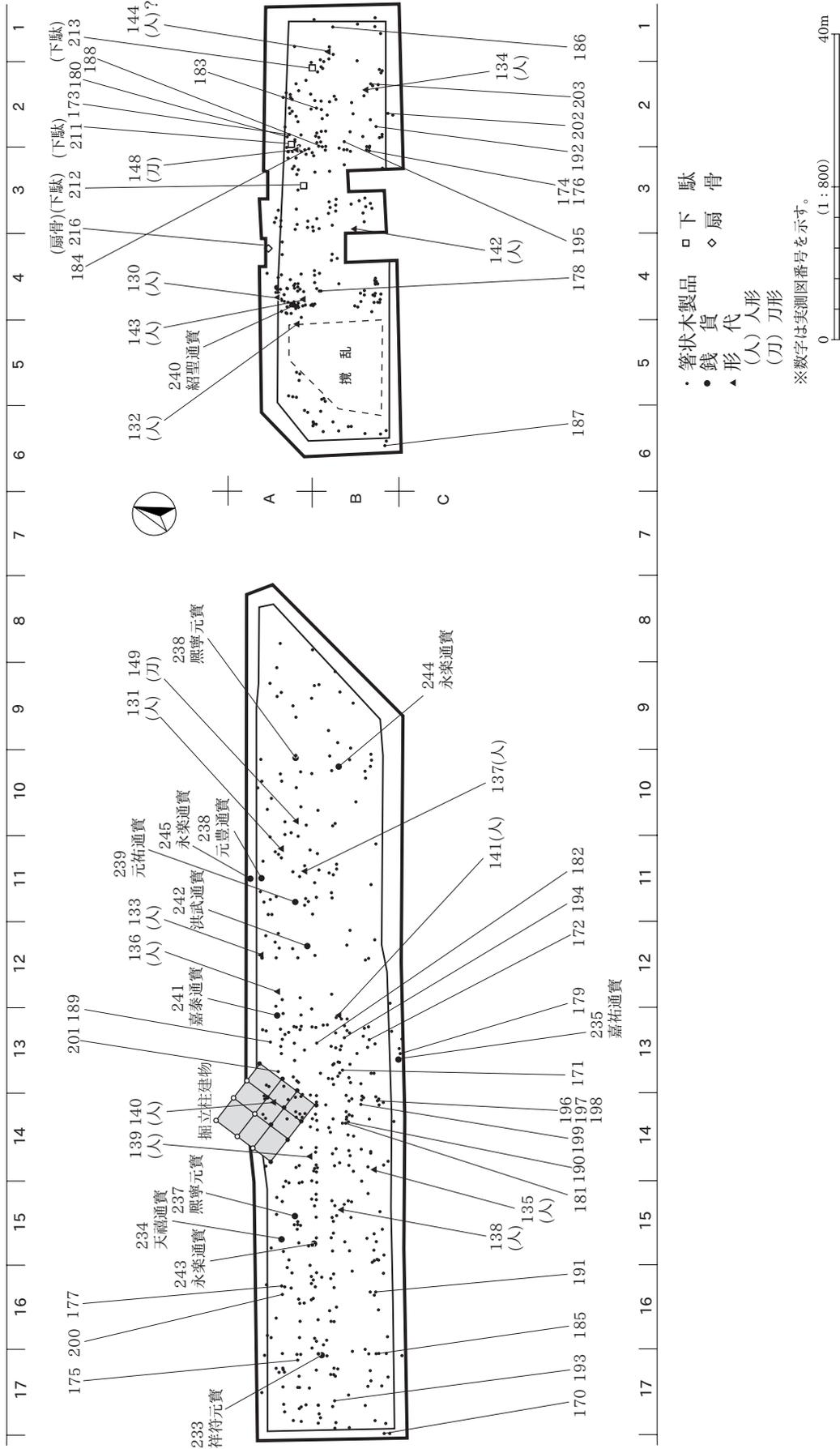
最も箸状木製品の出土密度が低いのは、8～12列周辺である。ほかの範囲と比べ、形代や錢貨の出土が多い傾向にあり、対照的である。

いずれの集中範囲も調査範囲の北側に比較的集中する傾向が認められ、これらの祭祀具の供給源となる集落が調査範囲外の北側に存在する可能性が想定される。また、中世の土器・陶磁器の出土傾向(第七章1)は10～17列に多く認められ、1～6列には少ない。この傾向は、箸状木製品の出土量比とは必ずしも一致しておらず、土地利用の相違を反映している可能性がある。

2) 出土状況

多数出土した箸状木製品・棒状木製品の多くは破損しており、Ⅱb層中から横たわるような状態で出土した(例えばSX64-W1やSX84-W3等)。しかし、中には地面に突き刺したような状態で検出されたものも認められた。古墳時代前期の遺物包含層(Ⅲ層)から出土した箸状木製品には、地面に突き刺されたものも含まれるのであろう。

今回の調査においては、6地点(SX1・4・5・64・84・88)において、特異な出土状況を記録することができた。箸状木製品が突き刺さっていたSX1・64・84、棒状木製品が突き刺さっていたSX4・5・88である。垂直に突き刺さったもの(SX4)は少数で、やや斜位に突き刺さったもの(SX1・5・64・84・88)が多いようである。Ⅱb層中(中世の遺物包含層中)もしくはⅢ層上面(中世の遺構確認面)から突き刺されたものとみられるが、いずれにしてもⅡb層中には上部がほとんど露出しない状況で検出



第5図 箸状木製品等の出土位置

3 古墳時代の遺構

された。すなわち、当時の地表面からほとんど地上に露出していなかった可能性が高い。したがって、地面に突き刺したといっても、箸状木製品や棒状木製品が林立するような状況を復元することはできない。また、折れた状態(SX1)・折れ曲がった状態で検出されたもの(SX64-W2・SX84-W1)も特徴的に認められた。これらは、しまりの強いⅧ層上面付近で折れており、細い箸状木製品が硬い地面に突き刺さりきらずに折れたものと理解することもできる。

SX1 (図版7・25) 16A8グリッドに位置する。長さ19.9cmの1本の完形の箸状木製品(図版15-200)が折られた状態で突き刺さっていることが特徴的であり、端部が下を向いた側をa、上を向いた側をbとして記載する。aの上端はⅢ層下半部にまで潜りこんでおり、折った後にⅢ層上面から突き刺したのであれば、10cmほどを地表面から押し込んだことになる。むしろ、突き刺す最中に完形の箸が折れ、地面に刺さったままとなった部分をaと理解するのが合理的であろう。その後、折れた残りの側bを改めて刺し直したのであろう。すなわち、SX1は、箸状木製品を折って突き刺したのではなく、突き刺す途中で折れたため刺し直したものと考えべきであろう。なお、bの先端部は、Ⅲ層上面から4cmほどしか突き出ない状態である。

SX4 (図版7・27) 17B15グリッドに位置する。下端部を尖らせた長さ31.7cm、幅・厚さ2.3cmほどの棒状木製品(図版15-207)が、ほぼ垂直に地面に突き刺さった状態で検出された。Ⅱb層とⅢ層上部を掘削後に検出されたものであるが、上端部はほとんどⅡb層中にまで達しないものとみられる。

SX5 (図版8) 13A23グリッドに位置する。下端部を尖らせた長さ20.6cm、幅・厚さ1.2cmほどの角柱状の棒状木製品(図版15-201)が、地面に斜位に突き刺さった状態で検出された。下端部は、地面に突き刺すために先鋭に加工されたものと考えられる。

SX64 (図版8) 14B8グリッドに位置する。横たわった棒状木製品(W1)と折れ曲がった箸状木製品(W2・図版15-199)が隣接して検出された。両者が同時期のものであれば、W1が横たわったⅢ層上面付近が当時の生活面とみられる。W2は、地面に突き刺す過程で、Ⅷ層上面付近で折れ曲がったようである。

SX84 (図版8・25) 14B8グリッドに位置する。3本の箸状木製品が隣接して検出されている。W2(図版15-198)・W3(図版15-197)は横たわった状態、W1(図版15-196)はⅧ層上面で折れ曲がった状態で検出されている。W2は、本来的には箸状木製品が出土しないⅡa層からの出土であり、Ⅱb層堆積時に原位置から移動している可能性が高い。一方、W3は、Ⅱb層とⅢ層の層理面から出土しており、この付近が当時の生活面であったと考えられる。W1は、しまりの強いⅧ層を避けるように大きく湾曲して折れ曲がっている様子を理解できる。

SX88 (図版8) 15B7グリッドに位置する。下端部を平坦に加工した長さ15.7cm、幅1.8cm、厚さ0.9cmほどの角柱状の棒状木製品(図版14-152)が、地面に斜位に突き刺さった状態で検出された。ほかとは異なり下端部が平坦であるものの、Ⅷ層中にまでしっかりと突き刺さっている。検出面はⅧ層上面に近いが、上端部を欠損しているため、何層から突き刺したのかは明らかでない。

3 古墳時代の遺構

A 掘立柱建物

SB2 (図版4・10・23・24) 14A・14B・15A・15Bグリッドに位置する。基本堆積との関係は明らかにできなかったが、P6(図版18-294)・P69(図版18-293)から出土した柱根の放射性炭素年代測定

は、1870±40年BP（AD80～210年、P6）、1680±40年BP（AD330～410年、P69）であり、古墳時代の遺構と判断した。また、P69がP68に切られ、P53がSX52（風倒木痕）を切っていることから、SX52→SB2→P68という新旧関係が理解された。建物の規模は、検出範囲では1間（2m）×3間（5m）の側柱建物と判断したが、調査範囲外にさらに広がる可能性がある。主軸方向は、真北から29度西偏する。柱穴の平面形はP101を除きすべて円形であり、断面形はU字状または階段状である。柱穴の規模は30cmほど、深さは30cmほどである。P6・P69の断面の観察からは、柱よりひと回り大きく掘られたピットの片側に寄せて柱を立て、周囲を掘削土で充填していることがわかる。なお、残された2本の柱根の樹種はスギである。当時、スギ林が優勢であったことから、周辺で調達した木材で掘立柱建物を建てたものと考えられる。

B 溝

溝は、SD2・SD9・SD10・SD32の4条が検出された。SD2・SD9・SD10は3区の西側（15B・16A・16B・17A・17B・18Bグリッド）に、SD32は3区の東端（9A・9Bグリッド）に位置する。いずれも調査範囲外にまで延伸するため、全体像は明らかでない。

SD2とSD9はほぼ直交しており、切り合い関係の把握からSD2→SD9の変遷が想定される。しかし、より古いと考えたSD2は、SD9と交差する部分で途切れており、またその付近で幅が広がっている。

したがって、より新しいSD9は、すでに存在したSD2を意識して掘削された可能性がより高い。両者に時間差があったとしても、ごく短期間の中で捉えられるものと考えられる。なお、両者からは古墳時代前期の遺物が、比較的まとまって出土している。しかし、遺物の年代観からは、両者の時間差を捉えることはできない。

SD2（図版3・7・26・27） 規模は、検出範囲で長さ15.7m、幅0.7m、深さ0.1mほどである。幅は最大で1.4mほどを測る部分もある。浅く立ち上がりが緩やかな溝で、断面形は弧状を呈する。覆土は灰褐色シルトであり、IV層により近い色調である。主軸方向は南北で、ほぼ直線的であるが、17B14グリッド付近で屈曲する。この屈曲する付近の標高が最も低い位置にある。溝に溜まった水は、この付近から低地側に流下したものとみられる。出土遺物は、255・256である。

SD9（図版3・7・26・27） 規模は、検出範囲で長さ18.4m、幅0.8m、深さ0.15mほどである。幅は最大で1.2mほどを測る部分もある。浅く立ち上がりが緩やかな溝で断面形は弧状であるが、深い部分は半円状を呈する部分もある。覆土は灰褐色シルトであり、IV層により近い色調である。主軸方向は東西で、ほぼ直線的である。馬の背状の微高地を横断するように広がっており、溝に溜まった水は、低地側に流下する配置になっている。何らかの区画もしくは排水としての機能を果たしたことが想定される。

SD10（図版3・7・27） 規模は、検出範囲で長さ3.1m、幅0.9m、深さ0.25mほどである。断面形は半円状である。主軸方向は東西で、ほぼ直線的である。覆土は地山（Ⅶ層）とよく似るが、色調がやや赤みを帯びており、地山よりも粘性があることで判別できた。SD2・SD9とは覆土の特徴が異なり、古墳時代以降に位置付けられるピットに切られている。このことから、本遺跡で最も古い段階に位置付けられる可能性がある。しかし、出土遺物はなく、風倒木痕と同様に粘性の高い土質の覆土であることを考慮すれば、人為的な掘り込みではない可能性もある。なお、同様の覆土の特徴は、SK12・SK91にも共通する。

SD32（図版6・10・27） 規模は、検出範囲で長さ9m、幅0.8m、深さ0.05mほどである。幅は最

大で1.2mほどを測る部分もある。断面形は弧状で、遺構内の覆土は黒褐色シルトであり、炭化物を多量に含む。覆土の特徴がⅢ層に共通することから、古墳時代の遺構である可能性が高いと判断した。主軸方向は東西で、ほぼ直線的であるが、9A23グリッド付近でほぼ直角に屈曲する。この溝もSD9と同様に馬の背状の微高地を横断するように広がっている。また、放射性炭素年代測定によって古墳時代の遺構と判断された板杭列(SX14)とおおむね直交する。遺物は、出土していない。

C 土 坑

土坑と判断した遺構は6基存在するが、覆土の特徴により大きく二分することができる。古墳時代前期の遺物包含層であるⅢ層を基調とする覆土を有するもの(SK87・SK100)と、Ⅷ層に似るが粘性がより強いことを特徴とする覆土を有するもの(SK12・SK91)とがある。両者の平面形態は、いずれもほぼ円形～楕円形を呈するが、断面形態はまったく異なる。前者は浅い皿状、後者は深い挿鉢状を呈する。遺物の出土状況においても状況が異なる。前者には古墳時代前期の遺物が含まれるが、後者には遺物の出土はみられない。後者は、古墳時代以降のピットに切られる状況があったことから古墳時代以前の遺構と考えたが、時代の詳細は明らかでない。いずれも直径2mほどの円形であり、挿鉢状の断面形を呈することは、風倒木痕の形態的特徴〔能登1974〕と共通する。人為的な落ち込みではない可能性も考慮する必要があるが、土層の逆転現象や倒木後の黒色土の嵌入は認められない。したがって、確実に古墳時代の土坑と判断されるのはSK87・SK100のみとなる。また、SK40・SK42については、比較的形態が整っていることから土坑として分類して調査したが、覆土の内容が風倒木痕と酷似することから人為的な掘り込みでない可能性がより高いと判断した。

SK87 (図版4・8) 14B2・14B7グリッドに位置する。規模は、長径0.65m、短径0.45m、深さは5cmを測る。平面形は楕円形、断面形は皿状である。覆土はⅢ層を基調としており、土器片が出土していることから古墳時代前期の遺構と判断した。

SK100 (図版4・8・23・26) 14B3・14B8グリッドに位置する。規模は、長径1.35m、短径0.85m、深さは15cmを測る。平面形は楕円形、断面形は皿状である。覆土は、Ⅲ層を基調としている。長さ33cm～14cm、厚さ4～9cmほどの扁平礫3点(第1表)が、まとまって出土していることが特徴的であり、その周囲から土器片が出土している(図版17-254)。扁平礫には、明瞭な使用痕や加工痕は認められないものの、その存在そのものが遺構の性格を考える上で重要な要素といえる。

取上げ番号	長さ	幅	厚さ	石材
S1	32.6	17.3	8.8	安山岩
S2	18.3	16.0	5.5	礫岩
S3	14.1	13.4	4.2	安山岩

第1表 SK100出土の扁平礫

SK12 (図版3・7) 17B22・17B23グリッドに位置する。規模は、長径1.7m、短径1.5m、深さは30cmを測る。平面形は円形、断面形は半円状である。覆土は、Ⅷ層(地山)と酷似するが、Ⅷ層よりも粘性があり赤みを帯びていることが特徴的である。遺物は、出土していない。

SK91 (図版4・8・26) 14B17・14B18・14B22・14B23グリッドに位置する。規模は、長径1.7m、短径1.2m、深さは44cmを測る。平面形は楕円形、断面形は半円状である。覆土は、Ⅷ層(地山)と酷似しており、平面プラン検出は困難であったため、トレンチを設定しながら調査を進めた。断面観察により、Ⅷ層よりも粘性があり赤みを帯びている土であることが辛うじて分かり、掘り込みの形状を判断することができた。この覆土の特徴は、SD10・SK12と一致する。遺物は、出土していない。

SK40 (図版5・10・26) 10A18・10A23グリッドに位置する。調査範囲外まで遺構が広がるため、

全体像は明らかではないが、規模は長径1m、短径1m、深さは20cmを測るとみられる。覆土は風倒木痕に特徴的に認められる黒色シルトを基調とすることから、人為的な掘り込みでない可能性が高い。遺物は、出土していない。

SK42 (図版3・7) 15A24・15A25グリッドに位置する。規模は長径0.95m、短径0.85m、深さは10cmを測る。平面形は楕円形、断面形は皿状である。平面形がやや歪であること、覆土が風倒木痕に特徴的に認められる黒褐色シルトを基調とすることから、人為的な掘り込みでない可能性が高い。遺物は、出土していない。

D 灰白色シルト塊

SX13 (図版3・7・28) 17B10グリッドのⅢ層下底から灰白色砂質シルトの塊が検出され、その周囲から土器片が比較的まとまって出土した(図版17-252・253)。ちょうど平地と低地の傾斜変換線付近に位置する。1.4m×0.8mほどの範囲に広がり、厚さは最大で10cmほどである。検出時は、地山と明らかに区別できる鮮やかな灰白色を呈していたが、時間の経過とともに地山(Ⅷ層)と似た灰色に変色した。また、中には顔料のような鮮やかな朱色の物質が含まれていたが、これも時間の経過とともに赤褐色に変化した。地下茎に沿うように顕著に認められたことから、地下水に含まれる酸化鉄と考えられる(事業団・三ツ井朋子班長の所見による。)

このシルト塊の性格については、いくつかの可能性を想定しながら調査を進めた。第一に、シルト塊の西隣りに炭化物集中範囲が検出されたため、それに関連した焼土であることを想定した。しかし、土質は均質な地山(Ⅷ層)に酷似しており、その可能性は低いと考えた。第二に、土器の素材であることを想定した。しかし、粘土質ではなく素材としては不適であると判断した。第三に、炭化物の西側に倒木が存在することから、転倒時に地下から持ち上げられた地山ブロックであることを想定した。周囲の遺物包含層からは遺物が多数出土しているにもかかわらず、全量水洗したシルト塊からは遺物は認められなかった。地表面に露出した後の変色の理由を説明できれば、最も蓋然性の高い想定であるかもしれない。しかし、いずれも問題点を抱える仮説であり、遺構の性格は明らかでない。

E 板 杭 列

SX14 (図版10・25・28) 9B16・17グリッドにおいて、先端を「V」字・「レ」字に尖らせた板状・棒状の板杭が1列に並んだ状態で検出された。いずれも掘り込みが認められないことから、連続的に地面に打ち込まれたものと考えられる。検出位置が低地に向かう傾斜変換線付近に位置しており、土地の区画に関する遺構である可能性が考えられる。また、溝SD32とおおむね直交する位置関係にあることから、相互の関連性も考えられる。

取上げ番号	実測番号	長さ	幅	厚さ	樹種	形態
W1	295	46.7	13.1	2.4	スギ	板状・先端V字
W2	297	39.1	9.3	2.1	スギ	板状・先端V字
W3		25.4	4.1	2.1	—	棒状・先端V字
W4		29.2	5.8	2.6	—	板状・先端V字
W5	296	39.0	8.0	2.9	スギ	板状・先端V字
W6		12.2	1.3	1.0	—	棒状・先端レ字
W7		16.8	10.4	1.6	—	板状・先端不明
W8		24.8	23.0	1.8	—	板状・先端不明
W9	298	55.3	23.0	1.6	スギ	板状・先端レ字
W10	299	31.2	2.9	3.1	スギ	棒状・先端レ字

第2表 SX14における板杭 (大きさの単位はcm)

板状・棒状の杭(図版18-295~299)は、直線上に8点(W1~W9)が115cmにわたり連続的に打ち込まれている。さらに、その南側には1枚(W9)が、西側に屈折するように打ち込まれている。これも含めると総延長は140cmになる。また、W9のちょうど延長上には、棒状のW10が単独で認められた。ト

4 その他

レンチ調査によって、その間に矢板列が連続しないことは明らかであったが、位置関係に有意な関係があることから一連の遺構と判断した。また、SX14の広がりを確認するためにトレンチ調査を実施したが、前後に延長しないことが明らかとなっている。

本遺構の年代は、Ⅷ層まで掘削してから検出したため、基本土層との関係は明らかでない。そこで、W1・W9・W10について放射性炭素年代測定を実施したところ1650±40年BP(AD380～420年、W1)、1700±40年BP(AD260～290年、AD320～400年、W9)、1820±40年BP(AD130～240年、W10)という結果が得られており、比較的近似した数値を示している。この測定値からSX14は、古墳時代の遺構と判断することとした。

板杭の大きさ・形状は、第2表のとおりである。板状・先端「V」字のもの(W1・2・4)、板状・先端「レ」字のもの(W9)、板状・先端不明のもの(W7・8)、棒状のもの(W3・5・6・10)が認められる。いずれも厚さは2cm前後である。残存状況が良好なものの長さは25～55cmほどであり、これは根入れ長を反映しているものと考えられる。幅は1～23cmであり、板状～棒状まで様々な形態の存在を表している。樹種は、分析したもの(W1・2・5・9・10)のすべてがスギと同定された。分析外の資料についても、外見上の観察からはスギである可能性が極めて高い。近隣で自生し、容易に入手できる素材が用いられたものと考えられる。

4 その他

A 風倒木痕

明らかな遺構のほかに、性格不明の落ち込みが多数存在した。ピット・土坑・溝のような形状を呈するが、明らかな遺構と比べると異質である。

ピット状の落ち込みは多数検出されているが、不自然にオーバーハングするものや先細りになるものなど、柱穴としてはあまりに貧弱なものが大半であった。下半部には、未加工の材が検出されるものもあり(SX80、SX92等)、木の根の一部であった可能性が高い。しかし、覆土の特徴などによって、確実なピットと判別することは困難であった。

土坑状の落ち込みは、直径2～5mほどの不整形円形を呈するものが多く、ドーナツ状のプラン(内側が地山ブロック基調・外側が黒色シルト)が検出されるものがあつた(SX72・73・89)。土層の堆積状況からは、倒木による土層の逆転現象と判断したが、そのことを裏付けるように木の根が残るものもあつた。円形の深い落ち込みSX71の底部からは加工痕のない材が検出されたほか、周囲には八手状に細い溝が延びていた。溝状の落ち込みは、幹から張り出した根の痕と考えられる。竪穴住居状の浅い落ち込み(SX76)も検出されたが、平面形状は不整形で、底面の凹凸が顕著であつた。これら性格不明の落ち込みの検出状況は、風倒木痕の特徴[能登1974]と共通することから、人為的な掘り込みとは区別して考えたい。

これらの覆土は、土壌化が進行した黒色土であり、Ⅴ層に似る。古墳時代以降に築かれた遺構に切られている事例が確認されており、SX73から検出された倒木(樹種:スギ)の放射性炭素年代測定は2900±40年BP(BC1130～1010年)という結果が得られている。落ち込みから出土した遺物は、SX73の縄文時代の石鏃1点(図版21-360)のみであることも矛盾しない。したがって、性格不明の落ち込みの多くは、遺跡が構築される以前の縄文時代晩期の風倒木痕と判断するのが妥当と考えられる。

B 倒 木

風倒木痕が密集する範囲から離れた15B・16Bグリッドからは、倒木1・2が並列して検出された。樹種は、いずれもクリである。ともに南東に向かって倒れていることから、冬季に北西から吹きつける季節風により倒れたものと考えられる。根元には、風倒木痕と共通した不整円形の落ち込みが検出され、覆土の特徴も共通する。倒木の埋没層位は、Ⅲ層下部～Ⅳ層上部付近であり、古墳時代に生育していた樹木と判断される(図版1-j地点)。SX13の西側にも株(倒木3)が検出されているが、これを含めると3つの株は低地との境界付近に間隔をおいて林立する。花粉分析の結果によれば、Ⅳ層段階においてはスギが優勢である一方、人為干渉によりクリ林の増加した可能性が考えられている。土壌サンプル採取位置はこれらの倒木の位置と近いことから、花粉と倒木相互の関連性が想定される。すなわち、クリは虫媒花であり花粉が飛散しないことから、サンプル採取位置の近くに花粉を供給する樹木が存在する可能性が高いのである。花粉分析の結果、倒木の検出層位を総合的に評価すれば、クリ花粉の供給源がこれらの倒木である可能性を指摘できよう。また、Ⅲ層段階になると、クリの花粉はほとんど観察されていない。このことは倒木の検出層位とも調和的な所見であり、クリが倒れた年代は、Ⅲ層最下底付近(古墳時代前期中頃)に位置付けることができる。

第V章 遺 物

1 中世～近世の遺物

A 概 要

今年度調査範囲からは、該期の遺構は掘立柱建物1棟と杭列1列が検出されたのみである。この建物は調査範囲内の微高地に位置し、その周辺は土壌分析(第VI章)の結果から水田稲作に適した湿地性の土地が広がっていたと考えられる。報告する遺物群は、そうした湿地性の土層の同層準から出土したもので、土器・陶磁器類、木製品、金属製品・銭貨、石製品がある。土器・陶磁器類は、青磁・白磁・青花(中国産染付)・李朝陶器・天目の舶載品、瀬戸美濃・珠洲・越前・信楽・越中瀬戸・肥前窯の国産品、瓦器、在地土師器が出土した。それらは14世紀後半から17世紀のものが多く、16世紀前半から中頃と18世紀以降の遺物が少ない。中世から近世前半にかけて、連続的に土地利用されている状況を鑑みて、おおむね17世紀代までの遺物を報告することとし、その変容過程を示すこととしたい。木製品は箸状木製品や形代等の祭祀的行為に伴うと考えられる製品(祭祀具)が多い。このうち箸状木製品のいくつかは、地面に突き刺さって検出されている等、該地が祭祀的空間であった可能性を示唆している。

なお、土器・陶磁器類の分類・編年および年代観については、青磁は上田秀夫氏[上田1982]、白磁は森田勉氏[森田1982]、15世紀の青磁・白磁については水澤幸一氏[水澤2004]、青花は小野正敏氏[小野1982]、李朝陶器は森本朝子氏・片山まび氏[森本・片山2000]、瀬戸・美濃焼は藤澤良祐氏[藤澤1993・1995]、珠洲焼は吉岡康暢氏[吉岡1994]、越前焼は田中照久氏・木村宏一郎氏[田中・木村2005]、越中瀬戸焼は宮田進一氏[宮田1997]および相羽[相羽2003]、肥前系陶磁器は大橋康二氏[大橋1993]、中世土師器は水澤幸一氏[水澤2005]の各論考を参考にした。実年代は、瀬戸美濃焼の古瀬戸後期様式Ⅰ期=14世紀後半、Ⅱ期=14世紀末～15世紀初頭、Ⅲ期=15世紀前半、Ⅳ期古段階=15世紀中頃、Ⅳ期新段階=15世紀後半、大窯1期=1480年～1530年頃、大窯2期=1530年～60年頃、大窯3期=1560年～1590年頃、大窯4期=1590年～1610年頃である。珠洲焼は吉岡Ⅳ期=14世紀第1四半期～第3四半期、Ⅴ期=14世紀第4四半期～15世紀前半、Ⅵ期=15世紀後半である。肥前系陶磁器は大橋Ⅰ-1期=1580年代～1594年、Ⅰ-2期=1594年～1610年代、Ⅱ-1期=1610年代～1620年代、Ⅱ-2期=1630年代～1640年代、Ⅲ期=1650年代～1690年代、Ⅳ期=1690年代～1780年代であるが、小画面まで特定できない場合には大画面で表記してある(「Ⅰ期」等)。それ以外の年代については文中に記した。なお、土器・陶磁器類はすべて包含層中より出土したため、器種別に報告することとする。

B 土器・陶磁器

1) 椀 類(図版11-1～28)

1～7は天目椀で、1は中国産、2～6は瀬戸美濃焼、7は肥前系陶器である。

1は灰白色を呈する緻密な胎土で、内外面に兎毫斑が認められるいわゆる「禾目天目」である。2と3は口縁端部をやや外側につまみ出す器形で、古瀬戸後期様式Ⅱ期に比定できる。4と5は古瀬戸後期様式

皿期に比定できるが、5の口縁形態は明瞭には屈曲せず、直線的に開く。6は口縁が玉縁状を呈する器形で、屈曲部に鉄釉が溜まり、圈線状に見える。2～5の天目椀が黒色を呈するのに対し、褐色を呈する。大窯4期に比定できる。7は内面および外面胴部上半に灰釉を掛けた天目椀である。口縁部は破損しているものの、残存部に屈曲部を残していることから天目椀と推定した。赤褐色を呈する粗い胎土で、武雄もしくは平戸地方の産である可能性が高い。

8～16は青磁である。8～10は蓮弁文椀である。いずれも片刃状工具により、蓮弁を一単位ずつ掘り込んで描いているが雑である。8と9は口縁端部をやや外側に引き出すが、10は端部が肥厚する。8は14世紀後半、9は14世紀末～15世紀初頭、10は15世紀中頃と考えられる。11～13は無文の椀である。11と12が外反し、13は内湾する。12の外面には沈線が一条巡る。いずれも、14世紀の後半から15世紀中頃の所産である。14～16は底部である。14は底部外面を蛇ノ目釉剥ぎする。15は厚くどっしりとした高台をもつ底部で、畳付け周辺と底部外面は無釉である。14・15は14世紀末から15世紀前半頃の所産である。16は見込みに花文を篋描きする。15世紀代の所産である。

17～20は瀬戸美濃焼である。17・18は平椀で、19は浅椀である。古瀬戸後期様式Ⅰ～Ⅱ期に比定できる。20は、内外面に赤味を帯びた光沢のない橙色の釉を掛け、内面には絵付けがみられる椀で、赤織部の可能性がある。17世紀初頭の所産か。

21は越中瀬戸焼の丸椀である。内外面に鉄釉をかける。17世紀中頃の所産である。

22～27は肥前系陶器、28は肥前系磁器である。22は内面および外面胴部上半に白濁した灰釉を掛け、口縁部にはさらに鉄釉を口縁とほぼ平行に上掛けする。いわゆる「皮鯨手」の椀である。23は口縁が外反する器形で、内外面に光沢のある灰釉を掛ける。24と25は底部であるが、ともに藁灰釉をかけた製品で作行が似る。黄白色の粗い胎土で、ケズり出し高台である。岸岳系山瀬窯の製品に似ている。26は内面に打刷毛目を施す椀。27は薄手の京焼風の椀で、外面に楼閣山水文を描く。28は外面に一重網目文を描く。年代は、24と25が大橋Ⅰ－1期、22が大橋Ⅰ期、23が大橋Ⅱ期、28が大橋Ⅱ－2期、27が大橋Ⅲ期、26が大橋Ⅳ期前半である。

2) 皿 類 (図版11－29～図版12－80)

29・30は青磁である。29は外面に篋描蓮弁文を配し、口縁が外反する皿である。30は胴部下半で屈曲する器形で、内面に劃花文を有する。ともに15世紀後半の所産である。

31～34は白磁である。31～33は黄色味を帯びた白色を呈する軟質な胎土をもつ一群で、口縁端部を面取りする。15世紀の所産であるが、口径が徐々に縮小化する〔水澤2004〕ことが知られ、31が15世紀前半、32が15世紀中頃～後半に位置付けられる。34は鮮やかな白色を呈する白磁で、内面に重ね焼きの痕跡が認められる。15世紀前半の所産である。

35は青花である。外面に花文、内面の口縁部に二重圈線を配する。小野分類B₁群に該当し、15世紀末～16世紀初頭の所産である。

36～38は李朝陶器である。いわゆる「雑釉陶器」である。いずれも砂礫を多く含む胎土で、内外面に灰釉を掛ける。36は口縁が内湾し、37は外反する。38は底部であるが、内外面に砂目積みが認められる。16世紀の所産である。

39～52は瀬戸美濃焼である。39～51は灰釉を施した皿である。39は中皿で、他と比較してやや大きめの口径を有する。古瀬戸後期様式Ⅰ期に比定される。これ以外は、小型の皿であるが、施釉範囲に違

いが認められる。40～45は口縁部のみ施釉され、縁釉皿もしくは縁釉はさみ皿と呼称される。40が古瀬戸後期様式Ⅱ期、41が古瀬戸後期様式Ⅳ期古段階、42～45が大窯1期に比定される。なお、43は内外面に回転糸切り痕を残す。このことから、青山双男氏のいう「紐輪積後轆轤水挽き成形」[青山2006]により製作されたと考えられ、大川東窯等の美濃窯の製品である可能性が高い。46～51はほぼ全面に施釉されるが口縁形態や重ね焼きの方法に差違が認められることから細分が可能である。46は口縁が内湾しながら立ち上がる器形で、丸皿である。47・48は口縁が外に開く端反皿である。49は底部片で丸皿もしくは端反皿であろう。高台内に墨痕が認められる。50は内外面を蛇ノ目状に釉剥ぎする内禿皿である。釉剥ぎした範囲内には輪ドチの痕跡が認められる。51は内面に菊をモチーフとする印花を有する皿で、外面は蛇ノ目状に釉剥ぎする。釉剥ぎした範囲には、重ね焼きをした際の窯着物が認められる。年代は46～48が大窯1期、49と50が大窯4期に比定できる。51は大窯期を通じてみられる技法である。52は内外面に長石釉を掛け、内面に鉄絵を施す「志野皿」である。底部外面は蛇ノ目状に釉剥ぎし、窯着物が認められる。大窯4期後半に比定される。なお、器表にススもしくはタールが付着するものは42～46・48であり、大半の製品が灯明皿として使用されていた可能性を指摘できる。特に大窯1期段階に著しい。

53～60は肥前系陶器である。53は口縁部を連続的に指でつまみ出す、いわゆる「ヒダ皿」で、内外面に灰釉を掛けるが、口縁端部には鉄釉を上掛けする。いわゆる「皮鯨手」である。54と55は内面に胎土目が認められる皿で、54には鉄絵が施されるいわゆる「絵唐津」である。56は内外面に白濁した藁灰釉を施す。高台内には墨痕が認められる。53～56は大橋Ⅰ期に属し、53はⅠ-1期、54・55はⅠ-2期に比定される。57は内面に砂目が認められる皿で、58は口縁部を上方につまみ上げる器形でいわゆる「溝縁皿」である。内面には鉄絵が施される。ともに大橋Ⅱ期の所産である。59は鉄釉の施された口縁が内湾する皿であるが、内外面にススが付着しており、灯明皿と判断される。大橋Ⅲ・Ⅳ期の所産である。60は内面と外面口縁部に銅緑釉、口縁部を除く外面に灰釉を掛け分ける皿で、内野山窯系の製品である。大橋Ⅳ期前半の所産である。

61・62は肥前系磁器である。61は内面に太い筆で意匠不明の文様を染付する。高台は低く、畳付には砂が付着する。釉は緑掛かっており、透明度が低い。また、生掛けのため、ムラが生じている。大橋Ⅱ-2期の所産である。62は内面に圏線を2条巡らせるのみの染付である。内面の胴部中程に屈曲を持つ。見込みには蛇ノ目釉剥ぎし、重ね焼きしているが、釉剥ぎ部分に窯着痕が認められる。大橋Ⅱ-1期の所産である。

63・64は越中瀬戸焼である。63はケズリ出し高台の皿である。内面には灰釉を掛けるが、見込みを蛇ノ目釉剥ぎし、重ね焼きをする。釉剥ぎ部分に窯着痕が認められる。17世紀中頃の所産である。64は胴部下半でやわらかに屈曲し、やや内湾しながら立ち上がる器形で、いわゆる「向付」である。内外面の上半に鉄釉を掛ける。17世紀第1四半期頃の所産であろう。

65～80は土師器皿である。成形技法により、てづくね成形とロクロ成形に大別できる。

65～72はてづくね成形である。65と66は深身の皿である。65の口縁端部は肥厚し、玉縁状になる。66は胴部中程で屈曲する。遺存率が低く判然としないが、14世紀後半から15世紀中頃までの所産か。68と69は口径が8.5cm程度の皿、70～72は口径が10.0cm程度の皿である。口縁形態は68が内湾するほかは、外に引き出されている。70と71は口縁端部が上方に引き出されている。また、71と72の胴部下半には指頭圧痕が認められる。71の内面には横位にナデ調整をおこなった形跡が顕著に認められる。

16世紀後半から17世紀第1四半期頃に比定できる。

73～80はロクロ成形である。器形は胴部が直線的に開く器形（73・74）と上方に立ち上がる器形（75・76）があり、口径は一定しない。底部（76～80）はすべて回転糸切り技法により切り離されるが、器厚に差違が認められる。いずれも15世紀代の所産と考えられる。75は14世紀前半に遡るか。

72・73・76・77・79にはススもしくはタールが付着しており、灯明皿として使用されていたものと考えられる。本調査範囲においては手づくね成形の皿よりもロクロ成形の皿の方が灯明皿としての使用頻度が高い傾向がある。

3) 鉢・盤類、瓦器、筒形容器、香炉類、茶入、杯（図版12－81～93）

81～86は鉢もしくは盤である。

81～83は瀬戸美濃焼である。81は内外面の胴部上半に灰釉を掛ける鉢で、古瀬戸後期様式IV期新段階に比定できる。82は内外面に鉄釉を施す鉢で、口縁部を上方につまみ上げている。大窯段階か。83は内外面に灰釉を施し、口縁部を外反させる折縁深皿で、古瀬戸後期様式IV期古段階に比定される。

84・85は肥前系陶器である。84は内面に灰釉を掛け、鉄絵を施すいわゆる「絵唐津」の鉢である。大橋I期の所産である。85は内面に褐釉を施し、白刷毛目による波状文を施す鉢である。大橋III期の所産である。

86は青磁の盤である。底径は推定12cm程度を測る。

87・88は瓦器である。87は口径が7.4cmを測る筒形の器形で、器種不明である。胎土が軟質である上、焼成は甘く、にぶい橙色を呈する。胴部の中程にスタンプ文が巡る。88は緩やかに内湾する器形で風炉であろうか。87とは異なり、焼成が良く、黒色を呈する。外面には突帯が巡り、その下位に雷文が巡る。

89～92は瀬戸美濃焼である。89は筒形容器で、外面と内面上半に灰釉が掛かる。古瀬戸後期様式III期に比定できる。90は香炉である。底部は回転糸切り後、粘土塊により足をつける。遺存部には一足しか認められないが、三足になる可能性が高い。91も器形の類似性から香炉になる可能性が高い。外面上半には灰釉が掛かる。共に古瀬戸後期様式に比定され、91はII期の可能性が高い。92は茶入と考えられる。内外面に灰釉を施し、口縁端部は釉剥ぎする。

93は白磁の八角杯である。やや粗い黄白色の胎土で、白磁皿31～33と類似する。外面を大きく面取りする。15世紀中頃から後半の所産である。

4) 片口鉢・播鉢（図版13－101～115、128・129）

101～109・115は珠洲焼である。101～103は吉岡IV期に比定される。101は口縁部があまり開かないので、IV期の中でも前半期に位置付けられ、103は外に開く器形であることから後半に位置付けられる。104～107は吉岡V期に比定される。105を除き、口縁内側に波状文が施される。108・109は吉岡VI期に比定される。ともに口縁内側に波状文が施される。焼成が甘く、混入物が多く目立つようになる。115は底部である。明瞭ではないが、静止ヘラキリされている。図化していない底部片においても、すべて静止ヘラキリが確認される。

110～112は越前焼である。口縁形態より110は15世紀後半、111は15世紀末頃、112は16世紀末頃に比定される。

113・114は越中瀬戸焼である。113は浅黄色を呈する軟質な胎土で、長石を多く含む。内外面に鉄

1 中世～近世の遺物

釉を掛けるが、釉厚は薄く、色調はにぶい褐色を呈している。口縁端部は折り返して肥厚させる。17世紀前半の所産である。114は灰色味の強い灰白色を呈する硬質な胎土で、長石を殆ど含まない。内外面には鉄釉を施すが、全面にある程度均一の厚さで掛かり、灰褐色等の濃い色調を呈している。口縁端部は折り返した後、外に引き出されている。114は113と作行が異なる点が多いことから越中瀬戸焼ではなく、瀬戸美濃焼もしくは須佐唐津焼の可能性がある。年代は16世紀末から17世紀初頭と考えられるが、須佐唐津焼であった場合は17世紀後半の所産である可能性もある。113と114の口縁端部はともに平滑になっている。研磨具としての使用や、出し入れの際に磨耗した可能性も考えられよう。

128・129は肥前系陶器である。128は口縁部にのみ鉄釉が掛かる。遺存部に卸目はみられないが、口縁形態から大橋Ⅱ-2期の播鉢と判断できる。129は口縁部が玉縁状に肥厚する器形で、大橋Ⅳ期前半の所産である。

5) 壺・瓶・甕 (図版13-116~127)

116・117は瀬戸美濃焼である。116は口縁部を折り返して肥厚させる器形で、口縁部付近の内外面に鉄釉を掛ける。四耳壺の可能性が高い。117は外面に灰釉が掛かる瓶子の胴部下半である。ともに古瀬戸後期様式と考えられる。

118は李朝陶器の瓶である。タタキ成形されており、内面には同心円状の当て具痕が残る。外面には白濁した灰釉が掛かる。36~38の雑釉陶器皿と同様に16世紀の所産と考えられる。

119・120は越中瀬戸焼の広口壺である。ともに内外面に鉄釉を施す。119は口端部付近に、120は外面にススが付着する。120は口端部の釉が剥離しており、重ね焼きをおこなった痕跡と推察される。年代はともに17世紀前半~18世紀前半と判断され、120は新瀬戸古窯〔三鍋・渡辺2001〕に類似することから17世紀末~18世紀初頭頃の可能性がある。

121・122は肥前系陶器の甕である。ともに口径が10~12cm程度と小型である。内外面に灰釉を施す。口縁形態は121が外に折り返し、122は平坦となる。122の口縁端部には貝殻状の目積み痕が認められる。ともに大橋Ⅰ期の所産である。

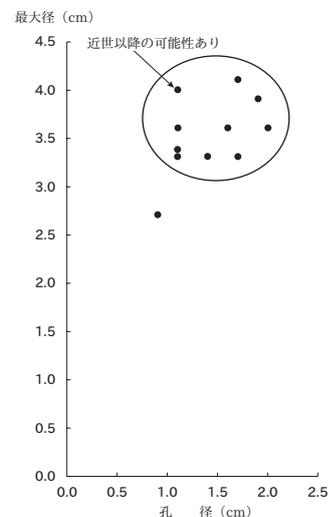
123~126は珠洲焼である。123・124はロクロ成形の壺である。125と126はタタキ成形による甕である。口縁形態と胴部の張り具合から125が吉岡Ⅴ~Ⅵ期、126が吉岡Ⅳ期前半の所産と判断される。

127は信楽焼の甕または壺の胴部片である。胎土は緻密な白色系の土で、大粒な長石を多く含む。その一部は桃色味を帯びた器表にも顕著に吹き出している。葉茶壺の可能性が考えられ、15世紀代の所産か。

C 土製品

1) 土 錘 (図版12-96~100)

管状土錘は11点出土しており、うち5点(96~100)を実測図化した。形態的特徴からの時期決定が難しい遺物であるが、出土層位から判断して中世に属する可能性が高い。いずれも丸軸棒に粘土を巻き付けて手づくね成形されており、端部に面を作出する。実測対象外の資料も含めて最大径・孔径の計測値(推定含む)をみると(第6図)、最大径



第6図 管状土錘の最大径と孔径

2.7cm・孔径0.9cmをはかる1点を除いておおむね似たような値（最大径3.3～4.1cm、孔径1.1～2.0cm）を示し、それらは「太型」[関1990、藤塚1999、加藤2001]の範疇で捉えられる。比較的小型の1点も、いわゆる「細型」よりは明らかに径が大きく、「太型」ないし「中間型」の中で捉えられよう。孔径等から判断すれば、本遺跡の管状土錘は袋網系の錘であろうか。具体的な対象魚や使用法は明確でないが、本遺跡は日本海に近く、中世期に網漁がおこなわれていたものと考えられる。

2) 陶片円板 (図版12-94・95)

94・95は陶片円板である。ともに珠洲焼T種からの転用である。外縁を連続的に剥離し、円形を作出している。

D 木製品

木製品は140・191を除き、Ⅱb層～Ⅲ層からの出土であるが、圧倒的多数はⅡb層から出土している。したがって、中世後期（14世紀後半～16世紀）に属すると判断されるが、一部はⅢ層からも出土している。Ⅱb層・Ⅲ層はそれぞれ薄い堆積層であることから、資料が混在したのと考えられる。また、Ⅱb層から突き刺すような状態で検出されたものも認められている。これらの状況から、Ⅲ層から出土した木製品についても、本来的にはⅡb層に帰属するものである可能性が高いと判断した。なお、Ⅱb層でもⅢ層との境界からより多く出土していることから、中世後期でもより古い年代である可能性がある。

出土した木製品は、箸状木製品658点、形代16点（人形14点・刀形2点）、下駄3点、扇骨1点、木簡1点、漆へら1点、漆器皿1点、曲物底板3点、鋤先1点、布巻具2点があり、このほかに多数の棒状木製品・板状木製品がある。ここでは、木製品を素材形状により、大きく3分類して報告する。

A類 板状木製品：扁平な長方形を基調とする素材から作り出されたもの。形状および加工方法により10類に細分することができる。

B類 棒状木製品：厚みのある円柱状もしくは角柱状を基調とする素材から作り出されたもの。形状および加工方法により5類に細分することができる。

C類 その他製品：遺存している部分から本来の器形と用途が推定可能な木製品。

なお、樹種の実験はスギが圧倒的多数を占めている。スギは本遺跡周辺で純林を構成することから入手しやすい素材である。また、大きな材を採るのに適しており、加工工作が比較的容易であることから、利用目的にかかわらず広く使用されていたと考えられる。

1) A類 板状木製品 (図版14-130～169)

A-1類 (130～136) 板状材の長軸の上方寄りに両側面から抉りをいれるもの。人物の側面ないしは正面を表現したと考えられるもの（130・131・133・136）が認められ、人形として使用されていた可能性を指摘できる。ただし、いずれの表面にも墨による描画や線刻等はみとめられない。樹種はすべてスギである。

a：上半を両側から斜めに細く削り出していき、抉りを入れることで、胴部と頭部を表現するもの。

130～133が該当する。なお、130は杓子からの転用と考えられる。

b：直線的な胴部から抉りを入れ胴部と頭部を区分けし、頭部に細かな加工を加えて人物を表現したと見られるもの。136が該当する。

1 中世～近世の遺物

c：直線的な胴部から挟りを入れ胴部と頭部を区分けしただけのもの。134と135が該当する。このグループは形状から荷札状木簡である可能性も考えられるが、墨痕は認められなかった。

A-2類(137～144) 板材の長軸の上方寄りに一側面から挟りをいれるもの。人物の側面を表現したと考えられ、人形として使用された可能性がある。A-1類よりも幅の狭い素材が使用され、小型のものが多く、頂部を加工するものが多い。137・139・142の胴部の下方は細くなり、人物の腹部から腰部を表していると考えられる。本類の下方は欠損しているものが多い。144は頂部が未加工のまま、頭部が方形を呈しており異質である。下方が炭化している。樹種は137がマツ属であるほかはすべてスギである。

A-3類(145) やや厚みのある板材に方形の孔を穿つ等の加工を施すもの。145のみが該当する。145の左方は破損しているが、本来は方形基調の板材の中央付近に方形の孔が開けられたもので、ほかの部材と組み合わせさせて一つの製品を構成する組材と考えられる。樹種はコナラ属である。コナラ属は強靱で弾性に富むことから建築材に用いられることが多い。

A-4類(146・147) やや厚みのある板材を素材とし、側面観がL字状になるよう挟りを入れ、頂部に向かって細く削り出すもの。ほかの部材と組み合わせさせて一つの製品を構成する組材と考えられる。146と147は出土位置がおよそ100m離れているものの、形状の類似性から同一製品ないしは同型の製品の組材であった可能性がある。なお、147は挟りの表裏から直径3mmの円孔が2つ穿たれている。樹種はともにスギである。

A-5類(148・149) 方形基調の板材を素材とし、一側面から反対の側面上端に向かい弧を描きながら尖らせるタイプ。刀を模倣した形状を呈し、刀形として使用した可能性を指摘できる。148は弧が短いのにに対し、149は弧が長い。また、149には直径4mmほどの円孔が穿たれるが、刀形の用途に伴うものか、元々穿孔されていた製品ないしは部材からの転用品であるのかは判断できない。転用品の場合、円形の素材からの転用が考えられるが、本製品の器壁の薄さを考慮すると曲物底板等の厚みを有する素材からの転用は考えにくい。樹種はともにスギである。

A-6類(150・151・155) 方形基調の板材を素材とし、先端を尖らせるもの。150と155は一側面から先端に向かい細く尖らせるものの、端部には平坦な面を残す。151は両側面から先端に向かい細く尖らせる。150は扁平な素材で、形状から荷札状木簡の可能性もあるが、残存部に墨痕は認められなかった。樹種は150がヒノキで、151と155はスギである。

A-7類(152～154) 小型の方形基調の板材を素材とし、端部を加工しないもの。本類はA-6類と異なり先端を尖らせてはいないものの、152と154が地山に突き刺さった状態で検出された。樹種はスギである。

A-8類(156～158・162・163・165・166) 方形基調の板材を素材とし、素材の縁辺に大幅な加工を行わず方形を維持しつつ、円孔もしくは木釘によりほかの材と組み合わせて使用するもの。156～158・162・165・166には大小様々な円孔が認められるが、すべて部材の上方の中心軸上に1孔が穿たれるという共通点がある。樹種は158がブナ属で、163がサワラであるほかはスギである。158の側面と裏面は炭化している。163と165は側面に他材と木釘で組み合うように作られている。163は器表にも細かな木釘が打ち込まれた痕跡が認められる。また、163は裏面に膜状の黒色付着物が認められ、漆塗り製品であった可能性が高い。本製品はサワラ材を使用している。サワラは水湿に強い材であることもあり、大型の漆器の部材である可能性もあろう。

A-9類(159～161) 方形基調の板材を素材とし、素材の縁辺の大幅な加工が行われないもの。159

と161は上下両端が破損していることから全容は明らかでないが部材の一部であろう。160は幅広の板材で下方が炭化する。器表には擦痕が多数認められることから、俎板の可能性がある。樹種はすべてスギである。

A-10類 (164・167～169) 小型の板材を素材とし、縁辺に加工を施し多様な平面形を呈するもの。164は下半が膨らむ形状を呈し、下端部は両側面から削り出して尖らせる。右側面は直線的に作られているが、左側面は弧を描く。上方の中央やや右寄りに直径6mm程度の円孔が穿たれる。左側面と下端面、裏面は炭化している。167は長方形を呈する部材で、右方中央に方形の抉りを入れる。器表には木釘が3か所認められるが、木釘は裏面まで貫通しない。168は縦長の八角形を呈する。上下端は表裏から削られ、先端に向かい徐々に薄くなる。ほぼ中央軸上には直径2mmと5mmの円孔が穿たれるが、一方は表面から、他方は裏面から穿たれている。169は大部分を欠損し全容は不明であるが、外形を面取りし、多角形に作出された部材と考えられる。表面には等間隔に平行刻線が認められる。本グループはそれぞれ単独で製品となるのではなく、何らかの製品の部材であると考えられる。樹種はすべてスギである。

2) B類 棒状木製品 (図版15-170～210)

B-1類 (170～200) 15～25cm程度を測る細い棒状木製品を素材とし、断面多角形に表面を面取りするとともに片端ないしは両端を削り出して尖らせるもの。いわゆる「箸状木製品」である。断面形態や形状、法量から細分できる可能性があるが、完形に近い遺物が少なく明らかでない。本類は木製品の中で最大の出土点数(658点)を数え、調査範囲内から万遍なく出土している。出土傾向は、SX84やSX64、SX1が端的に示すように地面に突き刺さったまま検出される例がみられた。また、地面に刺した際の反発力により製品が折れ曲がったまま土中に残された状況もあり、遺存率が低い要因の一つといえるかもしれない。近隣において湿地性の土地に箸状木製品を刺す同様の事例は、寺地遺跡[相羽2002]・山岸遺跡[渡邊2007]がある。このような行為は、古代の斎串的役割と同様な役割を果たした[四柳1987]と考えられ、祭祀的行為と判断される。素材の樹種選択に関しては、185がヒノキである他はスギである。

B-2類 (201～203) 角柱状の棒状木製品を素材とし、先端を一側面から反対の側面端に向かい直線的に斜めに削り取って尖らせるもの。201と203の平面形態がほぼ長方形を呈するのに対し、202は幅や稜線が一定しない。断面も一定せず、端正な方形を呈さない。201はB-1類と同様、地面に刺さった状態で検出された。前出の寺地遺跡でも断面正方形に近い箸状木製品(寺地遺跡では「箸C類」と呼称)が、本報告でいう箸状木製品(B-1類)とともに出土していることを考慮すると、本類はB-1類と同様な使われ方をされた可能性が高い。樹種は202がクリであり、201と203がスギである。

B-3類 (204～207) 角柱状もしくは円柱状の棒状木製品を素材とし、先端を中心軸に向かい連続的に削り出し、尖らせるもの。いわゆる「杭状木製品」。芯持ち材(204)と芯外し材(205～207)があり、後者は器表を面取りして調整する。樹種は204がヒノキであるほかは、スギである。

B-4類 (208・209) 円柱状の棒状木製品を素材とし、上方に抉りを巡らせるもの。形状から布巻具もしくは経巻具の可能性はある。ただし、表面には糸が擦ったような痕跡は認められない。樹種はいずれもスギである。

B-5類 (210) 円柱状の棒状木製品。加工を加えていない棒状の木製品である。上部を欠損しているので、全容は不明である。柄等の可能性が考えられよう。樹種はスギである。

3) C類 その他の製品 (図版15-211～222)

遺存部分から、本来の形状と用途が推定可能で、A類・B類以外の木製品を一括した。

211～213は下駄である。211と212の平面形は隅を削り落とした略円形を呈する。歯の無い割り下駄で、田下駄や浜下駄として用いられたと考えられる。213は平面楕円形を呈する連歯下駄である。歯は摩り減っており、使い込んだ様子が看取される。近年、秋田裕毅氏により下駄が地上と他界をつなぐ祭祀品であるとの説〔秋田2002〕が論じられている。樹種はすべてスギである。

214は鋤先刃床部である。裏面と先端が炭化する。樹種はスギである。

215は木筒である。下端を尖らせる形状から突き刺して使用された札類と考えられる。墨痕は、赤外線装置を使用して「三月日の口〔土カ〕之口」「[] □ □」と判読した。樹種はスギである。

216は扇骨である。長方形の板状木製品を素材とし、下方の中心軸上に要となる直径2mm程度の円孔を穿つ。下端は両側面から削り込み尖らせる。前出の秋田説〔秋田2002〕では、下駄とともに扇のもつ祭祀色にも着目している。今回、祭祀的空間と考えられる調査範囲から形代や箸状木製品に加えて、下駄・扇がセット関係をなして出土したことは極めて興味深い。樹種はスギである。

217は漆へらである。先端部には赤漆が付着し、先端に近い胴部下半には黒漆が付着する。黒漆は厚く付着する部分と薄い部分ないしは付着しない部分が認められた。このことから、本製品は、漆器そのものではなく、漆器を製作する際の道具であったといえる。樹種はヒノキである。

218はへら状の木製品である。樹種はスギである。

219は内外面に黒漆を塗布した漆器皿である。底径は8cmを測り、ベタ高台である。樹種はブナ属を使用している。遺存率が悪く、器形による製作年代の推定は難しいが、同層準から出土した陶磁器類の年代から14世紀後半以降と考えられる。漆器の樹種同定を行った長岡市大武遺跡〔春日ほか2000〕や上越市仲田遺跡〔加藤ほか2003〕では15世紀の漆器にブナ属が多く使用されているとの結果が示されており、調和的な状況といえる。

220～222は曲物底板である。220は剥落が進行しており明瞭ではないが、黒漆が塗布されている。直径は21.0cmを測る底板の一部で、側面に木釘が認められる。221は直径24.5cmを測る底板の一部である。222は直径7.8cmを測る小振りの曲物底板で、上面に黒漆が塗布されている。器表には直径5mmと8mmの孔が穿たれている。樹種は、221はスギであるが、220と222はサワラである。サワラは水湿に強い材でもある上、漆は膜を張ることから、湿度のあるものを保管するのにも適する。製品の用途に応じて、材の選択および漆の塗布の有無を行っていた可能性がある。

4) 木筒 (図版15-215)

【釈文】

〔土カ〕

・「三月日の口之口」

・「[] □ □」

199mm × 17mm × 5mm 051型式

木筒はほぼ中央付近で切断されているが、そのほかに大きな欠損はなく、ほぼ完形で残存している。切断部以外の欠損としては上端部、「三月」の上の部分がわずかに削り落とされている。調整はよく残り、

表裏とも滑らかさを保つ。

墨痕は両面とも非常に薄く、肉眼で判読されるのは表面の「三」だけである。赤外デジタルカメラの撮影でも判読は難しく、Hamamatu社製赤外装置によって判読した。裏面が判読できないことから、使用段階での表裏関係を確定することはできていない。よって便宜的に、文字が多く判読された面を表とし、墨痕の残りが少ない面を裏とした。「口〔土カ〕」文字については、『五體字類』(第7図)を根拠に「土」の可能性を推測した。裏面に関しては、文字と思われる墨痕の残画を確認できたにすぎない。

判読された表面の文字内容については二つの解釈が考えられる。一つは「三月」で意味を区切る解釈である。残る「日の土之口」については、適当な根拠・類例を見出せなかったが、一例をいえば、「日野」姓で「土之助」や「土之進」等という個人名等の可能性が推測される。もう一つは「三月日」で時期を示す語句とする。こうした具体的に日付を記さない記載法は中近世の文書類に散見する。ただし、前者に関しては「日野」姓の人名を当該地域の史料上で確認できず、後者については「土之口」の適当な解釈ができない等の問題が残る。

一緒に出土した遺物から時期が中世(15世紀頃)であることと、下端を尖らせる形状から俵等に突き刺して使用された札類と考えられる以外は、不明な点が多い。

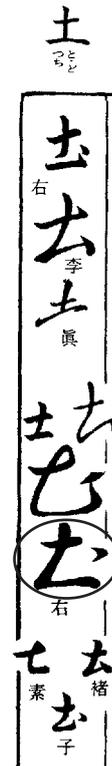
E 金属製品・製鉄関連遺物(図版16-223~231)

金属製品は、釘(224~226)と用途不明品(223)が出土した。釘は、いずれも鉄製の角釘で、224と226が断面方形、225が断面長方形を呈する。三者の法量にはまとまりがなく、細かい用途はそれぞれ異なるものとみられる。また頭部形態については、224は欠損しており不明であるが、残り2点は直角に屈曲するタイプである。223は、外径5.1cm・内径3.4cmの環状を呈する銅製品で、環の内側が直角に屈曲して8mmほど下方に延びる。屈曲して延びた部分には、直径1.5mmの小孔が2つ並列して穿たれる。出土層位から判断して中世のものともみられ、襖・障子などの戸の開閉のために手をかける部分(引手金具)である可能性が高い。

製鉄関連遺物は、鞆羽口(227・228)と鉄滓(229~231)が出土した。羽口は、2点とも破片資料であるが、いずれも外径7.5cm前後、内径3~4cmほどと推測され、本遺跡ではおおむね同じ大きさの羽口が使用されていたとみられる。また227の外表面には、塊状の鉄滓が付着しているが、メタルは確認されなかった。鉄滓については、いずれも碗形滓の類とみられるが、特に229は大型で明瞭な碗形を呈している。これら鉄滓は3点とも、メタルは確認されなかった。

F 石製品(図版16-232)

石製品の出土は少なく、砥石が数点出土したのみである。232は、きめの細かい凝灰岩製の仕上砥である。上面のみ砥面として使用している。両側面は節理面のままである。裏面は弦鋸によると考えられる小割・成形の際の痕跡が、弧を描くように認められる。下端には突出部がみられ、上面から鋸で切った後、最後に折り取った痕跡と考えられる。



第7図 土の字体例
(『五體字類』)

G 銭貨 (図版 16 - 233 ~ 245)

銭貨は、11世紀～15世紀のもの計13枚が出土した。具体的には、祥符元宝(北宋・1008年、真書)1枚、天禧通宝(北宋・1017年、真書)1枚、嘉祐通宝(北宋・1056年、真書)1枚、熙寧元宝(北宋・1068年、真書)2枚、元豊通宝(北宋・1078年、篆書)1枚、元祐通宝(北宋・1086年、行書)1枚、紹聖元宝(北宋・1094年、篆書・背月か)1枚、嘉泰通宝(南宋・1201年、真書・背二または背三か)1枚、洪武通宝(明・1368年、真書・コ頭単点通か)1枚、永楽通宝(明・1408年、真書)3枚である。嘉泰通宝(241)を除いた9種は、備蓄銭の出土枚数上位15位以内[鈴木1999]におさまるものであり、中世期に一般的な銭貨が出土していることがわかる。なお、本遺跡では人形・箸状木製品をはじめとして中世の祭祀的遺物が数多く出土していることから、祭祀行為に伴うものであった可能性も考えられる。

H 骨角器 (図版 21 - 363、第VI章5)

363は、17A24グリッドⅢ層から出土した骨角器である。長さ2.7cm、幅0.6cm、厚さ0.3cmを測る。素材は、シカの角である可能性があるが明らかでない。被熱しているため加工の状態は明瞭でないが、面を取るような削りにより、やや扁平な棒状に仕上げられている。放射性炭素年代測定によって中世に位置付けられるイルカの骨と比較的近い地点から出土していることから、中世の遺物と判断したが、イルカの骨と比べると被熱の状態が著しく白色化している。むしろ15B4グリッドⅡb層から出土しているヒトの頭蓋骨と被熱の状況は近い。なお、この骨角器はⅢ層から出土しており、古墳時代あるいは縄文時代に遡る可能性もある。

2 古代の遺物 (図版 16 - 246 ~ 251)

古代の遺物は少ないが、須恵器(246～251)が出土した。出土層位はⅡb層(中世)であるが、Ⅲ層(古墳時代)との境界から出土することが多い。246と247は杯蓋、248～250は杯、251は甕である。胎土は混入物や胎質から二分される。

A類：灰白色を呈し、きめ細かい。軟質の白色砂礫を多く含む。杯の器壁は薄い。佐渡小泊窯産と推定され、246・248・249・250が該当する。250は無台杯で、底部を回転ヘラキリする。

B類：黄色味を帯びたシルト質。粘土塊を含む。247・251が該当し、247の胎土は西頸城丘陵産に似る。251はタタキ成形の甕である。

須恵器の年代は、246や250の形状および佐渡小泊窯製品が搬入されていることから判断して、春日編年Ⅴ～Ⅵ期(9世紀)[春日1999]に位置付けられる。

3 古墳時代の遺物 (図版 17 - 252 ~ 299)

A 概要

古墳時代の遺構と明らかに判断できたのは、掘立柱建物1棟・溝3条・土坑2基・板杭列1列と少ない。該期の遺物は、遺構が分布する3区から出土しているが、東側ほど遺物分布が希薄になっていき、1区・2区からはほとんど遺物が出土していない。出土遺物は、土器・石製品・石器・木製品がある。土器は前

期後半を主体とし、中期・後期のものも認められるが、小片が多く器形を把握できる資料は極めて少ない。石製品は、玉作関連資料（滑石製の勾玉・管玉・白玉の製作関連資料、翡翠の原石・剥片）と紡錘車が出土した。玉作関連資料は、副次的に生じる剥片・碎片等はほとんどなく、母岩の共有関係も認められない。これらの状況から、調査範囲内において一連の製作が行われた可能性は低いものと考えられた。石器は、貝殻状剥片を素材とする横刃形石器23点と打製石斧1点出土した。木製品は、掘立柱建物SB2の柱根と板杭が出土した。いずれも遺構の構築材であり、木製の道具は出土していない。

B 土器（図版17-252～図版18-292）

本遺跡では、古墳時代前期から後期にかけての土器が出土している。ただし良好な遺構一括資料がなく、包含層から出土した土器もかなりの時期幅を含んでいたため、細別して時期的変遷を検討するには至らなかった。したがって時期については、先行研究〔川村2000、笹沢2005、品田1991、滝沢2005、田嶋1986など〕を参考にした上で、古墳時代前期前半、古墳時代前期後半、古墳時代中期、古墳時代後期という大まかな記載にとどめざるを得なかった。『シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』で示された編年〔滝沢2005〕ないし石川県加賀地域の漆町編年〔田嶋1986〕に対比すれば、古墳時代前期前半は7期（群併行期）以前、古墳時代前期後半は8～11期（群併行期）、古墳時代中期は12～13群併行期、古墳時代後期は14～15群併行期におおむね相当する。中でも主体となるのは、古墳時代前期後半である。以下、各資料の特徴について個別に述べることにする。なお、今回出土した該期の土器は大半が甕類であり、全体形の分かる資料もきわめて少なかったことから、細別器種による分類もあえて設定しなかった。

SX13からは、252・253の土器が出土している。252は、口縁部がく字状にゆるく屈曲し端部が丸みを帯びる甕で、外面がハケ調整されている。253は、口縁部がく字状にやや強く屈曲する甕で、端部が若干上方に摘み上げられている。これら2点は、古墳時代前期後半に属するとみられる。

SK100からは、254の土器が出土している。口縁部がく字状にゆるく屈曲し端部が丸みを帯びる甕で、内外面ともハケ調整されている。時期は、古墳時代前期後半であろうか。

SD2からは、255・256の土器が出土している。255は、口縁部が逆コ字状を呈し、端部を上方に摘み上げる甕である。胴部は強く丸みを帯び、内外面ともハケ調整されている。古墳時代前期後半のものとみられる。256は有孔鉢の底部片である。外面はハケ調整され、内面はヘラナデ調整されている。底部中央には、直径1.0cmの孔が焼成前に穿たれている。

古墳時代の遺物包含層であるⅢ層からは、257～289の土器が出土している。そのほとんどが古墳時代前期後半に属するとみられるが、257～259・284・286・289は古墳時代中期、269・270は古墳時代後期のものと考えられる。

257～267は、口縁部がく字状ないし逆コ字状に屈曲する甕である。一部不明瞭なものを除き、ほとんどが内外面をハケ調整されている。口縁端部の形状にバリエーションがあり、丸みを帯びるもの（257～261・263・264・266・267）、上方に摘み上げるもの（262）、面をとるもの（265）の3種が認められる。268は、甕の底部。内外面ともハケ調整され、外面最下部はヘラナデ調整される。

269・270は杯である。体部が丸く口縁部が外反するもので、269は内面を黒色処理する。これら2点は本遺跡の古墳時代遺物としては最も新しく、古墳時代後期に属する。

271は、鉢である。底部が丸底で、口縁部が外反する。外面上半はハケ調整され、外面下半および内

面はヘラナデ調整される。

272は、小型壺の口縁部とみられ、外面にミガキが施される。273は、壺の体部とみられる。強く丸みを帯びた器形で、器壁が薄い。内面がヘラナデ調整されており、外面は不明瞭であるがミガキが施されているようである。

274～276は、底部片。器種は甕類であろうか。いずれも内面がハケ調整されており、うち276は外面および底面にもハケ調整がおこなわれている。

277～283は、壺の口縁部ないし上半部である。口縁部形態にバリエーションがあり、広口で有段のもの(278～280)、細口で有段のもの(283)、広口で無段のもの(277・281)、直線的で短いもの(282)の各種が認められる。また、少数ながら彩色されるものがあり、277は内外面に、280は内面に赤彩が施される。

284～287は、高杯脚部である。このうち284・286は若干ふくらみのある畿内系の長脚で、外面にミガキが施され、内面には粘土紐の積み上げ痕と指押さえ痕が明瞭に残される。287も、畿内系の長脚であるが、284・286に比べて直線的で、内面が丁寧にケズリ調整されている。288は小型の器台で、脚部が八字状に大きく開く。289は、高杯の口縁部である。口縁部が内湾気味に立ち上がり、内外面ともにミガキが施される。

Ⅲ層よりも下位のⅣ層からは、290～292の土器が出土している。290は、口縁部がく字状に強く屈曲し端部が丸みを帯びる甕である。外面はハケ調整され、内面はヘラナデ調整される。またⅢ層の甕類と比べると、器壁がきわめて薄い。291は、口縁部が外反し端部を上方に摘み上げる甕で、内外面ともハケ調整される。292は口縁部が直立気味に開く壺で、内外面ともハケ調整される。これらⅣ層出土の土器は、Ⅲ層よりも概して古相を示しており、古墳時代前期前半ないし前期中頃の位置付けを考えておきたい。

C 石製品 (図版19-302～図版20-345)

1) 玉作関連資料の概要

玉作関連資料は、滑石製の工程品と翡翠の原石・剥片がある。

滑石製の玉は、勾玉8点(うち未製品4点)、管玉4点(うち未製品3点)、白玉・算盤玉・平玉15点(うち未製品12点)である。未製品が大半を占めることが特筆される。また、一見、製品にまで仕上げられているかのようにみえても粗い擦痕が残されており、仕上げ砥がなされていない可能性が高い。形状の概略が整っていること、穿孔がなされていることをもとに製品を判断したものの、平滑な研磨面の状態から明らかに製品といえるのは管玉1点(310)と平玉1点(314)のみである。

一方、石核7点、剥片7点、研磨痕を有する素材2点も出土していることから、一通りの製作関連資料が揃っているといえる。しかし、石核に比べて剥片が少なく、また石核と剥片の間に母岩の共有を認めることができない。碎片については、土壌水洗を含めてもほとんど出土していないことが確認されている。すなわち、遺跡内で剥片剥離の過程がなされていることを積極的に認めることができないのである。

なお、玉類の出土地点周辺の土壌を土嚢袋120袋ほど水洗したが、玉類(未製品・素材)の回収率は1点/20袋程度であった。剥片・碎片や工具類の出土地数は少なく、玉類と同程度の点数であった。未製品の存在から調査範囲周辺で玉類の製作が行われていたことは確実視されるものの、製作の中心部分が調査範囲内ではないといえる。玉類の出土は、調査範囲の北側13A・14Aグリッド付近に集中することから、その北側の調査範囲外に玉作の中心地が存在した可能性がある。

翡翠の原石・剥片についても、玉作に関連する資料と考えられる。翡翠製敲石(346)が出土していることから、翡翠の剥片を作出していた可能性がある。しかし、製品までの一連の過程を示す資料は認められず、滑石製の玉作と同様、調査範囲内で盛んに製作されたものとは考えられない。

2) 岩石名・石材名の同定

岩石名・石材名の同定

石製品のうち22点の岩石名鑑定を、糸魚川市フォッサマグナミュージアム(分析者:同館館長補佐 宮島宏氏)に委託した。分析方法は次のとおりである。

まず、資料を肉眼およびルーペや双眼実態顕微鏡で観察し、肉眼的な特徴を把握した。このときに注目した特徴は、色調、透明度、結晶粒の有無と形、劈開の有無、共生鉱物種の有無とその種類、およその比重、脈状鉱物の有無等である。さらに分析走査型電子顕微鏡を用いて半定量分析をおこなった。資料の表面に汗、土壌等が付着していると、それらも検出されるので、あらかじめ表面にある汚れを、蒸留水を含ませた脱脂綿で数回拭いて除去し十分に乾燥させた。そして、フォッサマグナミュージアムに設置されている日本電子製走査型電子顕微鏡JSM-6300にオックスフォード社製エネルギー分散型X線スペクトロメーターQX2000を取り付けた分析走査型電子顕微鏡を用いて資料の半定量分析をおこなった。分析にあたっては、前もって清澄にした資料をφ100mmの試料載台に分析用カーボンテープを用いて軽く固定した。分析走査型電子顕微鏡での半定量分析は、資料に炭素蒸着をするのが普通であるが、考古学的な資料に炭素蒸着をすると資料表面を汚してしまうので、今回は無蒸着の状態で行うこととした。分析条件は加速電圧15kV、ワーキングディスタンス39mmから48mm、分析範囲0.5mm×0.4mm、分析時間30～120秒である。必要に応じて複数箇所を分析し、大きな相違がないことを確認した。肉眼鑑定の結果と検出された元素の種類とそれぞれのピークの高さから資料の岩石名・鉱物名を判断した。その結果は、第8・9図と観察表のとおりである。グラフにおいてピークを示す主要元素名を示し、その構成から判定された岩石名を記載することとした。

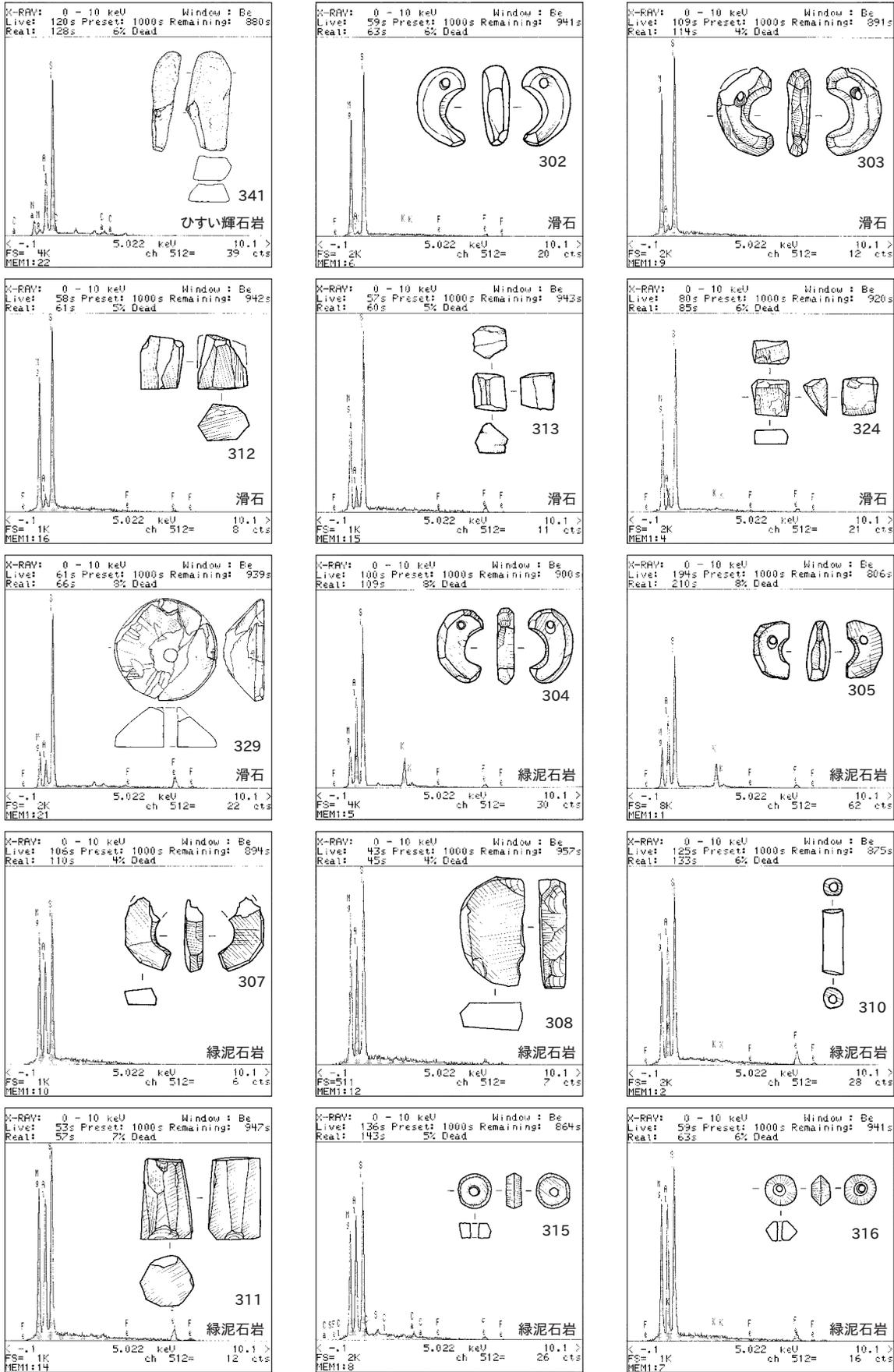
なお、一部の資料については、肉眼観察による岩石名・鉱物名の同定をフォッサマグナミュージアムの宮島宏氏・竹之内耕氏にお願いした。この結果については、観察表の「岩石名」の欄に、括弧書きで記載することとした。また、石器・石製品の形態と材質の間に有意な関係が認められることから、「岩石名」とは別に、考古学的観点で踏まえた分類名称を「石材」の欄に記載することとした。

岩石名の同定結果

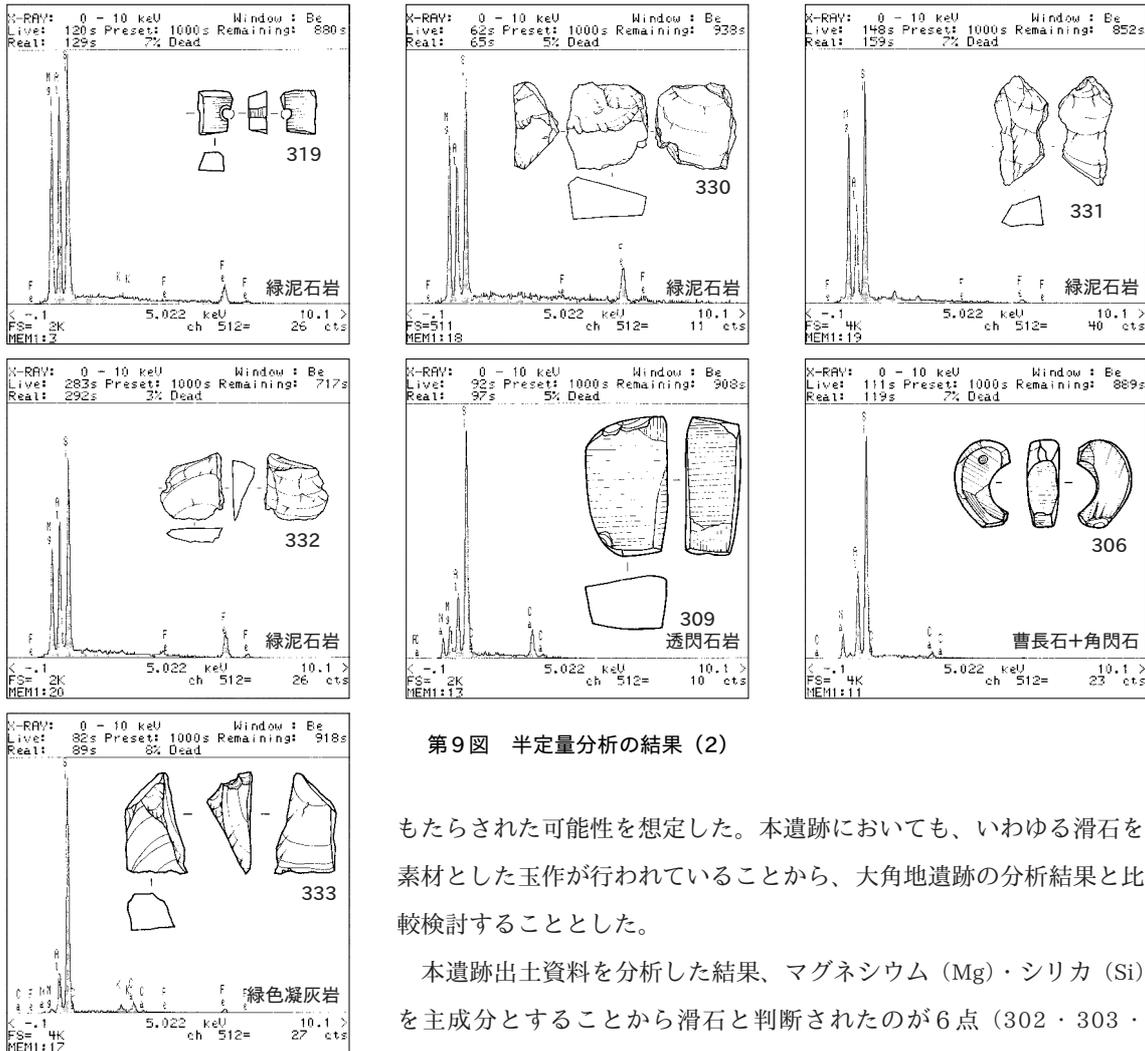
ひすい輝石岩 341は、シリカ(Si)・アルミニウム(Al)・ナトリウム(Na)・マグネシウム(Mg)から構成されており、ひすい輝石岩と判断された。やや青色を帯びることが特徴的なひすい輝石岩である(図版25)。チタン(Ti)と鉄(Fe)を多く含むオンファス輝石が青色をなすとされているが、本試料にそれらは認められない。なお、このほかにも、ひすい輝石が明瞭に肉眼観察されるものについてもひすい輝石岩と判断した。

滑石・緑泥石岩 平成17年度に発掘調査した大角地遺跡出土資料においては、これまで滑石と呼ばれてきた軟質の石材に、岩石学的には緑泥石岩と呼ばれるものが多数含まれていることが半定量分析によって明らかになった[加藤ほか2006b]。特に、古墳時代の玉で滑石とみていたすべてが緑泥石岩の特徴を有していた。肉眼観察においても、特定の石材が用いられたものと考えられ、素材が限られた原産地から

3 古墳時代の遺物



第8図 半定量分析の結果 (1)



第9図 半定量分析の結果(2)

もたらされた可能性を想定した。本遺跡においても、いわゆる滑石を素材とした玉作が行われていることから、大角地遺跡の分析結果と比較検討することとした。

本遺跡出土資料を分析した結果、マグネシウム (Mg)・シリカ (Si) を主成分とすることから滑石と判断されたのが6点 (302・303・312・313・324・329)、マグネシウム (Mg)・アルミニウム (Al)・シリカ (Si) を主成分とすることから緑泥石岩と判断されたのが12点 (304・305・307・308・310・311・315・316・319・330・331・322)であった。このように、いわゆる「滑石」には、岩石学的に滑石と判断されるものと緑泥石岩と判断されるものが存在することがわかる。しかし、分析範囲は0.5mm×0.4mmと極めて狭く、分析範囲をわずかに移動しただけで異なる成分構成が見出される場合があり、1試料に滑石と緑泥石岩の特徴が混在する場合もあった。例えば331は、緑泥石岩と判断されるものの、他と比べるとアルミニウムが少なく滑石が混在している可能性がある。すなわち、滑石と緑泥石岩の中間的なものも存在するのである。したがって、滑石と緑泥石岩を岩石学的に分類することに意義はあろうが、本遺跡の資料を考古学的に評価する場合、両者を区別することの効果はより小さい。軟質な石材を必要とした古墳時代の人々にとっては、両者の相違がさほど重要な要素でなかったと考えられよう。玉の石材選択に両者が混在することは、その裏付けといえる。本報告では、これらを一括して「滑石」と呼ぶこととした。

なお、329はマグネシウム (Mg) が少なく、鉄 (Fe) が定量検出されており、滑石の典型的な構成ではない。304・305についても緑泥石岩と判断したものの、カリウム (K) を含んでおり典型例とはいえない。これらについては、肉眼観察の結果と総合的に判断して同定した。

透閃石岩 309は、シリカ (Si)・アルミニウム (Al)・マグネシウム (Mg)・ナトリウム (Na)・カルシ

ウム (Ca) から構成されることから、透閃石岩と判断される。

曹長石+角閃石 306は、白色の部分と緑色の部分から構成されるが、元素の構成においても相違が認められた。広範囲を占める白色部分が曹長石 (NaAlSi₃O₈)、部分的に存在する緑色部分が角閃石であることが明らかとなった。なお、グラフは曹長石部分の分析結果である。

緑色凝灰岩 333は、シリカ (Si) を主成分とし、アルミニウム (Al) をわずかに含む。外見上、緑色凝灰岩と判断されるものであるが、火山灰の主成分である石英を主体とすることが理解される。

3) 各 説

勾 玉

302～309は、勾玉とその製作過程を示す資料である。このうち、直径1～2mmほどの穿孔がなされているものは302～305で、306は穿孔途中、307は欠損のため穿孔の有無は不明である。308・309は、勾玉の「C」字が作出される前段階の素材である。勾玉の大きさは、長さが1.5cm前後であり、素材である308・309はそれよりひと回り大きい2.2cmほどである。風化が著しいため元来の表面状態が明らかでない302を除けば、いずれも研磨により形成された稜線が残されることが特徴的である。あるいは仕上げの研磨に至っていない可能性もあろう。また、穿孔途中に破損したとみられる303や、穿孔途中の306の存在からは、勾玉の形態の概略が決定されてから穿孔する製作過程を理解することができる。石材は、滑石が主体であるが、管玉・白玉等と比べるとやや異質であり、バラエティーに富む。

管 玉

310～313は、管玉とその製作過程を示す資料である。このうち310が穿孔されており、表面は擦痕をほとんど残さないほど入念に研磨されている。未製品の可能性がある勾玉の表面とは状態が異なり、製品として理解することができるかもしれない。311～313は、多角柱に整えられた穿孔前の素材である。径よりも長さを有するものを管玉の未製品と判断したが、313は白玉の未製品であるかもしれない。ただし、白玉の素材である扁平素材 (318・319等) とは異質である。石材は、いずれも勾玉と比べると組織が粗い滑石である。

白玉・算盤玉・平玉

314～326は、白玉・算盤玉・平玉の製作過程を示す資料である。本遺跡では、この種の玉類が最も多く出土しているが、完形品は3点のみである (314～316)。いずれも直径6～7mm、厚さ2～3mm、孔径1～2mmほどのビーズ状の玉である。いわゆる白玉とは異質であり、より算盤玉に近い形態であることが特徴的である。中でも側面観が菱形を呈する316は、算盤玉と評価できるものである。315は、表裏に平坦面が作出されており白玉に近い形状であるが、側面観が亀甲形をなすことが特徴的であり算盤玉と共通する。314は、全体的に滑らかに仕上げられており平玉ともいえる形状をなしている。稜線はシャープでないものの、やはり側面観は亀甲形をなす。314には、荒々しい擦痕が残されていないことから、あるいは目的とする形態であったのかもしれない。そうであれば、「白玉状→算盤玉状→平玉状」という変形過程をたどることができる。大きさの比較においても「315 (直径7mm) →316 (直径6.5mm) →314 (直径6mm)」という相違があり、この変形過程と一致する。しかし、資料が少ないため十分な分析を行うことはできない。

平面円形のこれらの玉の製作過程に関連する資料は317～326である。最初に324～326のような扁平素材を作出し、外形の概略を剥離等によって決定する。318・320・321・325は剥離によって周囲の形状を円形に仕上げている様子が理解される。このような形態が作出された段階で穿孔がなされている。ただし、平面正方形の素材に穿孔する事例(319)もあり、必ずしも画一的な製作過程をたどらない可能性もある。その後、外周を研磨によって正円に整えて、製品が完成するものと考えられる。なお、324は端正な直方体に仕上げられていることから、角玉である可能性がある。

紡 錘 車

紡錘車(329)は1点出土した。発掘時に頂部を破損しているが、ほぼ完形品である。國下多美樹氏による紡錘車の分類(第10図)[國下1988]によれば、「①断面形態は截頭円錐形あるいは台形状を呈するもの。②側面傾斜角が50度未満。③平滑な面をもつ。」という特徴のI b類に相当する。傾斜角がより小さいということは、頂部の直径が底部の直径に比してより小さいことを意味している。頂部周辺を破損しているものの、ごく一部で確認される残存状況からは、この特徴を読み取ることができる。

玉類の素材

本遺跡の玉類の素材には、滑石・凝灰岩・ヒスイがあり、石材ごとに特徴を記載する。

滑 石 滑石は、剥片(330～332)・石核(334～336)・板状素材(327・328)が存在する。長幅比1:1ほどの寸詰まりの剥片であるが、形態はバラエティーに富む。この大きさ・形態は、石核の作業面とおおむね対応関係にある。軟質であること、繊維状の組織を有すること、節理が発達することから、剥片剥離をコントロールすることは困難であったことが想定される。したがって、大型の剥片や縦長の剥片を得ることは、物理的に困難であった可能性が高い。「軟質」という性質であるため、研磨によって素材剥片の形状を大きく修正したほうが効率的であり、目的物の素材として必要な大きさを確保することが優先されたのであろう。研磨により作出された板状素材327・328は、剥片の形状が研磨によって著しく修正されており、そのことを裏付けている。

なお、滑石の原石は、剥離面の切り合い関係が不明瞭で、かつ表面がやや擦れた状況にある。この状況は、露頭の「ズリ」の表面によく似ている。もともと軟質な石材であるため、河川を流下することは考えにくく、山地の露頭で原石が採取されたものと考えられる。また、335の打面部分左端には、礫面を研磨した痕跡が確認される。これは、石材の「質」の確認のために、部分的に研磨した可能性もあろう。

ヒスイ 原石9点、剥片7点が出土した。338～342が原石、343～345が剥片である。礫面の状態からは、338・339が円礫、340・341・342・345は垂角礫と判断され、350m北に広がる海岸で採取可能とみられる。特に、338・339のような円礫は明らかな漂石であり、これらが河川で採取された

大分類	断面形態の特徴	小分類	断面形	形態細部の特徴
I 類	截頭円錐形 あるいは台形状を 呈するもの	a		○側面を数段に分けて大きく底面取りするもの
		b		○全体に扁平(厚さ16mm未満)で側面で底面取り状に浅く凹ませるもの
		b'		○平滑な面をもつもの(b)と丸味を帯びるもの(b')がある
		c		○全体に厚手(厚さ16mm以上)で側面上部・中央部と下部の境が峻をもって明瞭に区別されるもの
		d		○側面傾斜角50°未満
II 類	長方形あるいは 隅丸長方形を 呈するもの	a		○全体に厚手(厚さ16mm以上)で側面上部・中央部と下部の境が峻をもって明瞭に区別されるもの
		e		○側面傾斜角が50°以上
III 類	算盤玉形を 呈するもの	a		○側面下部が消失し、全体が台形状を呈するもの
		b		○側面下部が消失し、全体が半球形状を呈するもの
III 類	算盤玉形を 呈するもの	a		○薄手のもの(厚さ10mm以下)
		b		○厚手のもの(厚さ12mm以上)
III 類	算盤玉形を 呈するもの	a		○明瞭な平滑面をもつもの
		b		○全体が丸味をもつもの

第10図 紡錘車の形態分類 [國下1988]

可能性はより低い。いずれも透明感のある良質なヒスイであり（図版25）、玉類の素材とみられる。ヒスイ製の敲石（346）が出土していることから、遺跡内で素材剥片が剥離され玉作が行われた可能性がある。しかし、接合関係や母岩の明らかな共有関係は認められず、剥片剥離時に副次的に生じる碎片の出土もみられない。原石・剥片が認められるものの、ヒスイの玉作が調査範囲内で行われた可能性は低い。原石や他地点で剥離された剥片が、遺跡内に搬入されたものと考えられる。

なお、341・343・344は部分的に青色を帯びる特徴的なヒスイである（図版25）。特に、343は斑紋状に青味を帯びた部分があり、小滝の野口で局所的に産出する「青ヒスイ」によく似る。この種のヒスイが、遺物として出土するケースは知られておらず、稀有な資料といえる。

凝灰岩 333は、緑色凝灰岩の剥片である。緻密で良質な石材が用いられていることから、玉作関連資料と考えられる。やや縦長で角柱に近い形態であることから、管玉の素材である可能性が想定される。ただし、これ以外に同質の石材は出土しておらず、遺跡内で完結するような玉作が行われたとは考えられない。337は、凝灰岩製の石核である。全面、節理面に沿って割れた直方体の原石を素材とし、適当な剥離角があらかじめ用意された部分に作業面が形成されている。打面を深く抉るように剥片を剥離していることが特徴的である。直方体の石核から寸詰まりな素材剥片を得る過程は、柏崎市行塚遺跡出土例〔伊藤1985〕に共通する。風化面は緑色を帯びておらず、必ずしも玉作関連資料とは評価できないが、このことを積極的に評価することとした。なお、同様の石核は、このほかに1点認められる。

D 石 器（図版20 - 346～図版21 - 359）

古墳時代の石器と判断したのは、敲石2点、砥石3点、横刃形石器23点、打製石斧1点である。いずれもⅢ層から古墳時代前期の土器とともに出土している。縄文時代の遺物と明らかに判断できるのは、風倒木痕から出土した石鏃のみであることから、古墳時代前期の遺物である可能性が高いと判断した。

敲 石

346・347は、敲石である。346はヒスイ製で、周縁の稜線上に著しい敲打痕が認められる。硬質なヒスイの剥離に用いられた可能性がある。347は、長さ15.6cmの流紋岩製の大きな楕円礫が用いられ、上下両端に敲打痕が形成される。このような特徴的な敲石は、上越市裏山遺跡（弥生時代後期）〔小池ほか2000〕、糸魚川市六反田南遺跡・横マクリ遺跡（古墳時代前期）等で類例が見出される。

スタンプ形石器

348は、スタンプ形石器である。棒状の円礫を素材とし、その折損面を打面として側面に調整剥離を施している。調整剥離は、折損面の全周に及び、端部がすぼまるように作出されている。

砥 石

349～351は、凝灰岩製の砥石である。349は、細粒の凝灰岩製である。表裏面に平坦な砥面が形成されているが、鋭利な刃物との接触によって形成された断面「V」字状の線状痕が多数認められる。線状痕の形状からは、金属器の研磨に利用された可能性をうかがい知ることができる。表面には、断面「U」字状の溝状砥面が1条認められる。いわゆる筋砥石と共通する断面形態であり、玉作においても利用された可能性が高い。350は、349と酷似する細粒の凝灰岩製で、砥石の一部とみられる。鋭利な刃物と

の接触により形成された線状痕が多数認められ、金属器の研磨に利用された可能性が高い。351は、349・350と比べるとやや粒子の粗い凝灰岩製である。表裏の広い平滑面を有することや、側面に鋭利な刃物との接触により形成された断面「V」字状の線状痕を有することから、主に金属器の研磨に利用された可能性が高い。ただし、表面にいわゆる筋砥石としての特徴も認められ、玉作においても利用された可能性を指摘できる。

横刃形石器

名称 背面に円礫の礫面を有する貝殻状剥片〔小池1986〕を素材とし、剥離または研磨により刃部が作出された石器が23点出土した。このような形態は、弥生時代の北陸地方（富山・石川）においてしばしば認められ「横刃形石器」と呼称されている。本報告ではこれに習い、「横刃形石器」の名称を採用することとする。

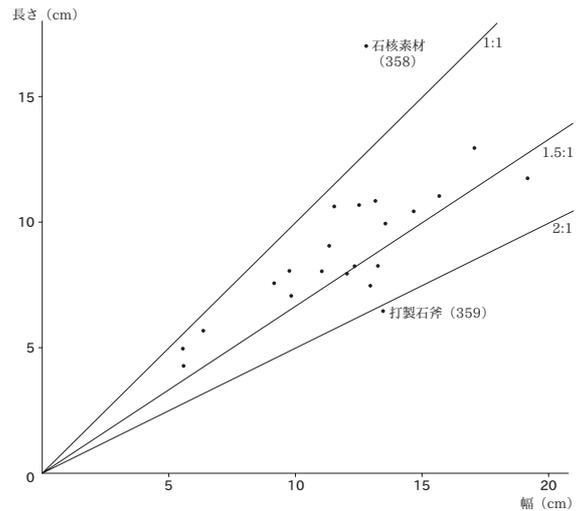
石材 石材は、細粒の砂岩13点（57%）、安山岩5点（21%）、流紋岩2点（9%）、粗粒の砂岩2点（9%）、蛇紋岩1点（4%）である。細粒の砂岩（変成を受けている可能性のあるものを一部含む。）を素材とするものが圧倒的に多く、基本的には極めてよく似た石材が用いられる傾向にある。

なお、原石は、礫面の形状から円礫であったと考えられる。このように特定の石材への依存度が比較的高いものの、接合関係は確認されておらず、明らかな母岩の共有関係も認められない。剥離時に副次的に生じる小さな剥片や碎片が伴っていないことも勘案すれば、他所で剥離した剥片を本遺跡に搬入したものと考えられる。

素材剥片 素材剥片の大きさは、長さ4～13cm、幅6～19cmほどと、バラエティーに富む（第11図）。いずれも横長であることが特徴的で、貝殻状を呈する。長幅比は、多くが1：1～1.5：1の範囲に収まり、大きさは異なっても相似形をなしている。

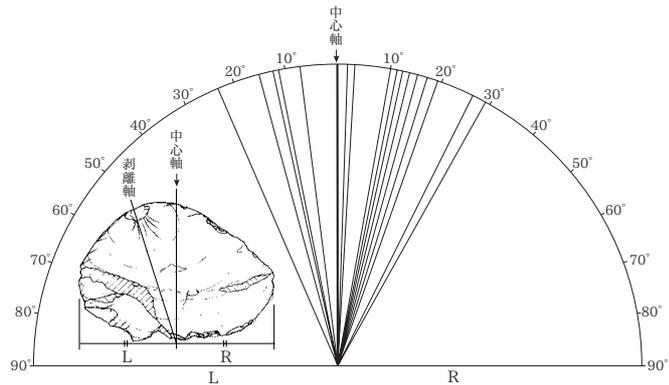
素材剥片は、打点付近が著しく凹むことが特徴的（実測図において▼印で図示）であり、20点中18点（90%）に認められる。この凹みは細かな剥離面が重複した結果であり、幅2cm、深さ3mmほどの大きさである。重複する剥離面の切り合い関係は不明瞭であり、一定の手順をもって剥離痕が重ねられた結果とは考えにくい。また、石核の作業面が残る358の打点付近にも、貝殻状剥片と対応する剥離痕の重複が認められる。すなわち、石核・剥片双方の打点付近に同様の痕跡が認められるのである。したがって、この凹みが剥離後に二次加工として形成された可能性は低く、剥離前に石核を繰り返して打撃することで形成されたものと考えられる。それにより、潜在的な割れを予め作出することで、円滑に剥片を剥離したのであろう。適当な剥離角を保持していない円礫から剥離するため、このような事前準備が必要であったと考えられる。石川県内において集成された実測図〔久田1999〕をみると、同様の剥離痕が認められ、貝殻状剥片が何らかの特殊な過程を経て剥離されている可能性が高い。

主要剥離面は、バルブが未発達で比較的平坦な面をなすことが特徴的であるが、末端部付近で大きな蝶



第11図 横刃形石器の大きさ

番状剥離や階段状剥離を生じる傾向にある(354~356)。末端部を確認できる資料22点中13点(59%)に認められた。このような現象は、剥離速度の急速な低下によって引き起こされているものと考えられる〔山田・志村1989〕が、その出現頻度は極めて高い。356のように節理面の存在が契機となって生じているものもあるが、そのような剥離速度を低下させる要因をもたないもののほうが圧倒的に多い。目的剥片が横長であるため、破壊力とその伝達方向が拡散してしまい、剥離速度の急速な低下を招いたのであろう。また、上述のように剥離の事前準備作業において潜在的な割れ面が形成されていた可能性がある。それゆえに必要な破壊力が小さかったため、剥離速度ももともと遅かったことが想定される。このことも剥離速度低下の一因であったかもしれない。



第12図 貝殻状剥片の剥離軸

剥離軸が、剥片の中心軸と一致することは極めて少ないことも特徴的である(第12図)。打点は、剥片の幅の中心軸より、左右に 10° ~ 20° ほどずれることが多く、特に裏面右側にずれるケースが顕著である。石核の形状と剥離者の利き手が、このような状況を生み出している可能性がある。

加工 二次加工は、剥片の末端部に調整剥離が施されることが一般的である。調整剥離は、剥片の縁辺部に留まる浅いものが多く、素材剥片の形状を著しく変更するものではない。一方、354の左右側縁に施された二次加工は比較的深いもので、剥片の両端を直線状に裁断するかのようのものである。

加工範囲は、素材剥片の末端部周辺に認められるが、左右の側縁にまで及ぶものもある。一方、打点付近に二次加工が施されることはほとんどない。352は、打点付近にも二次加工が施されているが、これは素材剥片の形状の相違によるものと考えられる。

研磨による調整は、353のみに認められる。剥離によって形状の概略が決定された後に、研磨調整されている。研磨面は、素材剥片の末端部・左側縁・打点付近に認められ、鋭利な刃部を作出している。石庖丁とでもいえる形態であるが、コーングロス認められない。これが石庖丁であるとするれば、未使用であるか、使用面が研磨によって更新されたかのいずれかであるが、器表面の観察から後者の可能性は低い。

使用痕 糸魚川地域における古墳時代の遺跡からは、しばしば「浜山型内磨砥石」〔寺村1966〕が出土する。それらは貝殻状剥片を素材とすることが多く、糸魚川市横マクリ遺跡から出土した砥石と形態的に類似する。しかし、横マクリ遺跡においては粗粒の砂岩が用いられているのに対し、本遺跡では細粒・緻密な砂岩が用いられている。また、本遺跡の資料には研磨や両面調整によって作出された鋭利な刃部に使用痕が観察されることから、異なる機能を想定することが必要と判断された。

本遺跡から出土した横刃形石器のうち、352・353・354の3点において使用痕が肉眼観察された。352は裏面のほぼ全面と表面の刃部周辺に摩耗、353は刃部周辺の凸部周辺に摩耗と線状痕、354は刃部周辺にわずかな光沢が観察された。いずれの資料も程度に差はあっても使用痕が凹部にまで進入しており、対象物が硬質な物質でないことは確かである。このような使用痕の観察状況、353の形態がいわゆる「石庖丁」とよく共通すること、北陸地方における弥生時代の横刃形石器が収穫具や除草具の機能を果たしたとされていることから、農具として使用された可能性を想定した。そこで、県教委・澤田敦主任調

査員の協力を得て高倍率法（100～300倍）で使用痕を観察した。その結果、353において極めて微弱なBタイプの使用痕〔梶原・阿子島1981、阿子島1989〕が、ごく限られた範囲で確認された。しかし、極めて局所的な所見であり、積極的にイネ科植物との相関関係を指摘することはできない。

資料の帰属時期と分布 横刃形石器は、北陸地方の弥生時代にしばしば認められる形態である。この種の形態が古墳時代の遺物として報告されている事例はほとんどないが、本遺跡では出土状況から判断して古墳時代前期の遺物に伴う可能性が最も高い。久田正弘氏の集成作業によって、石川県では古墳時代前期まで存在することが指摘されており〔久田1999〕、本遺跡においても古墳時代前期の遺物として理解することとしたい。また、横刃形石器は、上越市以北の越後では弥生時代・古墳時代には認められない。糸魚川地域における遺物の様相が、富山・石川により近いことが理解される。このことは、北陸地方の影響を色濃く受けた地域であることを示している。

打製石斧

359は、打製石斧（石鎌）である。素材の形状は、素材剥離面の構成から横長剥片であったと考えられる。素材剥片には、「①背面に円礫の転礫面を有する。②主要剥離面の打点为中心軸からややずれる。③幅が15cmほどである。④黒色で細粒の砂岩が用いられる。」という特徴がある。これらは横刃形石器の素材である貝殻状剥片と共通しており、同様の素材が用いられた可能性が高い（第11図）。二次加工は、ほぼ全周に施されるが、基端部と刃部の背面には認められない。表裏がおおむね対象形を呈していたため、あえて二次加工が施されなかった可能性がある。二次加工の剥離面は縁辺部のみに留まっており、素材の厚みを減じるようなものではなかったと理解できる。二次加工によって作出された平面形態は、中央部付近で若干抉れるものの、いわゆる「撥形」に分類される。また、刃部には使用痕が肉眼観察される。器軸に対し左方へ7度ほど傾く線状痕と磨耗が認められ、土掘り具として使用されたとする使用痕〔池谷・馬場2003〕とよく共通する。

この資料1点を単独で評価するならば、縄文時代の石器として評価するものであろう。また、打製石斧が古墳時代の資料に混在して出土する場合、一般的にはより古い時代の遺物の混入と評価される場合が多い。しかし、本遺跡においては、古墳時代以前に形成された風倒木痕から出土した石鎌等、3点の石器・土製品を除けば、大半が古墳時代と中世の遺物である。時代別の遺物量の多寡と比較すれば、本資料は古墳時代に帰属する可能性を想定しなくてはならない。北陸地方においては、弥生時代後期以降に打製石斧（石鎌）が存在することが指摘されており〔戸谷2004〕、また石川県漆町遺跡SD1011（8群～9群）〔田嶋ほか1988〕や石川県上荒屋遺跡SD16・SD17（6～8群）〔出越ほか1995〕においては、古墳時代前期の遺構から打製石斧が出土している。姫御前遺跡とほぼ同時期に位置付けられる糸魚川市笛吹田遺跡でも、縄文時代の遺物がほとんど出土しない状況において打製石斧が確認できるだけでも4点出土している〔安藤ほか1978、山岸2005・2006〕。笛吹田遺跡の報告書において山岸洋一氏は、「富山・石川県地方では弥生時代後期以降においても、鉄器の代替として石製の石鎌すなわち打製石斧が用いられるという事例があり」笛吹田遺跡出土の「打製石斧もその一例に加えられるかもしれない。」「山岸2005」と指摘している。

このような現状を勘案すれば、打製石斧の年代が古墳時代にまで下る可能性を積極的に想定する必要がある。横刃形石器と共通する素材が用いられていることや出土遺物の構成を考慮すると、むしろこの資料を縄文時代にさかのぼって理解することは合理的でない。出土状況と石器の特徴を総合的に判断すれば、本資料が古墳時代に帰属する遺物である可能性がより高いものと判断したい。ただし、縄文時代の遺物で

ある可能性を否定する材料も十分ではなく、今後、共伴事例の蓄積によって裏付ける必要がある。

E 木製品 (図版18-293~299)

293・294はSB2の柱根である。293はP69、294はP6からの出土である。ともに長さが50cm弱しか遺存していないが、残存部の状態は比較的良好である。柱痕の底面はどちらも平坦に仕上げられており、側面と底面がほぼ直角に交わる。底面の加工方法については、293は縁辺から中心に向かって加工を施し、中心は未加工のまま残す。294は若干不明瞭で加工の方向や切り合い関係は明らかでないが、底面の全面にわたり加工が施されていると判断される。どちらもスギの芯外し材を使用しており、断面は方形基調で、太さは11~13cm程度と近似している。なお、放射性炭素年代測定において、伐採年は293が1680±40年BP(AD330~410年)、294が1870±40年BP(AD80~210年)との結果が得られている。

295~299は板杭である。3区から東側に地形が落ち込み始める部分(9B・10Bグリッド)に地面に連続的に突き刺した状態で列を為して出土した。それぞれが隣接して打ちこまれているわけではなく、間隔が開いている。板杭は10点出土しているが、その内、残りの良いものを5点図化した。それぞれの板杭の大きさや加工方法は一定していない。幅が23cm程度を測る大きなもの(298)から幅が3cm程度と狭く板というよりも角柱状の杭に近いもの(299)まで様々である。また、先端部の加工方法も板杭の両端から下端の中心付近に向かい削り出し尖らせるもの(295~297)と一側面から反対の側面に向かい削り出し尖らせるもの(298・299)がある。素材はすべてスギ材で、柁目取りである。スギ材は杭や矢板等の土木材に選択される例が多い[伊東1988]。県内では、時期は異なるが、佐渡市平田遺跡で弥生中期の板杭が出土しており、やはりすべてスギ材であった[坂上ほか2000]。なお、放射性炭素年代測定において、伐採年は295が1650±40年BP(AD380~420年)、298が1700±40年BP(AD260~290年、AD320~400年)、299が1820±40年BP(AD130~240年)との結果が得られている。

4 弥生時代の遺物 (図版18-300・301)

流路跡とみられる18C21グリッドのV層から300・301が出土した。どちらも長方形の大きな板材を素材とし、上端に突起を有する。器表には方形もしくは円形、半円形の孔が複数穿たれている。互いは接合しないものの、並んで出土したこと、厚さおよび突起部を除く部分の長さが近似値を示すこと、器表の調整が類似していること等から同一部材もしくは組み合わせて一つの製品となる可能性が高い。これらは形状や大きさから、扉や壁材等の建築部材が想定される。なお、放射性炭素年代測定において、301の伐採年は2150±40年BP(BC340~320年、BC210~160年)との結果が得られている。本品が出土したV層は古墳前期前半の土器が出土したIV層より下位に位置し、年代的に齟齬は生じておらず、本品は弥生時代の遺物と考えられる。

5 縄文時代の遺物 (図版21-360~362)

A 石器 (図版21-360・361)

360は、風倒木痕SX73の最下層から出土した珪質頁岩製の石鎌である。基部形態の分類[鈴木1974]

によれば凸基有茎鏃であり、縄文時代晩期に最も多く認められるものである。南東350mに位置する笛吹田遺跡からは、縄文時代晩期後葉の土器が出土しており、それと同時期の資料である可能性がある。また、SX73と隣接する風倒木痕SX14から出土した倒木の放射性炭素年代測定を行った結果、2900±40年BP（BC1130～1010年）という年代が得られている。石器の形態的特徴と放射性炭素年代測定の結果を総合すれば、縄文時代晩期の所産である可能性が高いと判断される。また、縄文時代に対比される基本土層VI層においては、花粉分析・植物珪酸体分析から当時、スギ林が卓越する森林状態であったとされている。石鏃の先端部が衝撃剥離痕〔御堂島1991〕によって破損していること、風倒木痕からの出土であること、縄文時代の遺物がほとんど出土していないことを総合すれば、狩猟の場に置き去られた石器であったと考えられる。

361は、扁平礫に剥離により刻みを加えた石錘である。長軸・短軸の2方向に、剥離による抉りが形成されている。古墳時代の石器との共通性を見出せなかったため、形態的特徴から縄文時代の石器と判断した。しかし、石鏃のように形態的特徴のほか、出土位置による裏付けをもって縄文時代の石器と判断したわけではない。弥生時代においても、打ち欠きによる石錘が存在することが指摘されており〔平井1991〕、古墳時代以降の遺物である可能性も否定できない。

B 土製品（図版21-362）

362は、土製品もしくは粘土塊である。破損がみられないことから、土製品の一部分ではない可能性が高い。裏面は平坦、表面は山形であり、表面側におおむね平行する刻みが連続的に認められる。この刻みは、何らかの圧痕である可能性もある。古墳時代の土器と比べると、胎土や焼成の状態が異なり、縄文時代の遺物と判断したが、詳細な帰属時期や性格については明らかでない。

第Ⅵ章 自然科学分析

1 花粉分析

金原 正子（株式会社 古環境研究所）

A はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

B 試料

分析試料は、姫御前遺跡の18C21グリッドより採取された試料1（Ⅱa層、黒灰褐色土（砂混）：江戸時代）、試料2（Ⅱb層、黒灰褐色シルト粘土（植物遺体混）：室町時代）、試料3（Ⅲ層、黒灰褐色シルト粘土（植物遺体混）：古墳時代）、試料4（Ⅳ層、灰褐色粘土（植物遺体混））、試料5（Ⅴ層、暗褐色粘土（植物遺体混））、試料6（Ⅵ層、黒褐色粘土（植物遺体混））の計6点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図（第13図）に示す。

C 方法

花粉の分離抽出は、中村 [1973] の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行う。花粉の同定は、島倉 [1973] および中村 [1980] をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村 [1974・1977] を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

D 結 果

1) 分 類 群

出現した分類群は、樹木花粉32、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉21、シダ植物胞子2形態の計59である。これらの学名と和名および粒数を第3表に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第13図に示す。主要な分類群は写真に示す。また、寄生虫卵についても同定した結果、2分類群が検出された。

以下に出現した分類群を記載する。

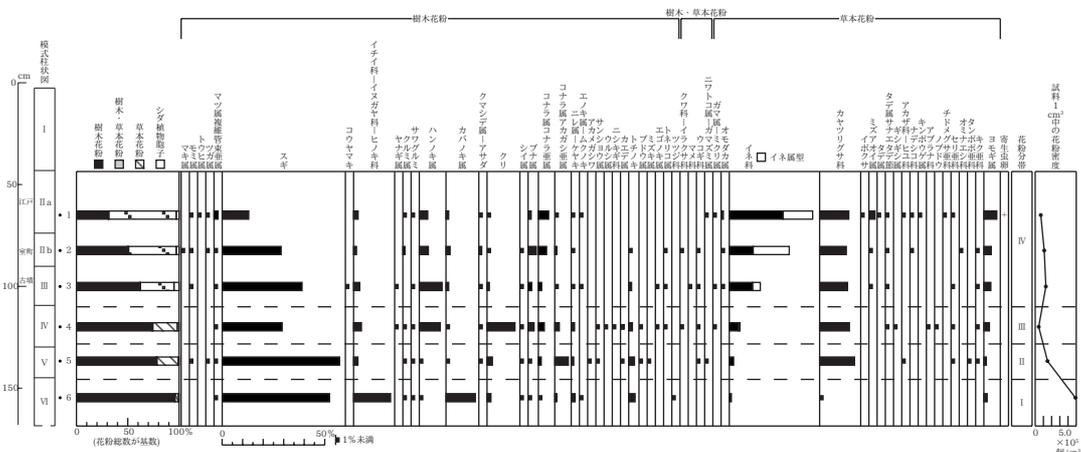
〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複雑維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、アカメガシワ、サンショウウ属、ウルシ属、ニシキギ科、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、ミズキ属、エゴノキ属、トネリコ属、ツツジ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

分類群	学名	和名	18C21					
			II a 層	II b 層	III 層	IV 層	V 層	VI 層
Arboreal pollen		樹木花粉						
<i>Podocarpus</i>		マキ属		1				
<i>Abies</i>		モミ属	1	1	1		1	
<i>Picea</i>		トウヒ属	1					
<i>Tsuga</i>		ツガ属	1	1			3	
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		マツ属複雑維管束亜属	11	3	4	3	1	4
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	70	143	217	131	327	359
<i>Sciadopitys verticillata</i>		コウヤマキ		1				
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	12	7	17	17	12	124
<i>Salix</i>		ヤナギ属	1	1		1		
<i>Juglans</i>		クルミ属	2	5	3	3	2	1
<i>Pterocarya rhoifolia</i>		サワグルミ	3	3	4	2	6	
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	22	22	62	46	3	5
<i>Betula</i>		カバノキ属	7	10	7	3	1	98
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ	1	7	2	3	1	
<i>Castanea crenata</i>		クリ	1	3	6	61	15	13
<i>Castanopsis</i>		シイ属	1	2	1	2	1	1
<i>Fagus</i>		ブナ属	8	20	10	13	4	2
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	27	20	9	13	8	5
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	3	5	10	38	7	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ	2	4	5	7	7	13
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ	2		1			3
<i>Mallotus japonicus</i>		アカメガシワ					1	
<i>Zanthoxylum</i>		サンショウウ属				2	1	
<i>Rhus</i>		ウルシ属				1		
Celastraceae		ニシキギ科				1		
<i>Acer</i>		カエデ属				1	1	
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ		2	8	8	16	21
<i>Vitis</i>		ブドウ属				3	2	
<i>Cornus</i>		ミズキ属					1	
<i>Syrinx</i>		エゴノキ属			1	1		
<i>Fraxinus</i>		トネリコ属		1	1	1		
Ericaceae		ツツジ科						1
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉			3		4	
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科			2	1		
Leguminosae		マメ科			1			
Araliaceae		ウコキ科			1	1	3	
<i>Sambucus-Viburnum</i>		ニワトコ属-ガマズミ属	1				1	
Nonarboreal pollen		草本花粉						
<i>Typha-Sparganium</i>		ガマ属-ミクリ属	1		4	1		
<i>Sagittaria</i>		オモダカ属	6	3	5	5	4	0
<i>Gnominaceae</i>		イネ科	142	58	63	20	12	7
<i>Oryza type</i>		イネ属型	78	88	21	3		
Cyperaceae		カヤツリグサ科	77	65	76	65	97	6
<i>Anellema keisak</i>		イボクサ	1					
<i>Monochoria</i>		ミズアオイ属	16	2	1			
<i>Polygonum</i>		タデ属	1					
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>		タデ属-サナエタデ節	1	1	2	2		
<i>Rumex</i>		ギシギシ属				1		
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒコ科	1				1	
Caryophyllaceae		ナデシコ科	1	1				
<i>Ranunculus</i>		キンポウゲ属	1					
Cruciferae		アブラナ科					1	
<i>Amelops</i> <i>brevipedunculata</i>		ノブドウ					1	
Hydrocotyloideae		チドメグサ亜科	3					
Apioidae		セリ亜科	4		1	2	1	
Valerianaceae		オミナエシ科		1				
Lactucoideae		タンポポ科					1	
Asteroidae		キク亜科					1	
<i>Asteris</i>		ヨモギ属	34	18	19	12	7	11
Fern spore		シダ植物胞子						
Monolate type spore		単条溝胞子	13	13	27	7	3	2
Trilate type spore		三条溝胞子	3	1	2	1	1	1
Arboreal pollen		樹木花粉	174	256	363	335	448	663
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	1	5	2	5	4	0
Nonarboreal pollen		草本花粉	367	238	193	109	120	24
Total pollen		花粉総数	542	499	558	449	572	687
Pollen frequencies of 1cm ³		試料1cm ³ 中の花粉密度	6.8	1.1	1.3	4.3	1.5	4.9
			$\times 10^4$	$\times 10^5$	$\times 10^5$	$\times 10^4$	$\times 10^5$	$\times 10^5$
Unknown pollen		未同定花粉	7	5	0	11	11	8
Fern spore		シダ植物胞子	16	14	29	8	4	3
Helminth eggs		寄生虫卵						
<i>Ascaris (lumbricoides)</i>		回虫卵		4				
<i>Trichuris (trichiura)</i>		鞭虫卵		3				
Total		計	7	0	0	0	0	0
Helminth eggs frequencies of 1cm ³		試料1cm ³ 中の寄生虫卵密度	7.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
			$\times 10$					
Digestion remains		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments		微細炭化物	(+)	(+)	(++)	(-)	(-)	(+++)

第3表 花粉分析結果



第13図 18C21における花粉ダイアグラム

1 花粉分析

クワ科-イラクサ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属-ガマズミ属

〔草本花粉〕

ガマ属-ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、アブラナ科、ノブドウ、チドメグサ亜科、セリ亜科、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

〔寄生虫卵〕

回虫卵、鞭虫卵

2) 花粉群集の特徴

18C21 (試料1 (II a層: 江戸時代)、試料2 (II b層: 室町時代)、試料3 (III層: 古墳時代)、試料4 (IV層)、試料5 (V層)、試料6 (VI層)) において、花粉構成と花粉組成の変化から、下位より4帯の花粉分帯を設定する (第13図)。

・ I 帯 (試料6)

花粉密度が極めて高く、ほとんど樹木花粉で占められ、スギが卓越する。イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、カバノキ属などが伴われ、トチノキ、ニレ属-ケヤキ、クリなどが低率に出現する。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科、カヤツリグサ科がわずかに出現する。

・ II 帯 (試料5)

花粉密度が低くなり、草本花粉の占める割合がやや増加する。I帯同様スギが卓越するが、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、カバノキ属が減少し、スギ、コナラ属アカガシ亜属が増加する。草本花粉ではカヤツリグサ科が増加する。

・ III 帯 (試料4)

樹木花粉では、スギが優勢し、ハンノキ属、クリが比較的多く、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、トチノキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が低率に伴われる。

・ IV 帯 (試料1、試料2、試料3)

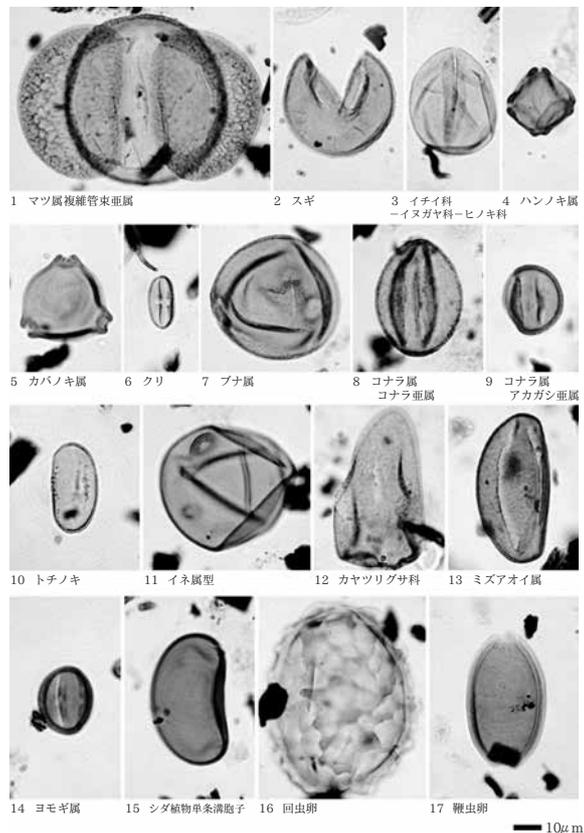
樹木花粉ではスギが優勢するが、上部に向かい草本花粉のイネ属型を含むイネ科が増加し優勢する。試料1では、回虫卵と鞭虫卵がわずかに検出される。

E 花粉分析から推定される植生と環境

花粉分帯にそって下位より植生と環境の推定を行う。

1) VI層 (I帯) の時期

スギ林が卓越し、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、カバノキ属の森林やトチノキ、ニレ属-ケヤキ、



第14図 花粉・孢子・寄生虫卵の顕微鏡写真

クリの樹木が伴われる。草本は少なく、周辺は森林状態である。

2) V層(Ⅱ帯)の時期

森林が優勢ではあるが、草本の湿地性カヤツリグサ科が増加する。前時期同様にスギ林が卓越して分布するが、コナラ属アカガシ亜属が微増し、温暖な海岸部で増加したと考えられる。

3) IV層(Ⅲ帯)の時期

スギが優勢であるが、ハンノキ属、クリの森林が増加し、湿潤化しハンノキ属の増加から、湿地林の拡大がみられ、湿潤化が推定される。一方、クリが増加し、人為干渉によりクリ林の増加した可能性が考えられる。森林要素として、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、トチノキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が分布する。

4) II a層、II b層、III層(IV帯、江戸、室町、古墳)の時期

スギ林が優勢であるが上位に向かって減少し、水田が著しく拡大する。スギ林とイネ属型を含むイネ科が負の相関を示し、下部のIII層(古墳)では平野部の低湿な個所にもスギ林が分布しており、II b層(室町)、II a層(江戸)にかけて、順次水田化されていったと考えられる。

F ま と め

姫御前遺跡では、地域的にはスギ林が分布し、VI層(I帯)堆積時の本地点は森林状態であった。V層(Ⅱ帯)、IV層(Ⅲ帯)にかけては、カヤツリグサ科やハンノキ属の生育する沼沢湿地がやや拡大する。II a層、II b層、III層(IV帯、江戸、室町、古墳)になると、水田が上位に向かって拡大し、スギ林の減少がみられた。特にII b層(室町)の時期に水田が大きく拡大したと推定された。

2 植物珪酸体分析

杉山 真二(株式会社 古環境研究所)

A はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸(SiO_2)が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている[杉山2000]。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である[藤原・杉山1984]。

B 試 料

分析試料は、基本土層断面のII a層からVI層までの層準から採取された計6点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図(第15図)に示す。

C 分 析 法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法[藤原1976]を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で

2 植物珪酸体分析

秤量)

- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による 20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10-5g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ネザサ節は0.48、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である [杉山2000]。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

D 分析結果

1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第4表および第15図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、キビ族型、ヨシ属、ウシクサ族 A (チガヤ属など)

〔イネ科-タケ亜科〕

ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型 (ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型 (ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

〔イネ科-その他〕

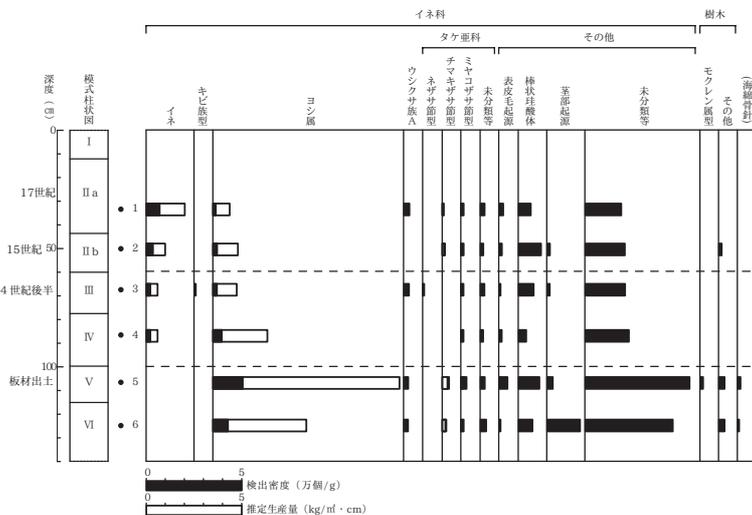
表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

モクレン属型、その他

検出密度 (単位: ×100 個/g)		地点・試料					
分類群	学名	1	2	3	4	5	6
イネ科	Gramineae						
イネ	<i>Oryza sativa</i>	70	34	20	20		
キビ族型	Panicaceae type			7			
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	14	21	20	46	158	79
ウシクサ族 A	<i>Andropogoneae A type</i>	28		26		22	21
タケ亜科	Bambusoideae						
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>			7			
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	7	14			36	21
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	14	14	13	13	29	14
未分類等	Others	21	14	20	13	22	29
その他のイネ科	Others						
表皮毛起源	Husk hair origin	21	14	7	13	43	7
棒状珪酸体	Rod-shaped	63	117	78	39	108	72
茎部起源	Stem origin			14	13	29	172
未分類等	Others	188	207	208	228	546	458
樹木起源	Arboreal						
モクレン属型	<i>Magnolia</i> type						14
その他	Others		14			29	29
(海綿骨針)	Sponge						14
植物珪酸体総数	Total	425	462	417	372	1034	902
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm) : 試料の仮比重を 1.0 と仮定して算出							
イネ	<i>Oryza sativa</i>	2.05	1.01	0.57	0.58		
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.88	1.31	1.23	2.88	9.97	4.97
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>			0.03			
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.05	0.10			0.27	0.16
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.04	0.04	0.04	0.04	0.09	0.04

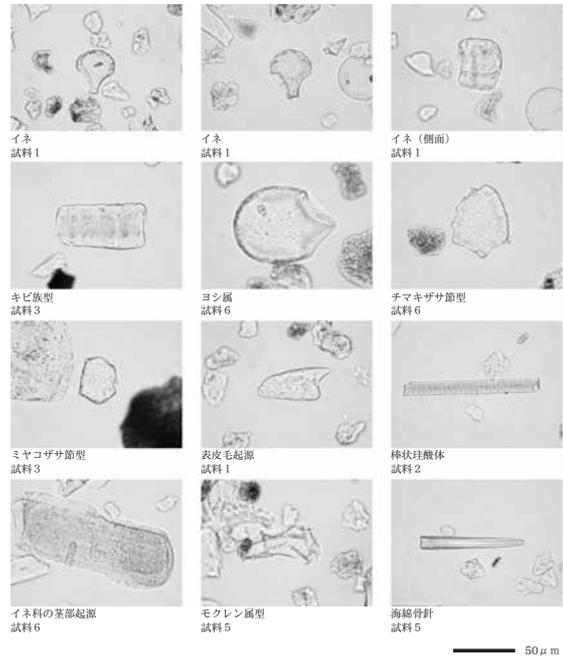
第4表 植物珪酸体分析結果



第15図 植物珪酸体分析結果

2) 植物珪酸体の検出状況

下位のVI層（試料6）からV層（試料5）にかけては、ヨシ属が多量に検出され、ウシクサ族A、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、および樹木（その他）なども認められた。IV層（試料4）ではイネが出現しており、ヨシ属は大幅に減少している。イネの密度は2,000個/gと比較的低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個/gを下回っている。III層（試料3）でも、おおむね同様の結果であり、ヨシ属はさらに減少している。II b層（試料2）からII a層（試料1）にかけてはイネが増加しており、II b層（試料2）では3,400個/g、II a層（試料1）では7,000個/gとなっている。おもな分類群の推定生産量によると、VI層からIII層にかけてはヨシ属が優勢であり、II b層からII a層にかけてはイネが優勢となっている。



第16図 植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

E 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

VI層～V層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、IV層の時期にそこを利用して調査地点もしくはその近辺で水田稲作が開始されたと推定される。4世紀後半を主体とするIII層でも、おおむね同様の状況であったと考えられる。なお、稲作の開始以降もヨシ属が比較的多く見られることから、水田雑草としてヨシ属が生育していたことや、休閒期間中にヨシ属が生育していたことなどが想定される。15世紀を主体とするII b層から17世紀を主体とするII a層にかけては、集約的な水田稲作が行われていたと考えられ、イネ科の野草や雑草はあまり見られなかったと推定される。

3 放射性炭素年代測定

A はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（ ^{14}C ）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の ^{14}C 濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により ^{14}C 年代から暦年代に較正する必要がある。

ここでは、姫御前遺跡で出土した動物遺体、柱根、倒木の年代を特定するために、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。測定にあたっては、米国のBeta Analytic Inc.の協力を得た。

株式会社 古環境研究所

B 試料と方法

測定試料は、姫御前遺跡で出土した動物骨2点、木材7点、炭化物1点の計10点である。加速器質量分析 (Accelerator Mass Spectrometry ; AMS) 法による放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理を行った。

- 1) 蒸留水中で細かく粉碎後、超音波および煮沸により洗浄
- 2) 塩酸 (HCl) により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム (NaOH) により二次的に混入した有機酸を除去
- 3) 再び塩酸 (HCl) で洗浄後、アルカリによって中和
- 4) 定温乾燥機内で80℃で乾燥

前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、n-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデトロン加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。測定試料と方法を第5表にまとめた。

試料名	地点・土層	種類	前処理・調整	測定法
No.1	13B11 地点 III層	動物骨 No.2	---	AMS
No.2	11A13 地点 II a層	動物骨 No.3	コラーゲン抽出・アルカリ酸洗浄	AMS
No.3	SX71 地点 最下層	樹種 No.27	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.4	SX14 W9	樹種 No.31	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.5	SX14 W10	樹種 No.32	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.6	P6 地点 (SB2)	樹種 No.23	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.7	P69 地点 (SB2)	樹種 No.24	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.8	SX14 W1	樹種 No.28	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.9	18C21 地点 V層	樹種 No.58	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.10	11B5 地点 III層	炭化米	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

第5表 放射性炭素年代測定の試料と方法

C 結果

年代測定の結果を第6・7表に示す。

試料名	測定 No. (Beta-)	¹⁴ C年代 (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年 BP)	暦年代 (西暦)
No.1	225377	コラーゲンが残存しておらず測定不能			
No.2	225378	560 ± 40	-14.4	730 ± 40	交点 : calAD1280 1 σ : calAD1260 ~ 1290 2 σ : calAD1230 ~ 1300
No.3	225379	2890 ± 40	-24.4	2900 ± 40	交点 : calBC1080 1 σ : calBC1130 ~ 1010 2 σ : calBC1250 ~ 1240, : calBC1220 ~ 980
No.4	225380	1720 ± 40	-26.0	1700 ± 40	交点 : calAD350 1 σ : calAD260 ~ 290, : calAD320 ~ 400 2 σ : calAD240 ~ 420
No.5	225381	1800 ± 40	-23.5	1820 ± 40	交点 : calAD220 1 σ : calAD130 ~ 240 2 σ : calAD90 ~ 260, : calAD290 ~ 320

第6表 放射性炭素年代測定の結果 (1)

試料名	測定 No. (Beta-)	^{14}C 年代 (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代 (西暦)
No.6	225382	1850 ± 40	-23.9	1870 ± 40	交点 : calAD130 1 σ : calAD80 ~ 210 2 σ : calAD60 ~ 240
No.7	225383	1670 ± 40	-24.1	1680 ± 40	交点 : calAD390 1 σ : calAD330 ~ 410 2 σ : calAD250 ~ 430
No.8	225384	1630 ± 40	-23.7	1650 ± 40	交点 : calAD410 1 σ : calAD380 ~ 420 2 σ : calAD260 ~ 280, : calAD330 ~ 450, : calAD450 ~ 460, : calAD480 ~ 530
No.9	225385	2140 ± 40	-24.4	2150 ± 40	交点 : calBC190 1 σ : calBC340 ~ 320, : calBC210 ~ 160 2 σ : calBC360 ~ 280, : calBC260 ~ 60
No.10	225386	710 ± 40	-25.3	710 ± 40	交点 : calAD1280 1 σ : calAD1270 ~ 1290 2 σ : calAD1260 ~ 1310, : calAD1360 ~ 1380

第7表 放射性炭素年代測定の結果 (2)

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は国際的慣例により Libby の 5568 年を使用した (実際の半減期は 5730 年)。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25 (‰) に標準化することによって得られる年代である。

4) 暦年代 Calendar Age

^{14}C 年代測定値を実際の年代値 (暦年代) に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正する必要がある。暦年較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値およびサンゴの U/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新の較正曲線である IntCal04 では BC24050 年までの換算が可能である (樹木年輪データは BC10450 年まで)。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (68% 確率) と 2 σ (95% 確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の 1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

D 所 見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、No.2 では 730 ± 40 年 BP (1σ の暦年代で AD 1260 ~ 1290 年)、No.3 では 2900 ± 40 年 BP (同 BC1130 ~ 1010 年)、No.4 では 1700 ± 40 年 BP (同 AD 260 ~ 290 年、AD320 ~ 400 年)、No.5 では 1820 ± 40 年 BP (同 AD130 ~ 240 年)、No.6 では 1870 ± 40 年 BP (同 AD80 ~ 210 年)、No.7 では 1680 ± 40 年 BP (同 AD330 ~ 410 年)、No.8 では 1650 ± 40 年 BP (同 AD380 ~ 420 年)、No.9 では 2150 ± 40 年 BP (同 BC340 ~ 320 年、BC210 ~ 160 年)、No.10 では 710 ± 40 年 BP (同 AD1270 ~ 1290 年) の年代値が得られた。なお、No.1 の動物骨にはコラーゲンが残存しておらず、年代測定はできなかった。

4 樹種同定

金原 明 (株式会社 古環境研究所)

A はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

B 試 料

試料は、姫御前遺跡より出土した人形、刀形、荷札状、木筒、漆器、扇、曲物底板、下駄、布巻具、板杭、板状木製品、不明木製品、棒状木製品、箸状木製品、柱根、倒木などの木材 105 点である。時期は弥生時代から室町時代である。

C 方 法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面 (木口と同義)、放射断面 (柁目と同義)、接線断面 (板目と同義) の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって 40 ~ 1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

D 結 果

結果を第 8 表に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を第 17 図に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 (第 17 図 1)

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質よりマツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあ

り、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 (第17図2・3・4)

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 (第17図5)

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靱であり、耐朽性、耐湿性ともに高い。良材であり、建築など広く用いられる。

サワラ *Chamaecyparis pisifera* Endl. ヒノキ科 (第17図6)

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞がみられる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で

試料番号	出土位置	出土層位	器種	結果(学名/和名)
1	5A20・6A24	II b	人形	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
2	5A20・6A24	II c	人形	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
3	12A13	III	人形	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
4	12A24	II b	人形	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
5	14A8	II a	人形	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
6	14A25	II b	人形	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
7	15B12	III	人形	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
8		II b	人形?	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
9		II c (下)	人形	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
10		II b	人形	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
11		II b	人形	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
12		II b	人形	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i> マツ属擬管束亜属
13		II c	刀形	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
14		II b	刀形	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
15	8B6	II b	荷札状	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
16		II b	人形?	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
17		II b	曲物底板	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl. サワラ
18		II b	曲物底板	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
19		II c	下駄	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
20		II c	下駄	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
21		II b	布巻具	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
22		II b	布巻具	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
23	P6		柱根	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
24	P68・P69		柱根	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
25			倒木	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
26			倒木	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
27	SX71	最下層	風倒木	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
28			板杭	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
29			板杭	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
30			板杭	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
31			板杭	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
32			板杭	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
33	15A5	II b	鯛先	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
34		II b	漆へら	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
35	17B11	III	板状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
36		II b	板状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
37		II c	板状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
38		II c	板状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
39		II c	板状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
40		II c	板状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
41		II b	板状	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl. サワラ
42		II b	板状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
43	5T7	III	板状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
44	12A5	III	板状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
45	14B8	III	へら状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
46		II b	棒状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
47		II b	部材	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
48		II c	板状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
49		II c	板状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
50		II b	板状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
51		II b	曲物底板	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl. サワラ
52		II b	部材	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
53		II b	部材	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
54		II b	板状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
55		II b	板状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
56		II b	板状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
57		II b	板状	<i>Fagus</i> ブナ属
58	18C21	V	建築材	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
59	18C21	V	建築材	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
60	4A25	II b	棒状	Cupressaceae ヒノキ科
61	11B7		板状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
62	13A23		棒状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
63	13A23	II b	棒状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
64	13B12	II b	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
65	13B22	II b	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
66	14B8	II b	板状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
67	15B7		板状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
68		II c	棒状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
69		II b	棒状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
70		II b	棒状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
71	2A25	II c	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
72	2B23	II b	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
73	2C16	II c	棒状	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
74	3B1	II b	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
75	3B1	II c	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
76	6B15	II b	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
77	13A13	II b	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
78	13B11	II b	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
79	13B14	II b	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
80	14B8	II b	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
81	14B9	II b	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
82	14B9	II b	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
83	14B9	II b	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
84	14B12	III	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
85	16A8		管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
86	16A9	II b	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
87	17A9	III	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
88	17B16	III	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
89	18B5	II b	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
90	18B15	II a	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
91		II b	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
92		II c	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
93		II c	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
94		II c	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
95		II b	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
96		II c	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
97		II c	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
98		II b	管状	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
99		II b	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
100	14B12	III	管状	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
101		II b	木簡	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
102		II b	漆器皿	<i>Fagus</i> ブナ属
103		II b	扉骨	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
104		II b	人形	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
105		II b	下駄	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ

第8表 樹種同定結果

4 樹種同定

あるがスギ型の傾向を示すものもあり、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりサワラに同定される。サワラは岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ30m、径1mに達する。材は木理通直、肌目緻密であるが、ヒノキより軽軟でもろいが、広く用いられる。

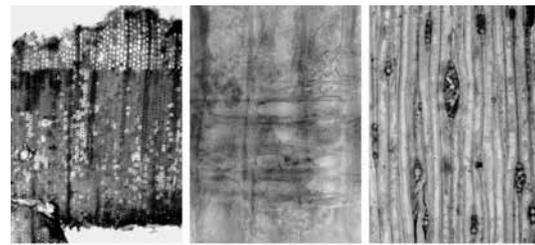
ヒノキ科 Cupressaceae

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

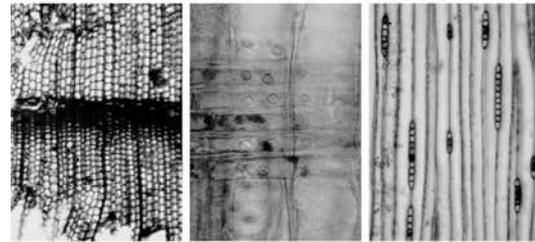
横断面：早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞がみられる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、小型のものが存在するが、分野壁孔の型及び1分野に存在する個数は不明瞭である。

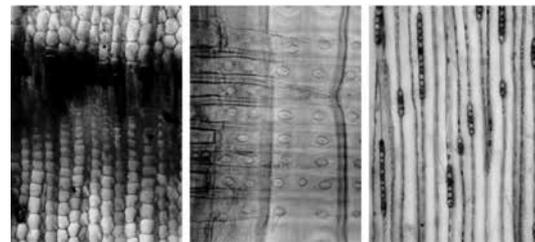
接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であ



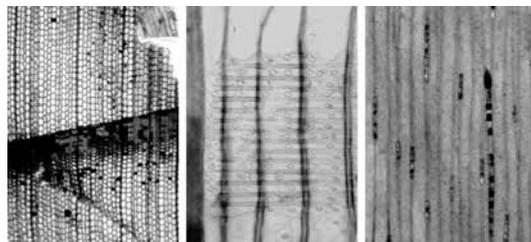
横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm
1. 12 人形 マツ属椴離管束型属



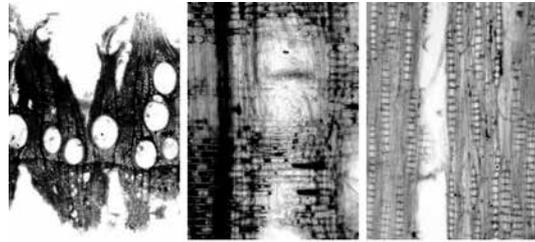
横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm
2. 39 板状木製品 スギ



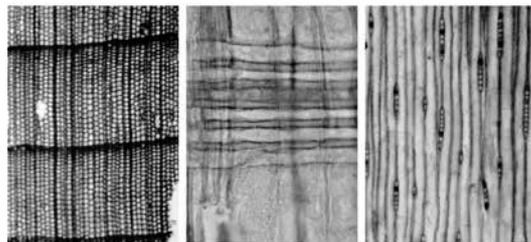
横断面 : 0.2mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm
3. 63 棒状木製品 スギ



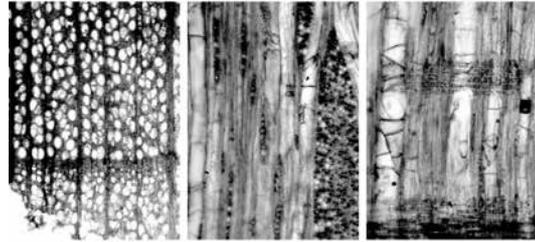
横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.1mm 接線断面 : 0.2mm
4. 104 人形 スギ



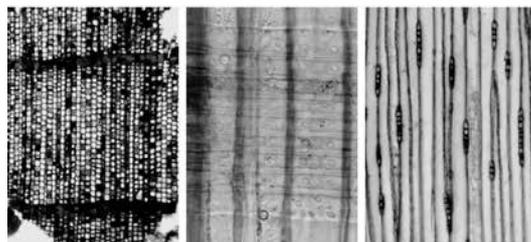
横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm
7. 73 棒状木製品 クリ



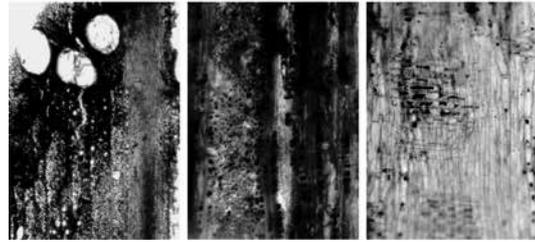
横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm
5. 15 荷札状 ヒノキ



横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm
8. 102 漆器 プナ属



横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm
6. 41 板状木製品 サワラ



横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm
9. 47 不明木製品 コナラ属コナラ節

第17図 木材の顕微鏡写真

る。

以上の形質よりヒノキ科に同定される。ヒノキ科には、ヒノキ、サワラ、アスナロ、ネズコなどがあり、いずれも常緑高木である。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 (第17図7)

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

ブナ属 *Fagus* ブナ科 (第17図8)

横断面：小型でやや角張った道管が、単独あるいは2～3個複合して密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は緩やかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られる。

接線断面：放射組織はまれに上下端のみ方形細胞が見られるがほとんどが同性放射組織型で、単列のもの、2～数列のもの、大型の広放射組織のものがある。

以上の形質よりブナ属に同定される。ブナ属には、ブナ、イヌブナがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ35m、径1.5m以上に達する。材は堅硬、緻密であり、靱性があるが保存性は低い。容器などに用いられる。

コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 (第17図9)

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靱で弾力に富み、建築材などに用いられる。

E 所 見

同定の結果、姫御前遺跡の木材は、マツ属複維管束亜属1点、スギ91点、ヒノキ3点、サワラ3点、ヒノキ科1点、クリ3点、ブナ属2点、コナラ属コナラ節1点であった。

スギが最も多く、人形、刀形、荷札状、木筒、扇、曲物底板、下駄、布巻具、板杭、板状木製品、不明木製品、棒状木製品、箸状木製品、柱根など木製品の大小に関わらず幅広く使用されている。スギは温帯に広く分布する針葉樹であるが、日本海側の積雪地帯等で純林を形成し、本遺跡周辺の地域的な森林であ

つたとみなされる。木理通直で大きな材が取れる良材であり、また加工工作も比較的容易である。古代以降、地域的に多用される。

マツ属複雑管束亜属は、人形に使用されている。ヒノキは、荷札状、漆へら、箸状木製品に使用されている。サワラは、曲物底板、板状木製品、不明木製品に使用されている。水湿に強い材である。ヒノキ科は棒状木製品に使用されている。いずれの針葉樹も温帯を中心に分布する高木で、木理通直で大きな材が取れる良材である。クリは、棒状木製品と倒木であった。クリは、温帯に広く分布する落葉高木で乾燥した台地や丘陵地を好む。二次林要素でもある。重厚で保存性が良い木材である。ブナ属は漆器、不明木製品に使用されている。ブナ属は縄文時代以降現在まで伝統的に木地に用いられる。コナラ属コナラ節は不明木製品に使用されている。ブナ属とコナラ属コナラ節は冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素が含まれ、いずれも弾力に富む木材である。

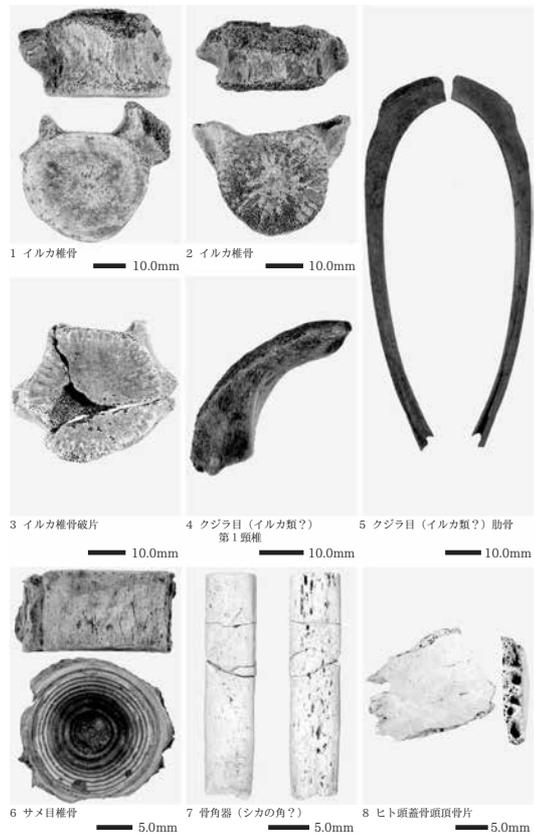
以上、姫御前遺跡の古代から室町時代の木材の樹種はスギが極めて多い特徴を有する。本地域は山地部の主要な森林がスギ林であり、他の樹種も本地域に生育可能な樹種であり、いずれも地域的な流通の範囲で得ることできる樹種である。

5 動物遺存体同定

金原美奈子（株式会社 古環境研究所）

A はじめに

一般に日本の国土は、火山灰性の酸性土壤に広く覆われ、動物遺存体の保存状態には恵まれていない。そのため、遺跡で動物遺存体が出土するのは、貝塚、石灰岩地帯の洞穴や岩陰が代表的で、近年では湿地環境の遺跡や遺構からも多くの動物遺存体が報告されつつある。しかし乾燥した沖積平野遺跡ではほとんどの動物遺存体が、長い年月の間に腐食して土に還ってしまっている。しかし、その中でも動物の歯、特にエナメル質は、動物骨格の中でも腐食に強く、特に大きく堅固なウシやウマの臼歯のエナメル質が、乾燥環境から出土する例は珍しくない。また微細な魚骨の歯のエナメル質は、発掘中に肉眼で採集することは不可能で、遺構の埋土を1ミリ以上のフルイの面上で洗うことが必要である。そうした哺乳類の歯のエナメル質、灰化して無機質化した微細な魚骨からそれぞれの種類を同定し、その生態的情報を援用して当時の環境を復元し、過去の人々の生業や食生活を知ることができる。



第18図 動物遺存体写真

B 試 料

試料は、試料名1・14B11 II b or IIIの1点、試料名2・13B7 IIIの1点、試料名3・11A13 II aの1点、試料名4・16A18 II bの1点、試料名5・H18-2Tr IIIの1点、試料名6・15B12 IIIの1点、試料名7・17A24 IIIの1点、試料名8・15B4 II bの1点、計8点である。

C 方 法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。

D 結 果

1) 分 類 群

同定された学名、和名および部位を第9表に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記す。

〔魚類〕

サメ目 *Lamniformes* 椎骨

〔哺乳類〕

イルカ *Delphinus delphis* 椎骨

クジラ目(イルカ類?) *Cetacea (Delphinus delphis ?)* 第1頸椎・肋骨

ヒト *Homo sapiens* 頭蓋骨頭頂骨片

試料名	分類群		種類	部位	備考
	学名	和名			
1 14B11	II b or III	<i>Delphinus delphis</i>	イルカ	哺乳類 椎骨	
2 13B7	III	<i>Delphinus delphis</i>	イルカ	哺乳類 椎骨片	
3 11A13	II a	<i>Cetacea (Delphinus delphis ?)</i>	クジラ目 (イルカ類?)	哺乳類 肋骨	小型クジラ目
4 16A18	II b	<i>Cetacea (Delphinus delphis ?)</i>	クジラ目 (イルカ類?)	哺乳類 第1頸椎	小型クジラ目
5 H18-2Tr	III	<i>Lamniformes</i>	サメ目	魚類 椎骨	
6 15B12	III	<i>Delphinus delphis</i>	イルカ	哺乳類 椎骨	小型
7 17A24	III	Unknown	不明		骨角器(シカの角?)
8 15B4	II b	<i>Homo sapiens</i>	ヒト	哺乳類 頭蓋骨頭頂骨片	20歳から30歳代、焼けているので年齢は不明

第9表 動物遺存体同定結果

2) 動物遺存体の特徴

試料名1	14B11	II b or III	イルカ椎骨が同定された。
試料名2	13B7	III	イルカ椎骨片が同定された。
試料名3	11A13	II a	クジラ目(イルカ類?)肋骨が同定された。
試料名4	16A18	II b	クジラ目(イルカ類?)第1頸椎が同定された。
試料名5	H18-2Tr	III	サメ類椎骨が同定された。
試料名6	15B12	III	イルカ椎骨が同定された。
試料名7	17A24	III	骨角器(シカの角?)が同定されたが、何かは不明である。
試料名8	15B4	II b	ヒト頭蓋骨頭頂骨片が同定された。

E 考 察

姫御前遺跡における動物遺存体同定の結果、サメ類、イルカ、クジラ目、ヒトが同定された。いずれも

火を受けて白色灰化しており、それゆえにバクテリアなどの微生物の分解作用を受けずに保存されたのであろう。小型のクジラ目、おそらくイルカ類の一種としたものには、椎骨、および第一頸椎、肋骨などがある。サメ類は大型の種類である。骨角器の破片も鹿角製で表面を磨いた棒状の道具である。ヒトの頭蓋骨の破片も焼けており、火葬骨がまぎれたのであろうか。

参考文献

- 石丸恵利子・松井章 2001 「岡山城本丸下の段出土の動物遺存体」『史跡保存整備事業史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』岡山市教育委員会 p.323-337
- 尾崎大真 2005 「INTCAL98からIntCal04へ」『学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジアNo.3－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－』 p.14-15
- 金原正明 1993 「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第10巻 古代資料研究の方法』角川書店 p.248-262
- 佐伯浩・原田浩 1985 「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 p.20-48
- 佐伯浩・原田浩 1985 「広葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 p.49-100
- 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1984 『粟津貝塚湖底遺跡』 p.141-142
- 島倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』5 p.60
- 島地謙・伊東隆夫 1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣 p.296
- 杉山真二 2000 「植物珪酸体(プラント・オパール)」『考古学と植物学』同成社 p.189-213
- 中村 純 1973 『花粉分析』古今書院 p.82-110
- 中村 純 1974 「イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として」『第四紀研究』13 p.187-193
- 中村 純 1977 「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』10 p.21-30
- 中村 純 1980 「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録』13 p.91
- 中村俊夫 1999 「放射性炭素法」『考古学のための年代測定学入門』古今書院 p.1-36
- 奈良県立橿原考古学研究所 2000 『南郷遺跡群V』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第77冊 p.132
- 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9 p.15-29
- 藤原宏志・杉山真二 1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学』17 p.73-85
- 松井章・宮路淳子 2000 「坪井・大福遺跡から出土した動物遺存体」『坪井・大福遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 p.194-205
- 松井 章 1997 「岡山城本丸中の段出土の動物遺存体」『史跡岡山城本丸中の段発掘調査報告書』岡山市教育委員会 p.323-331.
- 松井 章 1988 「中世のマダイ漁」『草戸千軒』182 草戸千軒町遺跡調査研究所 p.6-7
- 松井 章 2000 『桓武西宮・西浦遺跡発掘調査報告書』(財)静岡県埋蔵文化財研究所 p.156-161
- 丸山真史・宮地淳子・松井章 2004 「居徳遺跡群出土の動物遺存体について」『居徳遺跡群IV』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター p.211-240
- 山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」『植生史研究』1 植生史研究会 p.242
- Paula J Reimer et al., 2004 IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.

第Ⅶ章 ま と め

1 姫御前遺跡から出土した中近世の土器・陶磁器

A 出土状況

本遺跡では、中近世の包含層（Ⅱa層・Ⅱb層）中から656点（接合後破片数）の土器・陶磁器が出土した。そのうち383点が中世、250点が近世で、その他に古代須恵器9点と年代不明のものが14点ある。

中世と近世の時期区分は、第10表に示した通りである。中世と近世の画期については、取り扱う対象によりさまざまな見解があるものの、おおよそ1600年前後とするのが一般的である。新潟県においては慶長三（1598）年の上杉氏の会津転封を画期とする見解〔坂井1990〕がある。このような見解にしたがうと、瀬戸美濃焼大窯様式は15世紀末に始まり、最終段階である大窯4期の終末が1610年頃に位置付けられる〔藤澤1993〕ことから、一部が近世に含まれる可能性がある。しかし、その大部分は中世段階の製品であることから、ここでは細分を行わずにすべて中世に分類した。同様に、肥前系陶器は1580年代には焼成が開始されている〔大橋1993〕ことから、一部が中世に含まれる可能性があるが、近世に分類した。

本遺跡では、中世・近世の土器・陶磁器が調査範囲内から万遍なく出土（第19図）している。大グリッド18列の西側大半と大グリッドA列の北側半分とC列の南側の大半は調査範囲の外にある。一方でB列は1B・6B・9Bを除き、すべて調査範囲の中に含まれることから、単純に数量だけでの比較は難しい。そこで、条件が一致している2～5、10～17Bグリッドにおける出土土器・陶磁器の量比をみることにする。

中世においては、10～17Bでまとまって出土している。この地点は調査範囲内でも標高が高く、掘立柱建物SB1と重複する範囲である。北側に隣接するA列でも多くの土器・陶磁器が出土していることから調査範囲の西側と北側に遺跡が延伸する可能性が高く、これらの遺物を供給する集落の中心が調査範囲外に存在しているものと考えられる。一方、低地にあたる1～6Bグリッドからの出土は少量であり、居住地域として選択されなかったことが窺われる。ただし、箸状木製品等祭祀具を含む木製品の出土分布は、逆に10～17Bグリッドより密な傾向にあり（第5図）、集落内ないしは集落周辺における土地利用において使い分けがなされていた可能性が想定される。

近世においても多くの土器・陶磁器が出土している。10～17Bでは中世から引き続き多くの出土量が見られ、集落の位置がさほどの変更されていないものと考えられる。一方、1B・2A・2Bグリッドでも、同等の出土量が認められ、中世とは異なる土地利用がなされていた可能性を示唆している。また、近世の遺物包含層Ⅱa層からは混入品と判断される数点のほかには、中世に盛んに行われた祭祀行為に伴う木製品は出土しておらず、土地利用の在り方も変化した可能性がある。

B 姫御前遺跡における土器・陶磁器の流通と選択性

1) 中世

本遺跡から出土した土器・陶磁器を産地と器種により分類し、集計したものが第10表である。

中世の供膳具については、磁器・陶器・土器が用いられている。その中の大半を椀と皿が占める。椀は

1 姫御前遺跡から出土した中近世の土器・陶磁器

		18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	上段 破片数	下段 重量 (g)	
A	4	24	14	14	19	17	18	18	16	2	1			2		4	1	1				
	160.6	791.4	267.5	435	481.6	677.5	705.1	488.9	452.9	110.1	35.7			6.1		78.3	9	278				
	3	36	15	26	47	21	6	19	21	13				1		4	3	5	2			
B	69.2	1597.6	588.5	1078.2	1463	948.7	187.3	1122.1	770.2	356.5				1.4		172.6	219.2	105.3	9.7			
				1	1	2	1															
C				27.4	16.8	17.1	6.6															

中世 N = 383片
13739.6g

		18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	上段 破片数	下段 重量 (g)	
A	10	9	8	24	8	5	20	16	1	2				1		1	1	6				
	126.7	222.3	99.8	334.1	119.4	32.8	402.5	225.9	5.2	20				7.9		2.1	2.5	219.2				
	15	4	22	8	11	3	12	4									3	24	18			
B	145.6	122.4	358.7	136.5	285.6	38.4	289.2	71.2									131.8	288.4	330.2			
				2	1														7			
C				4.3	12.8													37.2				

近世 N = 250片
4072.7g

第19図 中近世の土器・陶磁器出土分布

時期	分類	器種 産地	供膳具						調理具		貯蔵具			その他							不明	合計			
			天目	碗	皿	杯	盤	鉢	掃鉢 (片口鉢)	甕	壺	瓶	香炉 類	茶入	蓋	灯明 皿	火入	風炉	匣鉢	転用					
中世	磁器	青花		2	1																		3	383	
		青磁		19	3		1															1	24		
		白磁		1	9	1																			11
	陶器	船載天目	1																						1
		李朝磁器			3							1													4
		瀬戸美濃	12	6	32			2			1	4	3	1								1	62		
		珠洲							75												2		216		
		越前						1	11	17													29		
		信楽										5											5		
		土器	瓦器															1	1						2
土師質				26																		26			
近世	磁器	肥前系		22	25	1		3			6											57			
		肥前系	1	48	47			11	12	6	1	2			1								129		
	陶器	越中瀬戸		3	9				10		34							1					57		
		京・信楽		1	1							2				1							5		
		備前													2								2		
合計			14	102	156	2	1	17	108	203	15	3	1	2	2	1	1	1	2	2	2	633			

第10表 中近世土器・陶磁器の産地・器種別破片数

中国製の磁器と国産の瀬戸美濃焼から構成されるが多くは中国製で、特に青磁が卓越する。皿も同様の産地構成を示すが、朝鮮半島の李朝陶器が少量含まれる。碗と異なり、青磁の占める割合が低く、白磁や瀬戸美濃焼が卓越する。特に、瀬戸美濃焼の灰釉を施した皿が多い。李朝陶器は16世紀に補完的に搬入されたものであろう。瀬戸美濃焼皿と土師器皿の中には器表にススやタールが付着しているものがみられ、灯明皿として使用されたと判断されるものが含まれる。その他の産地の製品にはそのような痕跡は認められないことから、選択的に使用されている可能性がある。天目碗は中国産と瀬戸美濃焼があるが、中国産は1点のみである。供膳具に分類したが、基本的に茶道具として使用されたと判断される。

中世の調理具と貯蔵具については、基本的に珠洲焼と越前焼で構成され、瓶や壺等の小型で装飾性の高い製品に瀬戸美濃焼が加わる。また、5点出土した信楽焼の壺は、胴部片のみで詳細は不明であるが葉茶壺の可能性が高い。

その他、瀬戸美濃焼の香炉や茶入が出土しており、奢侈品に選択的に瀬戸美濃製品を使用していること

が分かる。また、城館に特徴的に出土する瓦器〔水澤1999〕が2点認められる。

このように中世においては、供膳具に舶載陶磁器・瀬戸美濃焼を使用し、調理具と貯蔵具に珠洲焼・越前焼・信楽焼を使用する等、用途により各産地の製品を使い分けていることがわかる。香や茶道具、装飾性の高い奢侈品には瀬戸美濃焼が使われており、瀬戸美濃焼の高級品指向が見て取れる。また、本遺跡から出土した土器・陶磁器の使用者は、上記の奢侈品に加え、風炉の可能性を含む瓦器が出土していることから、茶の湯や香を嗜むことのできる比較的財力のある階層が想定される。

2) 近世

近世は、陶器と磁器が出土している。17世紀を主体とし、18世紀前半以降の陶磁器は少ない。

供膳具は、中世段階において使用されていた舶載品と瀬戸美濃焼が姿を消し、その大半を肥前系の陶器・磁器が占めるようになり、近世的な陶磁器組成へと変貌する。その他、越中瀬戸焼と京・信楽焼、備前焼が少量含まれる。

調理具と貯蔵具に関しても、供膳具と変わらず肥前系と越中瀬戸焼が大半を占める。小型の瓶には京・信楽焼の製品が用いられているが、江戸後期の所産である。貯蔵具では、甕等の大型の製品は肥前系陶器が用いられ、広口壺に代表される小型の製品に越中瀬戸焼が主に用いられている。装飾性の高い瓶には肥前系の磁器と京・信楽焼が加わる。その他、中世段階ではみられなかった蓋や灯明専用の皿等器種が増えるが、本遺跡においてその出土量は多くはない。

以上のように、基本的にどの器種に関しても肥前系の陶磁器が多くを占め、中世段階にみられた用途に応じた産地別製品の明瞭な使い分けはなされていないことがわかる。ただし、細かな器種分類においては肥前系陶磁器が主体をなさない、ないしは占有率が低い器種も存在する。肥前系陶磁器の流通量が少ない器種に、他産地の製品が補完的に充当されている激しい市場争いの様子が看取される。唯一、越中瀬戸焼の壺類のみ肥前系陶磁器を圧倒している。

C 土器・陶磁器の製作年代からみた姫御前遺跡の消長

本遺跡から出土した土器・陶磁器の製作年代を示した図が第20図である。

椀・皿類は、14世紀後半を始めとし、16世紀第1四半期頃まで青花・青磁・白磁・瀬戸美濃焼・土師器が多く使われている。青磁と白磁は15世紀末に流通量が減少し、代わりに青花と李朝陶器が流通し始める。ただし、本遺跡においては青花と李朝陶器の出土量は青磁と白磁に及ばないことから、代替品であると積極的に評価できない。16世紀第2四半期と第3四半期の遺物は極めて希薄となる。李朝陶器は細かな編年がなされていないことから本報告では16世紀に位置付けているが、16世紀を通じて搬入され使用され続けていたとはいえない。16世紀第4四半期になると再び遺物量が増加し、17世紀末まで多くの土器・陶磁器が出土する。18世紀前半以降、徐々に遺物量は減少する。

片口鉢・播鉢類は、14世紀末に珠洲焼が流通し始め、15世紀の内にその終焉を迎える。珠洲焼流通の終末期である15世紀後半には代わりに越前焼が流通し始める。16世紀に入るとみられなくなるが、16世紀末頃の製品が少量出土している。17世紀に入ると越中瀬戸焼が越前焼にとって代わり、さらに17世紀中頃に肥前系陶器の製品が流通し始めると越中瀬戸焼も駆逐され、肥前系陶器のほぼ独占状態となる。肥前系陶器の播鉢は口縁部のみに鉄釉を施し、底部を回転系切りする17世紀代に特徴的な製品が多く、18世紀中頃～19世紀に比定される内外面の全面に鉄釉を施す製品は1点のみである。

2 笛吹田遺跡出土の古墳時代土器との比較検討

壺・甕・瓶類は、16世紀の中頃に一時流通量が希薄となるものの、基本的に片口鉢・播鉢類と同じように珠洲焼・越前焼・肥前系陶器の順に推移しながら14世紀から18世紀前半にかけて継続的に搬入されている。

以上のように、本遺跡は①14世紀後半から16世紀第1四半期頃と、②16世紀第4四半期から17世紀末にまとまりが認められ、16世紀第2四半期から第3四半期の遺物は希薄である。したがって、この間の集落は別の地点に移動していたか、あるいは①の集落が廃絶したのち、同じような地点に②の時期に新たな別の集落が構築された可能性が考えられる。

本遺跡の終焉については、肥前系陶磁器の分析が手掛かりとなる。近世において最も多く出土しているのが肥前系陶磁器であるが、そのうち製作年代の判明した137片の時期別集計表が第11表である。大橋編年〔大橋1993〕のⅠ期からⅢ期まで出土量が増加するものの、Ⅳ期以降に減少する。Ⅳ期の製品には陶胎染付や内野山窯系銅緑釉皿等が主体を占め、Ⅳ期の中でも前半の様相である。したがって、②の終焉は17世紀末に迎えた可能性が高く、遅くとも18世紀前半には衰退していったと考えられる。

大橋	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	合計
陶器	0	9	13	6	8	36
磁器	29	33	35	4	0	101
合計	29	42	48	10	8	137

第11表 肥前系陶磁器の時期別破片数

碗・皿類

	中世						近世					
	14世紀		15世紀		16世紀		17世紀		18世紀			
青花												
青磁												
白磁												
李朝陶器												
瀬戸美濃												
越中瀬戸												
肥前系陶器												
肥前系磁器												
土師器												

片口鉢・播鉢類

	中世						近世					
	14世紀		15世紀		16世紀		17世紀		18世紀			
珠洲												
越前												
越中瀬戸												
肥前系陶器												

壺・甕・瓶類

	中世						近世					
	14世紀		15世紀		16世紀		17世紀		18世紀			
瀬戸美濃												
珠洲												
越前												
信楽												
李朝陶器												
越中瀬戸												
肥前系陶器												

第20図 出土陶磁器からみた姫御前遺跡の消長

2 笛吹田遺跡出土の古墳時代土器との比較検討

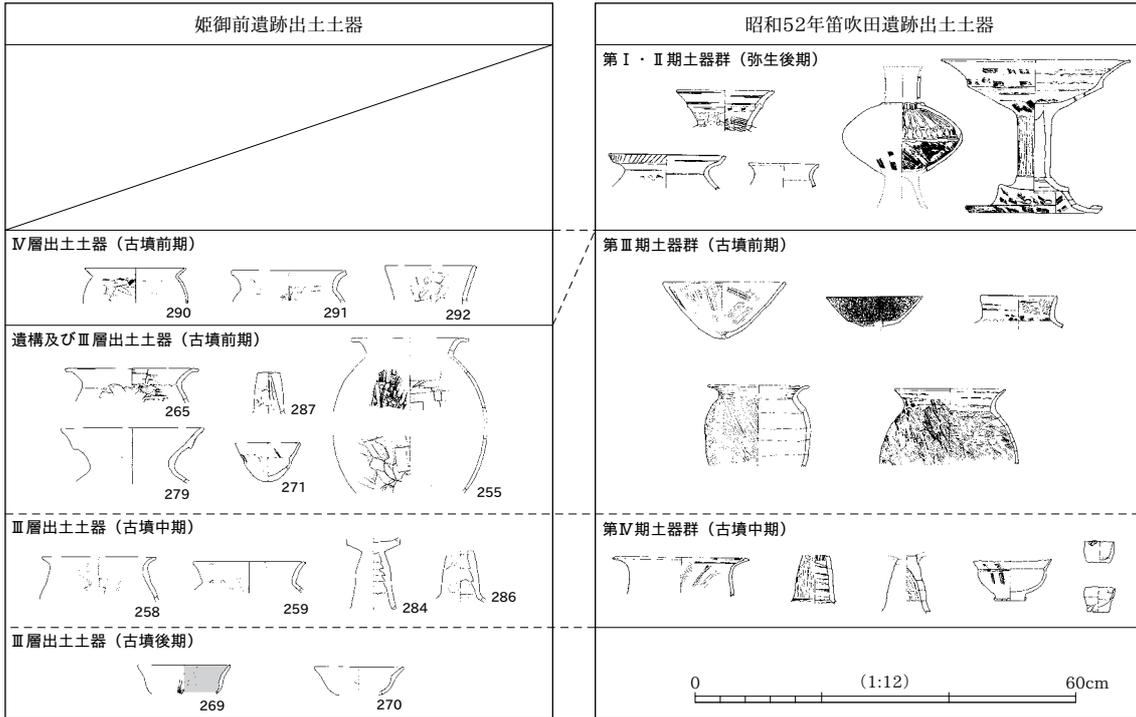
糸魚川地域の古墳時代前期を代表する笛吹田遺跡が、姫御前遺跡の南東約350mに所在する〔糸魚川市史編さん委員会1986、木島2005、安藤^{ほか}1978、山岸2005〕。笛吹田遺跡は、昭和37(1962)年時点では「姫御前遺跡」として登録されており、昭和50(1975)年に別個の遺跡として登録されるまでは、本遺跡と同一の遺跡として捉えられていた〔土田1978〕。その後、昭和52(1977)年に糸魚川市立東小学校建設に伴う発掘調査がおこなわれ、古墳時代前期を中心とする遺構・遺物が多数検出されている。今回調査の結果、改めて姫御前遺跡も前期を中心とする古墳時代の遺物を包含することが確認され、笛吹田遺跡との関係が注目されるに至った。そこで以下では、姫御前遺跡と笛吹田遺跡から出土した土器を対比し、両者の編年関係を検討することとする。

第V章で述べたように、本遺跡出土土器はほとんど遺構に伴っておらず、包含層から出土した土器もかなりの時期幅を持っていることから、詳細な時期的様相を抽出することはできない。したがって、両遺跡の出土土器を細別時期で対比することは難しく、ここではある程度の時期幅をみた中で両者の関係を検討するに留めることとする。現在の古墳時代土器編年研究の水準からすれば、粗い比較論になってしまうが、現時点での知見をまとめておくこととしたい。なお、笛吹田遺跡に関しては近年、糸魚川市教育委員会によって継続的に調査が行われ概報が刊行されているが、概報ゆえに資料の全容を把握できないため、ここでは主に昭和52年調査で出土した土器を扱うこととする。

さて、笛吹田遺跡報告書では、出土土器が大きく四群に分類され、それぞれが北陸の土器様式〔吉岡1967〕に合わせて時期比定されている〔千家1978〕。それによると、第I期土器群(C溝出土土器)は北陸第1様式、第II期土器群(B溝出土土器)は同第1～2様式、第III期土器群(工作用ピット・包含層第3層)は同第3様式、第IV期土器群(包含層第2層)は同第4様式に対応するものと位置付けられている。すなわち、第I・II期土器群は古墳時代前期、第III・IV期土器群は古墳時代中期という年代観である。その後、研究の進展により、溝状遺構は新潟シンボ編年2期頃〔金子^{ほか}1999、木島2005〕に、工作用ピットは同7・8～10期に位置付けられた。第I・II期土器群が弥生時代後期(II期は古墳時代前期も含む?)、第III期土器群が古墳時代前期ということになり、全体として発掘当初より各土器群の年代観が遡ったことになる。そして、残る第IV期土器群とされたものは、古墳時代中期に位置付けられる。

このように笛吹田遺跡は、古墳時代前期を主体とし、前後の時期を含んだ遺跡として理解することができる。近年の調査でも、古墳時代前期前半(新潟シンボ編年5期以降、6～7期か)の装飾器台等が出土しており、古墳時代前期を主体とした遺跡であることが再確認されている〔山岸2005〕。

そこで本遺跡から出土した土器をみると、古墳時代前期後半を中心として、古墳時代前期から後期までの土器が出土している。もう少し細かくいえば、遺構ないしⅢ層出土土器の多くが古墳時代前期後半に、Ⅲ層出土土器の一部が古墳時代中期および後期に、そしてⅣ層出土土器が古墳時代前期前半ないし前期中頃に位置付けられるとみられる。それらを笛吹田遺跡の各土器群に対応させるならば、本遺跡Ⅳ層出土土器およびⅢ層出土土器の多くが笛吹田遺跡第III期土器群に対応あるいは前後し、本遺跡Ⅲ層出土土器の一部が笛吹田遺跡第IV期土器群に対応することになる(第21図)。本遺跡Ⅲ層から出土した古墳時代後期の内面黒色杯(いわゆる田伏Ⅱ式土器)については、笛吹田遺跡昭和52年度調査出土品にはみられないが、近年の調査において類例が確認されており〔山岸2005〕、やはり古墳時代後期まで両遺跡が同時に存在



第21図 姫御前遺跡・笛吹田遺跡の主な出土土器

していたことが窺われる。

このように姫御前・笛吹田両遺跡の出土土器は、時期的には古墳時代前期以降、明らかに重複していることを指摘できる。笛吹田遺跡の方がより古い時期（弥生時代後期～古墳時代前期前半）の遺物を含むとはいえ、両遺跡が全く無関係とは考えられない。土器以外の玉類や石器にも共通性が見出されることを勘案すれば、むしろ密接な関係を想定すべきであろう。姫御前・笛吹田の地に存在した古墳時代集落像については、未だ不明な点が多いが、両者を切り離して捉えることはできず、今後は遺跡・遺構・遺物を総合的に捉えた視点が必要である。

3 古墳時代前期の横刃形石器・打製石斧

石器の帰属時期

本遺跡の調査においては、横刃形石器23点と打製石斧（石鋏）1点が出土した。両者の素材剥片には、「①背面に円礫の転礫面を有する貝殻状剥片〔小池1986〕である。②主要剥離面の打点が中心軸からややずれる。③黒色で細粒の砂岩が使用される。」という技術的・形態的な共通性が認められる。これら素材剥片の共通性から、両者を異なる時期と判断することは合理的でないと判断した。

しかし、出土遺物の圧倒的多数は、古墳時代と中世の遺物である。これ以外に縄文時代の遺物も数点認められるが、遺物量を勘案すれば、古墳時代でも前期に帰属する可能性が高いと考えられた。横刃形石器・打製石斧は、富山県・石川県において、弥生時代にしばしば認められる形態であり、北陸地方における先行研究を参考にしたい。

横刃形石器は、久田正弘氏が石川県では古墳時代前期まで存在することを指摘している〔久田1999〕。打製石斧は、安英樹氏・河合忍氏が弥生時代終末期まで存在すること〔安・河合1999〕、戸谷邦隆氏が

弥生時代後期以降に存在することを指摘している〔戸谷2004〕。また、石川県漆町遺跡SD1011（8群～9群）〔田嶋ほか1988〕や石川県上荒屋遺跡SD16・SD17（6～8群）〔出越ほか1995〕において、古墳時代前期の土器とともに打製石斧が出土している。笛吹田遺跡でも縄文時代の遺物がほとんど出土しない状況において打製石斧が少なくとも4点出土している〔安藤ほか1978、山岸2005・2006〕。笛吹田遺跡の報告書において山岸洋一氏は、「富山・石川県地方では弥生時代後期以降においても、鉄器の代替として石製の石鍬すなわち打製石斧が用いられるという事例があり」笛吹田遺跡出土の「打製石斧もその一例に加えられるかもしれない。」〔山岸2005〕と指摘している。

本遺跡における遺物の出土状況を、これらの研究を参考にして評価すれば、横刃形石器や打製石斧が古墳時代前期にまで残存するものと理解できる。一方、これらの石器は上越市以北の越後では古墳時代前期に認めることはできない。糸魚川地域における遺物の様相が、富山・石川により近いことを理解できよう。古墳時代前期において、横刃形石器・打製石斧が出土することは、北陸地方の影響を色濃く受けた地域であることを示唆する可能性がある。

横刃形石器・打製石斧の機能

横刃形石器・打製石斧とも、北陸地方では農具としての機能が想定されている〔久田1999・2000、安・河合1999、原田2002など〕。本遺跡における土壌分析においては、古墳時代前期に森林への人為干渉および稲作が開始されていることが明らかにされており、そのことを石器の使用痕分析からも検証できる可能性があった。そこで、本遺跡の横刃形石器・打製石斧の使用痕分析を、県教委・澤田主任調査員の協力を得て行った。

横刃形石器は、形態的特徴や北陸地方における使用痕分析の結果を受けて、イネ科植物を対象とした収穫具や除草具としての機能を想定した。特に研磨によって刃部が作出された353は、「石包丁」ともいえる形態を呈し、使用痕が局所的に肉眼観察された。そこで高倍率法で使用痕を観察したところ、Bタイプの使用痕（木の切断〔梶原・阿子島1981、阿子島1989〕）が、ごく限られた範囲で確認された。イネ科植物の作業では作業量の増加に伴い、Bタイプが発達してAタイプ（イネの刈り取り〔梶原・阿子島1981、阿子島1989〕）となることが知られており、農具として使用された可能性がある。しかし、極めて微弱な痕跡である上に局所的な観察結果であり、積極的にイネ科植物との相関関係を指摘することができなかった。肉眼観察で使用痕が明瞭に確認されるのにもかかわらず、イネ科との関係を積極的に評価することができなかったことは、横刃形石器の機能が収穫具や除草具のみでない可能性を示唆する結果といえる。すなわち、特定の形態が特定の機能を果たしたとは必ずしもいえないということである。多様な形態の中から数少ない資料を選択して実施した使用痕分析の結果のみをもって、横刃形石器の機能を限定的に理解しようとするにも問題があろう。

打製石斧は、刃部の表裏に滑らかな摩耗と器軸とほぼ平行する線状痕が観察された。また、摩耗は凹部にまで進入していることから、対象物が硬質でないことも理解された。これらの観察所見は、しばしば指摘される「土掘り具」の使用痕と整合する。高倍率法（100～300倍）による観察においても、土との接触により形成されるXタイプ（土掘り〔梶原・阿子島1981、阿子島1989〕）に近い使用痕が確認された。また、線状痕は器軸に対し7度ほど傾いて認められ、土掘り具として使用されたとする使用痕〔池谷・馬場2003〕とよく共通する。これらの所見から、土掘り具として形成された使用痕であることを指摘できよう。

ただし、これらの所見のみをもって打製石斧を農具と理解することは必ずしも適切でない。農耕に使用

されたのであれば、当該期の遺跡から安定的な数量が出土することが想定される。しかし、石川県上荒屋遺跡で膨大な数量が報告されている〔出越ほか1995〕ほかは、1遺跡から多くても数点出土している程度である。打製石斧の破損率や磨耗の進行程度、耕地面積と出土数量との相関関係等についても検討する必要がある。また、打製石斧は鉄製農具・木製農具等との補完関係をなす可能性もあることから、関連資料も含めて総合的に評価すべき問題でもある。

このように、本遺跡における使用痕分析の結果においては、横刃形石器・打製石斧が農具として利用されたとは断言できなかった。特定の形態が特定の機能のみを果たしたかは必ずしも明らかでなく、少数の分析事例をもって石器の機能を普遍化することについて慎重に評価すべきであろう。しかし、時代背景を考慮すれば、横刃形石器・打製石斧が農具として使用されたとすることは合理的な理解ともいえる。石器の機能については拙速的に結論を導き出すのではなく、技術的・形態的な分析、相互補完的な道具との関係、出土遺跡における古環境の復元等を総合的に検討して、その可能性を多角的に検証する必要がある。

4 姫御前遺跡の消長と周辺地域の環境変化

本遺跡の調査においては、土層を上位からⅠ層・Ⅱa層・Ⅱb層・Ⅲ層・Ⅳ層・Ⅴ層・Ⅵ層に区分することができた。このうち表土であるⅠ層を除くⅡa層～Ⅵ層について土壌分析（花粉分析・植物珪酸体分析）を実施した。その結果、地域的にはスギ林が分布し、Ⅵ層堆積時は森林状態であったのが、Ⅴ層・Ⅳ層にかけてはカヤツリグサ科やハンノキ属の生育する沼沢湿地がやや拡大し、Ⅲ層・Ⅱb層・Ⅱa層になると水田が上位に向かって拡大すると対照的にスギ林が減少することがわかった。特に、Ⅱb層の段階に水田が大きく拡大したと推定された。このような環境の変化には、人為干渉の影響があることが想定されており、遺跡の消長との相関関係について整理することとしたい（第22図）。

時代	時期等	層位	遺物	遺構	スギ林	水田	湿地林	クリ	人為干渉の過程等
縄文時代	晩期	Ⅵ層	△		◎			○	森林状態
弥生時代		Ⅴ層	△		◎			○	
古墳時代	前期	前半	△		○	○	◎	◎	水田稲作開始 森林の人為干渉
		中頃							
	後半	○	△	◎	○	◎	クリの倒木		
	中期	△							
後期	△								
奈良時代									
平安時代		Ⅱb層 最下部	△						
鎌倉時代									
室町時代	14世紀	Ⅱb層	◎	△	○	◎	○		集約的な水田稲作 (調査範囲は集落の 縁辺)
	15世紀		◎						
戦国時代	16世紀	第1四半期	◎	△	○	◎	○		集約的な水田稲作 (調査範囲は集落の 縁辺)
		第2四半期	△						
		第3四半期	△						
		第4四半期	◎						
江戸時代	17世紀	Ⅱa層	◎		△	◎	○		集約的な水田稲作
	18世紀		△						

◎：極めて多い ○：多い △：少ない

第22図 姫御前遺跡の消長と周辺地域の環境変化

VI 層 段 階 (縄文時代晩期)

花粉分析の結果、スギ林が卓越し、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、カバノキ属の森林やトチノキ、ニレ属-ケヤキ、クリの樹木が伴い、周辺は森林状態であったことが推測されている。VI層中からは、年代を特定する遺物は出土していないが、検出されたスギの風倒木痕の覆土がVI層と酷似することが観察された。この共通性は、森林状態であったとする花粉分析の結果と整合する。すなわち、検出された風倒木痕がVI層段階に形成された可能性を指摘できる。風倒木痕から検出された倒木について放射性炭素年代測定を実施したところ、2900±40年BP(BC1130～1010年)という年代が得られており、上位のV層から出土した木製品の放射性炭素年代測定結果2150±40年BP(BC340～320年、BC210～160年)と整合する。また、風倒木痕からは、形態的特徴から縄文時代晩期に比定される可能性が高い石鏃(図版21-360)が出土しており、この年代測定結果と矛盾しない。したがって、VI層は縄文時代晩期に形成された土層であると考えられた。

青海地区の寺地遺跡(第4図4)において実施された花粉分析においても、縄文時代晩期はスギが圧倒的に多いこと、草本花粉が極めて少ないことが明らかとなっている。このことから寺地遺跡周辺にもスギ林が存在することが指摘されており[鈴木2002]、本遺跡の分析結果とよく共通する。縄文時代晩期の糸魚川地域には、スギ林が広がっていた可能性を指摘することができ、今後、類例の蓄積を待って検証する必要がある。

また、風倒木痕から出土した石鏃は、先端部に衝撃剥離痕[御堂島1991]が観察されること、出土状況・土壌分析の結果を総合すれば、狩猟の場に置き去られたものと考えられる。本遺跡の南東350mに位置する笛吹田遺跡においても縄文時代晩期後葉の土器が出土しており[安藤ほか1978]、この頃すでに周辺地域の土地利用が開始されていることを指摘できる。ただし、明確な集落跡は検出されておらず、その実態は明らかでない。

V 層 段 階 (弥生時代)

花粉分析の結果、森林が優勢であるものの、草本の湿地性カヤツリグサ科が増加することが明らかにされた。VI層段階と同様にスギ林が卓越して分布するが、コナラ属アカガシ亜属が微増しており、温暖な海岸部で増加したと考えられる。VI層段階と比べると樹木の構成に変化が生じているものの、森林の状態であることには変わりなく、伐採等による人為干渉はなされていないものと考えられる。

V層中からの出土遺物は、2点の木製品(板材)のみである。低地から出土していることから、他所から流れ着いた資料である可能性もある。この板材について放射性炭素年代測定を行ったところ、2150±40年BP(BC340～320年、BC210～160年)という年代が得られたことから弥生時代に比定した。下位のVI層が縄文時代晩期に位置付けられること、上位のIII層から古墳時代前期の遺物が出土していることから、調和的な年代観といえる。

出土した板材(図版18-300・301)は、長さ106cm、幅25.5cm、厚さ1.8cmの大きさで、一定の規則性をもった配置で穴が穿たれている。弥生時代における木製品の集成[山田2003]と比較すると、扉等の建築材とよく似ている。このような遺物の存在は、近隣に集落が築かれたはじめたことを示唆している。

Ⅳ 層段階（古墳時代前期前半ないし前期中頃）

花粉分析の結果、スギが優勢であるが、ハンノキ属・クリの森林が増加することが明らかとなっている。ハンノキ属の増加からは、湿地林の拡大・湿潤化を推定することができる。一方、クリの増加は、人為干渉による可能性が考えられている。クリは虫媒花であり、花粉が広範囲に飛散しないことから、サンプル採取地点周辺にクリが生育していたものと考えられる。サンプル採取地点に近い低地との境界付近（15B・16B・17Bグリッド）に倒木1・2・3が検出されているが、その樹種はクリと同定されている。それらは一定の間隔をおきながら分布しており、あたかも人為干渉によって残された樹木のようなものである。人為干渉の要因は明らかでないが、食用植物の確保にあったことも想定される。

Ⅳ層中からは、数少ないながらも土器が出土しているが、遺構は検出されていない。出土した土器は、上位のⅢ層出土品より形態的にも古く位置付けられ、古墳時代前期前半ないしは前期中頃に比定される。遺物数は少ないものの、従前の土器編年研究を裏付ける層位的出土事例といえる（第七章2）。

これらの状況から、Ⅳ層段階においては生活の痕跡が窺えるものの、調査範囲周辺に居住空間等は築かれていない可能性が高い。植物珪酸体分析の結果、Ⅳ層段階に調査地点もしくはその近辺で水田稲作が開始されたと推定されており、あるいは生産域として土地利用されていた可能性もある。また、ヨシ属が比較的多く見られることは、水田雑草としてヨシ属が生育していたことや、休閑期間中にヨシ属が生育していたことを裏付けており、集約的な稲作は行われていないと判断される。いずれにしても、Ⅳ層段階においては水田稲作の開始やクリ林の増加が認められ、周辺地域の開発が始まったことを窺い知ることができる。

Ⅲ 層段階（古墳時代前期～後期）

花粉分析の結果、Ⅲ層～Ⅱa層にかけても、引き続きスギ林が優勢であるとされている。しかし、Ⅲ層からⅡb層・Ⅱa層に向かってスギ林が減少し、水田が著しく拡大することが明らかとなっている。このことは、植物珪酸体分析の結果からも裏付けられており、Ⅳ層段階で開始された水田稲作が、Ⅲ層段階でも行われていると理解される。なお、Ⅳ層段階に人為干渉で残されたとみられるクリの倒木は、Ⅲ層中から検出されている。いずれも南東方向に倒れていることから、日本海から吹きつける北西の季節風によって倒れたものと考えられる。Ⅲ層段階あるいはその直前段階においてクリが倒れたものと考えられるが、Ⅲ層中からクリの花粉がほとんど検出されていないことと調和的である。

Ⅲ層から出土した遺物は、古墳時代前期後半のものが大半であり、古墳時代中期・後期のものがごくわずかに認められる。遺物量の多寡を考慮すると、Ⅲ層段階の遺構（確かなものは、掘立柱建物1棟・溝3条・土坑2基・板杭列1列。）は、古墳時代前期後半に位置付けられる可能性が極めて高く、このうち溝2条（SD2・9）は、出土遺物によって前期後半に位置付けられた。一方、掘立柱建物・板杭列は、柱根・板杭の放射性炭素年代測定によってⅢ層段階に比定された。

検出された遺構は、分布にまとまりが認められず、調査範囲においては集落としての性格を想定することはできない。唯一の掘立柱建物は、1間（2m）×3間（5m）の側柱建物である。建物が調査範囲外にまで延伸するとしても、梁間1間の細長い建物となる。住居として利用するには規模が小さく、小屋等の簡易的な建物であったことが想定される。この建物の規模・構造を考慮すれば、調査範囲周辺が生産域として利用された可能性も考えられる。また、Ⅲ層からは、横刃形石器や打製石斧が出土している。これら

の石器は、耕作に関する農具といえるかもしれないが、そのことを裏付けるための十分な根拠は得られなかった。土器については、まとまって出土することはなく、多くが小片であることは、そのような遺跡の性格と整合するのかもしれない。

なお、Ⅲ層中からは玉作関連資料も出土している。滑石製の勾玉・管玉・白玉の製作に関する原石から製品に至る一連の工程品、翡翠の原石・剥片が出土している。一方、それらの過程で副次的に生じる剥片や碎片の数が少ないことが特徴的である。また、母岩の共有関係も認めることができないことから、調査範囲内で玉作が行われたと積極的に評価することができない。しかし、調査範囲の周辺で玉作が行われていたことは確実であり、今後、実施予定の調査結果と総合的に評価する必要がある。

Ⅲ層段階は、南東350mに所在する笛吹田遺跡と時期的に重複する。大規模な笛吹田遺跡に対して、小規模な本遺跡は対照的なあり方を呈する。玉作においても、生産の規模は対照的である。今後、実施される本遺跡の調査成果および笛吹田遺跡の報告書の刊行を待って、両遺跡の関係について多角的に検討していくことが必要となろう。

Ⅱ b 層段階（室町時代～戦国時代）

花粉分析・植物珪酸体分析の結果により、Ⅱ b 層からⅡ a 層にかけては集約的な水田稲作が行われていたと考えられる。Ⅳ層・Ⅲ層段階にみられた水田雑草が減少していることも確認されており、生産性の向上を窺い知ることができる。

Ⅱ b 層段階は、出土した土器・陶磁器の年代から平安時代（9世紀）～中世に位置付けられる。遺物の大半は14世紀後半～16世紀（室町時代～戦国時代）のものであることから、主に中世後期に形成された遺物包含層と考えられる。

中世後期の陶磁器には、香や茶道具、風炉の可能性を含む瓦器が含まれており、茶の湯や香を嗜むことのできる比較的財力のある階層の存在を窺い知ることができる。しかし、検出された遺構は、総柱の掘立柱建物1棟と杭列1列のみである。掘立柱建物は調査範囲の北側（加賀街道沿いの集落（第4図）の方向）に延びていることから、集落の中心が調査範囲外に広がるものと考えられる。土壌分析の結果も踏まえれば、調査範囲が水田稲作の生産域により近い可能性を指摘できよう。

Ⅱ b 層からは、木製品が極めて多く出土したことが特筆される。特に、箸状木製品（658点）や棒状木製品が多く、中には地面に突き刺したような状態で検出されたものもあった。その検出状況の観察からは、それが当時の地表面からほとんど地上に露出していない可能性が高いと判断された。したがって、地面に突き刺したといっても、箸状木製品や棒状木製品が林立するような状況を復元することはできなかった。箸状木製品は、中世段階において、古代の齋串と同様な役割を果たしたと考えられており〔四柳1987、畑2006〕、出土状況を勘案すれば祭祀具であった可能性が高いといえる。このほかにも、形代（人形・刀形）・下駄・扇や銭貨等、祭祀に使用された可能性が指摘される遺物〔秋田2002〕も出土しており、湿地的な環境において祭祀がなされたと考えられる。

糸魚川地域においては、本遺跡と同様に箸状木製品が多数出土する事例が報告されている。寺地遺跡（第4図4）においては15世紀に位置付けられる自然流路から、舟形木製品2点と多量の箸状木製品が出土している。箸状木製品の中には、「N」字状に折り畳んだものや、地面に突き刺したかのような状態のものも認められる〔相羽2002〕。12世紀後半に位置付けられる山岸遺跡（第4図37）においては、膨大な数の箸状木製品・棒状木製品とともに人形・刀形・舟形や下駄等の祭祀的遺物が出土している。箸状木

製品・棒状木製品・板状木製品は地面に突き刺したような状態で発見されており、中にはピットに多量の棒状木製品を様々な方向から突き刺す特異な事例も認められた [渡邊 2007]。時期的に差異のある事例であるが、中世の糸魚川地域においては、箸状木製品を用いた祭祀を行う風習が存在したものと理解することができよう。

同様の祭祀行為の痕跡は、中部地方では13世紀～14世紀に多いことが指摘されている [畑 2006]。木製品は、Ⅱb層でもⅢ層との境界からより多く出土していることから、本遺跡における中世の最も古い段階（14世紀後半）に位置付けられる可能性がある。しかし、その根拠は十分でなく16世紀頃まで下る可能性も否定できない。時期別にみた陶磁器数量の多寡を考慮すれば、むしろ15世紀頃に位置付けられる可能性が最も高いと考えられる。

また、これらの木製品とともに動物骨が出土したことも特徴的である。出土した8点中5点がイルカ（イルカ類？2点を含む）、サメ類・ヒト・不明（骨角器363）が各1点であり、イルカの多さが特筆される。これらの出土層位は、Ⅱb層を中心とするものの、Ⅱa層・Ⅲ層からの出土も確認されたため、年代を特定するため放射性炭素年代測定を実施した。分析用のコラーゲンが抽出されたイルカの肋骨（動物骨試料名3）の測定結果が730±40年BP（AD 1260～1290年）であったことから、動物骨の帰属年代は中世（Ⅱb層段階）と判断された。多量の木製品と動物骨がともに出土した事例として、山形県亀ヶ崎城跡（16世紀後半～17世紀初頭）を挙げることができる。「出土した木製品には、食事や調理に使う道具、遊びやまじないの道具、お茶の道具、建物の部材など、様々な種類があり」、ここにイルカや魚の骨が伴っている [高桑 2006]。ここでもイルカの骨の存在が特筆されており、本遺跡から出土した動物骨を偶発的な混入と拙速的に判断することはできない。また、時期的に遡る8世紀～9世紀の遺跡ではあるが、石川県小島西遺跡では木製祭祀具とともにイノシシの頭骨が出土している [大西 2004]。これらの事例も参考にすれば、木製品による祭祀行為とこれらの動物骨を関連付けて理解する必要があるであろう。

Ⅱ a層段階（江戸時代）

花粉分析・植物珪酸体分析の結果により、Ⅱa層においても集約的な水田稲作が行われていたと考えられる。水田雑草の減少が認められる一方、イネ科の花粉・イネの植物珪酸体ともに検出量は最多であり、生産性の更なる向上を窺い知ることができる。また、Ⅱb層との層理面には、足跡等旧地表からの圧迫によって形成されたと考えられる凹凸が多数観察される。これは、Ⅱa層段階の耕作に伴う足跡である可能性が高い。

Ⅱa層段階は、出土した陶磁器の年代から江戸時代に位置付けられる。17世紀以降の遺物が認められるが、その大半は17世紀代に収まる。これに伴う遺構は検出されておらず、居住域として利用された可能性は低い。しかし、17世紀代の遺物が比較的多く出土していることから、その頃の居住域と著しく離れていない可能性が高い。一方、18世紀以降の遺物は、対照的にまとまりに欠いており、遺物の供給源がより離れたことを示唆している。本調査範囲の近くに築かれた集落はこの頃、加賀街道沿いに広がる現在の集落周辺（第4図）に移転したのかもしれない。

以後、現代に宅地造成が行われるまで、調査範囲は継続的に水田として利用されたようである。

要 約

- 1 姫御前遺跡は、新潟県糸魚川市東寺町2丁目1番地ほかに所在する。遺跡は、現海岸線から350m内陸の標高約6mの沖積地に立地する。
- 2 調査は北陸新幹線の建設に伴い、平成18年度に実施した。調査面積は3,120m²である。
- 3 調査の結果、中世と古墳時代の遺構・遺物が検出された。
- 4 中世と判断された遺構は、総柱の掘立柱建物1棟と杭列1列のみであり、集落の縁辺を調査したものと考えられる。遺構および遺物の分布状況からは、集落が調査範囲の北側に広がっていた可能性が高い。また、出土した陶磁器の構成からは、茶の湯や香を嗜むことのできる比較的財力のある階層の集落であったことを指摘できる。
- 5 中近世の陶磁器は、青磁・白磁・青花・李朝陶器・天目の舶載品、瀬戸美濃・珠洲・越前・信楽・越中瀬戸・肥前窯の国産品、瓦器、在地土器がある。これらの年代は、14世紀後半から16世紀第1四半期頃と16世紀第4四半期から17世紀末にまとまりが認められた。16世紀第2四半期～第3四半期の遺物は希薄であるものの、中世後期～近世前半にかけて断続的に土地利用されたことが理解される。
- 6 中世の陶磁器は、供膳具に舶載陶磁器・瀬戸美濃焼、調理具と貯蔵具に珠洲焼・越前焼・信楽焼が使用されており、用途により各産地の製品を使い分けられていることがわかった。また、香や茶道具、装飾性の高い奢侈品には瀬戸美濃焼が使われており、瀬戸美濃焼の高級品指向が理解された。
- 7 中世においては、木製品の多さが特筆される。特に、箸状木製品や棒状木製品が多く、中には地面に突き刺したような状態で検出されたものもあった。このほかにも、形代（人形・刀形）・下駄・扇や銭貨等、祭祀に使用された可能性が指摘される遺物も出土しており、湿地的な環境において祭祀がなされたものと考えられた。
- 8 古墳時代の土器は、前期～後期のものが認められるが、その多くが古墳時代前期後半の資料である。古墳時代と判断した側柱の掘立柱建物1棟・溝3条・土坑2基・板杭列1列は、前期後半に帰属する可能性が高い。遺構数が少ないことから、調査範囲が集落の縁辺もしくは生産域であったことが想定される。なお、南東約350mには時期的に重複する大規模な集落跡・笛吹田遺跡が所在する。遺構・遺物の検出状況は対照的であり、相互の関係について、今後の調査結果を踏まえて検討する必要がある。
- 9 古墳時代の玉作関連資料は、滑石製の勾玉・管玉・白玉・算盤玉・平玉の製品・未製品と、翡翠の原石・剥片が認められた。しかし、それらの過程で副次的に生じる剥片や碎片の数が少ない。調査範囲内の製作を積極的に評価できないものの、周辺で玉作が行われていたことは確実である。
- 10 古墳時代の石器は、横刃形石器・打製石斧が認められた。北陸地方に類例が認められ、農具として利用された可能性が想定されるが、その機能については類例の増加を待つて多角的に検討する必要がある。
- 11 土壌分析の結果、縄文時代にはスギの森林であったのが、古墳時代前期前半ないし中頃から人為干渉が始まり水田稲作が開始されたことが明らかとなった。それ以降、水田の拡大とともにスギの森林が減少していき、中世段階以降は集約的な水田稲作が行われたものと理解された。

引用・参考文献

- 相田泰臣 2004 「越後における古墳時代後期を中心とした土器の様相」『新潟考古』15 新潟県考古学会
- 相羽重徳 2002 「第IV章遺構 2D自然流路」『寺地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第113集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 相羽重徳 2003 「越中瀬戸広口壺に関する粗描―県内出土報告例から―」『研究紀要』4 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 青山双男 2006 「美濃窯における施釉陶器の皿にみられる成形技法についての一考察 ―大川東窯跡第3群を事例として―」『瑞浪陶磁資料館 研究紀要』11 東濃西部歴史民俗資料館瑞浪陶磁資料館
- 秋田裕毅 2002 『下駄 神のはきもの』ものと人間の文化史104 法政大学出版局
- 阿子島香 1989 『石器の使用痕』考古学ライブラリー56 ニュー・サイエンス社
- 安藤文一^{ほか} 1978 『笛吹田遺跡』糸魚川市教育委員会
- 池谷勝典・馬場伸一郎 2003 「弥生時代飯田盆地における打製石鍬の用途について」『中部弥生時代研究会 第6回発表要旨集』中部弥生時代研究会
- 伊東隆夫 1988 「4. 加工木にみる古代の木材利用 2 土木材」『日本の遺跡出土木製品総覧』鳥地 謙・伊東隆夫編 雄山閣出版
- 伊藤恒彦 1985 「行塚遺跡出土の玉造り関連遺物について」『吉井遺跡群』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第4 柏崎市教育委員会
- 糸魚川市史編さん委員会 1986 『糸魚川市史 資料集1 考古編』糸魚川市役所
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 大西 顕 2004 「小島西遺跡」『季刊考古学』雄山閣
- 大橋康二 1993 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 梶原 洋・阿子島香 1981 「頁岩製石器の実験使用痕研究―ポリッシュを中心とした機能推定の試み―（東北大学使用痕研究チームによる研究報告 その2）」『考古学雑誌』67-1 日本考古学会
- 春日真実 1998 「西頸城地域における古代の土器様相」『研究紀要』2 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 「第4章古代 第2節土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会 高志書院
- 春日真実^{ほか} 2000 『大武遺跡I（中世編）』新潟県埋蔵文化財調査報告書第97集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2001 「第V章 遺物 3.土製品（1）土錘」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書I 松影A遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学・高階敏昭・沢田福宏 2003 『仲田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第128集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学・杉田和宏・近藤慎子・相羽重徳・松永篤知 2006a 『用言寺遺跡I』新潟県埋蔵文化財調査報告書第159集 新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学・杉田和宏・近藤慎子・相羽重徳・松永篤知 2006b 『大角地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第173集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金子拓男 1975 「新潟県青海町天神山経塚出土の陶製経筒と珠洲焼の成立について」『信濃』27-1 信濃史学会
- 金子正典・滝沢規朗・丸山一昭 1999 「第3章 弥生時代・古墳時代 第2節 土器 第3項 弥生後期」『新潟県の考古学』新潟県考古学会 高志書院
- 川村浩司 2000 「上越市の古墳時代の土器様相 ―関川右岸下流域を中心に―」『上越市史研究』5 上越市史専門委員会
- 木島 勉 1989 『立ノ内遺跡・山崎三十三塚』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書16 糸魚川市教育委員会

- 木島 勉 2005 「頸城32 笛吹田遺跡」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第2分冊 新潟県考古学会
- 木島 勉 2007 「山崎A・B遺跡一台地に営まれた平安・鎌倉時代の集落一」『第14回 遺跡発掘調査報告会』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小池義人 1986 「第三章遺跡各説 C.岩野E遺跡 6.まとめ b.石器について」『中原遺跡・岩野A遺跡・岩野E遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集 新潟県教育委員会
- 小池義人^{ほか} 2000 『裏山遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 國下多美樹 1988 「京都府下の紡錘車について」『京都考古』第50号 京都考古刊行会
- 坂井秀弥 1990 「新潟県における中世末から近世の遺跡調査状況」『かみくひむし』第80号 かみくひむしの会
- 坂上有紀・高橋 保・田義正 2000 「第四章 遺跡」『平田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第98集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 笹沢正史 2005 「頸城地域における弥生時代後期から古墳時代前期の集落動態」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第1分冊 新潟県考古学会
- 品田高志 1991 「越後における古墳時代土器の変遷Ⅱ」『柏崎市立博物館報』6 柏崎市立博物館
- 梶山林継 1972 「神坂峠」『神道考古学講座5 祭祀遺跡特説』雄山閣
- 鈴木郁夫 1982 「I 地形分類図 1 地形概説」『新潟県上越地域土地分類基本調査 糸魚川』新潟県農地部総合整備課
- 鈴木郁夫 2000 「I 概説 1 地形概説」『新潟県地質図説明書(2000年度版)』新潟県商工労働部商工振興課
- 鈴木公雄 1999 『出土銭貨の研究』東京大学出版会
- 鈴木 茂 2002 「第六章自然科学分析 1 花粉分析」『寺地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第113集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木俊成^{ほか} 1988 『小出越遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第51集 新潟県教育委員会
- 鈴木道之助 1974 「縄文時代晩期における石鏃小考」『古代文化』26-7 古代学協会
- 関 雅之 1972 『田伏玉作遺跡』糸魚川市教育委員会
- 関 雅之 1990 「古代細型管状土錘考」『北越考古学』3 北越考古学研究会
- 千家和比古 1978 「第4章 遺物 4 土器類」「第5章 総括 2 遺物について」『笛吹田遺跡』糸魚川市教育委員会
- 相馬御風 1938 「身辺雑記」『相馬御風一人雑誌 野を歩む者』46 野を歩む者の会
- 高桑 登 2006 「山形県酒田市亀ヶ崎城跡」『発掘された日本列島2006新発見考古速報』文化庁編 朝日新聞社
- 高橋 保 1988 『立ノ内遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第49集 新潟県教育委員会
- 滝沢規朗 2005 「土器の分類と変遷」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第1分冊新潟県考古学会
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人^{ほか} 1988 『漆町遺跡Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター
- 田中照久・木村宏一郎 2005 「越前」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』資料集 同実行委員会
- 田村浩司 1999 「第5章 中世・近世 第3項 漆器」『新潟県の考古学』新潟県考古学会 高志書院
- 辻 範朗 2006 「須沢角地遺跡」『財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成16年度』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土田孝雄 1978 「第2章 調査の経過 1 発掘調査に至るまで」『笛吹田遺跡』糸魚川市教育委員会
- 土田孝雄^{ほか} 1988 『須沢角地A遺跡発掘調査報告書』青海町教育委員会
- 土田孝雄 1991 「加賀街道 第二章1・2」『加賀街道・松本街道』新潟県歴史の道調査報告書第1集 新潟県教育委員会
- 出越茂和^{ほか} 1995 『上荒屋遺跡Ⅰ 第2分冊古墳時代編』金沢市文化財紀要120-2 金沢市教育委員会

- 寺崎裕助 1988 「第I章 遺跡の立地と周辺の遺跡 1.位置と地形」『原山遺跡 大塚遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集 新潟県教育委員会
- 寺村光晴 1966 『古代玉作の研究』吉川弘文館
- 寺村光晴・安藤文一ほか 1979 『大角地遺跡―飾玉とヒスイの工房址―』青海町教育委員会
- 戸谷邦隆 2004 「弥生時代後期後半以降の石製土掘り具～その機能と用途を考える～」『黒河尺目遺跡・黒河老田遺跡発掘調査報告』富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第25集 (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 永井久美男 1996 『日本出土銭総覧 1996年版』兵庫埋蔵銭調査会
- 能登 健 1974 「発掘調査と遺跡の考察―いわゆる‘性格不明の落ち込み’を中心として―」『信濃』26-3 信濃史学会
- 畑 大介 2006 「中世前期の村落祭祀と串状の木製品」『鎌倉時代の考古学』高志書院
- 原田 幹 2002 「戸水B遺跡出土石器の使用痕分析」『金沢市戸水B遺跡II』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 久田正弘 1999 「石製収穫具 打製石包丁」『農工具―石川県考古学資料調査・集成事業報告書』石川県考古学会
- 久田正弘 2000 『松任市橋爪遺跡』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 平野団三・渡辺秀雄 1968 「西頸城郡」『日本歴史地名大系 15 新潟県の地名』平凡社
- 平井 勝 1991 『弥生時代の石器』考古学ライブラリー64 ニュー・サイエンス社
- 藤澤良祐 1993 『瀬戸市史 陶磁史篇四』愛知県瀬戸市
- 藤澤良祐 1995 「中世陶器(古瀬戸)」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 藤塚 明 1999 「第4章 古代 第4節 生産と流通 第5項 漁業」『新潟県の考古学』新潟県考古学会 高志書院
- 水澤幸一 1999 「瓦器、その城館的なもの」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集 帝京大学山梨文化財研究所
- 水澤幸一 2004 「15世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相」『貿易陶磁研究』24 日本貿易陶磁研究会
- 水澤幸一 2005 「越後の中世土器」『新潟考古』16 新潟県考古学会
- 御堂島正 1991 「石鏃と有舌尖頭器の衝撃剥離痕」『古代』早稲田大学考古学会
- 三鍋秀典・渡辺 樹 2001 『新瀬戸古窯』立山町文化財調査報告書第32冊 立山町教育委員会
- 宮田進一 1997 「越中瀬戸の変遷と分布」『中近世の北陸―考古学が語る社会史―』北陸中世土器研究会編 桂書房
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 森本朝子・片山まび 2000 「博多出土の高麗・朝鮮陶磁の分類試案―生産地編年を視座として―」『博多研究会誌』8 博多研究会
- 安 英樹・河合 忍 1999 「石鏃雑考」『農工具―石川県考古学資料調査・集成事業報告書』石川県考古学会
- 山岸洋一・田村公一 2004 『水穂寺跡発掘調査報告書』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書47 糸魚川市教育委員会
- 山岸洋一 2005 『平成16年度笛吹田遺跡発掘調査概要報告書』糸魚川市文化財調査報告書49 糸魚川市教育委員会
- 山岸洋一 2006 『平成17年度笛吹田遺跡発掘調査概要報告書』糸魚川市文化財調査報告書53 糸魚川市教育委員会
- 山田しょう・志村宗昭 1989 「石器の破壊力学(2)」『旧石器考古学』39 旧石器文化談話会
- 山田昌久 2003 『考古資料大観 第8巻 弥生・古墳時代 木・繊維製品』小学館
- 吉岡康暢 1967 「北陸地方における土師器の編年」『月刊考古学ジャーナル』6 ニュー・サイエンス社
- 吉岡康暢 1994 『日本海域の土器・陶磁器 [中世編]』六興出版
- 四柳嘉章 1987 『西川島 能登における中世村落の発掘調査』石川県・穴水町教育委員会
- 渡邊裕之 2007 「山岸遺跡―平安時代末～鎌倉時代の祭祀・信仰の場―」『第14回 遺跡発掘調査報告会』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

姫御前遺跡 土器・陶磁器観察表(1)(中世～近世)

胎土：石=石英、白=白色粒子、赤=赤色粒子、黒=黒色粒子、
長=長石、雲=雲母、骨=海綿骨針、礫=砂礫

報告 番号	分類		グリッド		層位	口径 mm	器高 mm	底径 mm	色調		胎土 (上段:色調 下段:混入物)	製作痕跡	消費痕跡	備考
	種別	器形	大	小					外面	内面				
1	中国産 陶器	天目碗 (禾目)	13	B 23	II b	136	—	—	赤黒	赤黒	灰白 白	(内外) 鉄釉		
2	瀬戸 美濃焼	天目碗	13	A 14	II b	150	—	—	黒	黒	灰白 石	(内外) 鉄釉		古瀬戸後期様式II期 14C末～15C初頭
3	瀬戸 美濃焼	天目碗	13	A 18	II b	116	—	—	黒	黒	灰白 白	(内外) 鉄釉		古瀬戸後期様式II期 14C末～15C初頭
4	瀬戸 美濃焼	天目碗	14	B 17	II b	120	—	—	黒	黒	灰白 白	(内外) 鉄釉		古瀬戸後期様式III期 15C前半
5	瀬戸 美濃焼	天目碗	14	B 9	II a	128	—	—	黒	黒	灰白 長	(内外) 鉄釉	(内外) 擦痕多	古瀬戸後期様式III期 15C前半
6	瀬戸 美濃焼	天目碗	15	B 6	II b	112	—	—	褐	褐	浅黄橙 長	(内外) 鉄釉		大窯4期 16C末～17C初頭
7	肥前系 陶器	天目碗	11	B 14	II a	—	—	40	灰オリーブ	灰オリーブ	にぶい赤橙 石・白	(内外) 灰釉		大橋I期 1580～1610 年代 露胎部: 灰褐色
8	青磁	蓮弁文碗	10	A 14	II b	148	—	—	明緑灰	明緑灰	灰白 (空隙多)	(外) 蓮弁文		14世紀後半
9	青磁	蓮弁文碗	16	B 7	II b	150	—	—	明緑灰	明緑灰	灰白 白	(外) 蓮弁文		上田B-II類 14C末～15C初頭
10	青磁	蓮弁文碗	16	A 19	II b	116	—	—	灰オリーブ	暗オリーブ	灰白 白	(外) 蓮弁文		15C中頃
11	青磁	端反碗	10	A 13	II b	142	—	—	明オリーブ 灰	明オリーブ 灰	灰白 白			14C後半～15C
12	青磁	端反碗	10	B 4	I	125	—	—	明緑灰	明緑灰	灰白 白	(外) 沈線1条		1430年代～15C中頃
13	青磁	碗	18	B 21	II a	138	—	—	明緑灰	明緑灰	灰白 白	無文	(内外) 褐色付着物	14C後半～15C
14	青磁	碗	13	B 20	II b	—	—	54	明オリーブ 灰	明オリーブ 灰	灰白 白	(底) 蛇ノ目軸剥ぎ	漆継	14C末～15C前半
15	青磁	碗	16	A 4	II b	—	—	52	オリーブ	オリーブ黄	にぶい黄橙 白・礫	(高台内) 無釉 (底) 削り出し高台		上田B-II-a類 14C末～15C前半
16	青磁	碗	17	B 20	II b	—	—	64	オリーブ灰	オリーブ灰	灰白 白	(見込) 篋描文	漆継	15C
17	瀬戸 美濃焼	平碗	16	A 25	II b	167	—	—	オリーブ黄	オリーブ黄	浅黄橙 石	(内外) 灰釉		古瀬戸後期様式II期 14C末～15C初頭
18	瀬戸 美濃焼	平碗	2	B 18	II b	146	—	—	オリーブ黄	オリーブ黄	にぶい黄橙 石・白	(内外) 灰釉		古瀬戸後期様式I～II期 14C後半～15C初頭
19	瀬戸 美濃焼	浅碗	10	A 20	II b	—	—	—	黄白	にぶい黄	黄白 長・礫	(内外) 灰釉		古瀬戸後期様式I～II期 14C後半～15C初頭
20	瀬戸 美濃焼	碗 (赤織部?)	14	A 10	II a	185	—	—	にぶい橙	にぶい橙	浅黄橙 石・赤	(内) 鉄絵	漆継	17C初頭
21	越中 瀬戸焼	丸碗	11	A 14	II a	112	—	—	暗褐	暗褐	にぶい橙 長	(内外) 鉄釉		17C中頃
22	肥前系 陶器	碗(皮鯨手)	2	B 15	II a	120	—	—	灰白	灰白	灰白 白	(口) 鉄釉 (内外) 灰釉		大橋I期 1580～1610 年代 露胎部: にぶい黄橙
23	肥前系 陶器	碗	14	B 8	II a	95	—	—	灰白	灰白	灰白 白	(内外) 灰釉		大橋II期 1610～1650年代
24	肥前系 陶器	碗	16	A 14	II a	—	—	34	白	灰白	灰黄 石・長	(内外) 薬灰釉		大橋I-1期 1580年代～1594年
25	肥前系 陶器	碗	15	B 10	II a	—	—	44	灰白	灰白	灰白 石	(内外) 薬灰釉		大橋I-1期 1580年代～1594年
26	肥前系 陶器	碗	14	B 6	I	—	—	48	灰オリーブ	オリーブ黒	灰～褐灰 白	(内外) 灰釉 (内) 打刷毛目		大橋IV期前半 17C末～18C前半
27	肥前系 陶器	京焼風碗	13	A 13	I	—	—	—	淡黄	淡黄	黄 白	(外) 楼閣山水文		大橋III期 1650～1690年代
28	肥前系 磁器	碗	13	B 23	II a	—	—	40	明緑灰	明緑灰	灰白 白	(外) 一重網目文		大橋II-2期 1640～1650年代
29	青磁	端反蓮弁文 皿	4	A	II b	128	—	—	明オリーブ 灰	明オリーブ 灰	灰白(緻密・ 堅緻) 白	(外) 篋描蓮弁文	漆継	15C後半
30	青磁	腰折端反皿	15	A 20	II a	—	—	46	灰オリーブ	灰オリーブ	灰白 白	(内) 劃花文		15C後半
31	白磁	皿	4	A 19	II	136	—	—	白	白	白 白	(口) 端部面取り		森田D群 15C前半
32	白磁	皿	11	A 5	II b	106	—	—	白	白	白 白	(口) 端部面取り		森田D群 15C中頃～後半
33	白磁	皿	14	B 1	II b	—	—	—	白	白	白 黒	(外高台) 無釉		森田D群 15C
34	白磁	皿	9	B 13	II a	—	—	34	白	白	白(空隙多 やや軟)	(見込) 目跡2ヶ (底) 削り出し高台		森田D群 15C前半
35	青花	皿	9	B 8	II a	121	—	—	白+青	白+青	灰白 (空隙多)	(外) 草花文 (内外) 圈線		染付皿B1群 15C末～16C初頭
36	李朝 陶器	皿	11	A 9	II a	104	—	—	灰オリーブ	灰オリーブ	灰白 白	(内外) 灰釉		16C
37	李朝 陶器	皿	12	A 3	II a	106	—	—	灰	灰	灰白 白・黒・礫	(内外) 灰釉		16C
38	李朝 陶器	皿	15	B 3	II a	—	—	34	灰オリーブ	灰オリーブ	灰白 白	(内外) 灰釉 (内外) 砂目		16C
39	瀬戸 美濃焼	中皿	17	B 2	II b	124	—	—	明オリーブ 灰	明オリーブ 灰	灰白 石	(内外) 灰釉		古瀬戸後期様式I期 14C後半
40	瀬戸 美濃焼	緑釉小皿	14	B 4	II b	108	—	—	灰白+オリ ーブ灰	灰白+オリ ーブ灰	灰白	(口) 灰釉		古瀬戸後期様式II期 14C末～15C初頭
41	瀬戸 美濃焼	緑釉小皿	15	A 9	II b	110	—	—	灰白+オリ ーブ灰	灰白+オリ ーブ灰	灰白 石・白	(口) 灰釉		古瀬戸後期様式IV期 古段階 15C中頃
42	瀬戸 美濃焼	緑釉はさみ 皿	14	A 8～ 10	II b	108	22	52	灰白	灰白	灰白 石・長	(底) 回転系切り	(内外) スス	大窯1期 1480～1530年
43	瀬戸 美濃焼	緑釉はさみ 皿	15	A 20	II b	112	26	58	灰白	灰白	灰白 白	(口) 灰釉 (内外) 回転系切り	(内外) スス	大窯1期 1480～1530年
44	瀬戸 美濃焼	緑釉はさみ 皿	11	A 14	II b	110	—	—	灰オリーブ	灰オリーブ	灰白 石・長	(内外) 灰釉	(内外) スス	大窯1期 1480～1530年

姫御前遺跡 土器・陶磁器観察表(2)(中世～近世)

胎土：石=石英、白=白色粒子、赤=赤色粒子、黒=黒色粒子、
長=長石、雲=雲母、骨=海綿骨針、礫=砂礫

報告 番号	分類		グリッド		層位	口径 mm	器高 mm	底径 mm	色調		胎土 (上段:色調 下段:混入物)	製作痕跡	消費痕跡	備考
	種別	器形	大	小					外面	内面				
45	瀬戸 美濃焼	緑釉はきみ 皿	1	B 25	II b	101	—	—	オリーブ灰	オリーブ灰	灰白 石	(内外) 灰釉	(内外) スス	大窯1期 1480~1530 年 露胎部:浅黄橙色
46	瀬戸 美濃焼	丸皿	11	B 21	II a	94	—	—	灰オリーブ	オリーブ黄	灰白 石・礫	(内外) 灰釉	(口) スス	大窯1期 1480~1530年
47	瀬戸 美濃焼	端反皿	13	A 12	II b	92	—	—	浅黄	浅黄	黄白 白	(内外) 灰釉		大窯1期 1480~1530年
48	瀬戸 美濃焼	端反皿	12	A 3	II a	88	22	55	灰オリーブ	オリーブ黄	黄灰 石	(全) 灰釉 (底) 削り出し高台	(口) スス	大窯1期 1480~1530年
49	瀬戸 美濃焼	丸皿 or 端 反皿	10	B 4	I	—	—	40	オリーブ灰	オリーブ灰	灰 石	(内外) 灰釉	(高台内) 墨痕	大窯4期 1590~1610年
50	瀬戸 美濃焼	内禿皿	12	A 8	II a	108	21	66	灰オリーブ	灰オリーブ	灰白 石	(全) 灰釉 (内外) 輪ドチ痕		大窯4期 1590~1610年
51	瀬戸 美濃焼	印花皿	16	B 9	II a	—	—	—	灰オリーブ	オリーブ黄	灰白 石	(内) 印花 (底) 蛇ノ目釉剥ぎ		大窯段階 14C末~16世紀
52	美濃 美濃焼	志野皿	14	A —	T r	—	—	50	淡黄	灰白	黄白 長	(内外) 長石釉+鉄 絵(底) 輪ドチ痕		大窯4期後半 17C初頭
53	肥前系 陶器	ヒダ皿 (皮鯨手)	11	B 7	II a	134	—	—	灰オリーブ	灰オリーブ	灰褐 石・礫	(口) 鉄釉 (内外) 灰釉		大橋I-1期 1580年代~1594年頃
54	肥前系 陶器	皿(絵唐津)	16	A 9	II a	—	—	48	褐灰	灰オリーブ	灰 白	(内) 胎土目1ヶ (内) 灰釉+鉄絵		大橋I-2期 1594年~1610年代
55	肥前系 陶器	皿	16	A 14	II a	138	35	44	オリーブ灰	灰オリーブ	灰白 白	(見込) 胎土目4ヶ (底) 粉殻付着		大橋I-2期 1594年~1610年代
56	肥前系 陶器	皿	3	B 7	I	—	—	42	白	淡黄	淡黄 石	(内外) 薬灰釉	(底) 墨痕	大橋I期 1580~1610年代
57	肥前系 陶器	溝緑皿	15	B 12	II a	144	—	—	灰オリーブ	灰オリーブ	にぶい赤褐 白	(内) 砂目		大橋II-1期 1610~30年代
58	肥前系 陶器	溝緑皿 (絵唐津)	13	B 23	II a	131	—	—	灰黄	灰白	にぶい黄橙 白	(内) 鉄絵 (内外) 灰釉		大橋II期 1610~50年代
59	肥前系 陶器	灯明皿	11	B 11	II a	108	—	—	黒褐	黒褐	黄灰 石・白	(内外) 鉄釉	(内外) スス	大橋III・IV期 1650~1780年代
60	肥前系 陶器	銅緑釉皿 (内野山窯)	14	A 24	II a	126	—	—	灰黄	緑灰	黄白 石	(口・内) 緑釉 (外) 灰釉		大橋IV期前半 17C末~18C前半
61	肥前系 磁器	皿	11	A 3	II a	—	—	44	明緑灰	明緑灰	灰白 白	(見込) 染付 (置付) 砂付着		大橋II-2期 1640~50年代
62	肥前系 磁器	皿	11	A 31 3	II a	124	31	50	白+オリー ブ灰	白	白 白	(内) 圈線二条(内) 砂目+蛇ノ目釉剥ぎ	漆継	大橋II-1期 1610~1630年代
63	越中 瀬戸焼	皿	17	B 2	II a	—	—	58	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙 長・礫	(内) 灰釉 (内) 蛇ノ目釉剥ぎ		(内) 焙着物有り 17C中頃
64	越中 瀬戸焼	向付	2	B 22	II a	—	—	52	暗赤褐	暗褐	にぶい黄橙 石・長	(内外) 鉄釉 (底) 削り出し高台		17C第1四半期頃
65	土師器	皿	13	A 9	II b	100	—	—	にぶい褐	にぶい褐	灰黄褐 石・礫	てづくね成形		
66	土師器	皿	15	A 14	II b	110	—	—	にぶい橙	にぶい黄橙	にぶい橙 石・雲・礫	てづくね成形		
67	土師器	皿	10	B 16	II b	138	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	にぶい黄橙 石・礫	てづくね成形		
68	土師器	皿	16	B 16	II b	84	—	—	褐灰	にぶい橙	褐灰 雲・骨・礫	てづくね成形		
69	土師器	皿	17	B 2	II b	88	—	—	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙 石・礫	てづくね成形		
70	土師器	皿	15	A 5	II b	102	—	—	にぶい橙	にぶい橙	黒 石・長・骨	てづくね成形		16C後半~17C初頭
71	土師器	皿	14	A 24	II b	98	14	47	浅黄橙	にぶい橙	黒 石・骨・礫	てづくね成形		16C後半~17C初頭
72	土師器	皿	9	A 15	II b	104	—	—	灰白	灰白	灰白 石・礫	てづくね成形	(内) スス	16C後半~17C初頭
73	土師器	皿	17	B 13	II b	160	—	—	にぶい黄橙	灰黄褐	灰黄褐 白・雲	ロクロ成形	(内) スス	15C
74	土師器	皿	15	A 5	—	138	—	—	にぶい橙	にぶい黄橙	にぶい橙 石・礫	ロクロ成形		15C
75	土師器	皿	16	A 19	II b	110	32	56	にぶい黄橙	にぶい黄橙	にぶい黄橙 石・長・礫	ロクロ成形 (底) 回転糸切り		15C
76	土師器	皿	3	B 21	II b	74	20	56	にぶい黄橙	にぶい黄橙	にぶい黄橙 石・長・雲・礫	ロクロ成形 (底) 回転糸切り	(内・口外) タール	15C
77	土師器	皿	14	A 5	II b	—	—	64	黄白	黄白	黄白 石・礫	ロクロ成形 (底) 回転糸切り	(内) タール	15C
78	土師器	皿	15	A 14	II b	—	—	54	にぶい黄橙	にぶい黄橙	にぶい黄橙 石・長・礫	ロクロ成形 (底) 回転糸切り		15C
79	土師器	皿	10	A 3	II b	—	—	66	浅黄橙	にぶい黄橙	浅黄橙 石・雲	ロクロ成形 (底) 回転糸切り	(内外) スス	15C
80	土師器	皿	12	B 11	II b	—	—	80	にぶい黄橙	浅黄橙	にぶい黄橙 石・雲・礫	ロクロ成形 (底) 回転糸切り		15C
81	瀬戸 美濃焼	鉢	17	B 12	II b	352	—	—	淡黄	灰白	淡 黄	(口) 灰釉	漆継	古瀬戸後期様式IV期 新段階 15C後半
82	瀬戸 美濃焼	鉢	16	B 3	I	372	—	—	褐灰	褐灰	橙 石・礫	(内外) 鉄釉		大窯段階? 14C末~16C
83	瀬戸 美濃焼	折縁深皿	17	A 13	II b	—	—	—	灰オリーブ	灰オリーブ	灰白 白	(内外) 灰釉		古瀬戸後期様式IV期 古段階 15C中頃
84	肥前系 陶器	鉢 (絵唐津)	17	B 17	II a	—	—	—	灰	灰	黄灰~にぶい橙 石・礫	(内) 灰釉+鉄絵		大橋I期 1580~1610年代
85	肥前系 陶器	鉢	10	A 18	II a	—	—	—	灰褐	オリーブ褐	にぶい橙 石・礫	(内) 褐釉刷毛目		大橋III期 1650~1690年代
86	青磁	盤	4	A 19	II	—	—	—	明緑灰	明緑灰	白(空隙多、 やや軟)			
87	瓦器	不明	17	B 2	II b	74	—	—	にぶい橙	にぶい橙	明褐灰 石	(外) スタンプ文		
88	瓦器	風炉?	17	A 24	II b	—	—	—	黒	黒褐	にぶい黄橙 石・長・礫	(外) 雷文 (内外) ミガキ		

姫御前遺跡 土器・陶磁器観察表 (3) (中世～近世・古代)

胎土：石=石英、白=白色粒子、赤=赤色粒子、黒=黒色粒子、
長=長石、雲=雲母、骨=海綿骨針、礫=砂礫

報告 番号	分類		グリッド		層位	口径 mm	器高 mm	底径 mm	色調		胎土 (上段：色調 下段：混入物)	製作痕跡	消費痕跡	備考
	種別	器形	大	小					外面	内面				
89	瀬戸 美濃焼	筒形容器	17	A 9	I	128	—	—	灰オリーブ	灰オリーブ	灰白 石・白	(口・外) 灰軸		古瀬戸後期様式Ⅲ期 15C前半
90	瀬戸 美濃焼	香炉	10	A 13	Ⅱ b	—	—	52	灰白	灰白	灰白 白・長	(底) 回転系切り +足付		古瀬戸後期様式 14C後半～15C
91	瀬戸 美濃焼	香炉?	13	B 1	Ⅱ b	—	—	62	灰白	灰白	灰白 長	(外上半) 灰軸 (底) 回転系切り		古瀬戸後期様式Ⅱ期 14C末～15C初頭
92	瀬戸 美濃焼	茶入	6	A 15	Ⅱ b	32	—	—	にぶい黄	にぶい黄	灰白 石	(口) 釉剥ぎ (内外) 灰軸		
93	白磁	八角杯	14	A 10	I	—	—	—	黄白	黄白	黄白 (やや粗)	(外) 面取り		上田D群 15C中～後半
94	陶製 転用品	陶片円板	12	C 21	Ⅱ b	長 23	幅 23	厚 11	灰	灰	灰 石・骨・礫	(内外) タタキ	(外縁) 剥離	珠洲T種からの転用
95	陶製 転用品	陶片円板	17	A 9	Ⅱ b	長 27	幅 24	厚 15	灰白	灰白	灰白 石・礫	(内外) タタキ	(外縁) 剥離	珠洲T種からの転用
101	珠洲焼	片口鉢	14	B 3	Ⅱ b	386	—	—	灰	灰	灰白 石・骨・礫	(卸目) 5条一単位以上		吉岡Ⅳ-1～2期 14C前半
102	珠洲焼	片口鉢	15	A 10	Ⅱ b	358	—	—	灰	灰	灰 石・白・骨・礫	(卸目) 2条一単位以上	(内) 平滑	吉岡Ⅳ期 14C第1～3四半期
103	珠洲焼	片口鉢	13	B 18	Ⅱ b	472	—	—	灰	灰	黄灰 石・白・骨・礫	(卸目) 11条一単位		吉岡Ⅳ4期 14C第3四半期
104	珠洲焼	片口鉢	11	A 15	Ⅱ b	364	—	—	灰	灰	灰白 白・骨・礫	(口) 波状文(卸目) 7条一単位以上		吉岡Ⅴ期 14C末～15C前半
105	珠洲焼	片口鉢	10	A 20	Ⅱ b	366	—	—	黄灰	灰白	灰白 石・白・黒・骨・礫	(卸目) 6条一単位	(口) スス	吉岡Ⅴ期 14C末～15C前半
106	珠洲焼	片口鉢	11	A 23	Ⅱ b	446	—	—	灰	灰	灰 白・骨・礫	(口) 波状文(卸目) 9条一単位以上		吉岡Ⅴ期 14C末～15C前半
107	珠洲焼	片口鉢	18	A 3	Ⅱ b	442	—	—	灰	灰	灰 石・白・骨・礫	(口) 波状文(卸目) 10条一単位		吉岡Ⅴ期 14C末～15C前半
108	珠洲焼	片口鉢	10	B 21	Ⅱ b	376	—	—	灰白	灰白	灰白 白・骨・礫	(口) 波状文		吉岡Ⅵ期 15C後半
109	珠洲焼	片口鉢	16	B 9	Ⅱ b	268	—	—	褐灰	灰	にぶい黄 白・骨・礫	(口) 波状文		吉岡Ⅵ期 15C後半
110	越前焼	播鉢	17	B 17	Ⅱ b	320	—	—	にぶい橙	灰白	淡橙 石・白・長・礫	(卸目) 4条一単位以上		15C後半
111	越前焼	播鉢	14	A 24	Ⅱ b	320	—	—	にぶい橙	褐灰	にぶい橙 褐灰 石・長			15C末
112	越前焼	播鉢	10	A 8	Ⅱ b	396	—	—	にぶい黄橙	にぶい橙	灰白 石・白・礫	(卸目) 7条一単位以上		16C末
113	越中 瀬戸焼	播鉢	16	A 24	Ⅱ a	262	—	—	にぶい褐	にぶい褐	浅黄橙 長・礫	(卸目) 2条一単位 以上(内外) 鉄軸	(口端) 摩 耗・平滑	17C前半
114	越中 瀬戸焼	播鉢	11	A 23	Ⅱ a	236	—	—	にぶい黄橙	灰褐	灰白 礫	(卸目) 5条一単位 以上(内外) 鉄軸	(口端) 摩 耗・平滑	16C末～17C初頭?
115	珠洲焼	片口鉢	2	A 10	Ⅱ b	—	—	130	灰白	灰白	灰白 石・長・礫	(卸目) 10条一単 位(底) ヘラキリ		
116	瀬戸 美濃焼	四耳壺?	17	A 25	Ⅱ b	98	—	—	黒褐	灰	灰白 白	(口・外) 鉄軸		
117	瀬戸 美濃焼	瓶子	15	C 11	I	—	—	—	明オリーブ 灰	灰白	灰白 石	(外) 灰軸		古瀬戸後期様式?
118	李朝 陶器	瓶	6	A 10	Ⅱ a	—	—	—	灰	赤灰	灰白 白	タタキ成形 (外) 灰軸		16C
119	越中 瀬戸焼	広口壺	13	B 18	Ⅱ a	100	—	—	赤灰	灰赤	にぶい黄 長	ロクロ成形 (内外) 鉄軸	(口) スス	
120	越中 瀬戸焼	広口壺	13	A 13	I	102	—	—	灰褐	灰褐	浅黄橙 石・長・礫	(口端) 環状重ね焼 き痕(内外) 鉄軸	(外) スス	新瀬戸古窯併行 17C末～18C初頭
121	肥前系 陶器	甕	8	A 23	I	108	—	—	オリーブ黄	オリーブ黄	にぶい橙 石・礫	(内外) 灰軸		大橋Ⅰ期 1580～1610年代
122	肥前系 陶器	甕	14	A 4	Ⅱ a	122	—	—	灰オリーブ	灰白	灰白 礫	(内外) 灰軸 (口端) 貝殻目		大橋Ⅰ期 1580～1610年代
123	珠洲焼	壺(R種)	17	B 2	Ⅱ b	—	—	—	灰	灰	灰 石・骨・礫	ロクロ成形		
124	珠洲焼	壺(R種)	15	B 16	Ⅱ b	—	—	—	灰	灰	灰 石・骨・礫	ロクロ成形		
125	珠洲焼	大甕	16	B 8	Ⅱ b	(推定) 750	—	—	灰	灰	灰 石・骨・礫	(内外) タタキ	漆継	吉岡Ⅴ～Ⅵ期 14C末～15C後半
126	珠洲焼	中甕	14	B 11	Ⅱ b	340	—	—	灰	灰	明緑灰 石・礫	(内外) タタキ		吉岡Ⅳ1～2期 14C前半
127	信楽焼	壺か甕	13	B 18	Ⅱ b	—	—	—	明褐灰	にぶい橙	褐灰～灰白 長			15C?
128	肥前系 陶器	播鉢	2	C 1	Ⅱ a	260	—	—	暗赤灰	暗赤褐	褐灰 白・礫	(口) 鉄軸		大橋Ⅱ-2期 1630～40年代
129	肥前系 陶器	播鉢	2	A 10	Ⅱ a	366	—	—	灰緑	灰褐	灰赤 石・白	(卸目) 14条一単位		大橋Ⅳ期前半 17C末～18C前半
246	須恵器	杯蓋	17	C 6	Ⅱ b	—	—	—	灰白	灰白	灰白 石・礫	ロクロ成形		小泊窯
247	須恵器	杯蓋	18	B 3	Ⅱ b	140	—	—	灰白	灰黄	灰黄 長・礫	ロクロ成形		西頸城産
248	須恵器	杯	10	B 6	Ⅱ b	135	—	—	灰白	灰白	灰白 石・礫	ロクロ成形		小泊窯
249	須恵器	杯	10	B 17	Ⅱ b	134	—	—	灰白	灰白	灰白 石・礫	ロクロ成形		小泊窯
250	須恵器	無台杯	10	B 7	Ⅱ b	124	32	74	灰白	灰白	灰白 石・礫	ロクロ成形 (底) 回転ヘラギリ		小泊窯
251	須恵器	甕	11	B 21	Ⅱ b	—	—	—	灰白	灰白	明褐灰 石・長・礫	タタキ成形		

別 表

姫御前遺跡 土錐観察表 (中世～近世)

報告番号	分類	出土位置				長さ mm	最大径 mm	孔径 mm	厚さ mm	重さ (g)	備考
		層位	グリッド								
96	太型	II a	11	B	13	65	39	19	11	61.2	
97	太型	II b	15	A	20	47	(41)	(17)	12	26.1	
98	太型	II b	17	B	21	46	33	11	10	37.8	
99	太型	II a	15	A	14	38	(33)	(14)	10	13.9	
100	太型	III	11	B	21	27	(33)	(17)	8	4.8	

() 内は推定

姫御前遺跡 木製品観察表 (1) (中世)

報告番号	分析番号	分類	器種・形状	樹種	木取り	出土位置			長さ・口径 mm	幅・底径 mm	厚さ・器高 mm	備考			
						遺構番号	層位	グリッド							
130	2	A-1	人形	スギ	板目			II c	4	A	24	160	66	9	杓子からの転用か
131	11	A-1	人形	スギ	板目			II b	11	A	9	173	47	2	
132	1	A-1	人形	スギ	板目			II b	5	A	5	166	30	3	
133	3	A-1	人形	スギ	板目			III	12	A	13	181	38	3	
134	8	A-1	人形?	スギ	板目			II b	2	B	9	189	24	5	
135	16	A-1	人形?	スギ	板目			II b	15	B	4	273	37	11	
136	4	A-1	人形	スギ	板目			II b	12	A	24	357	33	14	
137	12	A-2	人形	マツ属	板目			II b	11	B	11	76	10	5	
138	7	A-2	人形	スギ	板目			III	15	B	12	75	7	2	
139	6	A-2	人形	スギ	板目			II b	14	A	25	129	19	6	
140	5	A-2	人形	スギ	板目			II a	14	A	8	128	18	7	
141	10	A-2	人形	スギ	板目			II b	13	B	7	226	27	17	
142	104	A-2	人形	スギ	板目			II b	3	B	6	189	15	7	
143	9	A-2	人形	スギ	板目			II c	4	A	20	138	14	9	
144	49	A-2	板状	スギ	板目			II c	1	B	22	190	21	10	先端：炭化
145	47	A-3	部材	コナラ属	板目			II b	2	B	25	149	39	25	
146	52	A-4	部材	スギ	板目			II b	17	B	3	144	26	17	
147	53	A-4	部材	スギ	板目			II b	16	B	6	115	26	16	円孔：直径3mm 2ヶ
148	13	A-5	刀形	スギ	板目			II c	3	A	5	128	18	4	
149	14	A-5	刀形	スギ	板目			II b	10	A	24	137	25	4	
150	15	A-6	荷札状	ヒノキ	板目			II b	8	B	6	132	27	4	
151	55	A-6	板状	スギ	板目			II b	13	B	5	136	29	13	先端：尖る
152	67	A-7	板状	スギ	削出棒	SX	88		15	B	7	157	18	9	地面に突き刺さって検出
153	66	A-7	板状	スギ	削出棒			II b	14	B	8	166	26	15	
154	61	A-7	板状	スギ	削出棒			III	11	B	7	121	21	10	地面に突き刺さって検出
155	38	A-6	板状	スギ	板目			II c	2	B	8	402	29	11	
156	42	A-8	板状	スギ	板目			II b	13	B	5	301	52	11	円孔：直径8mm
157	36	A-8	板状	スギ	板目			II b	4	A	25	240	37	8	円孔：推定直径12mm
158	57	A-8	板状	ブナ属	板目			II b	11	A	3	128	37	13	円孔：直径10mm 裏面：炭化
159	37	A-9	板状	スギ	板目			II c	2	B	9	266	46	6	
160	39	A-9	板状	スギ	板目			II c	2	B	8	275	112	10	擦痕多し、下方炭化
161	40	A-9	板状	スギ	板目			II c	2	A	15	492	68	16	
162	54	A-8	板状	スギ	板目			II b	2	A	20	81	24	9	円孔：直径3mm
163	41	A-8	板状	サワラ	板目			II b	17	B	7	108	27	6	黒漆か 側面に木釘
164	43	A-10	板状	スギ	板目			II b	14	B	1~3	172	50	11	円孔：直径6mm 表面炭化
165	56	A-8	板状	スギ	板目			II b	11	B	9	100	29	8	円孔：直径3mm 側面に木釘
166	35	A-8	板状	スギ	板目			III	17	B	11	161	51	13	円孔：直径6mm
167	50	A-10	板状	スギ	板目			II b	17	B	21	59	20	4	木釘
168	48	A-10	板状	スギ	板目			II c	2	A	20	76	29	6	円孔：直径2mm、直径5mm
169	44	A-10	板状	スギ	板目			III	12	A	5	54	29	6	上面に平行刻み目
170	89	B-1	箸状	スギ	削出棒			II b	18	B	5	156	9	6	
171	65	B-1	箸状	スギ	削出棒			II b	13	B	22	152	7	7	
172	79	B-1	箸状	スギ	削出棒			II b	13	B	14	156	9	8	
173	71	B-1	箸状	スギ	削出棒			II c	2	A	25	172	7	5	
174	93	B-1	箸状	スギ	削出棒			II c	3	B	4	176	8	4	
175	87	B-1	箸状	スギ	削出棒			III	17	A	9	178	10	6	
176	92	B-1	箸状	スギ	削出棒			II c	3	B	4	179	9	6	
177	86	B-1	箸状	スギ	削出棒			II b	16	A	9	191	7	4	
178	97	B-1	箸状	スギ	削出棒			II c	4	B	16	184	7	5	
179	99	B-1	箸状	スギ	削出棒			II b	13	C	16	184	6	7	
180	94	B-1	箸状	スギ	削出棒			II c	2	A	24	184	6	5	
181	100	B-1	箸状	スギ	削出棒			III	14	B	12	189	8	10	
182	78	B-1	箸状	スギ	削出棒			II b	13	B	11	200	7	5	
183	95	B-1	箸状	スギ	削出棒			II b	2	B	11	195	8	5	
184	74	B-1	箸状	スギ	削出棒			II b	3	B	1	196	6	5	
185	98	B-1	箸状	ヒノキ	削出棒			II b	17	B	5	198	7	5	
186	96	B-1	箸状	スギ	削出棒			II c	1	B	17	206	7	3	
187	76	B-1	箸状	スギ	削出棒			II b	6	B	20	213	8	5	
188	75	B-1	箸状	スギ	削出棒			II c	3	B	1	209	7	5	
189	77	B-1	箸状	スギ	削出棒			II b	13	A	13	206	6	7	
190	84	B-1	箸状	スギ	削出棒			III	14	B	12	218	8	4	
191	90	B-1	箸状	スギ	削出棒			II a	16	B	9	230	8	7	
192	91	B-1	箸状	スギ	削出棒			II b	2	B	20	243	8	5	
193	88	B-1	箸状	スギ	削出棒			III	17	B	16	236	7	6	
194	64	B-1	箸状	スギ	削出棒			II b	13	B	12	248	10	9	
195	72	B-1	箸状	スギ	削出棒			II b	2	B	23	251	8	4	
196	81	B-1	箸状	スギ	削出棒	SX	84	II b	14	B	9	163	8	5	W 1
197	83	B-1	箸状	スギ	削出棒	SX	84	II b	14	B	9	113	5	6	W 3
198	82	B-1	箸状	スギ	削出棒	SX	84	II b	14	B	9	58	6	4	W 2
199	80	B-1	箸状	スギ	削出棒	SX	64	II b	14	B	8	156	6	5	W 2
200	85	B-1	箸状	スギ	削出棒	SX	1		16	A	8	199	8	4	

姫御前遺跡 木製品観察表(2)(古墳時代・中世)

報告 番号	分析 番号	分類	器種・ 形状	樹種	木取り	出土位置			長さ・口径 mm	幅・底径 mm	厚さ・器高 mm	備考
						遺構番号	層位	グリッド				
201	63	B-2	棒状	スギ	削出棒	SX	5	II b 13 A 23	206	13	12	地面に突き刺さって検出
202	73	B-2	棒状	クリ	削出棒			II c 2 C 16	186	14	11	先端尖る
203	68	B-2	棒状	スギ	削出棒			II c 2 B 10	138	9	9	先端尖る
204	60	B-3	棒状	ヒノキ科	芯持ち			II b 4 A 25	103	10	9	先端尖る
205	46	B-3	棒状	スギ	芯外し			II b 6 B 10	240	22	16	先端尖る
206	70	B-3	棒状	スギ	削出棒			II b 11 A 13	276	15	7	先端尖る
207	62	B-3	棒状	スギ	削出棒	SX	4	13 A 23	317	22	24	先端尖る
208	21	B-4	布巻具	スギ	削出棒			II b 13 B 10	330	27	24	
209	22	B-4	布巻具	スギ	削出棒			II b 12 A 9	268	29	18	
210	69	B-5	棒状	スギ	削出棒			II b 11 B 3	171	18	19	
211	20	C	下駄	スギ	榎目			II c 2 B 1	223	117	18	割り下駄
212	105	C	下駄	スギ	榎目			II b 3 A 15	264	115	16	割り下駄
213	19	C	下駄	スギ	板目			II c 2 A 25	288	82	24	連歯下駄
214	33	C	鋤先	スギ	榎目			II b 15 A 5	109	59	14	裏面・先端：炭化
215	101	C	木筒	スギ	板目			II b 4 A 5	199	17	5	「三月日の口之口」[] □ □
216	103	C	扇骨	スギ	板目			II b 4 A 8	161	15	3	
217	34	C	漆へら	ヒノキ	板目			II b 14 B 21	163	28	4	先端：赤漆 胴：黒漆
218	45	C	へら状	スギ	板目			III 14 B 8	134	18	4	
219	102	C	漆器皿	ブナ属	横木取り			II b 3 A 10	—	80	—	(内外) 黒漆
220	17	C	曲物底板	サワラ	榎目			II b 13 B 17	149	37	7	黒漆塗布 側面に木釘か 直径21.0cm
221	18	C	曲物底板	スギ	榎目			II b 13 A 14	143	29	9	直径24.5cm
222	51	C	曲物底板	サワラ	斜め			II b 16 A 14	78	65	8	黒漆 円孔：直径5mm 直径8mm
293	24	—	柱根	スギ	芯外し	P	69	II b 14 A 24	492	112	97	断面方形
294	23	—	柱根	スギ	芯外し	P	6	II b 15 A 4	471	137	96	断面方形
295	28	—	板杭	スギ	榎目			III 9 B 16	467	131	24	W1 AD380~420年
296	30	—	板杭	スギ	榎目			III 9 B 16	390	80	29	W5
297	29	—	板杭	スギ	榎目			III 9 B 16	391	93	21	W2
298	31	—	板杭	スギ	榎目			III 9 B 17	553	230	16	W9 AD260~290年 or AD320~400年
299	32	—	板杭	スギ	芯外し			III 10 B 1	312	29	31	W10 AD130~240年
300	59	—	建築材	スギ	榎目			V 18 C 21	937	71	15	
301	58	—	建築材	スギ	榎目			V 18 C 21	1061	255	18	BC340~320年or BC210~160年

姫御前遺跡 鉄製品・製鉄関連資料・石製品観察表(中世～近世)

報告 番号	種別	分類	メタル度/石材	出土位置			長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ(空)	備考
				層位	グリッド						
223	金属製品	引手金具	—	III	13 B 18	(50)	52	10	4.2	推定外径51mm、内径34mm	
224	金属製品	鉄釘	—	II b	15 A 4	115	5	4	9.4		
225	金属製品	鉄釘	—	II b	3 B 20	40	10	4	7.2		
226	金属製品	鉄釘	—	II b	15 B 7	56	3	3	2.0		
227	製鉄関連	羽口	なし	II b	11 B 11	38	55	32	35.1	外径77mm、内径43mm、鉄滓付着	
228	製鉄関連	羽口	—	II b	17 A 3	41	46	23	39.8	外径72mm、内径30mm	
229	製鉄関連	鉄滓	なし	II a	11 B 21	95	69	32	196.5		
230	製鉄関連	鉄滓	なし	II b	15 B 16	75	51	25	105.1		
231	製鉄関連	鉄滓	なし	II b	17 A 5	47	33	21	34.5		
232	石製品	砥石(仕上砥)	凝灰岩	II b	13 B 11	67	28	16	46.2		

姫御前遺跡 銭貨観察表(中世)

報告 番号	銭貨名	書体	王朝	初鑄年 (西暦)	出土位置			外径縦 mm	外径横 mm	内径縦 mm	内径横 mm	銭厚 mm	重さ(空)	備考
					層位	グリッド								
233	祥符元寶	真書	北宋	1008	II b	17 B 2	24.4	24.2	6.1	6.2	1.0	2.7		
234	天禧通寶	真書	北宋	1017	II b	15 A 19	25.1	25.2	6.3	6.2	1.0	3.0		
235	嘉祐通寶	真書	北宋	1056	II b	13 C 16	25.0	25.0	6.9	7.0	1.1	3.3		
236	熙寧元寶	真書	北宋	1068	II b	10 A 5	24.6	24.3	7.0	7.0	1.1	2.6		
237	熙寧元寶	真書	北宋	1068	II b	15 A 15	23.3	23.6	5.5	5.5	1.4	2.9		
238	元豐通寶	篆書	北宋	1078	II b	11 A 13	23.8	23.9	6.5	6.8	1.2	3.1		
239	元祐通寶	行書	北宋	1086	II b	11 A 24	24.0	24.2	7.2	7.2	1.0	2.6		
240	紹聖通寶	篆書	北宋	1094	II c	4 A 25	23.9	24.2	6.0	6.5	1.3	3.1	背に「月」か	
241	嘉泰通寶	真書	南宋	1201	II b	13 A 4	24.4	24.4	6.5	6.6	1.1	3.0	背に「二」or「三」か	
242	洪武通寶	真書	明	1368	—	12 A 10	23.7	23.1	5.7	5.8	1.3	2.9	コ頭単点通か	
243	永樂通寶	真書	明	1408	II b	15 B 21	24.0	24.0	5.3	5.3	1.0	2.9		
244	永樂通寶	真書	明	1408	II a	10 B 8	24.9	24.8	5.5	5.5	1.2	3.0		
245	永樂通寶	真書	明	1408	II a	11 A 12	25.0	25.1	5.7	5.8	1.2	3.4		

別 表

姫御前遺跡 土師器観察表 (古墳時代)

胎土：石=石英、長=長石、雲=雲母、チャ=チャート、礫=砂礫

報告 番号	種別	造構		グリッド		層位	口径 mm	器高 mm	底径 mm	色 調		胎土 (上段:色調 下段:混入物)	調 整		炭化物	備考
		種別	番号	大	小					外面	内面		外面	内面		
252	甕	SX	13	17	B	10	III	166	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙 石・礫	(口・頸) ナデ (体) ハケ		(外) 口~頸	
253	甕	SX	13	17	B	10	III	156	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙 石・礫			—	取り上げNo P6
254	甕	SK	100	14	B	3	1	132	—	—	にぶい黄橙	暗灰黄 橙石・礫	(口・頸) ナデ (体) ハケ	(口・頸) ナデ (体) ハケ	(外) 口~体	
255	甕	SD	2	17	B	14		184	—	—	灰黄褐	灰黄褐 石・長・礫	(口・頸) ナデ (体) ハケ	(口・頸) ナデ (体) ハケ	(外) 口~体 (内) 体	
256	有孔鉢	SD	2	17	B	14		—	—	50	黄灰	橙 石・礫	ハケ	ヘラナデ	—	孔径1.0cm
257	甕			14	B	8	III	138	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙 長・礫	(口・頸) ナデ (体) ハケ	(口・頸) ナデ (体) ハケ	(外) 口~体	
258	甕			16	A	20	III	176	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙 長・礫	(体) ハケ	(体) ハケ	—	
259	甕			16	A	10	III	172	—	—	にぶい黄褐	にぶい黄橙 石・礫	(口・頸) ハケ→ ナデ (体) ハケ	(口・頸) ハケ→ ナデ	—	
260	甕			16	A	24	III	156	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙 石・長・雲・礫	(口・頸) ナデ (体) ハケ	(口・頸) ナデ (体) ハケ	—	
261	甕			17	B	15	III	154	—	—	橙	にぶい黄橙 石・長・礫	(口・頸) ナデ (体) ハケ	(口・頸) ナデ (体) ハケ	(外) 口~体	
262	甕			12	B	12	III	146	—	—	灰黄褐	にぶい黄 橙石・礫	(口・頸) ナデ (体) ハケ	(口・頸) ナデ	—	
263	甕			17	B	15	III	168	—	—	橙	橙 石・礫	(口・頸) ナデ	(口・頸) ナデ	—	
264	甕			12	A	14	III	160	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄 橙石・長・礫	(口・頸) ナデ (体) ハケ	(口・頸) ナデ	(外) 口~体	
265	甕			17	C	16	III	208	—	—	浅黄	灰黄 長・雲・チャ・礫	(口・頸) ナデ (体) ハケ	(口・頸) ハケ→ ナデ (体) ハケ	(外) 口~体	
266	甕			17	B	5	III	226	—	—	黒	にぶい褐 長・雲・礫	ハケ	ハケ	(外) 口~体	
267	甕			17	B	2	III	208	—	—	にぶい褐	にぶい褐 長・礫	(口・頸) ナデ (体) ハケ	(口・頸) ナデ (体) ハケ	—	
268	甕			17	B	25	III	—	—	56	灰黄褐	黒 にぶい黄橙 石・長・礫	(体) ハケ (底) ヘラナデ	ハケ	—	
269	杯			14	A	25	III	146	—	—	にぶい黄橙	黒 黄灰(精良) 石	(口・頸) ナデ (体) ハケ+ナデ	ミガキ (黒色処理)	—	
270	杯			11	A	8	III	140	—	—	灰黄褐	にぶい黄 橙石・礫			—	器表風化につ き調整不明
271	鉢			10	B	8	III	100	60	16	にぶい黄橙	にぶい黄 橙石・長・雲・礫	(口) ナデ (体上半) ハケ (体下半) ヘラナ デ	(口) ナデ (体) ヘラナデ	—	
272	小型壺			10	B	9	III	94	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄 褐石・礫	(口) ナデ (頸) ミガキ	(口) ナデ	—	
273	壺			16	A	20	III	—	—	—	にぶい黄橙	褐灰 石・礫	ミガキ?	ヘラナデ	—	
274	甕			10	B	17	III	—	—	64	明黄褐	橙 石・長・雲		ハケ	—	
275	甕			13	B	21	III	—	—	64	にぶい黄橙	にぶい黄 橙石・長・礫		ハケ	—	
276	甕?			13	B	22	III	—	—	44	灰黄褐	灰黄 石・礫	(体) ハケ (底) ハケ	ハケ	(内) 体	
277	壺			16	B	25	III	230	—	—	赤	赤 にぶい黄橙 石・長・礫	ハケ→赤彩	ハケ→赤彩	—	
278	壺			14	A	9	III	268	—	—	灰黄褐	黒褐 石・礫	ナデ	ハケ→ミガキ	—	
279	壺			14	B	1~3	III	222	—	—	浅黄橙	浅黄橙 石・長・礫	ハケ→ナデ	ナデ	—	
280	壺			17	A	23	III	—	—	—	にぶい黄橙	にぶい赤 褐石・礫	ナデ	ハケ→ナデ→ 赤彩	—	
281	壺			10	B	23	III	256	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄 橙石・長・礫	(体) ハケ		—	
282	壺			10	B	13	III	137	—	—	橙	橙 褐灰~にぶい黄 橙石・礫			—	軟質につき調 整不明
283	壺			14	B	2	III	—	—	—	にぶい黄	暗灰黄 石・雲・礫	ナデ	ハケ+ヘラナデ	—	
284	高杯			11	B	14	III	—	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄 橙石・長・礫	ミガキ	指押さえ	—	調整不明
285	高杯			13	B	17	III	—	—	—	明赤褐	橙 石・礫			—	
286	高杯			15	B	14	III	—	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄 橙石・長・礫	ミガキ	指押さえ	—	
287	高杯			13	B	23	III	—	—	—	にぶい黄橙	灰黄褐 石・長・礫	ミガキ	ケズリ	—	
288	器台			17	C	16	III	—	—	—	にぶい黄橙	浅黄 石・礫			—	器表風化につ き調整不明
289	高杯			11	A	13	III	228	—	—	灰黄褐	にぶい黄 橙石・長・礫	ミガキ	ミガキ	(外) スス	
290	甕			17	B	25	IV	156	—	—	黒	灰黄褐 石・礫	(口・頸) ナデ (体) ハケ	(口・頸) ナデ (体) ヘラナデ	(外) 口~体 (内) 口	
291	甕			17	B	20	IV	176	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄 橙石・長・礫	(口) ナデ (頸) ハケ→ナデ (体) ハケ	(口) ナデ (頸) ハケ→ナデ (体) ハケ	—	頸部内面に黒 斑
292	壺			17	B	10	IV	138	—	—	にぶい黄橙	灰黄褐 石・長・礫	(口) ナデ (頸) ハケ	(口) ナデ (頸) ハケ	—	

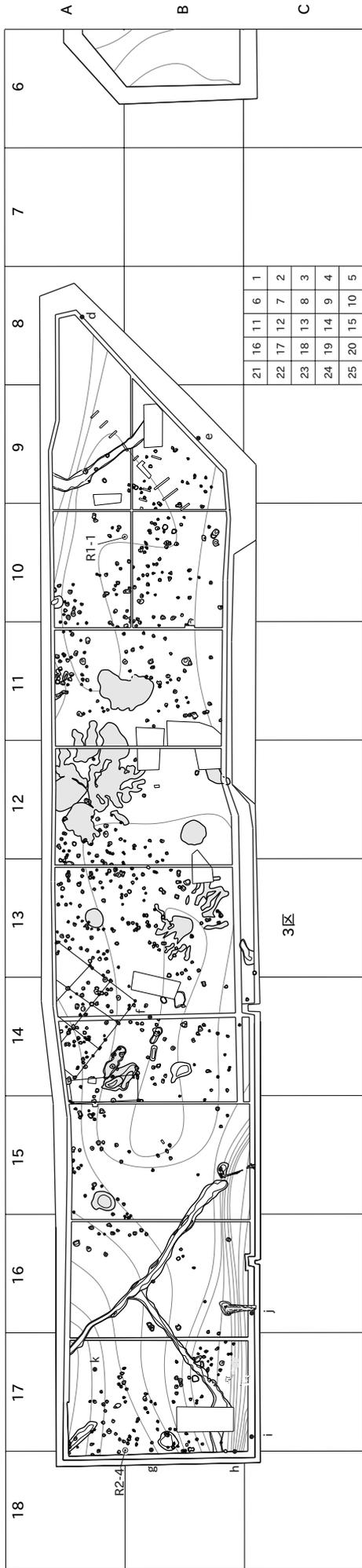
姫御前遺跡 石製品・石器観察表（古墳時代・縄文時代）

報告 番号	種別	石材	岩石名		出土位置		属性（単位：mm/g）					備考	
			分析 番号	分析結果	層 位	グリッド	長さ	幅	厚さ	重さ	孔径		
302	勾玉	滑石	6	滑石	Ⅲ	14 A	23	17	10	6	1.12	2	表面の風化が顕著
303	勾玉	滑石	9	滑石	Ⅲ	14 A	3	18	11	5	(1.31)	1.5	
304	勾玉	滑石	5	緑泥石岩	Ⅲ	17 C	6	14	9	3	0.65	1	Ⅲ層最下部出土、Kを微量含む
305	勾玉	滑石	1	緑泥石岩	Ⅲ	17 A	9	11	7	5	0.52	1	Kを微量含む
306	勾玉	未製品 蛇紋岩	11	曹長石+透閃石	Ⅲ	11 B	8	14	9	5	0.97	1	白色部分は曹長石、緑色の部分は透閃石
307	勾玉	未製品 滑石	10	緑泥石岩	Ⅲ	14 A	10	(15)	(9)	4	(0.71)		
308	勾玉	未製品 滑石	12	緑泥石岩	Ⅲ	13 A	4	23	14	6	3.39		
309	勾玉	未製品 滑石	13	透閃石岩	Ⅲ	13 B	14	22	13	12	5.78		曹長石と透閃石の混合物
310	管玉	未製品 滑石	2	緑泥石岩	Ⅲ	14 A	8	14	4	4	0.53	2	
311	管玉	未製品 滑石	14	緑泥石岩	Ⅲ	14 B	11	17	11	11	3.64		Feがやや多い
312	管玉	未製品 滑石	16	滑石	Ⅲ	17 A	25	12	10	9	(1.41)		
313	管玉	未製品 滑石	15	滑石	Ⅲ	17 B	10	8	7	7	0.70		Alが少ない
314	平玉	未製品 滑石		滑石	Ⅲ	14 A	9	6	6	3	0.16	2	側面の稜線が滑らか、平玉に近い
315	白玉	未製品 滑石	8	緑泥石岩	Ⅲ	14 A	3	7	7	3	0.35	1.5	
316	算盤玉	未製品 滑石	7	緑泥石岩	Ⅲ	15 A	4	6.5	6.5	4	0.22	1	
317	白玉	未製品 滑石		滑石	Ⅲ	14 A	8	(6.5)	(4.5)	3	(0.15)	(1.5)	
318	白玉	未製品 滑石		滑石	Ⅲ	14 A	9	8	(5)	2	(0.15)	(1.5)	
319	白玉	未製品 滑石	3	緑泥石岩	Ⅲ	14 B	7	7	(6)	3	(0.22)	(2)	
320	白玉	未製品 滑石		滑石	Ⅲ	14 A	8	8	(4)	3	(0.14)	(2)	
321	白玉	未製品 滑石		滑石	Ⅲ	14 A	8	8	(5)	2	(0.13)	(2)	
322	白玉	未製品 滑石		滑石	Ⅲ	14 A	9	7	(4)	2	(0.11)	(1)	
323	白玉	未製品 滑石		滑石	Ⅲ	14 A	8	(8)	(4)	(4)	(0.14)	(1)	
324	白玉	未製品 滑石	4	滑石	Ⅲ	10 B	16	8	8	5	0.4		角玉か
325	白玉	未製品 滑石		滑石	Ⅲ	14 A	8	11	9	3	0.62		
326	白玉	未製品 滑石		滑石	Ⅲ	14 A	9	10	8	2	0.29		
327	玉類	素材 滑石		滑石	Ⅱb	14 B	18	17	15	6	1.99		扁平素材
328	玉類	素材 滑石		滑石	Ⅲ	13 A	3	24	16	9	3.46		
329	紡錘車	滑石	21	滑石	Ⅲ	14 A	16	51	51	20	(55.29)	6.5	白色鉱物が主体、新規破損あり
330	剥片	滑石	18	緑泥石岩	Ⅲ	15 A	4	35	32	18	24.43		
331	剥片	滑石	19	緑泥石岩	Ⅲ	13 B	1	44	21	12	13.51		Alが少ない
332	剥片	滑石	20	緑泥石岩	Ⅲ	14 B	3	27	25	9	5.39		
333	剥片	緑色凝灰岩	17	緑色凝灰岩	Ⅲ	10 B	19	17	10	7	0.89		
334	石核	滑石		(滑石)	Ⅲ	13 A	15	37	51	101	274.04		ズリか
335	石核	滑石		(滑石)	Ⅲ	10 B	25	35	77	57	190.84		ズリか
336	石核	滑石		(緑泥石岩)	Ⅱb	14 A	13	72	75	38	201.07		ズリか
337	石核	凝灰岩			Ⅲ	9 B	6	32	43	58	122.06		節理面に沿って割れた角礫素材
338	原石	翡翠		(ひすい輝石岩)	Ⅲ	16 B	16	59	49	21	86.85		円礫（漂石）
339	原石	翡翠		(ひすい輝石岩)	Ⅲ	11 B	17	18	12	10	2.51		円礫（漂石）
340	原石	翡翠		(ひすい輝石岩)	Ⅲ	11 A	5	100	75	46	525.19		亜角礫
341	原石	翡翠	22	ひすい輝石岩	Ⅲ	15 B	3	68	31	19	54.36		青翡翠（小滝川流域野口産に類似）を含む、亜角礫一部剥離痕あり、石核か
342	原石	翡翠		(ひすい輝石岩)	Ⅲ	14 B	4	41	36	21	41.88		分割礫もしくは石核か、亜角礫
343	剥片	翡翠		(ひすい輝石岩)	Ⅲ	14 B	16	100	37	20	67.55		青翡翠（小滝川流域野口産に類似）を含む、Ⅲ層最下部から出土
344	剥片	翡翠		(ひすい輝石岩)	Ⅲ	17 B	1	70	32	18	30.20		青翡翠（小滝川流域野口産に類似）を含む
345	剥片	翡翠		(ひすい輝石岩)	Ⅲ	16 B	17	60	32	21	44.85		亜角礫
346	敲石	翡翠		(ひすい輝石岩)	Ⅲ	15 B	24	91	61	35	306.76		粒子が粗い
347	敲石	流紋岩		(流紋岩)	Ⅲ	16 B	16	156	93	72	1516.13		
348	スタンプ形石器	閃緑岩		(花崗閃緑岩)	Ⅱb	15 A	15	82	53	46	295.20		
349	砥石	凝灰岩			Ⅲ	10 A	8	133	91	51	504.00		対象物：金属・玉スス付着→被熱か
350	砥石	凝灰岩			Ⅱb	13 B	3	(80)	(48)	(27)	(100.72)		対象物：金属、349と同一個体か
351	砥石	凝灰岩			Ⅱb	11 A	23	(82)	39	23	(86.12)		対象物：金属・玉
352	横刃形石器	砂岩(黒色細粒)		(砂岩)	Ⅲ	16 B	6	50	56	10	29.85		ほぼ全面に使用痕あり
353	横刃形石器	砂岩(黒色細粒)		(ホルンフェルス)	Ⅲ	17 B	20	81	111	22	241.34		研磨調整あり、刃部に使用痕あり、石廬丁か
354	横刃形石器	流紋岩		(ヒン岩)	Ⅲ	11 B	11	100	136	31	515.6		刃部に使用痕あり
355	横刃形石器	砂岩(黒色細粒)			Ⅲ	13 A	10	80	121	19	181.34		
356	横刃形石器	砂岩(黒色細粒)			Ⅲ	18 B	4	111	157	35	580.42		
357	横刃形石器	砂岩(黒色細粒)			Ⅲ	16 B	5	130	171	22	489.12		やや粗粒で風化が著しい
358	横刃形石器	砂岩(黒色細粒)			Ⅲ	13 B	9	171	129	48	1176.44		刃部は両面調整
359	打製石斧	砂岩(黒色細粒)			Ⅲ	13 B	17	135	65	21	188.68		石鏃
360	石鏃	珪質頁岩		(珪質頁岩)		11 A	20	(40)	13	6	(2.73)		SX73-最下層出土
361	石鏃	砂岩(粗粒)			Ⅲ	11 B	9	95	75	23	187.87		
362	土製品				Ⅲ	11 B	3	44	36	19	16.45		粘土塊か

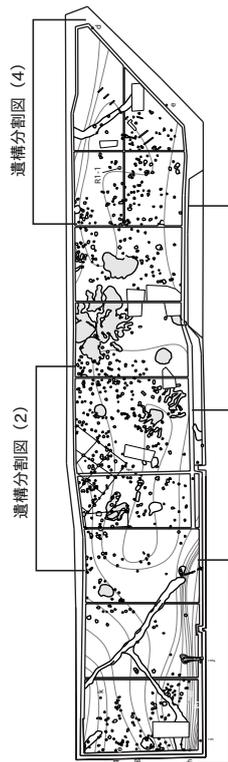
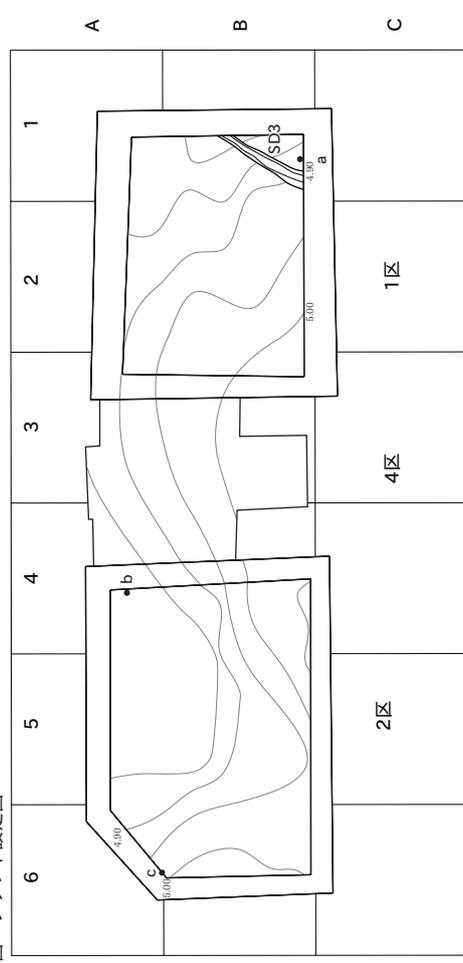
図 版

凡例

- 1 遺構分割図において、掘立柱建物を構成するピットと風倒木痕にスクリーントーンを貼付した。
- 2 遺構個別図（セクション図・エレベーション図）において、掘立柱建物を構成するピットに●記号を付した。
- 3 土器は、須恵器を断面塗りつぶし、土器・土師器・陶磁器を白抜きとした。
- 4 石製品、木製品に付したスクリーントーンの凡例は、実測図とともに個別に示した。
- 5 木製品の木目は、木取りを表示したものであり、実際の年輪幅とは異なる。
- 6 遺物写真図版の縮尺は、図面図版と概ね同じである。



遺構全体図・グリッド設定図

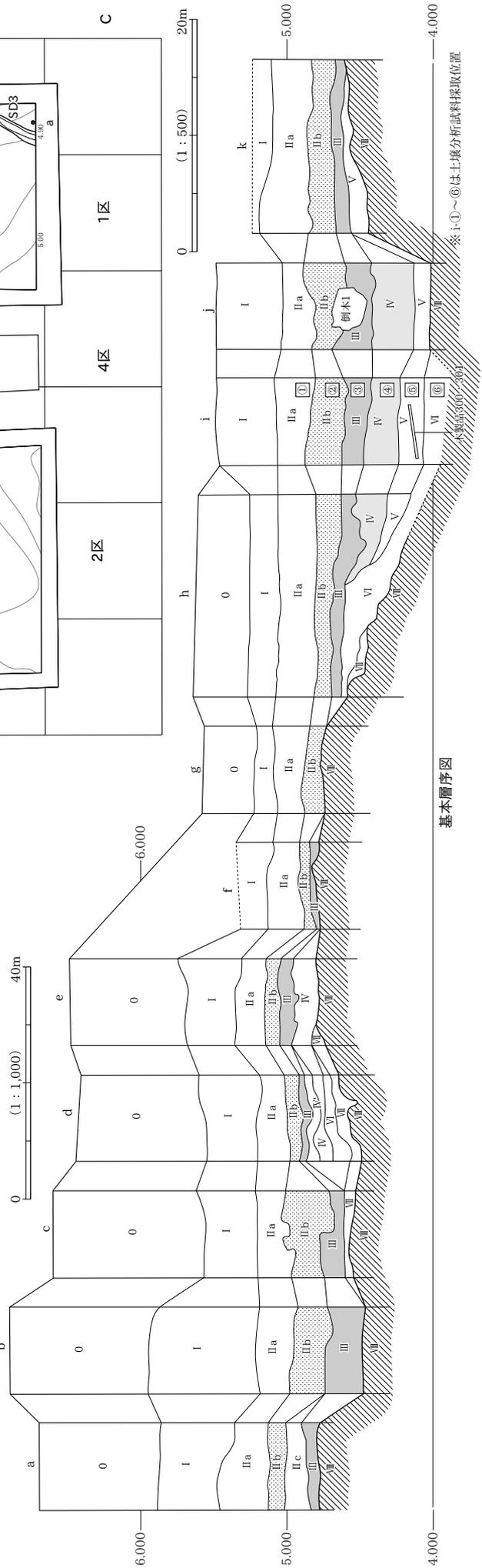


遺構分劃図 (1)

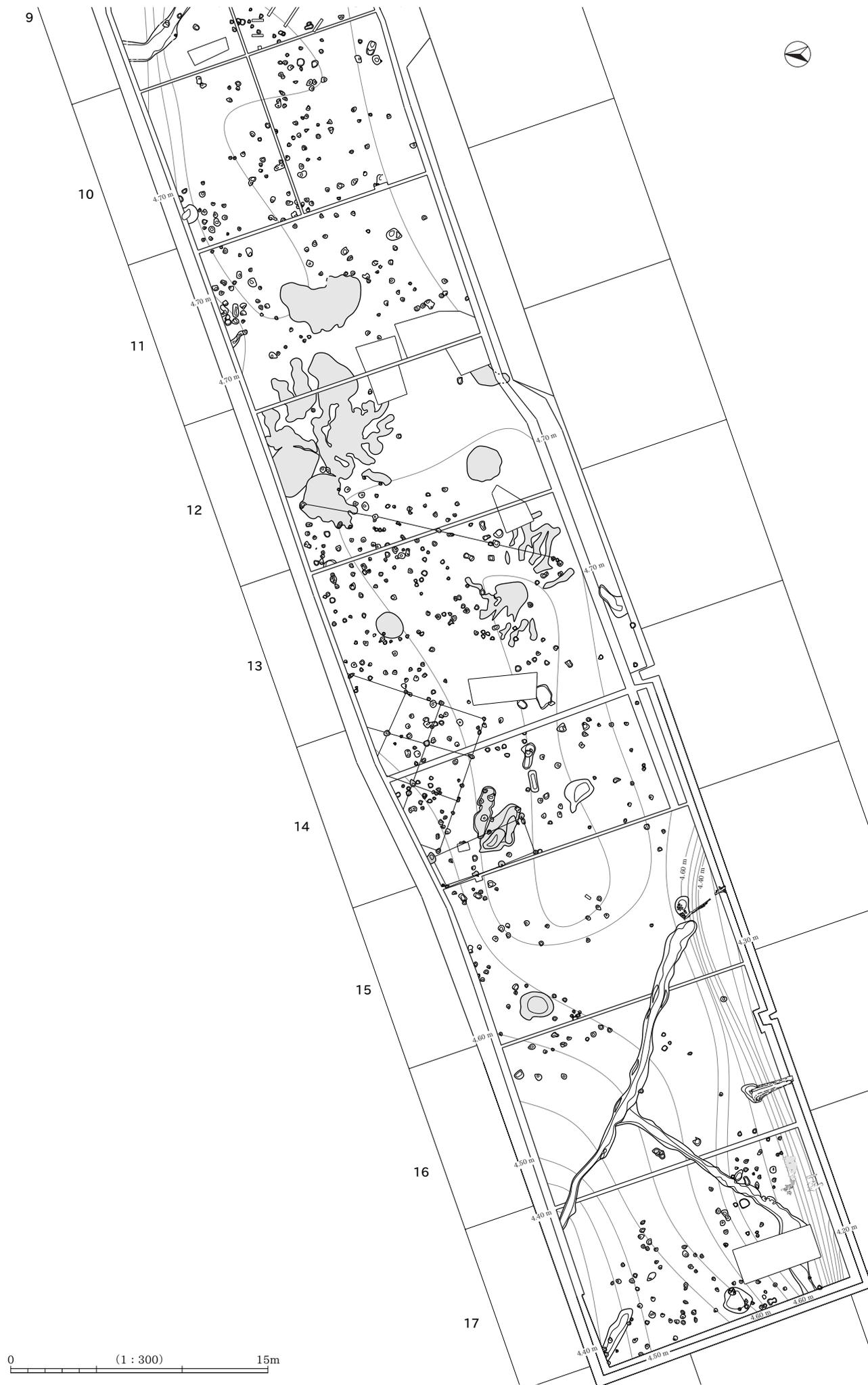
遺構分劃図 (2)

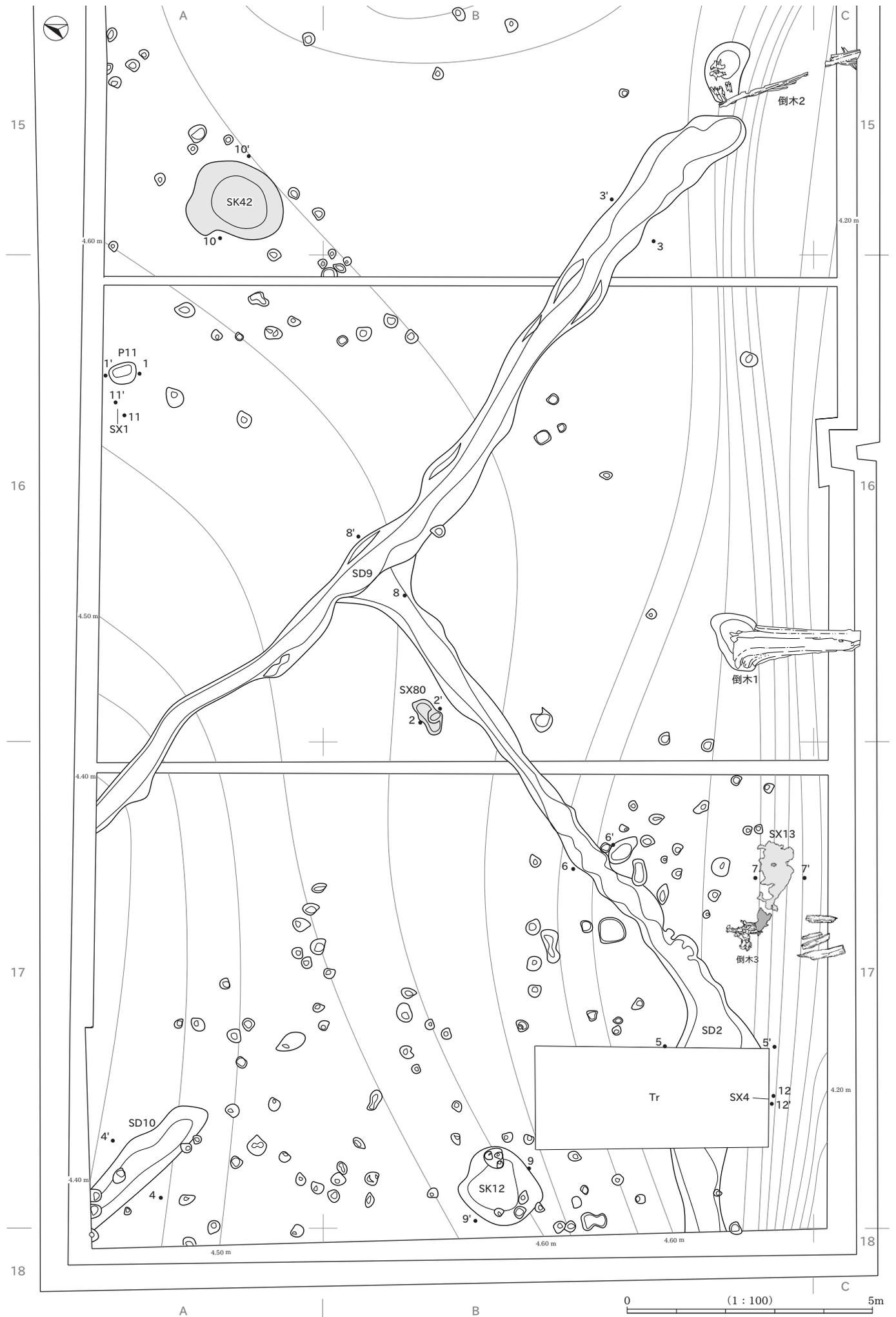
遺構分劃図 (3)

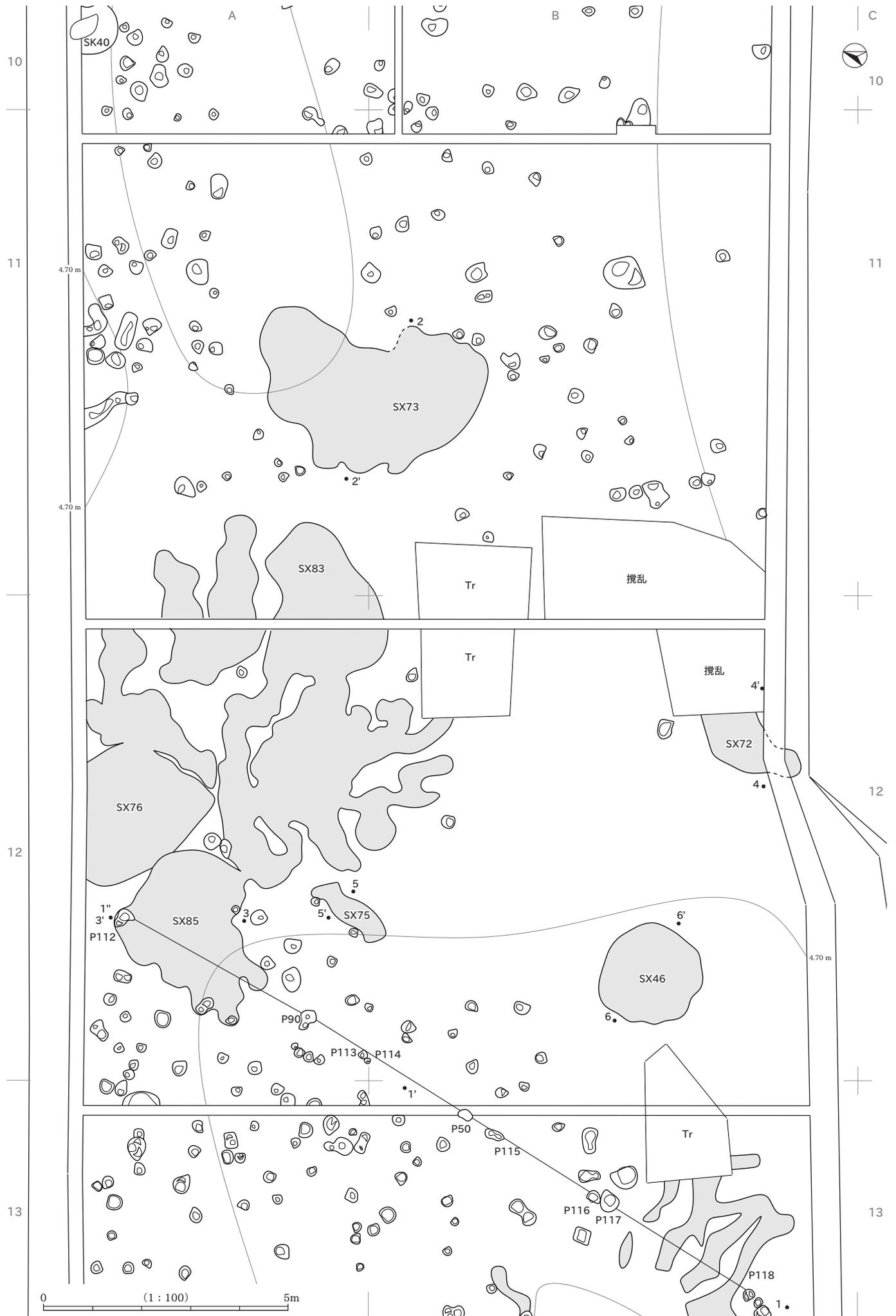
遺構分劃図 (4)

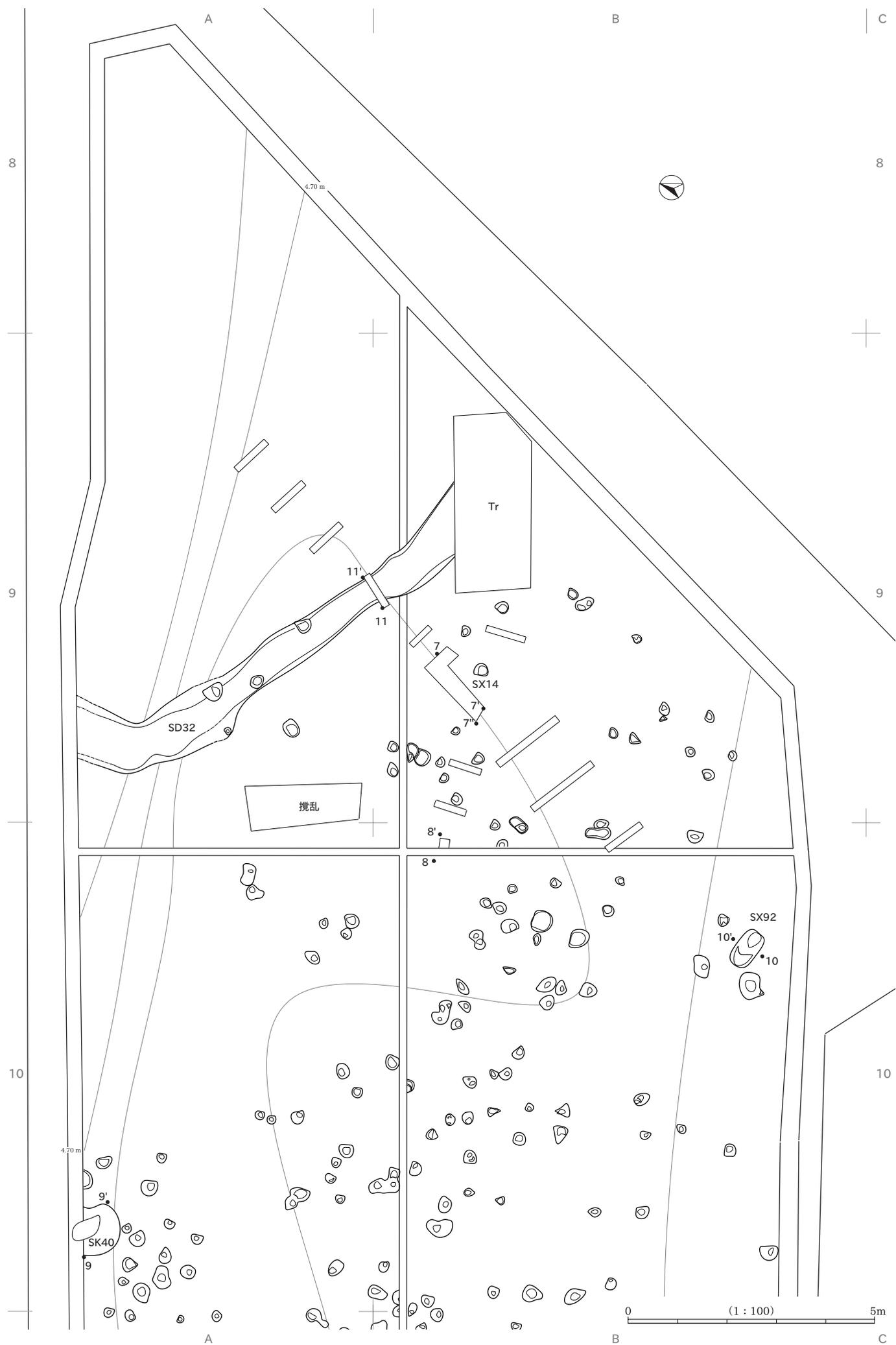


基本層序図

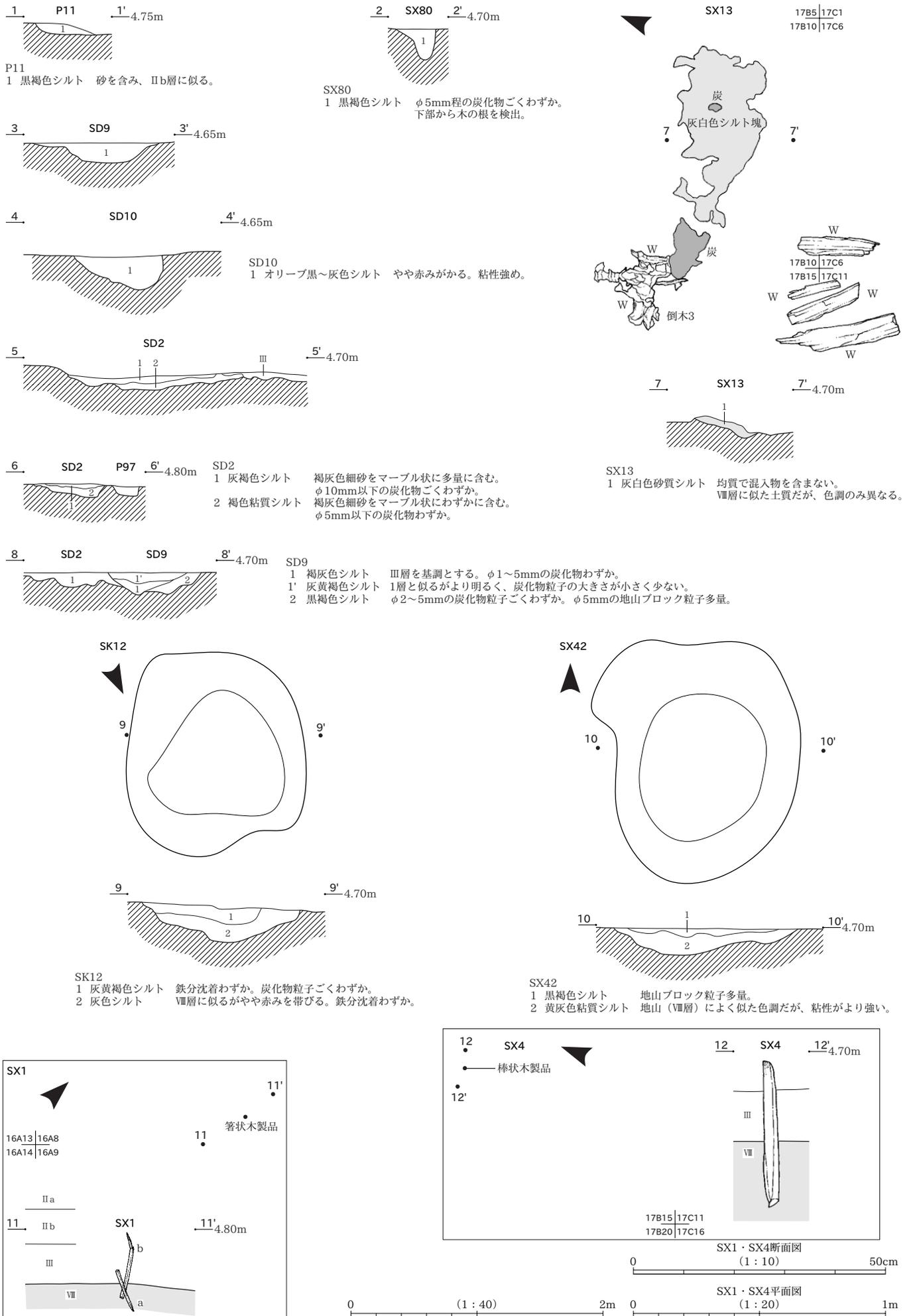




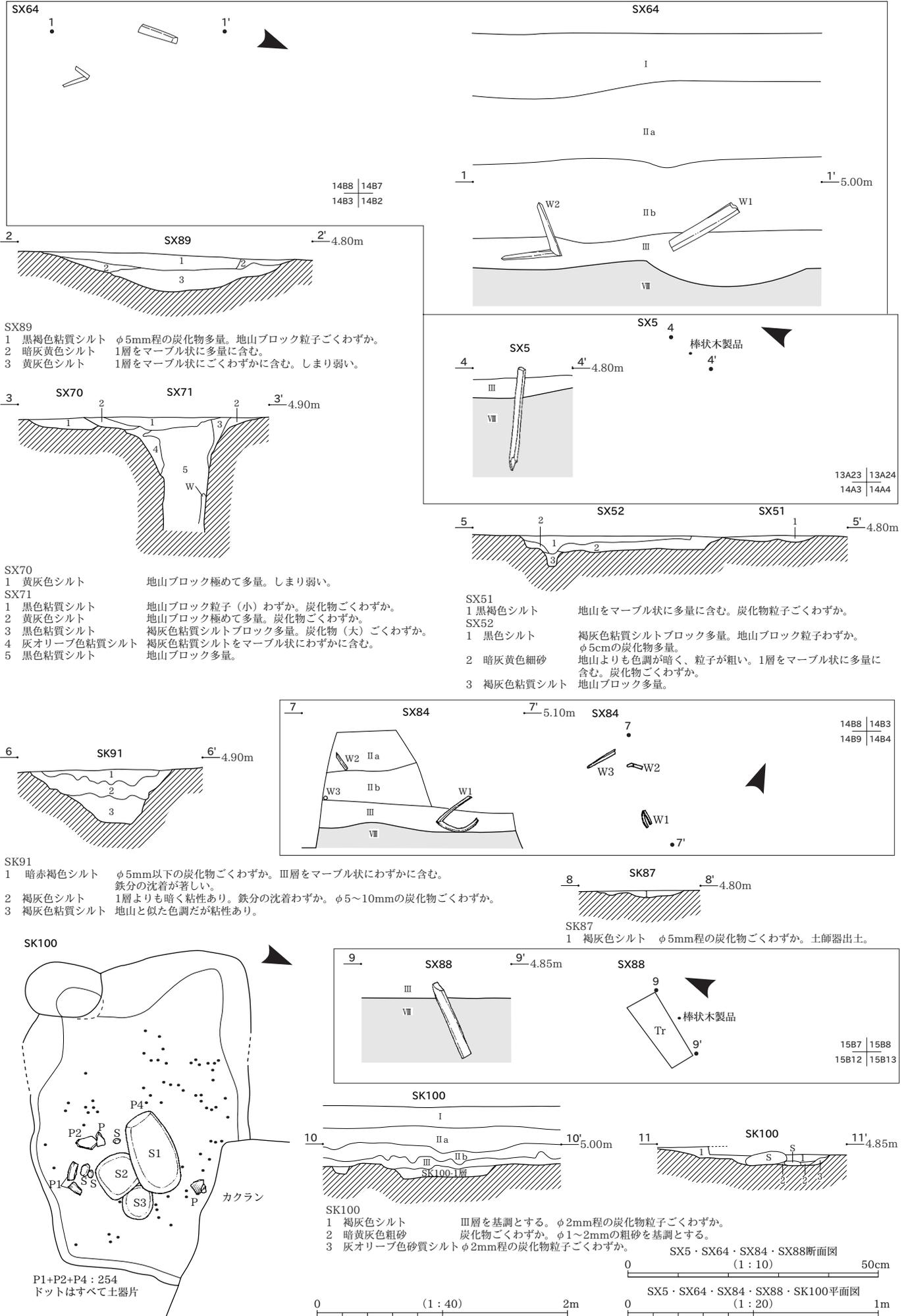




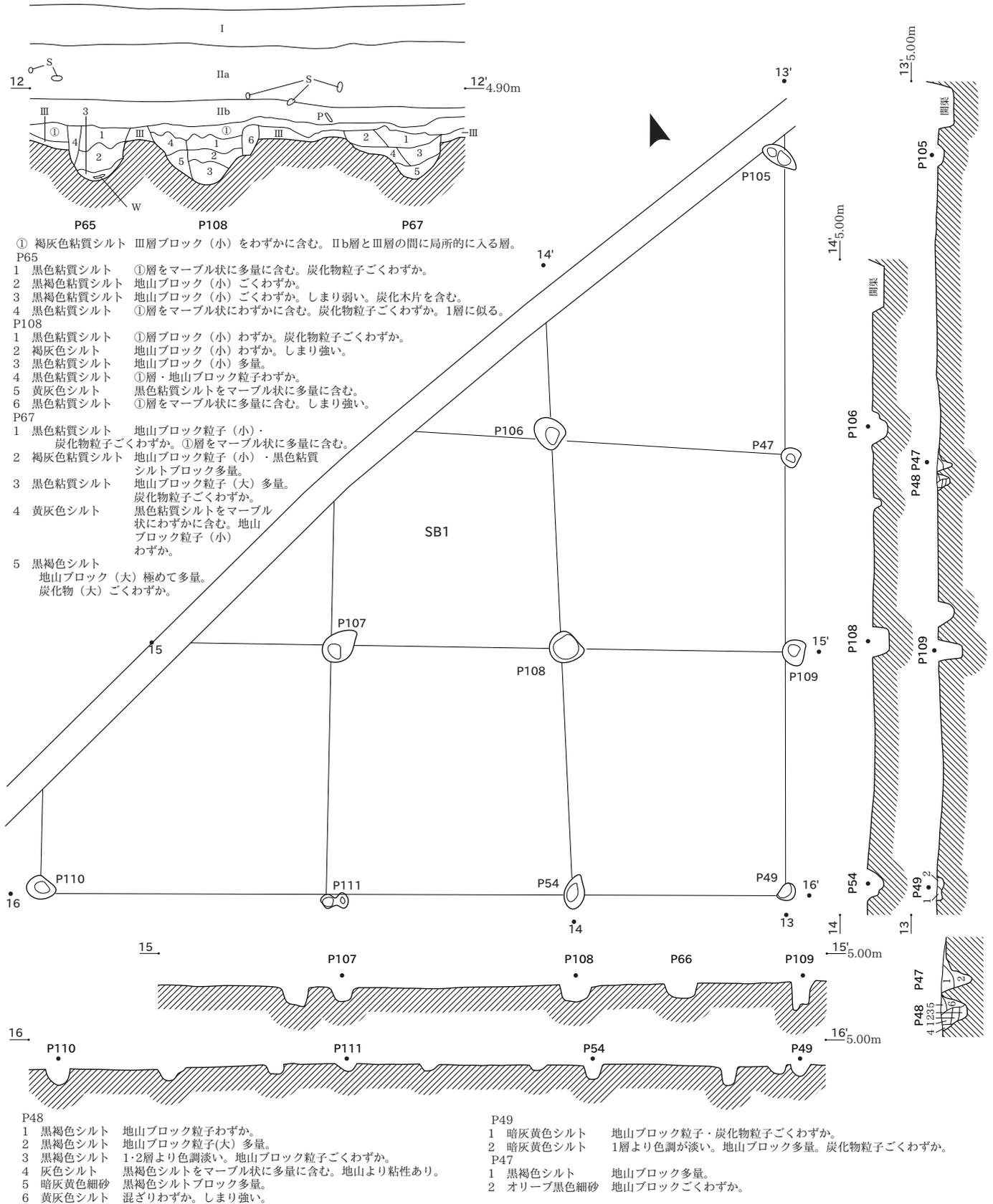
遺構分割図 (1)



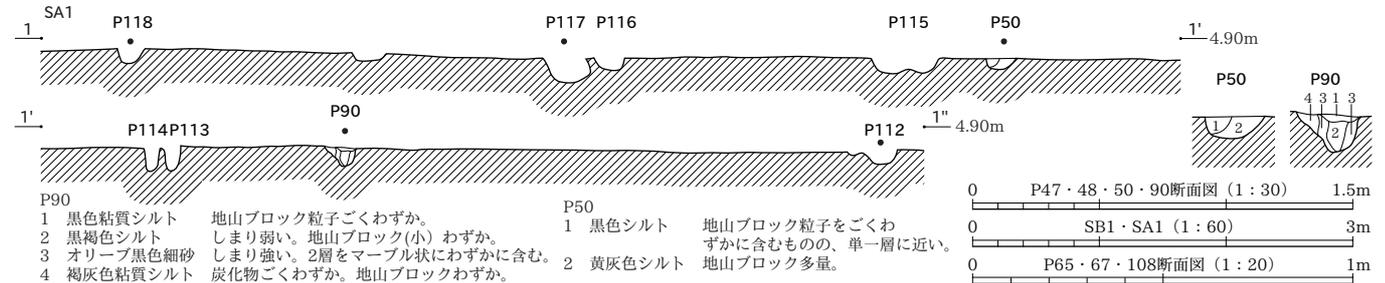
遺構分割図 (2)



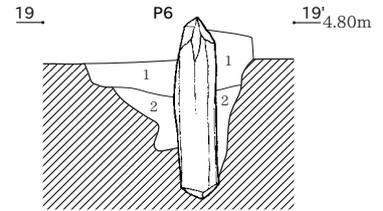
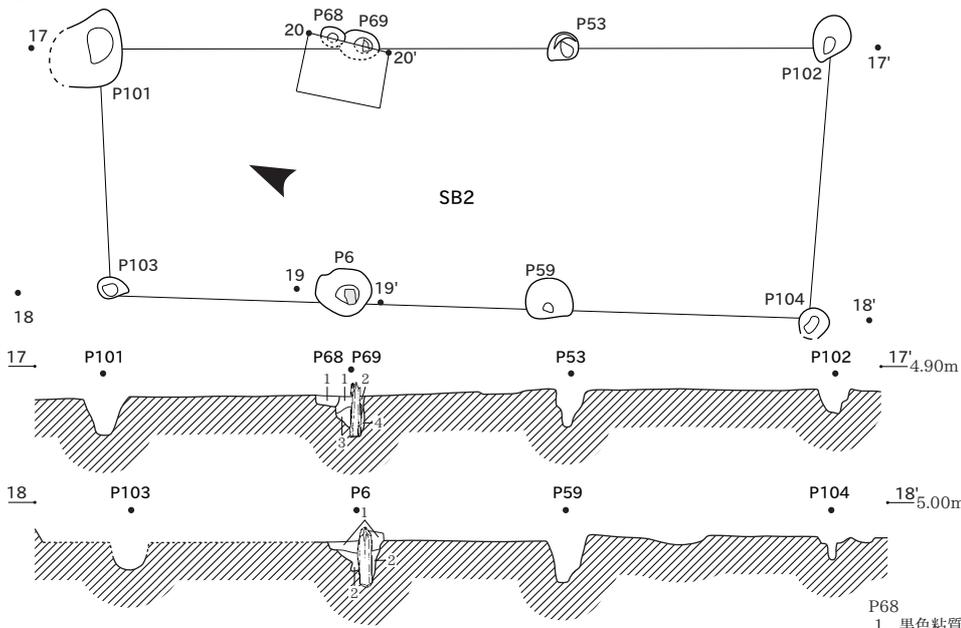
遺構分割図 (2)



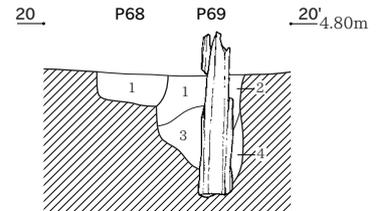
遺構分割図 (3)



遺構分割図 (2)

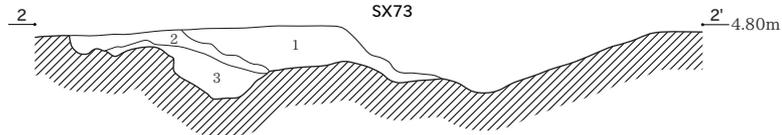


P6
 1 黒褐色粘質シルト III層を基調とする。地山ブロックわずか。炭化物ごくわずか。
 2 灰色シルト 地山ブロック多量。炭化物ごくわずか。柱根設置後の埋め土。

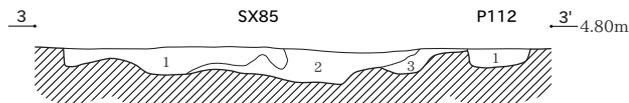


P68
 1 黒色粘質シルト 地山ブロック粒子 (小) わずか。
 P69
 1 褐灰色シルト 地山ブロック (大) 多量。炭化物わずか。
 2 褐灰色シルト 地山ブロックわずか。
 3 褐灰色シルト 地山ブロック粒子わずか。炭化物ごくわずか。
 4 褐灰色シルト 地山ブロック (大) 多量。炭化物ごくわずか。

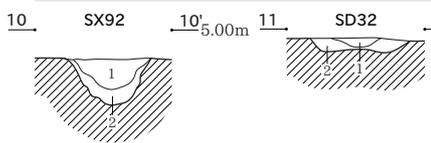
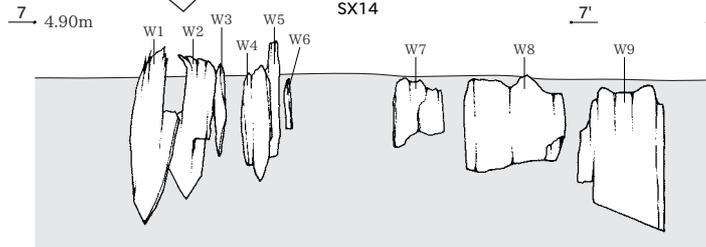
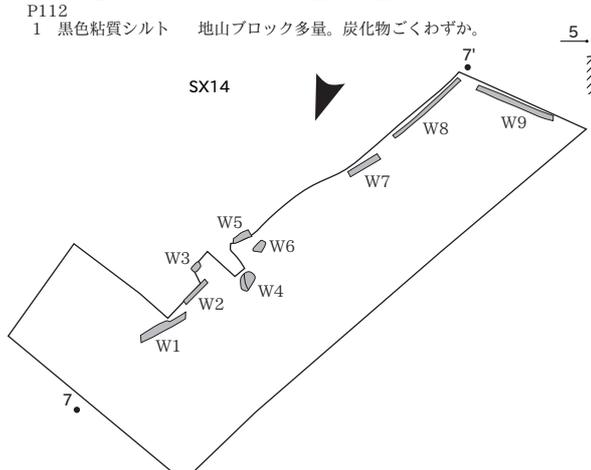
遺構分割図 (3)・(4)



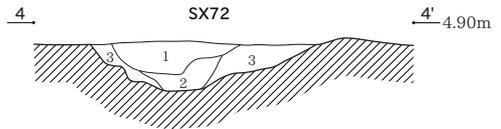
SX73
 1 褐灰色砂質シルト 地山に似る。φ10cm~1mmの褐灰色粘質シルトをマーブル状にわずかに含む。
 2 褐灰色粘質シルト 炭化物粒子ごくわずか。
 3 褐灰色砂質シルト 3層と似るがより明るく砂質。



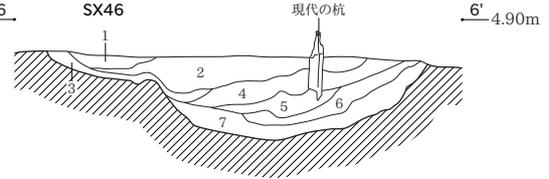
SX85
 1 黒色シルト 炭化物・地山ブロック粒子ごくわずか。
 2 灰オリーブ色細砂 黄灰色粘質シルトをマーブル状に多量に含む。
 3 黒褐色シルト 地山ブロック多量。黄灰色粘質シルトブロックわずか。



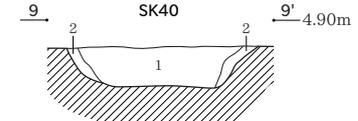
SX92
 1 黒褐色粘質シルト φ1mm以下の炭化物ごくわずか。
 2 黒褐色粘質シルト φ10mm以下の炭化物わずか。
 SD32
 1 黒褐色シルト 炭化物極めて多量。ブロック状に含む範囲あり。
 2 黄灰色シルト IV層に似るが炭化物がより多い。



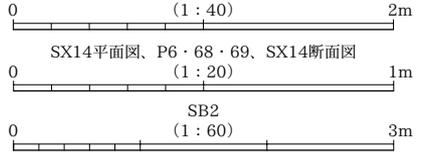
SX72
 1 黒色シルト 炭化物粒子・地山ブロック (小) わずか。
 2 黒褐色シルト 炭化物粒子ごくわずか。地山ブロック (小) わずか。1層より径小さい。しまり弱い。
 3 黄灰色粘質シルト 2層をマーブル状にわずかに含む。



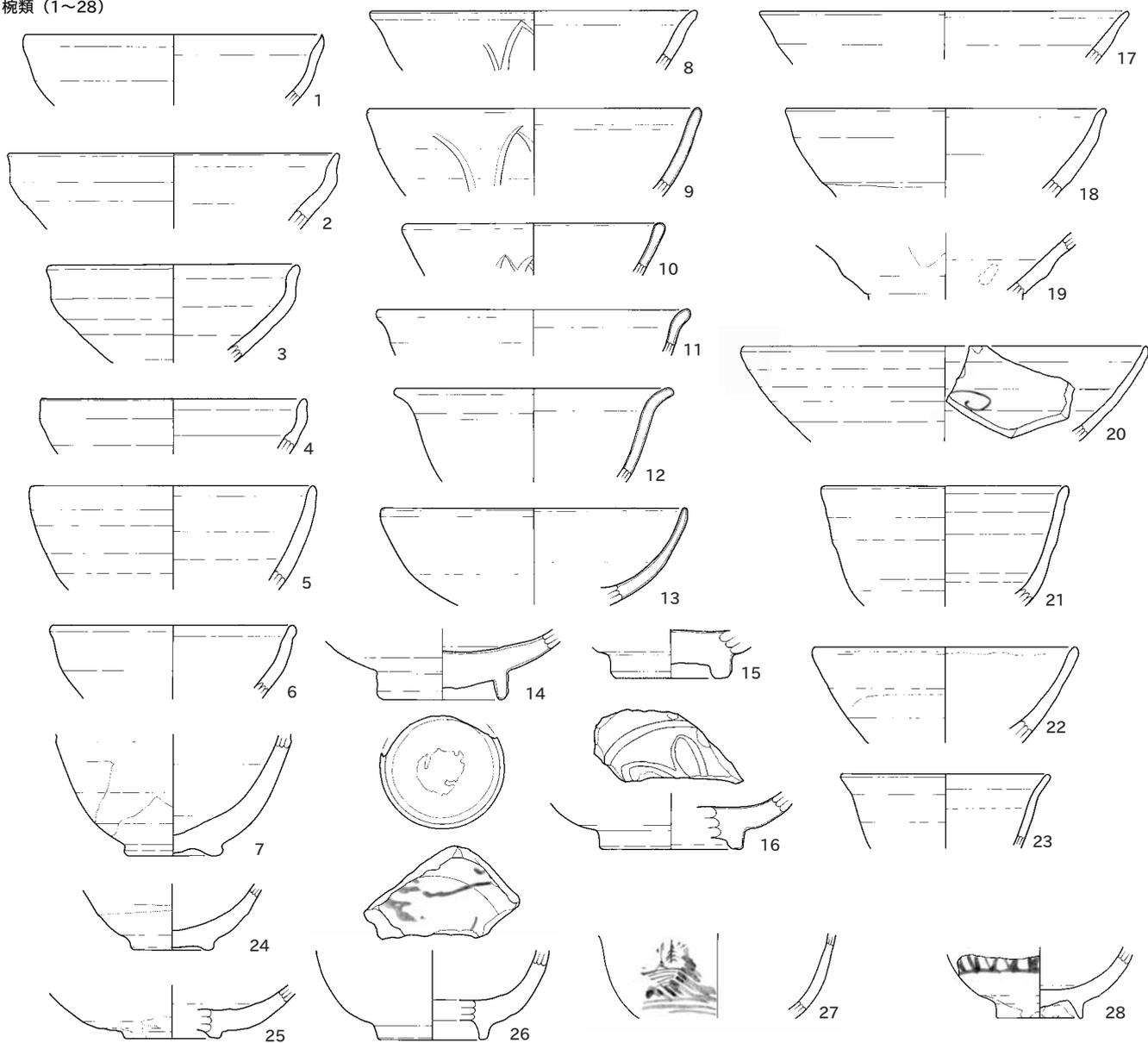
SX75
 1 黒色シルト 地山ブロック粒子 (小) わずか。炭化物粒子ごくわずか。
 2 黄灰色シルト やや粘性あり。1層をブロック状に多量に含む。地山より色調が暗い。
 SX46
 1 黒褐色シルト 地山ブロック粒子 (大) わずか。φ1mmの炭化物ごくわずか。
 2 黄褐色細砂 黄灰色粘質シルトをマーブル状にわずかに含む。
 3 オリーブ黒色粘質シルト 地山をマーブル状に多量に含む。φ10mmの炭化物わずか。
 4 灰白色細砂 やや黄色味を帯びる。黄灰色粘質シルトをマーブル状にごくわずかに含む。
 5 灰オリーブ色細砂 黄褐色細砂ブロック多量。黒色粘質シルト小ブロックわずか。
 6 黒色シルト 地山ブロック・炭化物多量。
 7 黒褐色シルト 6層より色調が濃い。炭化物多量。地山ブロック極めて多量。



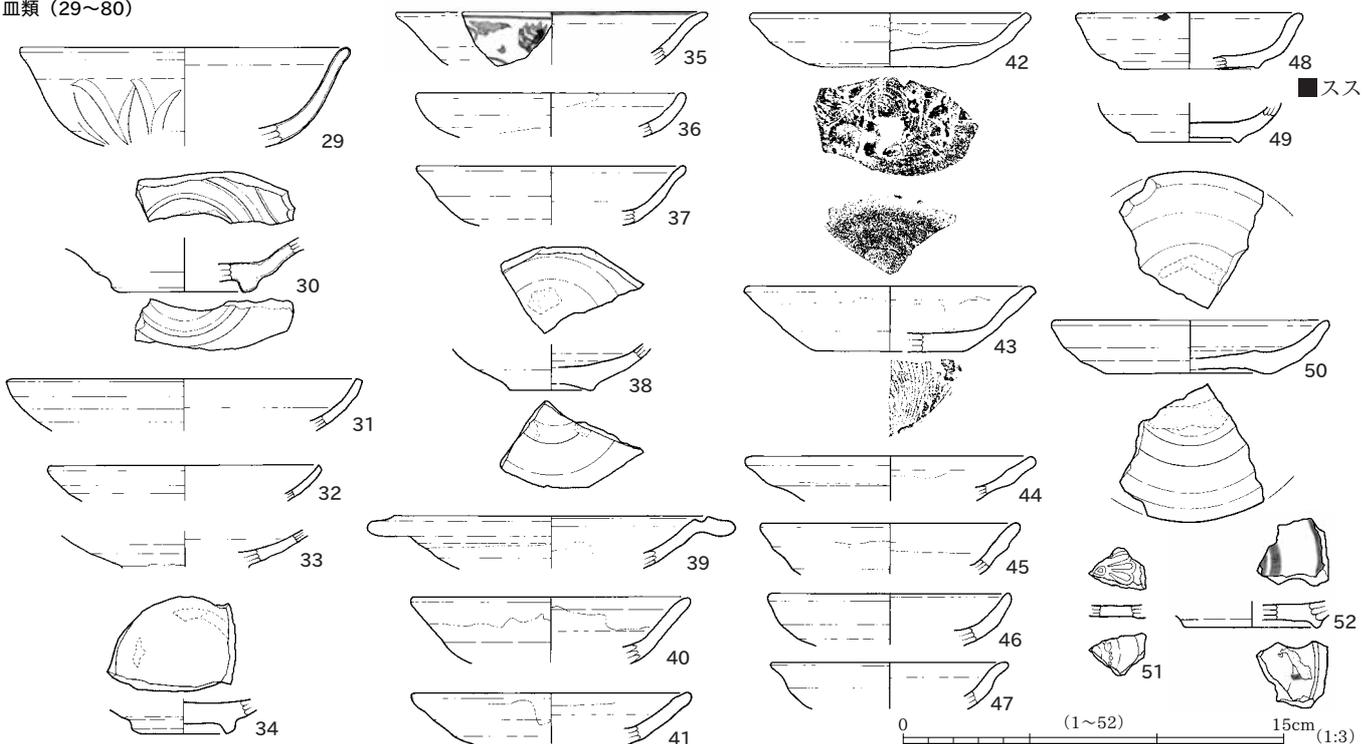
SK40
 1 黒色シルト 地山ブロック粒子わずか。炭化物ごくわずか。
 2 褐灰色シルト 地山ブロック (大) 多量。

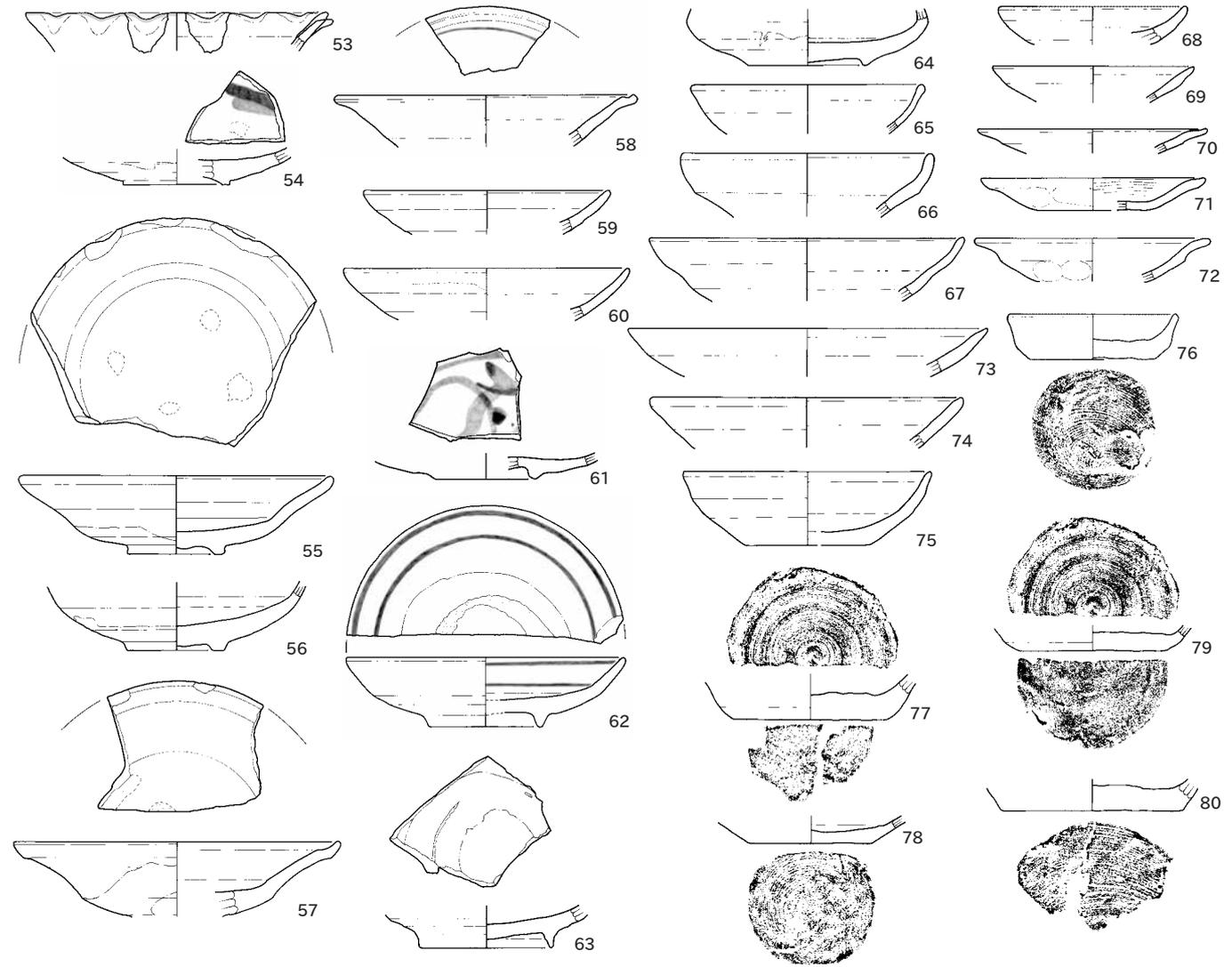


中近世の土器・陶磁器
碗類 (1~28)

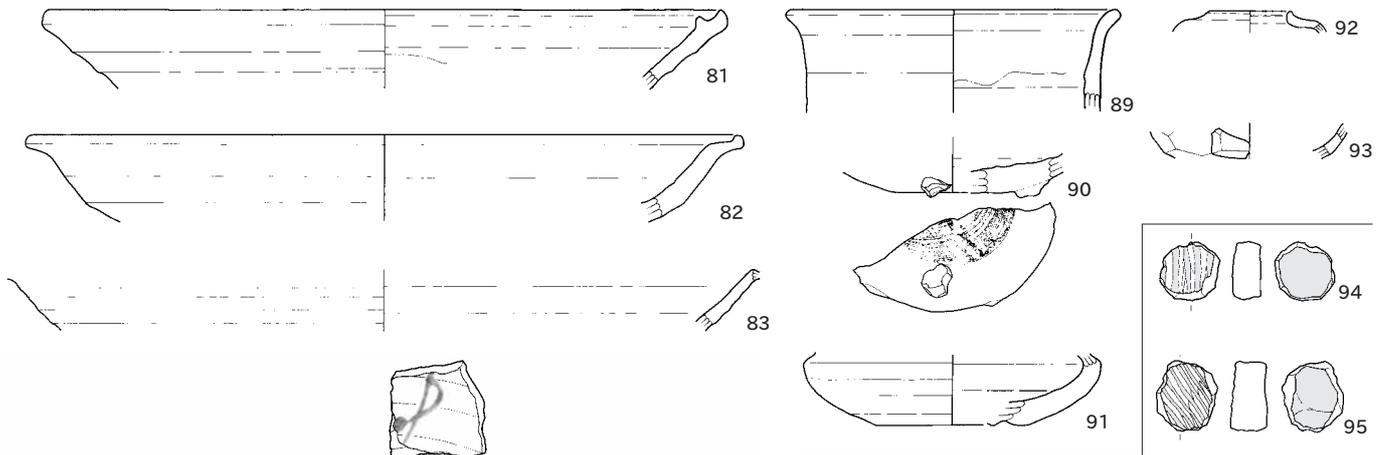


皿類 (29~80)

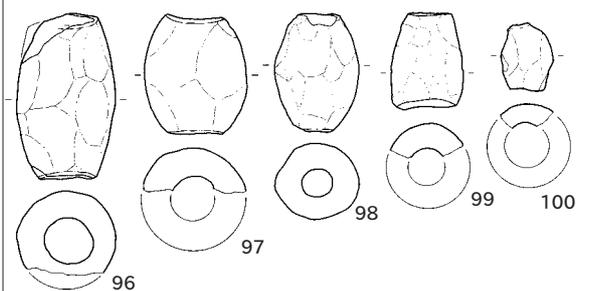




鉢・盤類 (81~86)、瓦器 (87・88)、筒形容器 (89)、香炉類 (90・91)、茶入 (92)、杯 (93)

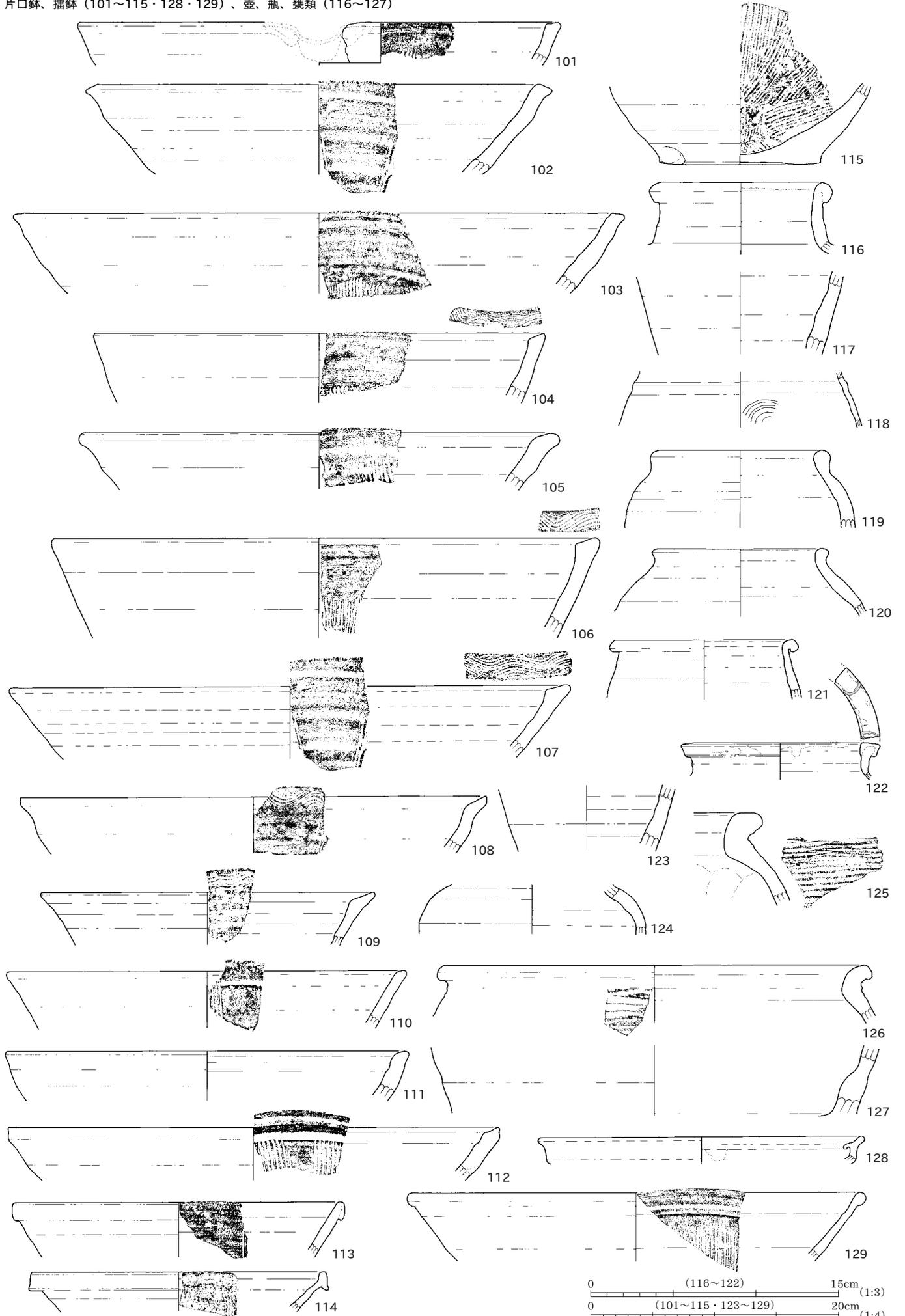


土製品 (94~100)

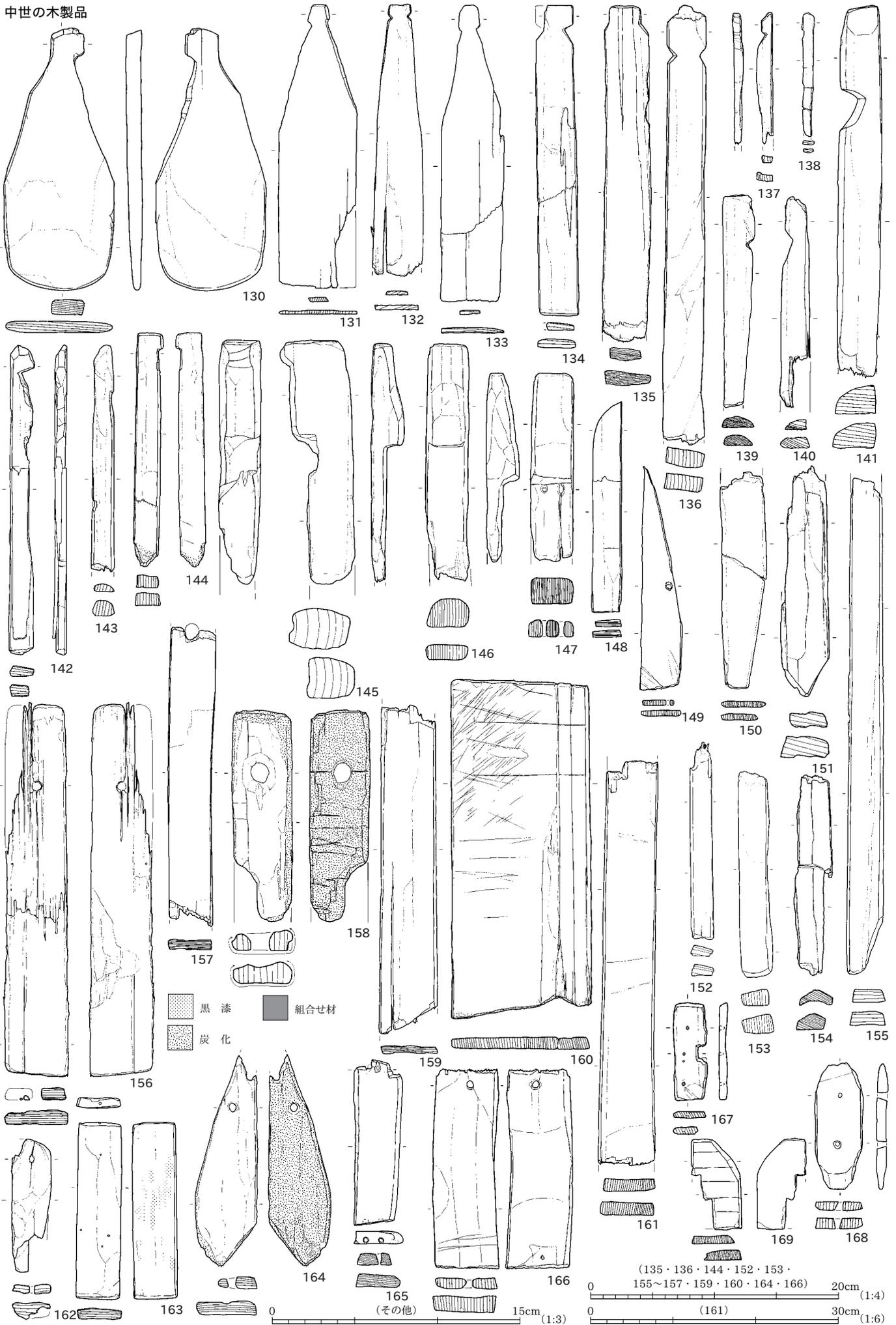


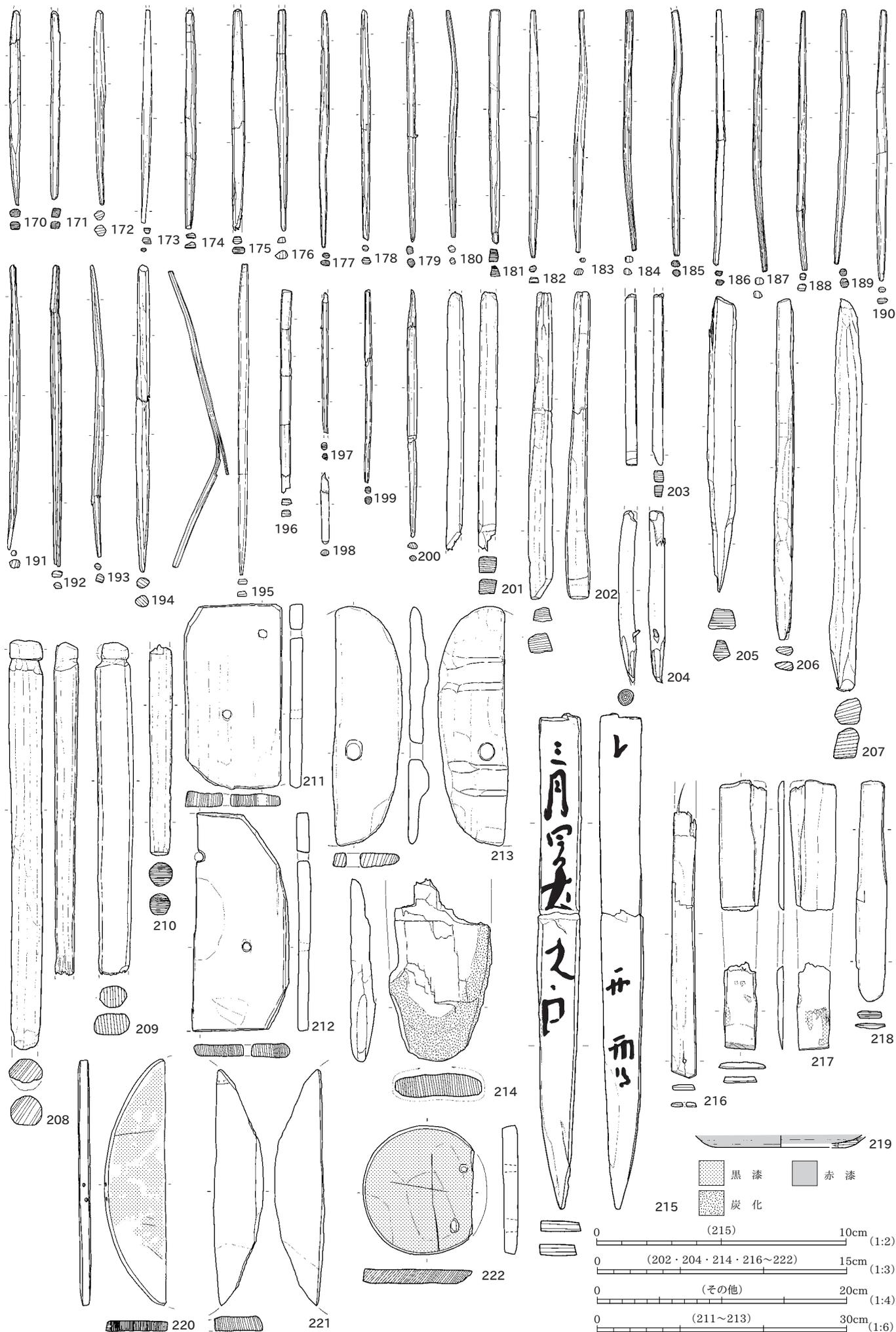
0 (その他) 15cm (1:3)
 0 (81~85・88) 20cm (1:4)

片口鉢、播鉢 (101~115・128・129)、壺、瓶、甕類 (116~127)

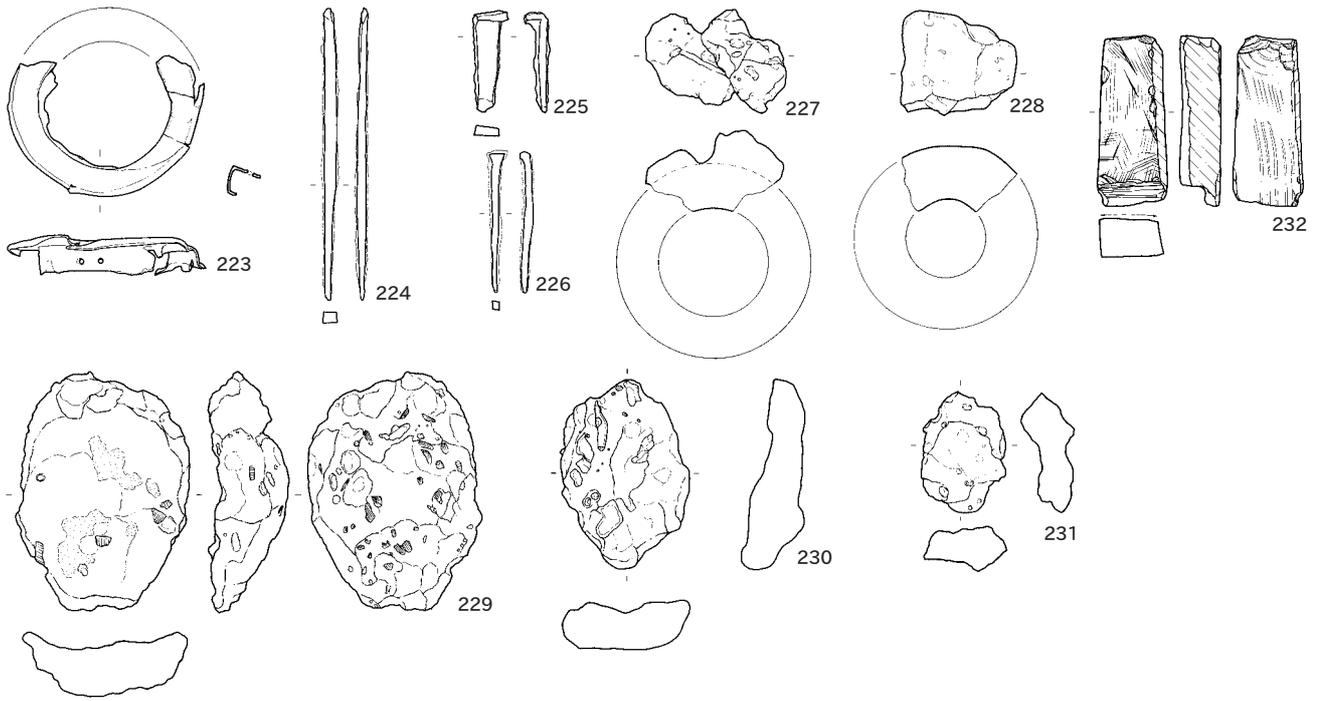


中世の木製品

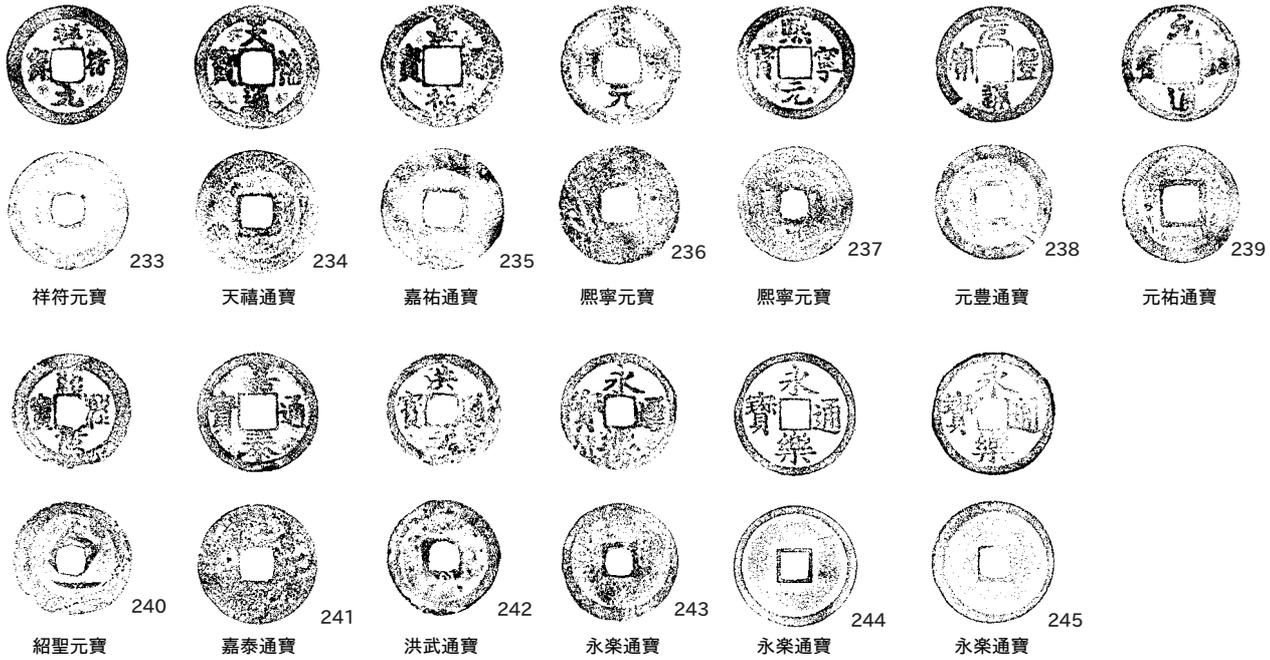




中近世の金属製品・石製品

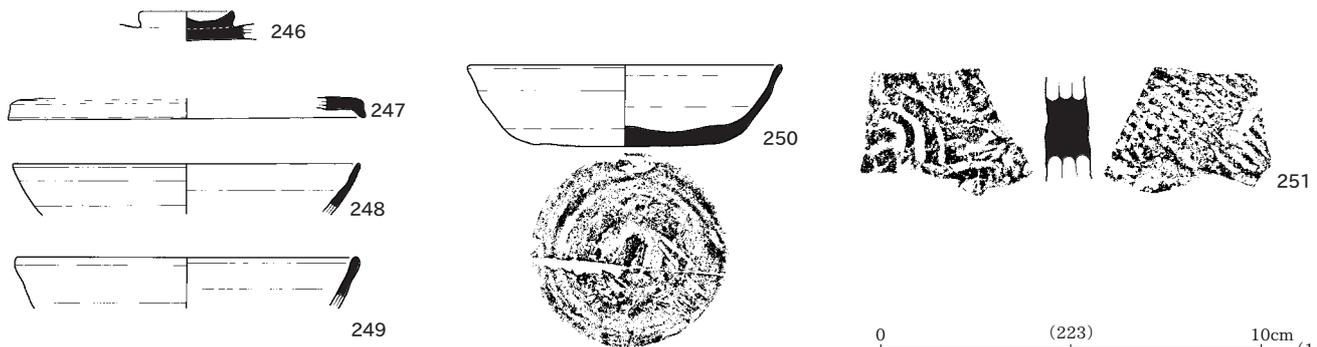


銭貨



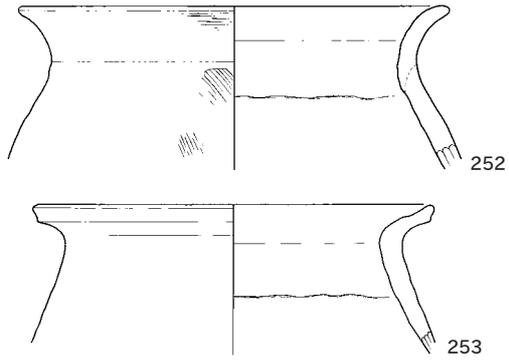
0 (233~245) 6cm (2:3)

古代の遺物

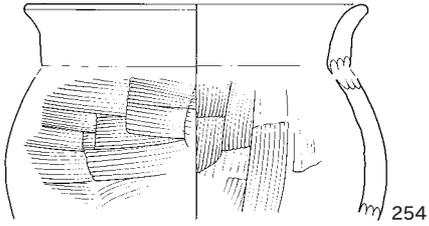


0 (223) 10cm (1:2)
0 (224~232・246~251) 15cm (1:3)

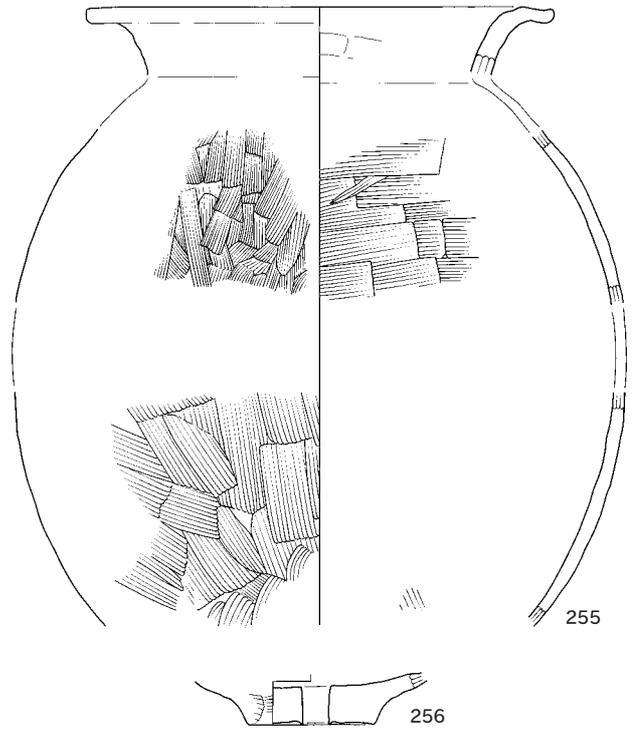
古墳時代の土器
SX13



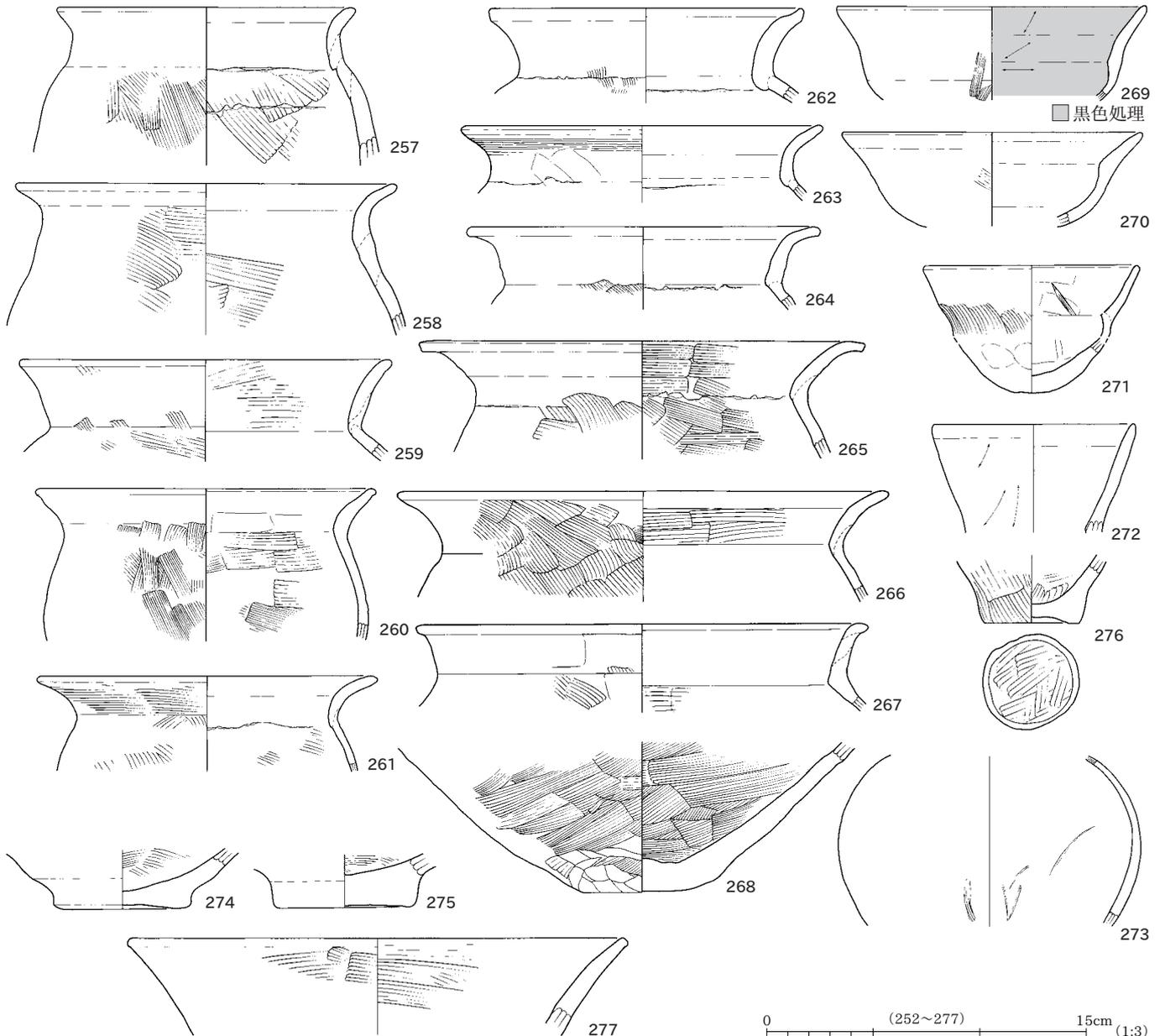
SK100



SD2

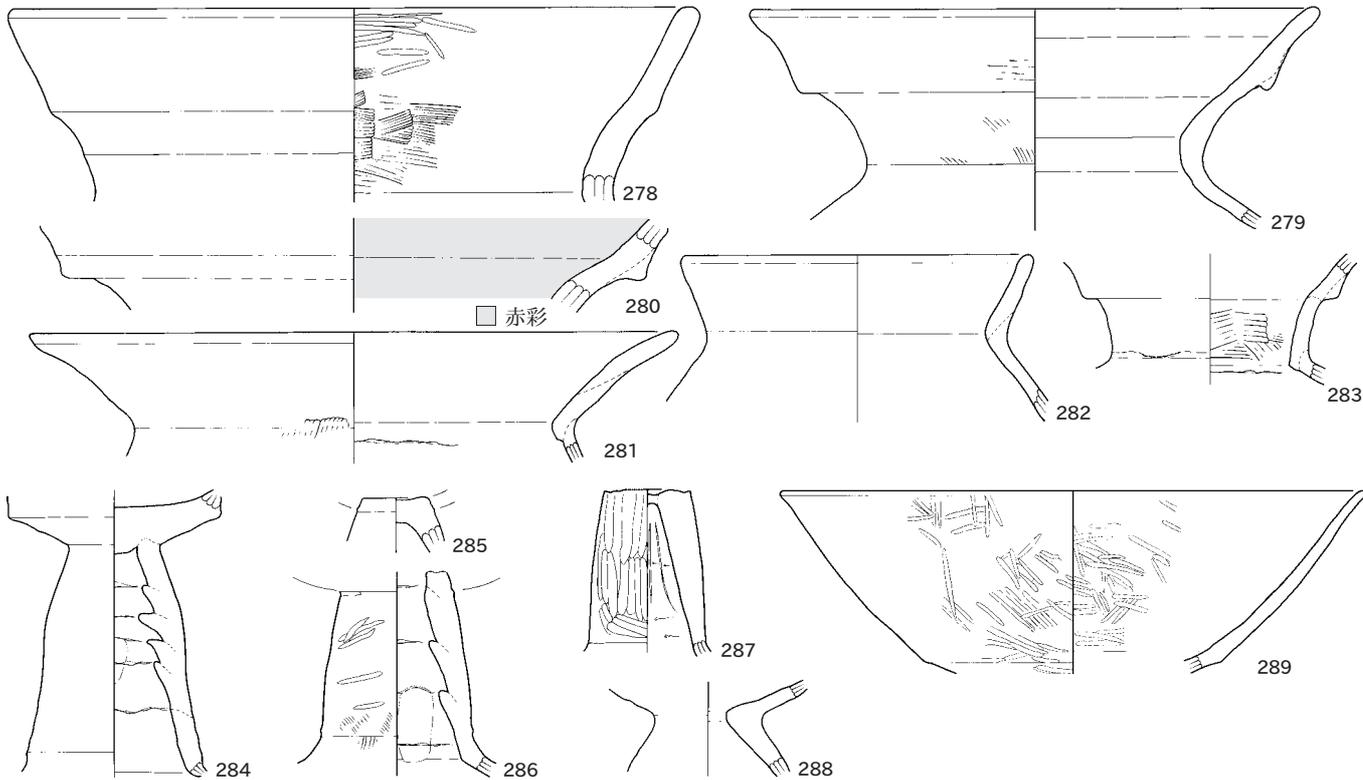


III層

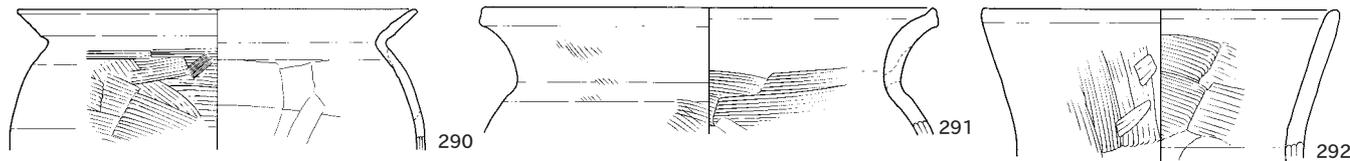


■ 黒色処理

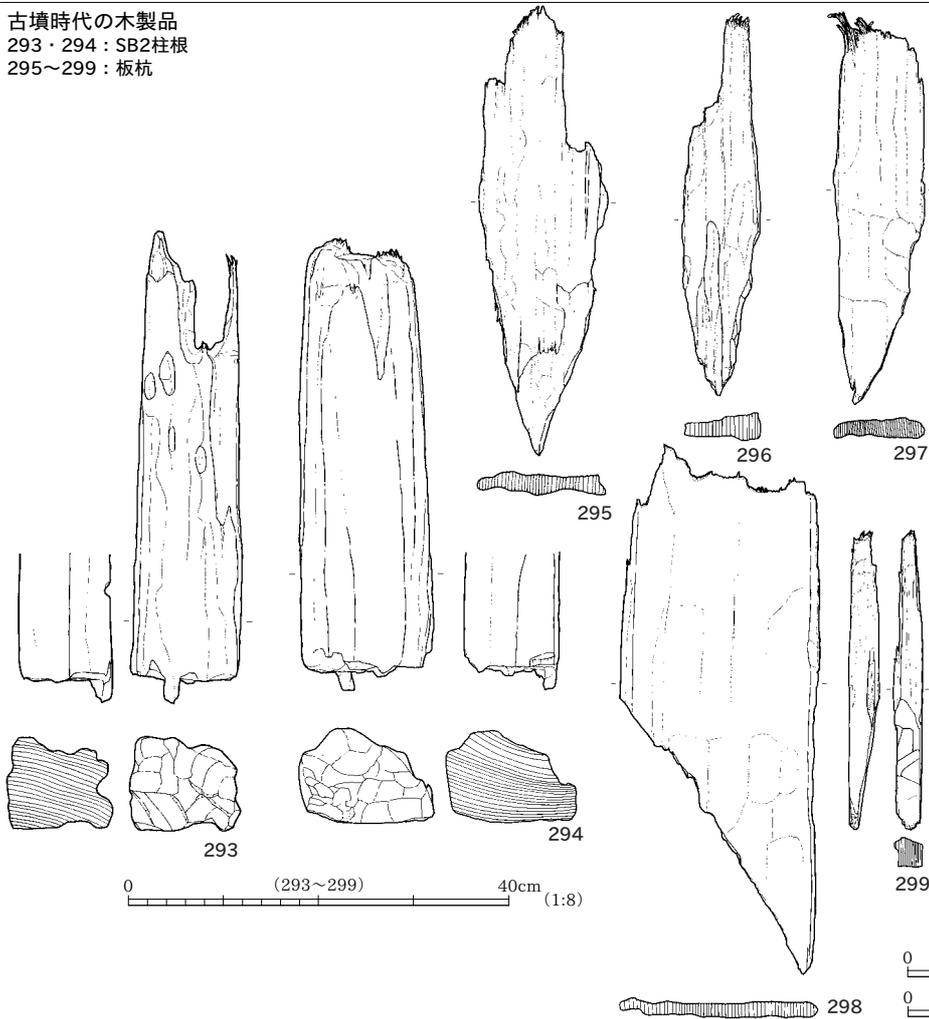
0 (252~277) 15cm (1:3)



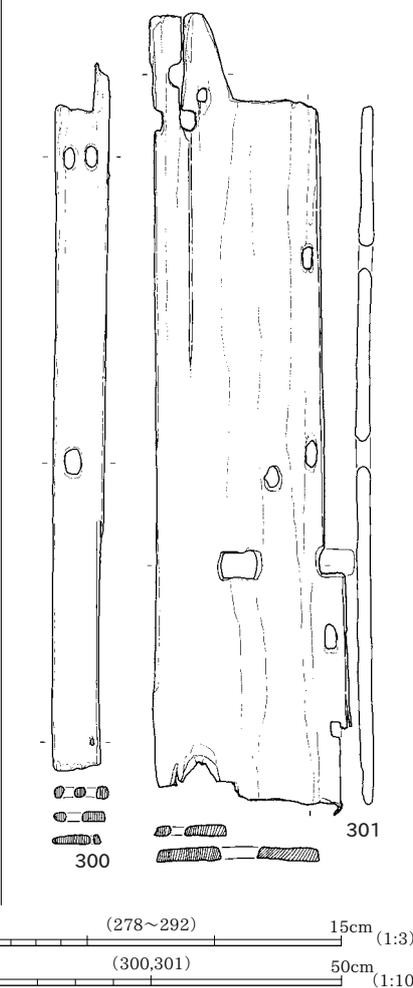
IV層

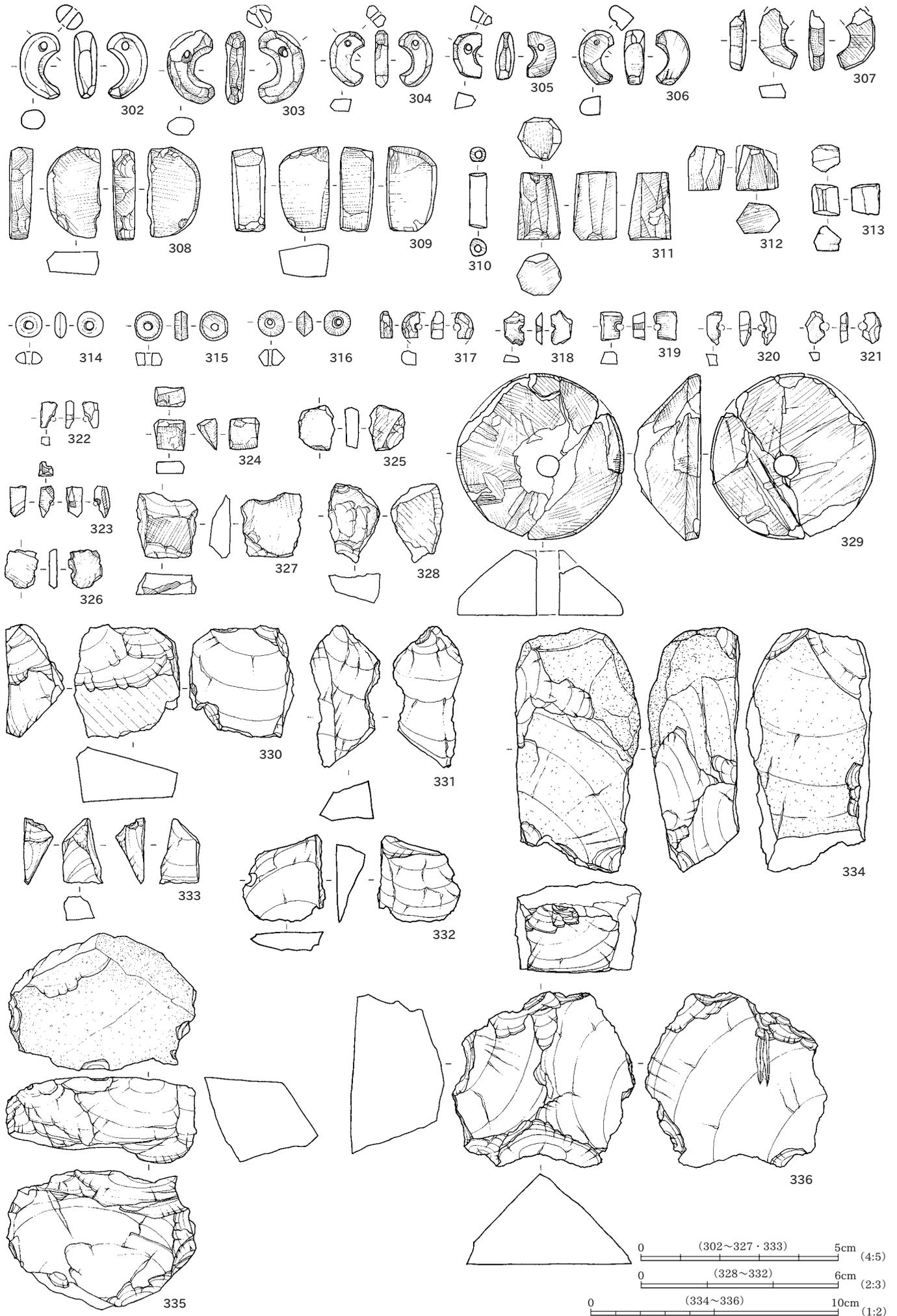


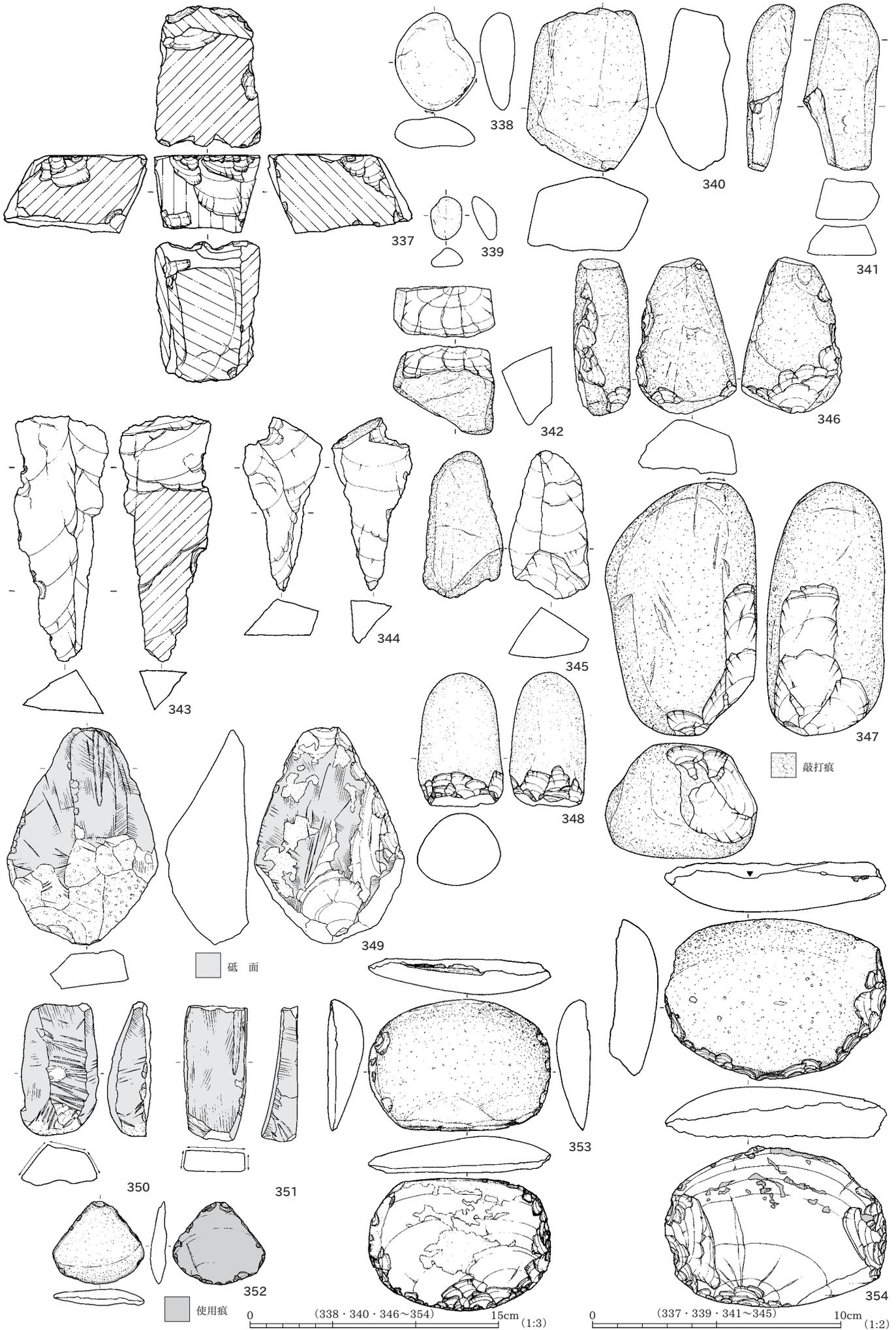
古墳時代の木製品
 293・294 : SB2柱根
 295~299 : 板杭

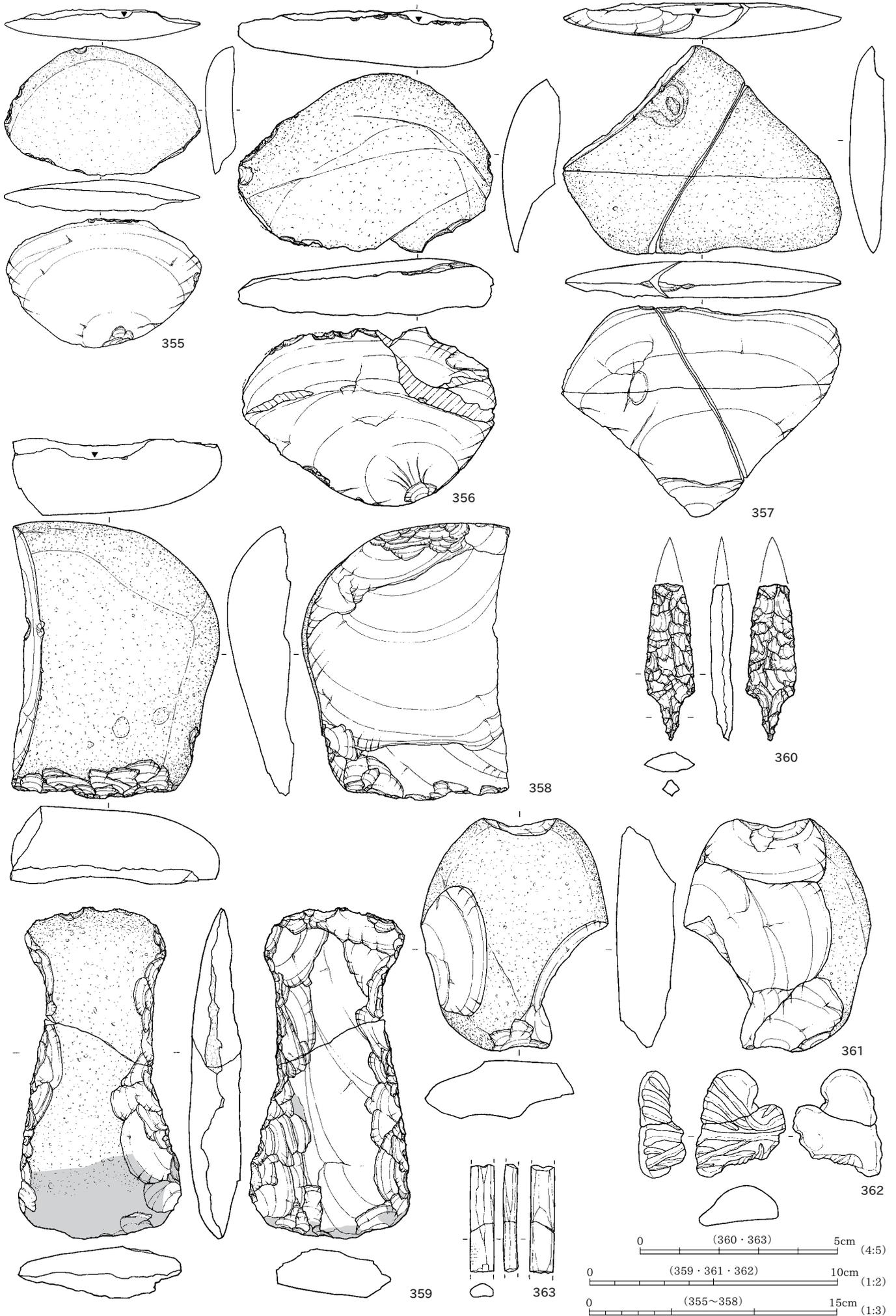


弥生時代の木製品











姫御前遺跡と周辺の地形（東上空から）



上空から見た姫御前遺跡



中世の掘立柱建物 (SB1) と古墳時代の掘立柱建物 (SB2) (北西から)



古墳時代の土坑SK100における遺物の出土状況 (北から)



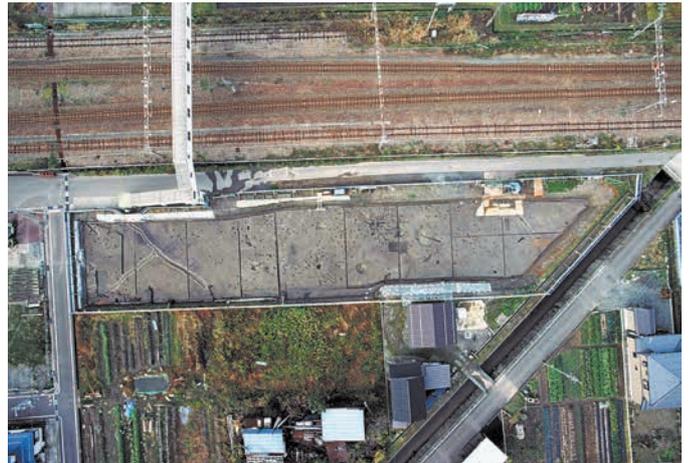
遺跡遠景(北東から、矢印の交点が姫御前遺跡)



遺跡近景(南から)



遺跡近景(北から)



遺跡近景(上空から)



遺跡近景(西から)



中世の掘立柱建物(SB1)(東から)



掘立柱建物(SB2)の柱根(P6)(西から)



掘立柱建物(SB2)の柱根(P69)(西から)



基本層序 17C21 グリッド付近 (建築材出土状況 北から)



基本層序 16C16・21 グリッド付近 (倒木2検出状況 北から)



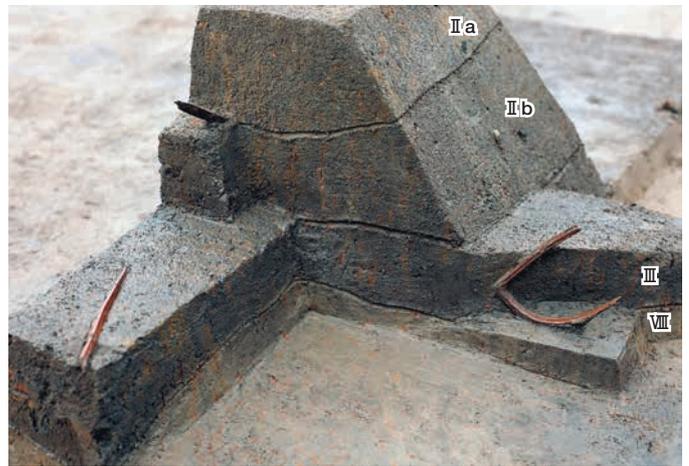
基本層序 1B25 グリッド付近 (SD3 セクション 北から)



SX14 検出状況 (W1~W9) (西から)



SX1 検出状況 (南から)



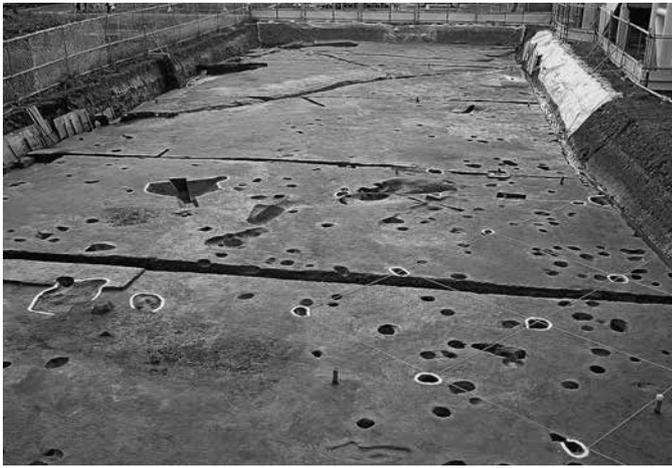
SX84 検出状況 (南西から)



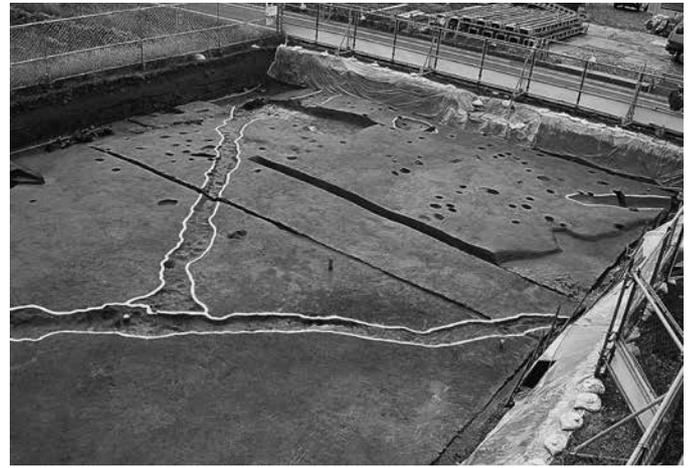
古墳時代の玉類



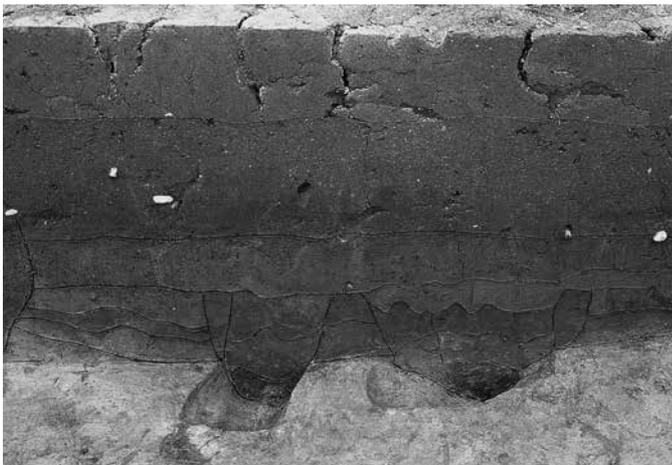
古墳時代に遺跡に持ち込まれたヒスイ原石・剥片 (左2点は青ヒスイ)



3区 完掘 (東から)



SD2・SD9・SD10 完掘 (北から)



P65・P108 (右・SB1) セクション (東から)



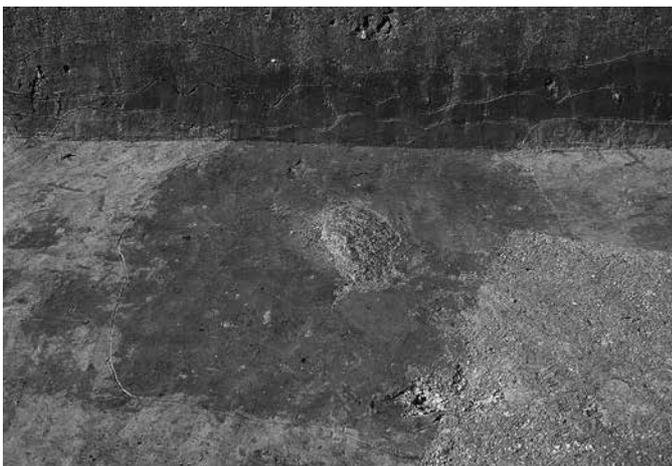
P47・P48 セクション (南から)



SK40 セクション (南から)



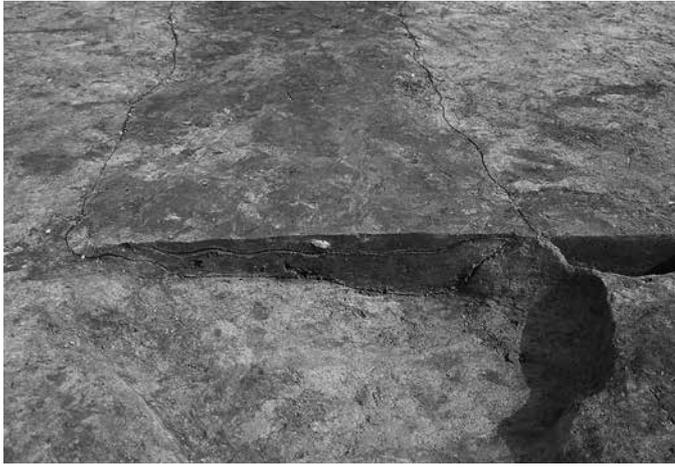
SK91 セクション (北から)



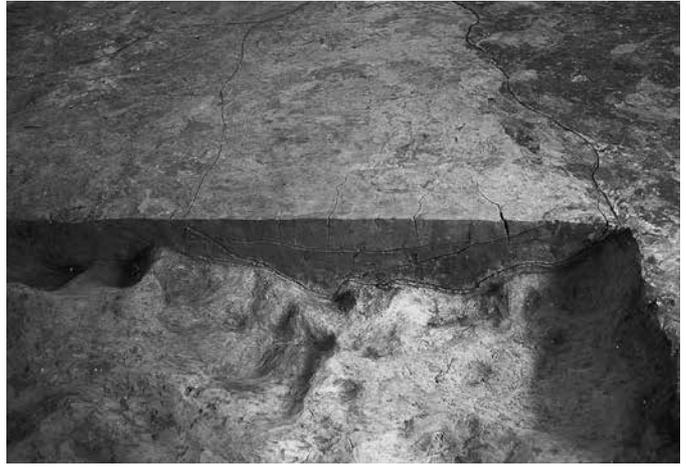
SK100 検出状況 (東から)



SK100 セクション (南から)



SD2 セクション (南から)



SD2・SD9 セクション (南東から)



SD10 セクション (南西から)



SD10 完掘 (北から)



SD32 セクション (南東から)



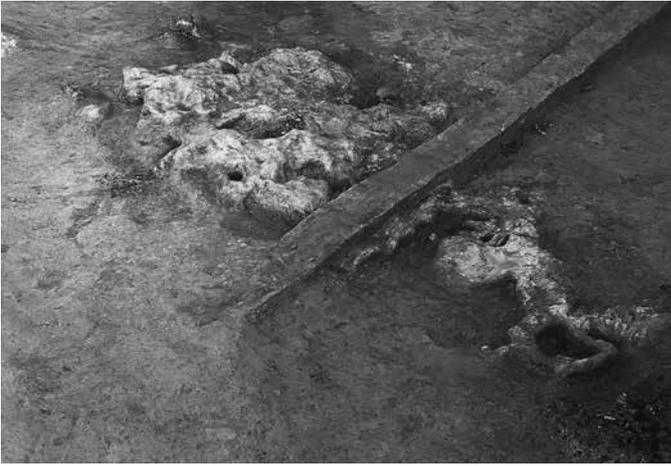
SD32 完掘 (南から)



SD3 完掘 (北東から)



SX4 検出状況 (北から)



SX13 検出状況 (北西から)



SX13 セクション (西から)



SX14 検出状況 (W1~W5) (北から)



SX14 検出状況 (W1~W6) (西から)



SX14 検出状況 (W7~W9) (北から)



SX14 検出状況 (W10) (南から)



SX46 セクション (南西から)



SX71 セクション (南から)



風倒木痕 SX71 完掘 (南から)



風倒木痕 SX75・76・83・85 完掘 (西から)



箆状木製品 出土状況 (西から)



人形 出土状況 (北から)



人形 出土状況 (南から)



人形 出土状況 (北東から)



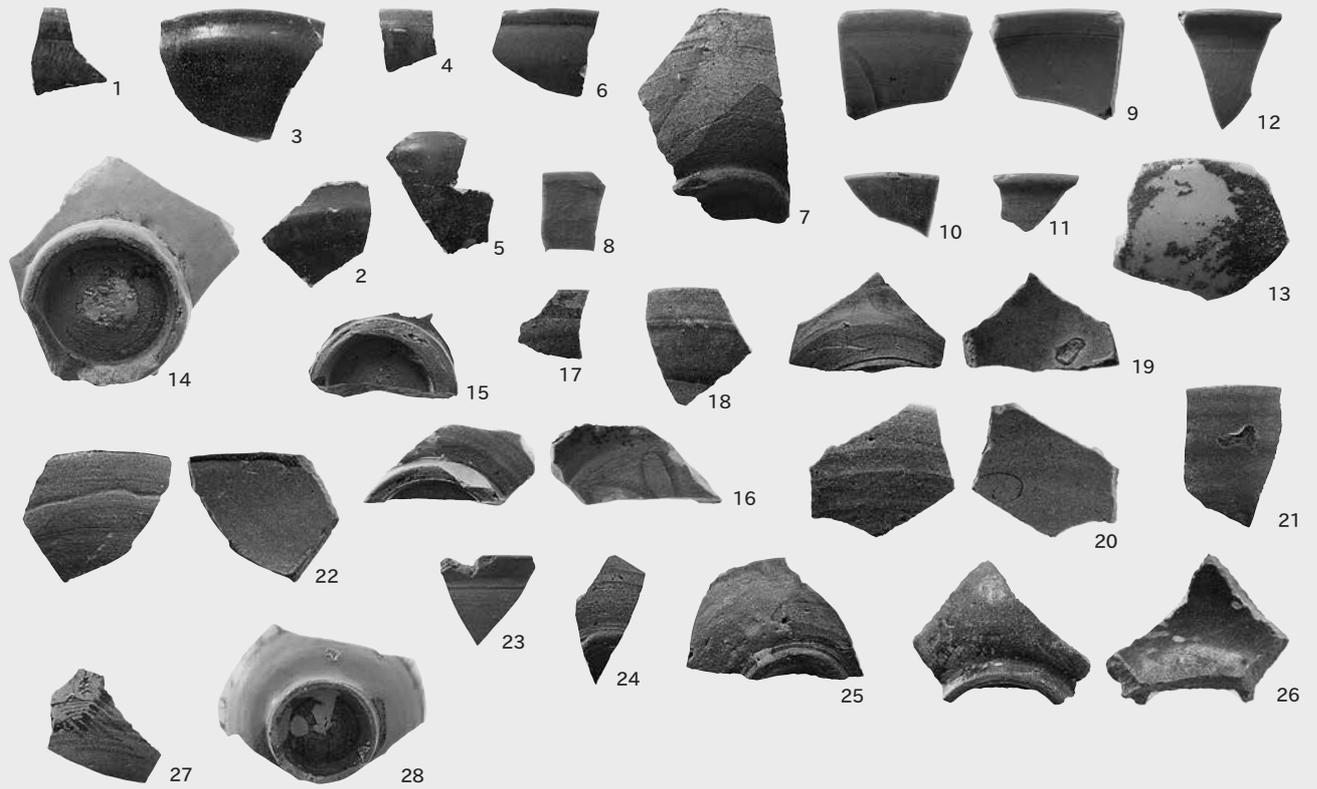
雨天時の調査の様子



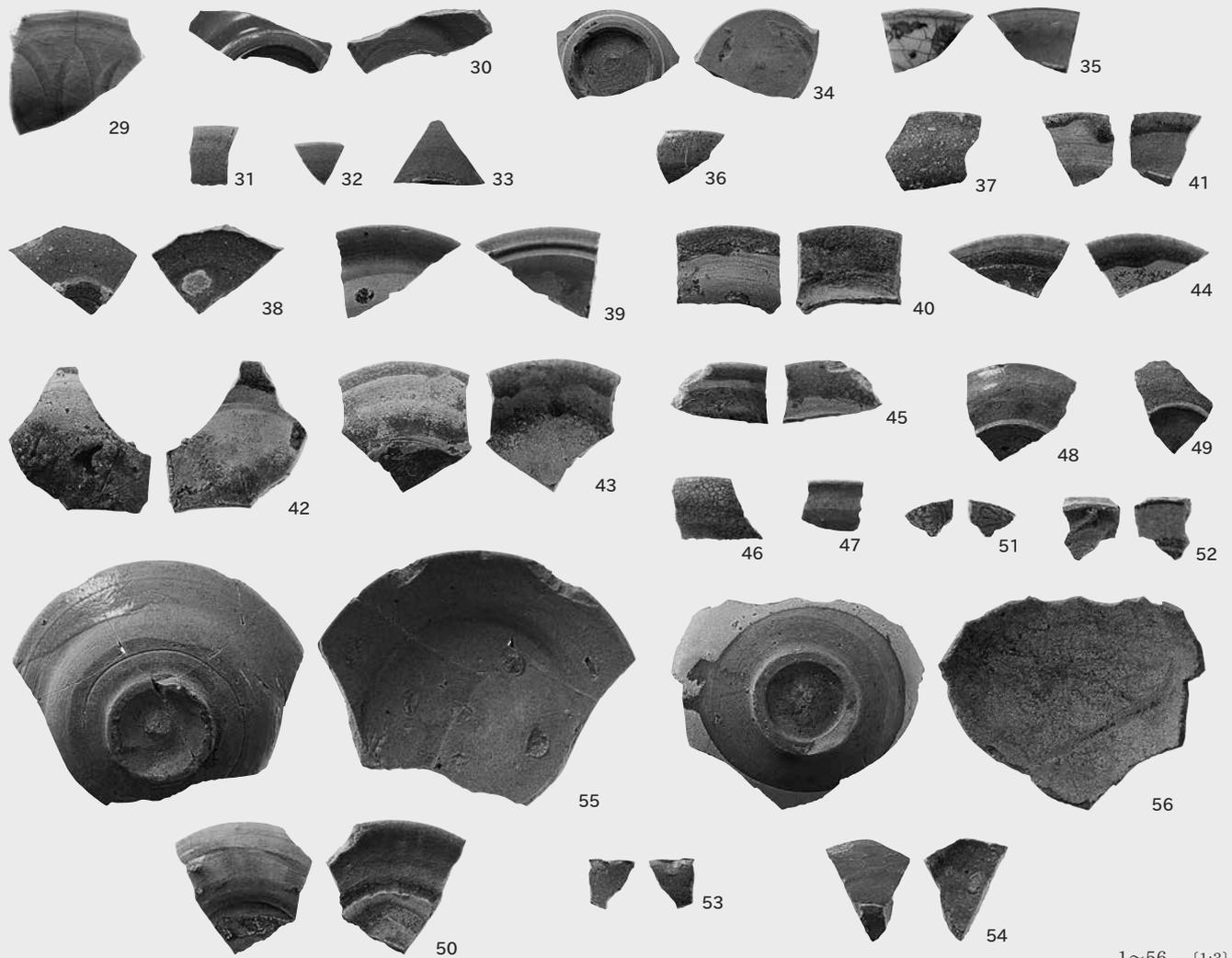
土壌水洗作業の様子

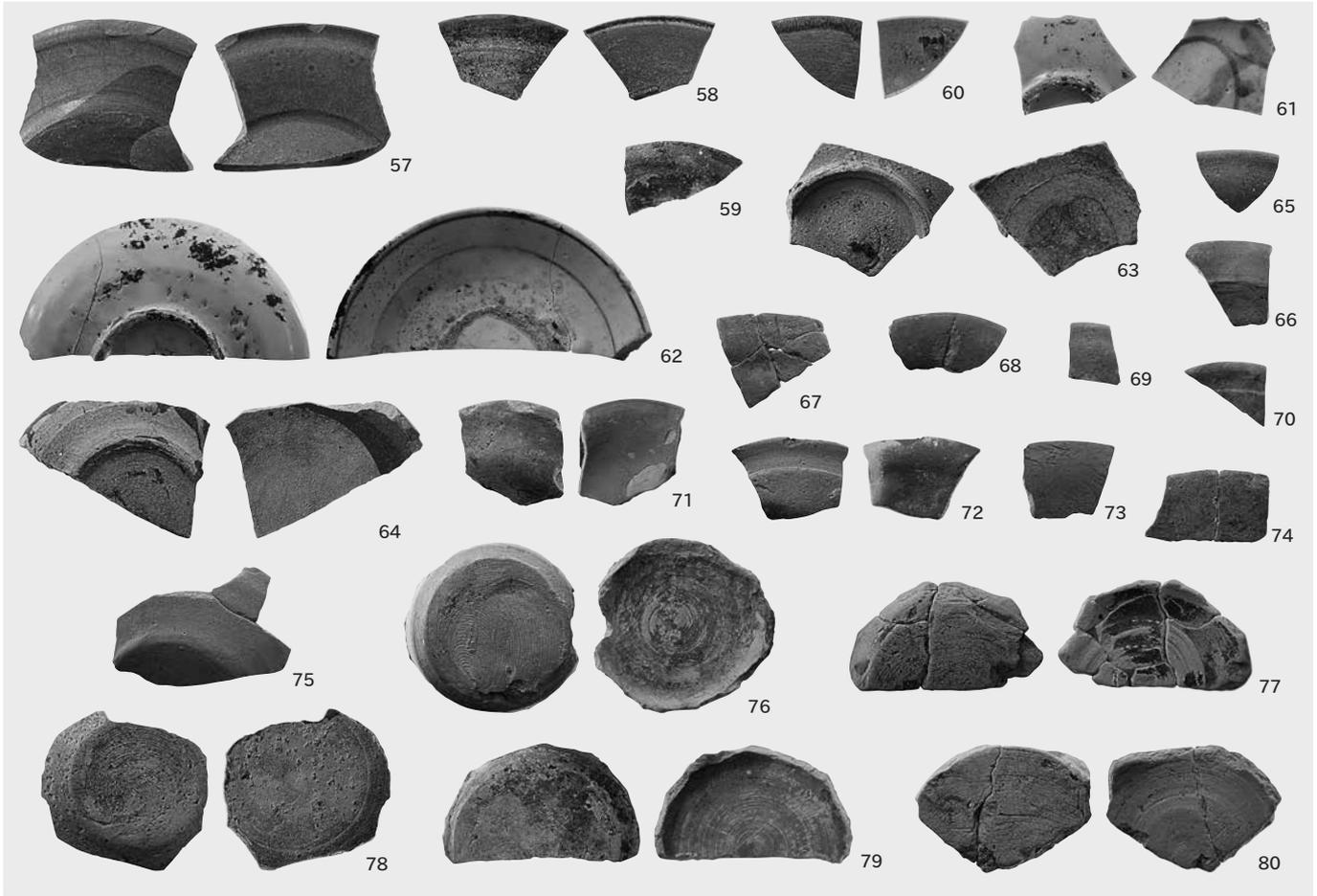
中近世の土器・陶磁器

椀類 (1~28)

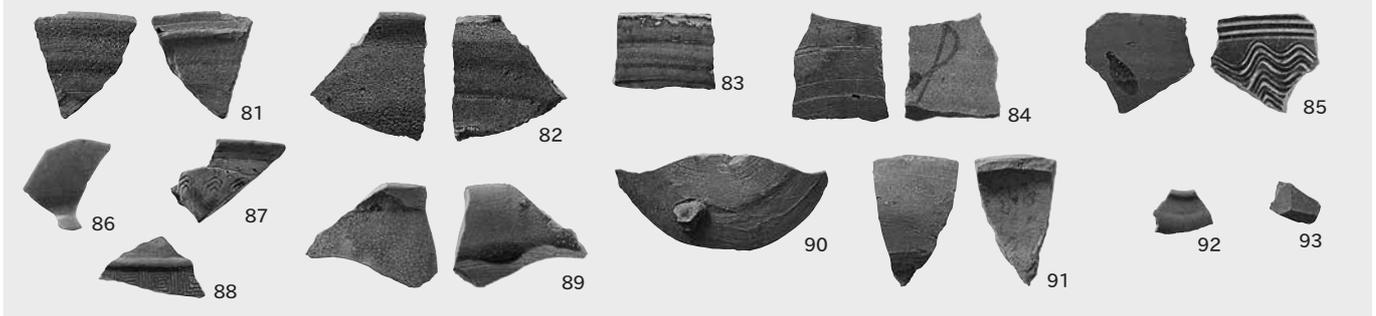


皿類 (29~80)

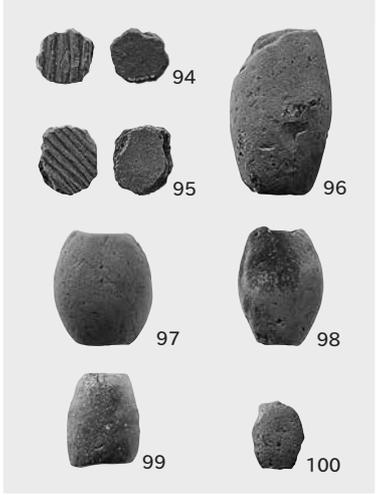




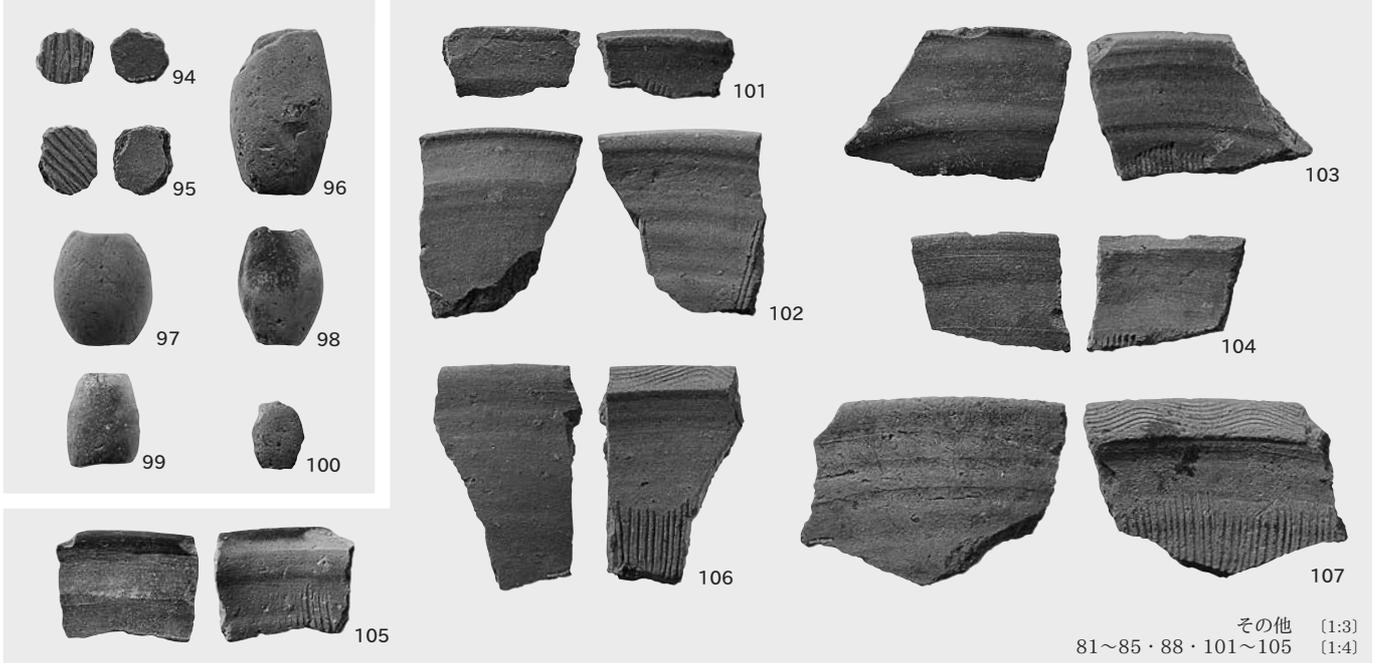
鉢・盤類 (81~86)、瓦器 (87・88)、筒形容器 (89)、香炉類 (90・91)、茶入 (92)、杯 (93)



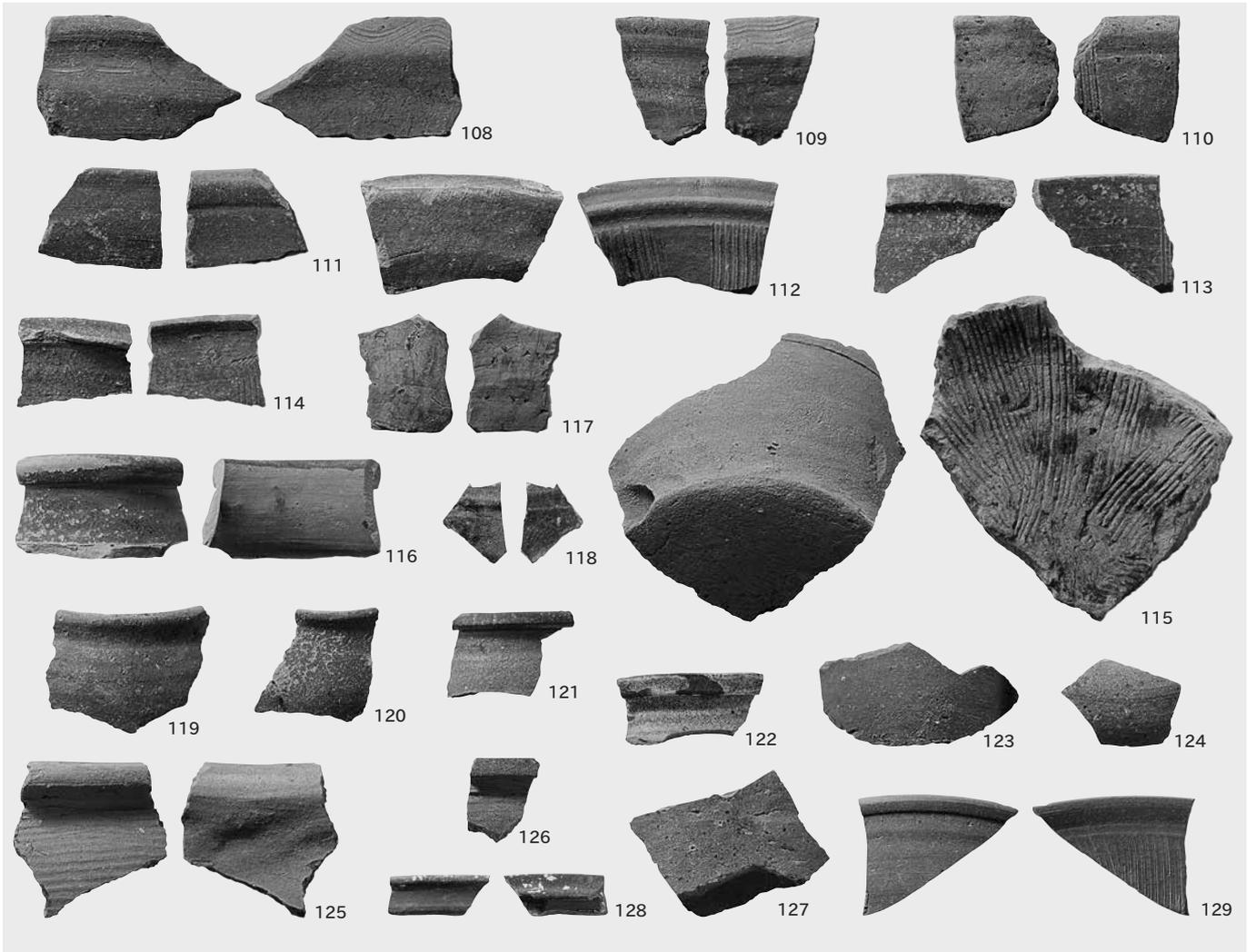
土製品 (94~100)



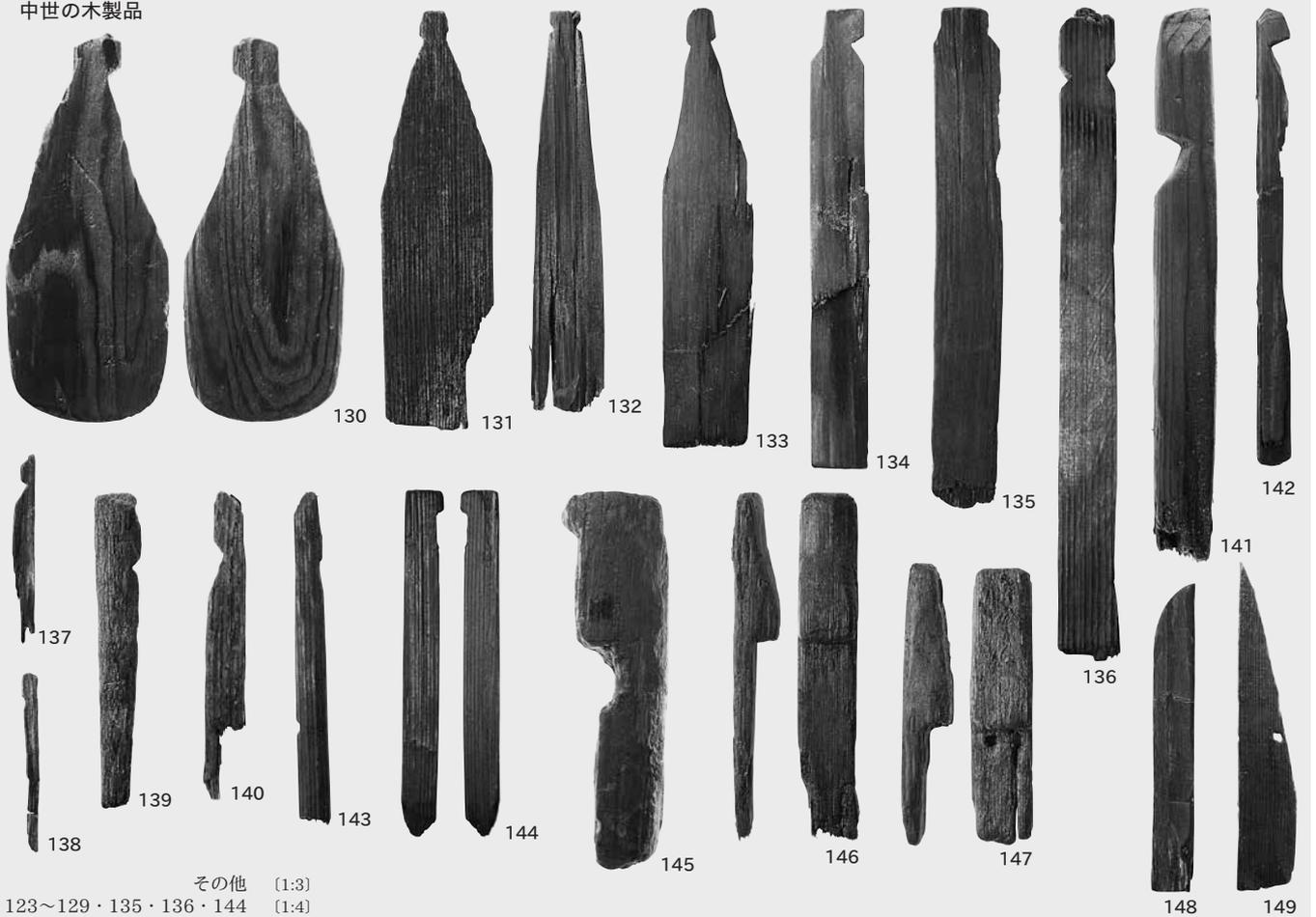
片口鉢・播鉢 (101~115・128・129)、壺・瓶・甕 (116~127)



その他 (1:3)
81~85・88・101~105 (1:4)



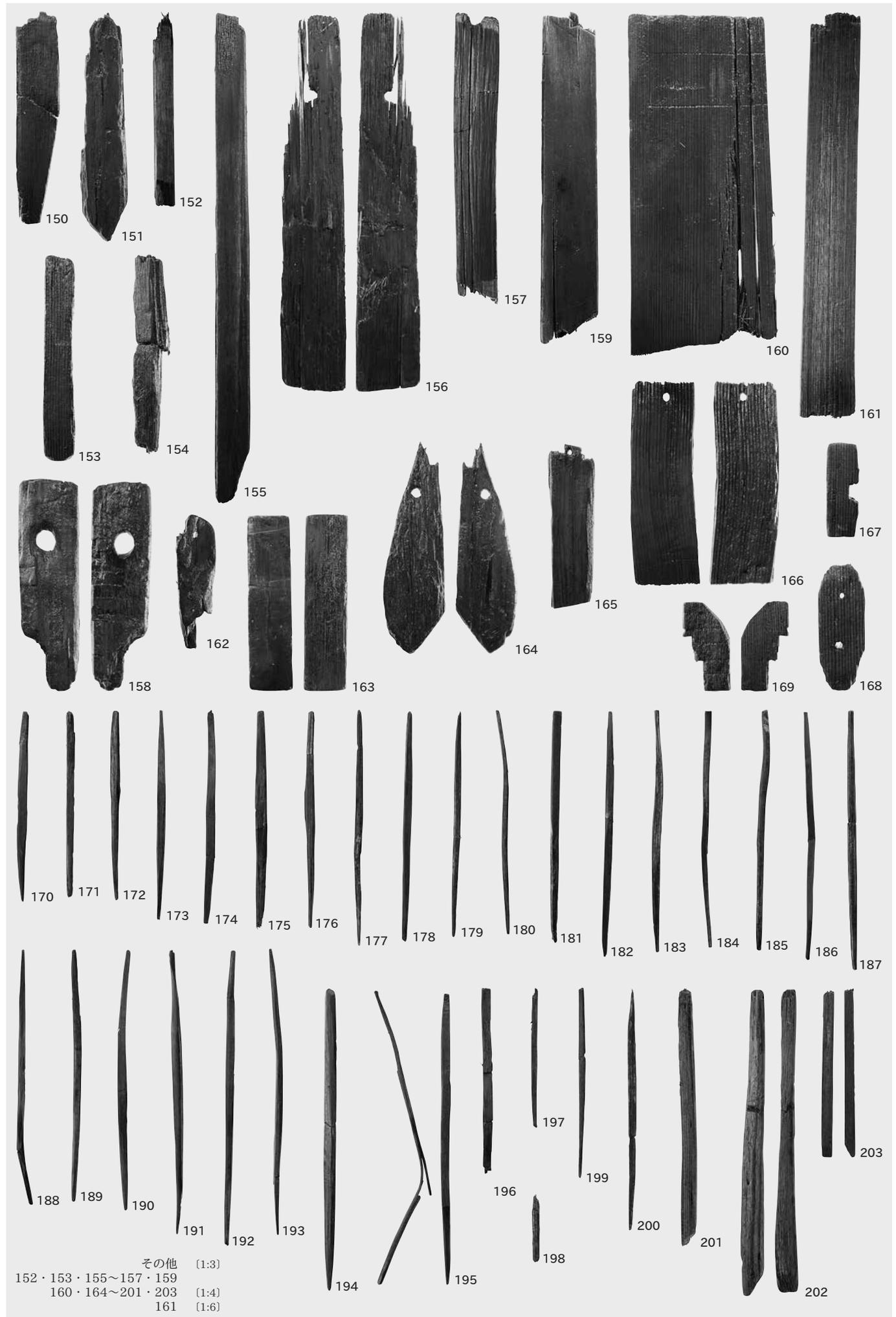
中世の木製品

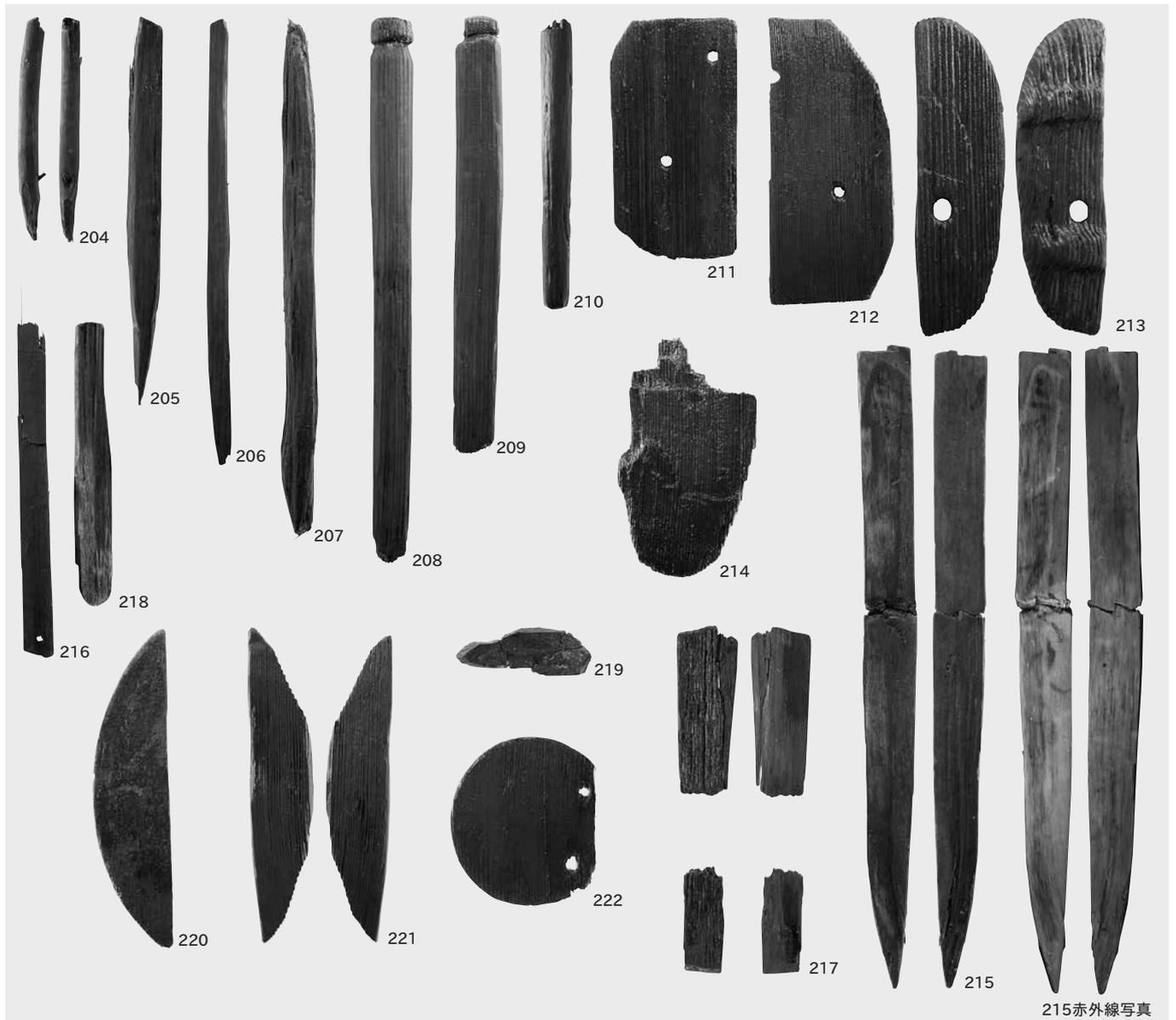


その他 [1:3]

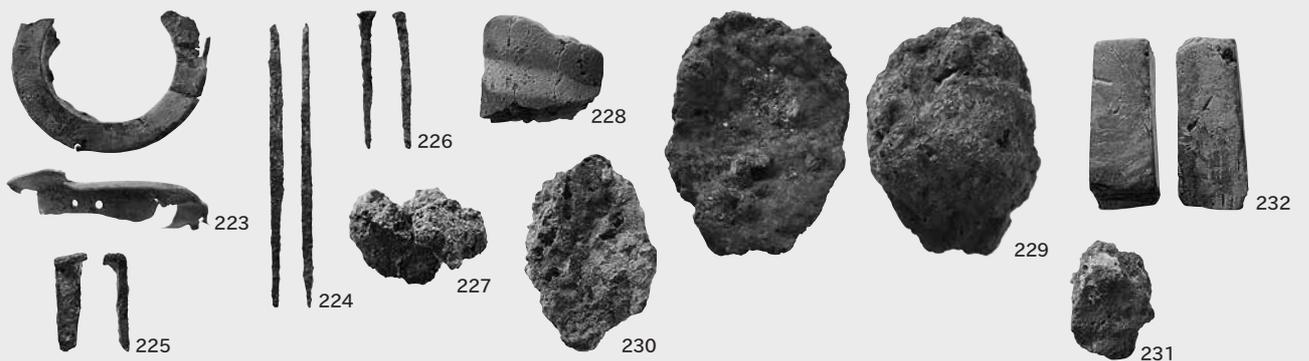
123~129・135・136・144 [1:4]

148 149

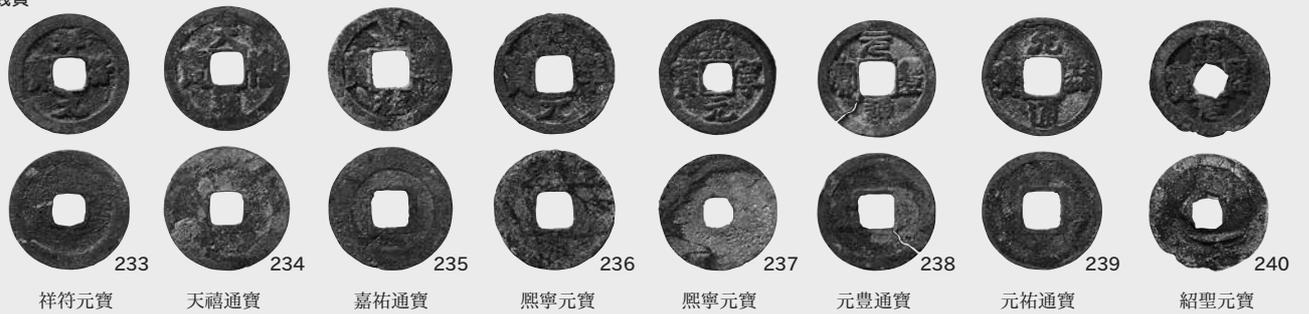




中近世の金属製品・石製品



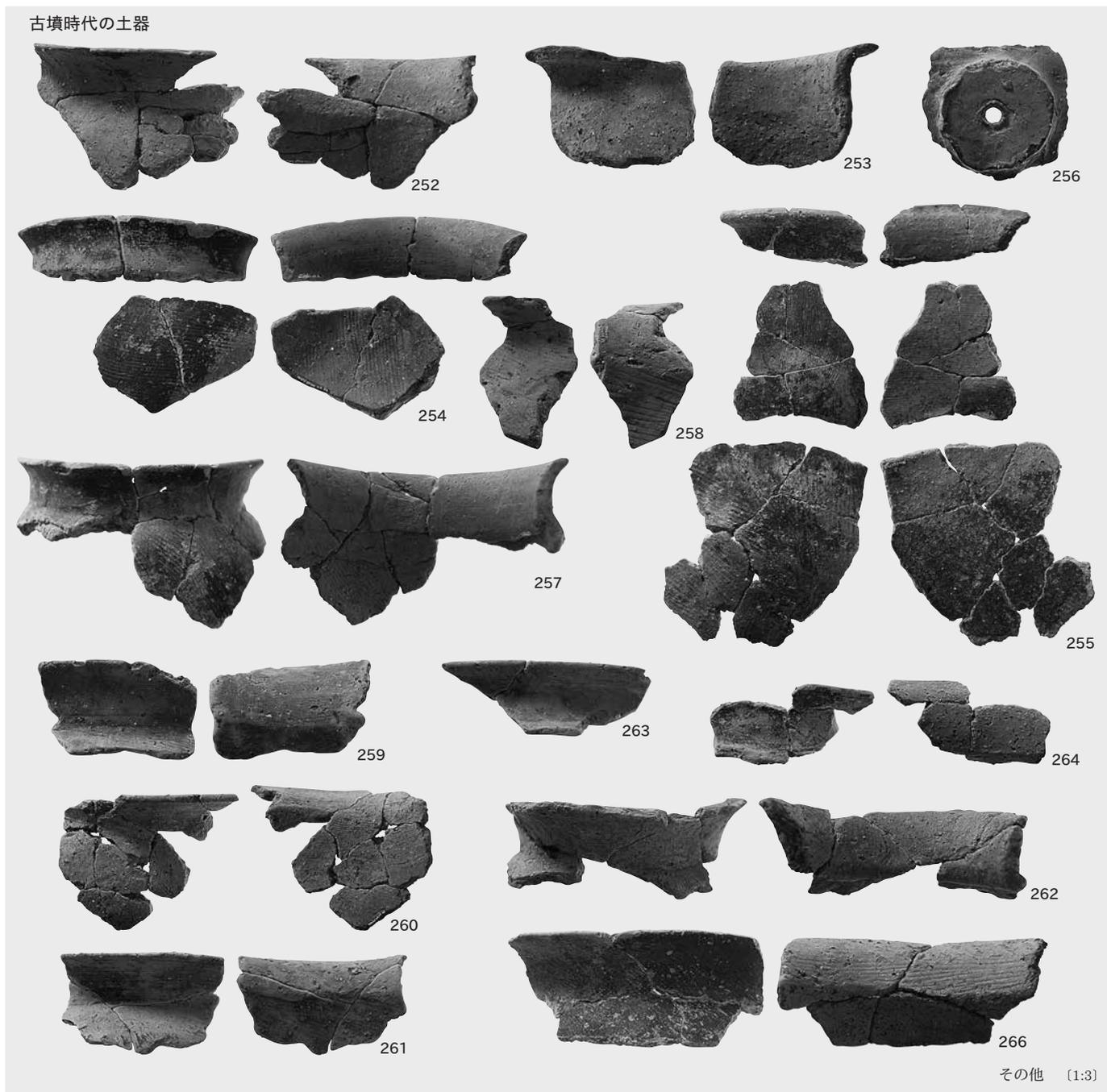
銭貨

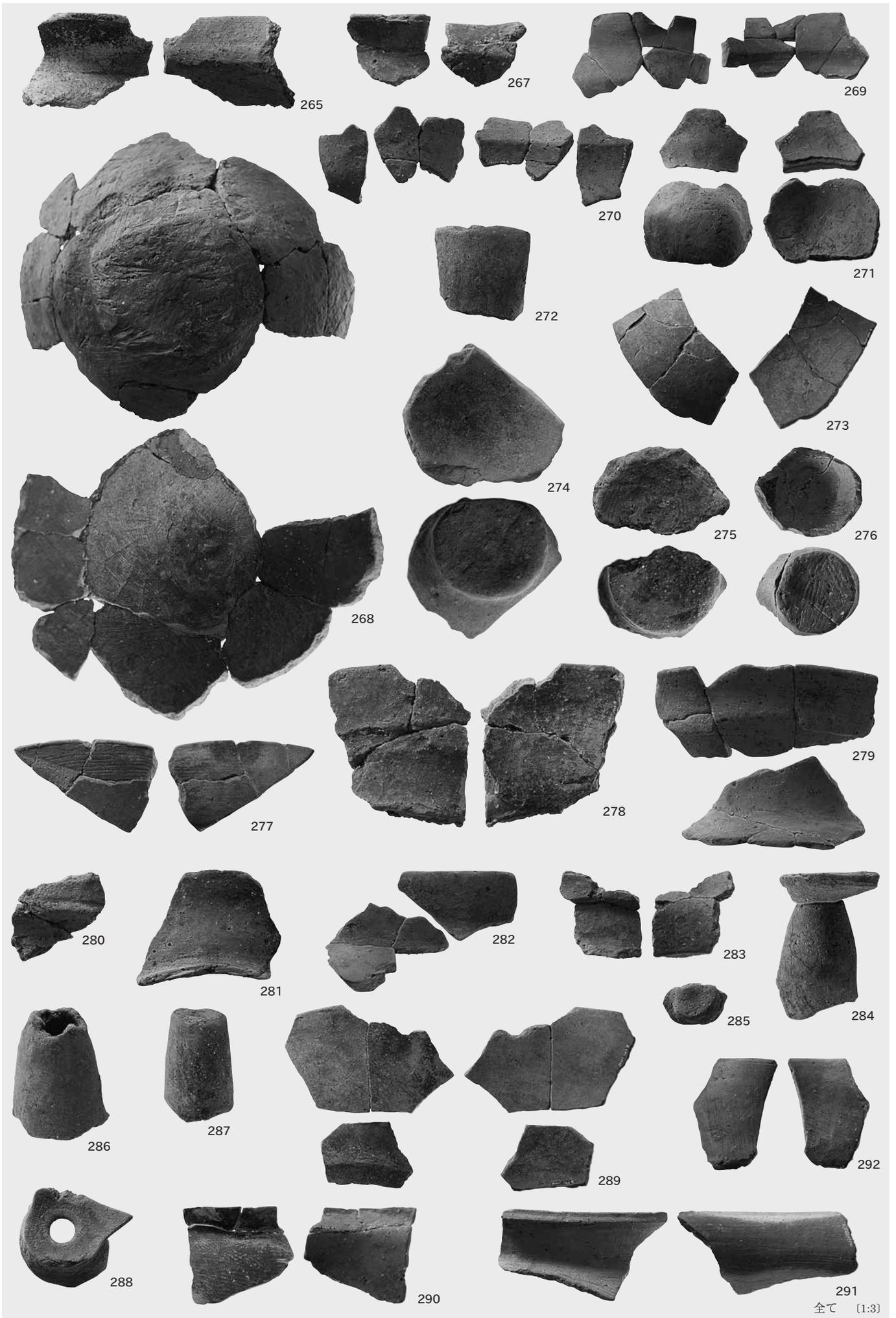


204・214・216~222
224~232 (1:3)

215・223 (1:2)
その他 (1:4)

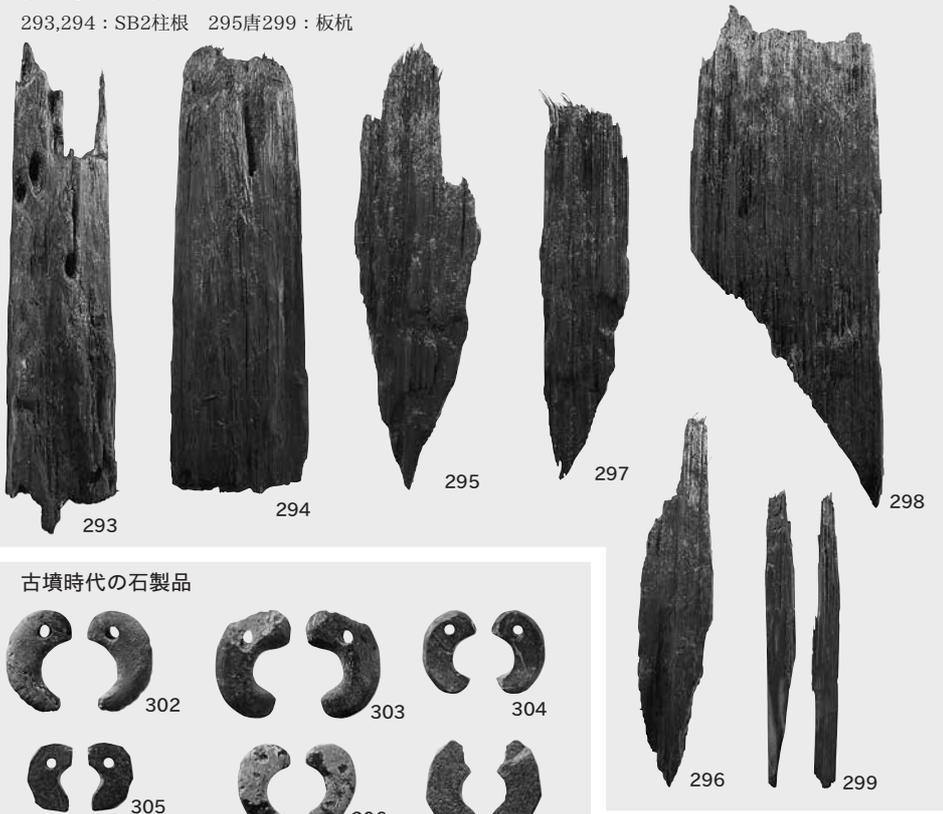
211~213 (1:6)
233~240 (2:3)



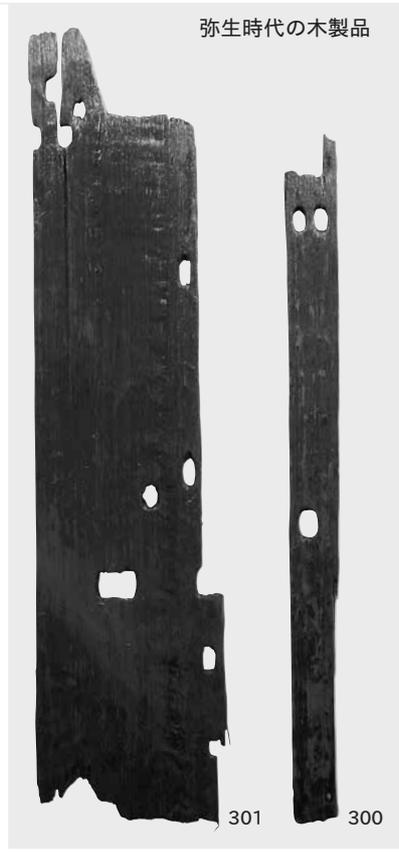


古墳時代の木製品

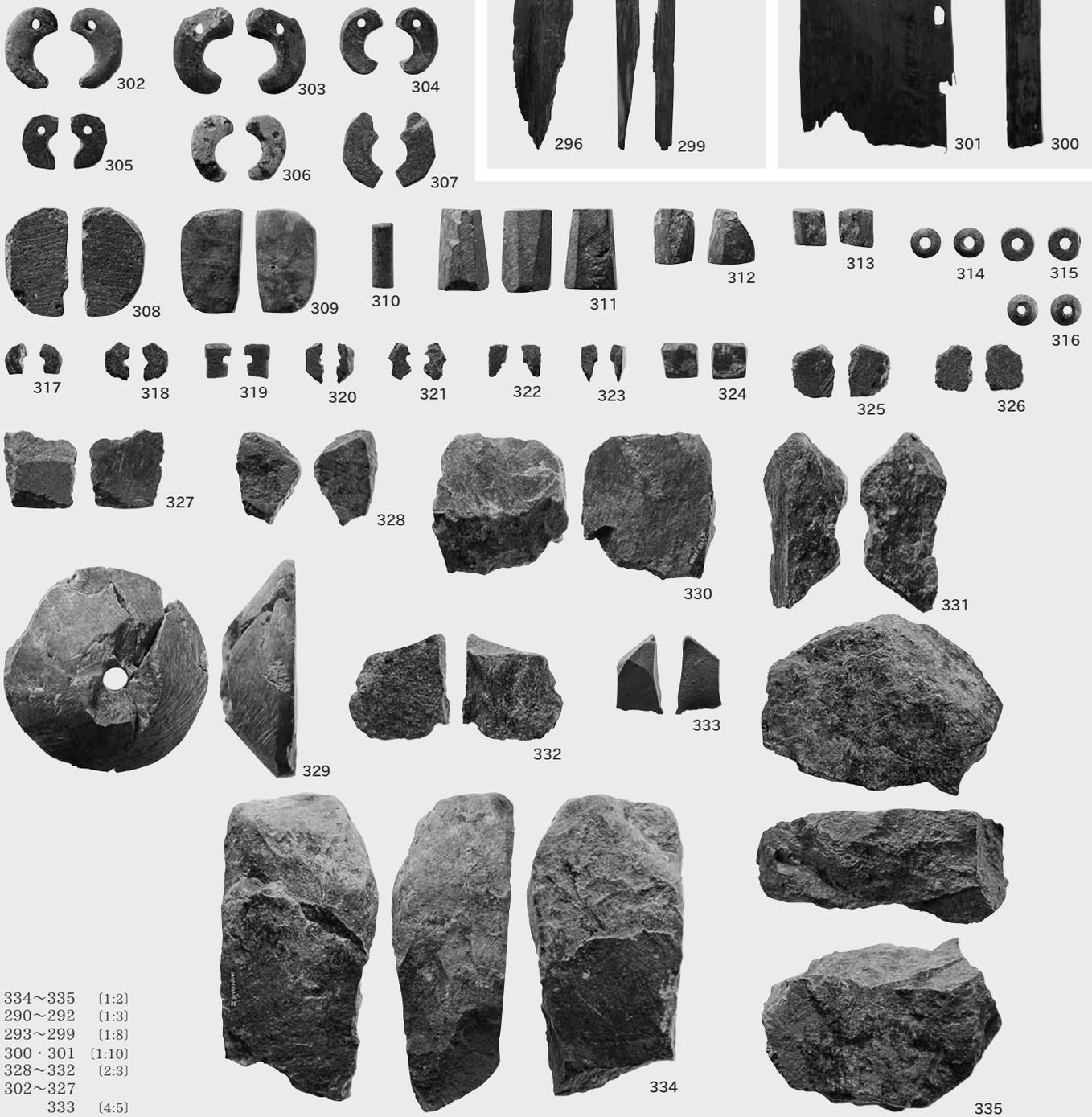
293,294 : SB2柱根 295唐299 : 板杭



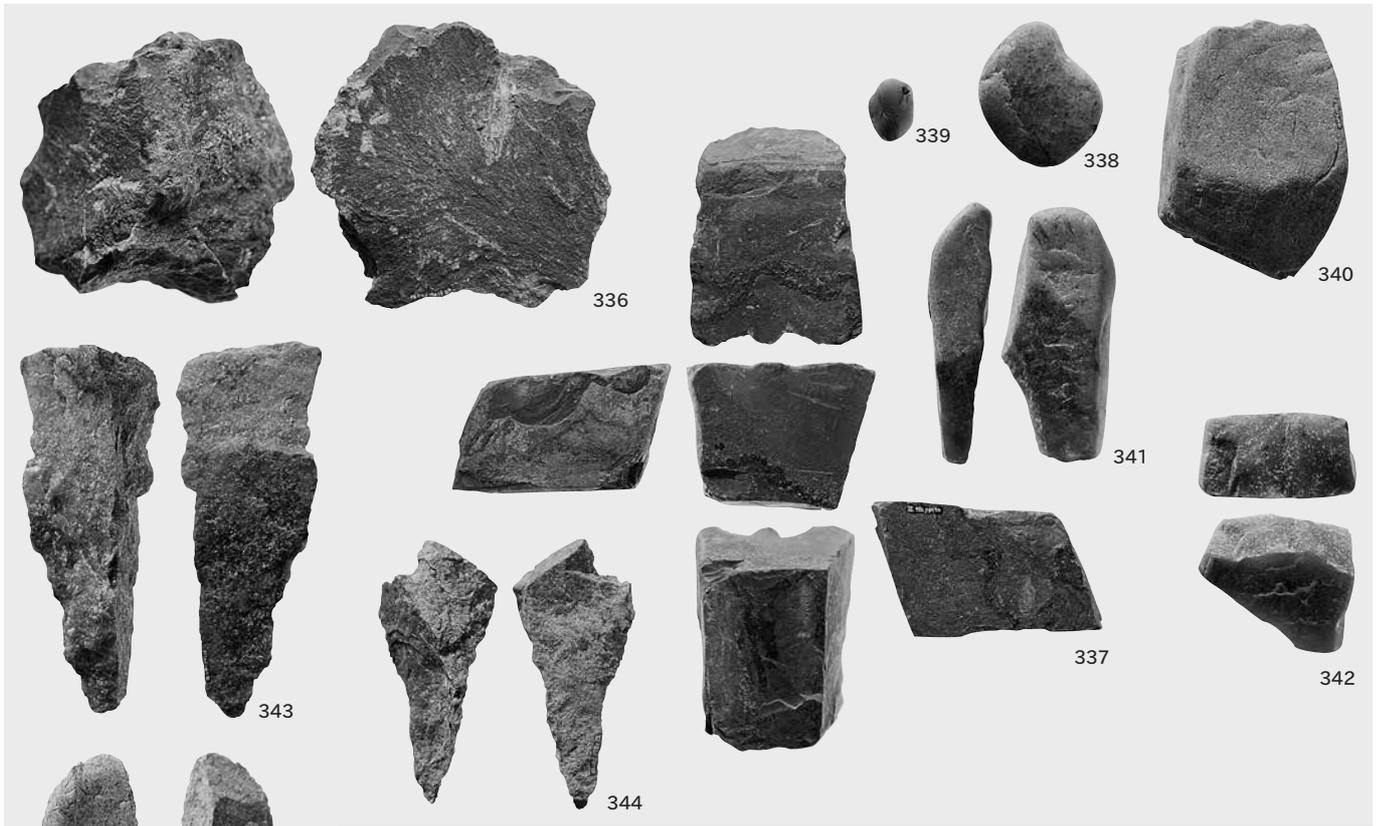
弥生時代の木製品



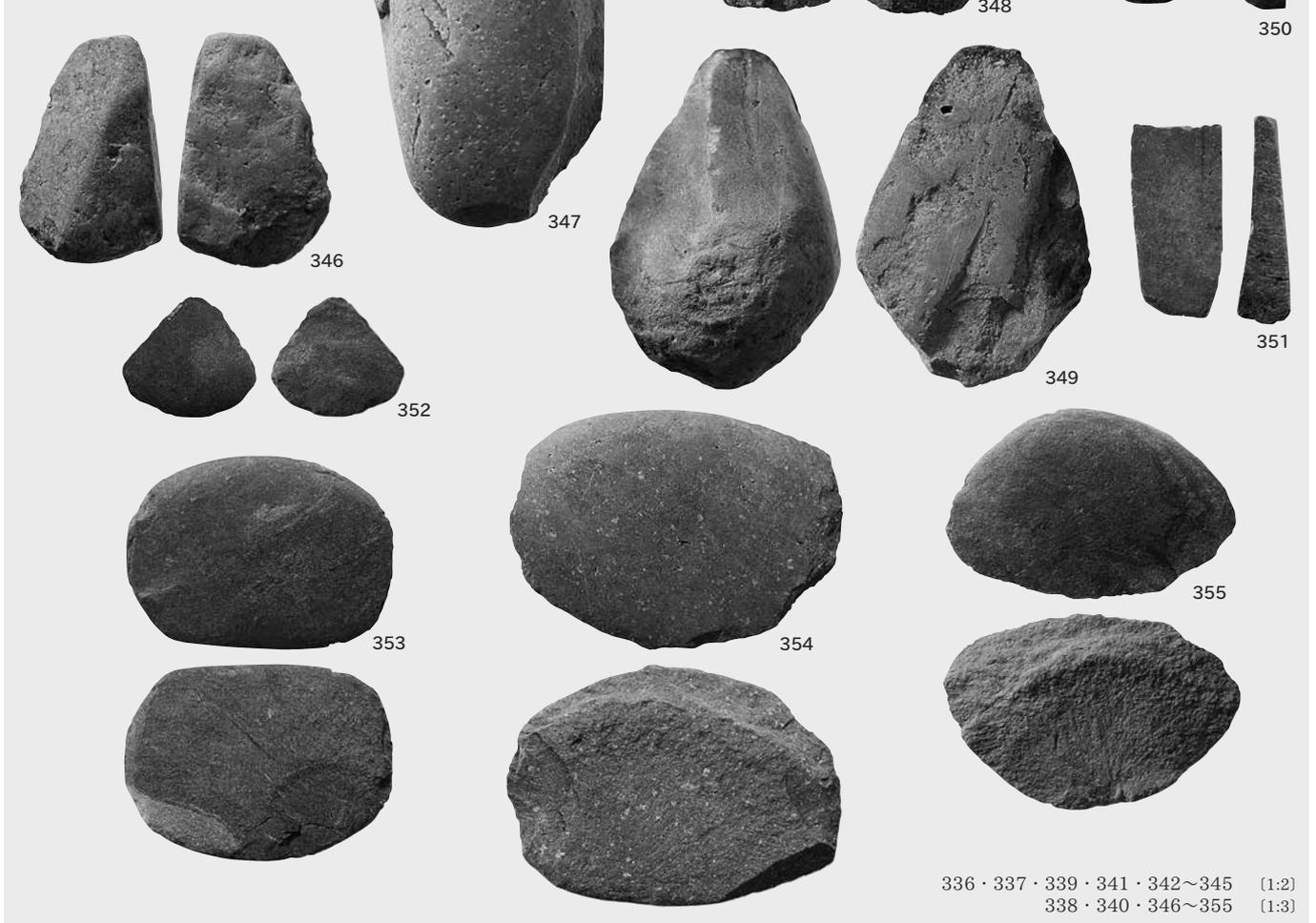
古墳時代の石製品



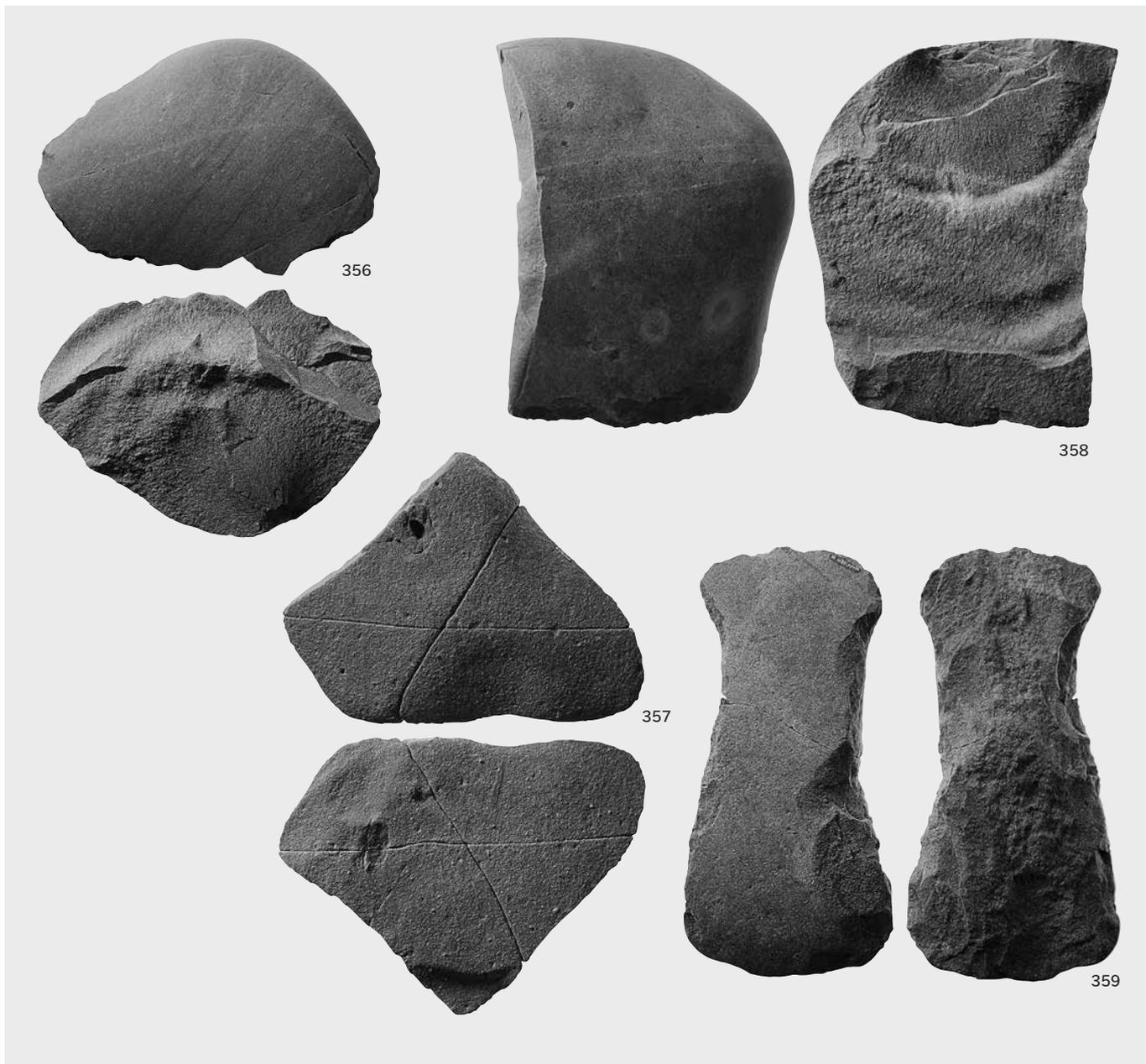
334~335 (1:2)
 290~292 (1:3)
 293~299 (1:8)
 300・301 (1:10)
 328~332 (2:3)
 302~327
 333 (4:5)



古墳時代の石器



336・337・339・341・342~345 [1:2]
 338・340・346~355 [1:3]



縄文時代の遺物



359・361・362 (1:2)
 356・357・358 (1:3)
 360 (4:5)

報告書抄録

ふりがな	ひめごぜいせき いち							
書名	姫御前遺跡 I							
副書名	北陸新幹線関係発掘調査報告書							
巻次	Ⅶ							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第184集							
編著者名	加藤学・小川真一・田中一穂（以上、埋文事業団）、相羽重徳・松永篤知（以上、株式会社 古田組）、金原正子・杉山真二・金原明・金原美奈子（以上、株式会社 古環境研究所）							
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250 (25) 3981							
発行年月日	2008（平成20）年1月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひめごぜいせき 姫御前遺跡	ひいがたけんいといがわし 新潟県糸魚川市東 寺町2丁目1番地 ほか	15216	265	37度 02分 35秒 (新座標)	137度 52分 32秒 (新座標)	20060807～ 20061129 ・ 20070116～ 20070118	3,120	北陸新幹線建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
姫御前遺跡	遺物 包含地	古墳時代	掘立柱建物1棟 溝 3条 土坑 2基 板杭列 1列	土師器、玉作関連資料（滑石製の勾玉・管玉・白玉・算盤玉・平玉、翡翠の原石・剥片）、紡錘車、石器（横刃形石器・打製石斧）				
		室町時代 ～ 戦国時代	掘立柱建物1棟 杭列1列	土師器、青磁、白磁、李朝陶器、瀬戸美濃焼、珠洲焼、木製品（箸状・棒状・人形・刀形・下駄・等）、鉄釘、製鉄関連資料、銭貨			多数出土した箸状等の木製品は、水辺における祭祀に用いられた可能性が高い	

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第184集	
北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅶ	
姫御前遺跡 I	
平成20年1月30日印刷 平成20年1月31日発行	編集・発行 新潟県教育委員会 〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1 電話 025 (285) 5511 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 電話 0250 (25) 3981 FAX 0250 (25) 3986 印刷・製本 北越印刷株式会社 〒950-0034 新潟県長岡市福住1丁目6番27号 電話 0258 (33) 0306

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第184集『姫御前遺跡Ⅰ』 正誤表追加

頁	位置	誤	正
抄録	北緯	37度02分35秒	37度02分45秒
抄録	東経	137度52分32秒	137度52分20秒

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第184集 姫御前遺跡 正誤表

ページ	範囲	誤	正
62	第10表	李朝磁器	李朝陶器
63	3行目	香や茶道具	香炉や茶道具
71	20行目	香や茶道具	香炉や茶道具
73	要約6	香や茶道具	香炉や茶道具
80	別表タイトル	土錐観察表	土錘観察表